

奇譚クラブ

1956年 9月号

読切悦虐小説「恋の脱殻」 松井 頼子
怪奇幻想小説「寄生虫」 壬生 すみ子



9月号

昭和三十一年八月三十日印刷 (第十卷 九月号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十一年九月号

9

奇譚クラブ

昭和三十一年八月三十日印刷 九月号 (第十卷第六号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



IBM. 2805

売切近し！ 残部僅少 お申込はすぐ。

晴雨「美人乱舞」

残部 僅少

伊藤晴雨先生著並圖菊版和装
美本 定價 四〇〇円 二四

図版目次

△島田雷のこわれる迄△丸雷のこわれる迄△美女のなやみ△崩れたる女△鉄砲責にされる女△火葬場異聞△群々に抱かれた美女△死神につかれた女△特別附録、娘風俗年中行事十二月、外特別附録として先人未発の貴重な春画文庫五章十九項に亘って詳説す。晴雨ファンに薦む。

美しき縛しめ

第二集

九人の緊縛モデルを駆使して完成した緊縛フォトの圧巻、未発表の秘作集

代表的な縛りポーズ三十二態

△責め写真はほしいが、印刷紙に焼けたものは高くて困ると、おっしゃる方は極く鮮明なコロタイプ印刷のアルバムをお求め下さい。
△三十二枚の変わったフォトがぎっしりと並んできつと皆さまの胸をわくわくさせることでしょう。全く素晴らしいです。

第二集 売切れました。

未製本の説明付き写真三十二葉、若干在庫してあります。一揃い三百円(千六十六円)にお送りします。

…(第二集)……[縛られた女ばかりの豪華アルバム]……(第一集)…

16態

内容
猿ぐつわ 紅と口 蠟燭責
雁字搦目 観 念 芋 虫
犠牲台 床の置物 鞭 打
目の綾 滑車吊 高小手
荒 縄 くさり エビ責

全部未発表特写の女体緊縛写真

図版目次

△島田雷のこわれる迄△丸雷のこわれる迄△美女のなやみ△崩れたる女△鉄砲責にされる女△火葬場異聞△群々に抱かれた美女△死神につかれた女△特別附録、娘風俗年中行事十二月、外特別附録として先人未発の貴重な春画文庫五章十九項に亘って詳説す。晴雨ファンに薦む。

貴重なる文献としてその真価を極めて高く評価される文庫誌

奇譚クラブのバックナンバー

今後この種文庫は、この値段では絶対に入手不可能です。発行部数が比較的多かった為、極めて安価な値段で譲り出されるわけですが、未入手の方々はどうぞこの際品切にならぬうちに早くお申込み下さい。
奇譚クラブ 旧号の在庫手持は、極めて僅少です。品切の恐れがあります。品切の際の代品を必ずお書き添え願います。品切になりました分は補充がつかぬ場合があります。悪しからずお許し下さい。旧号在庫品目録は品切となりました。詳細目次は一六二頁参照。

時代物責絵巻

売切 近し

内容
一、山法師と静御前 二、女スリと間引 三、淀君と千姫 四、大公方と侍女 五、八百屋お七の最後 六、新撰組と芸妓 七、十郎左エ門と腰元 八、小紫と悪旗本

○御申込みは迅速と確実を誇る天星社代理部へ
○御申込次第早速厳重荷造の上急送申上げます
○代金引替は送料が高くなりますので、必ず前金でお願いいたします
大阪市阿倍野区
晴明通一ノ八五
天星社代理部

代理部の分譲品目録

代理部の分譲品全部につき、最近版特選フォト、絵画等を加え、詳細なる目録を作成中ですので御入用の方は切手八円封入の上、お申込み下さい。出来次第お届けいたします。但し、以前に切手封入の上、予約されました方は、出来次第お送りいたします。

読者原稿募集

(皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】

アブノーマルに関する研究や発案、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たすようなもの、十枚迄、採用分には本誌三分分を贈呈いたします。

【創作】

異色ある題材を現れて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三枚迄、未発表の作品に限る。採用分には掲載後相当稿料支払います。

【体験告白手記】

皆さまの偏らざる真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度掲載分には一篇につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも人々には一篇位は直ぐ書けるものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ポケット告白】

文休や用紙など一切お任せ下さい。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下し。採用分には本誌三分分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項について通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載分には本誌二分分乃至三分分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マゾは継続的に御依頼いたします。優秀な作者に流暢、切腹等御自由です。

【編集者或は執筆者への公開状】

編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることになります。本誌三分分贈呈。

(開放した誌面を御利用下さい)

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをどしどし放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌半年分贈呈します。

【実写写真】

御自身写真されたものに限り、裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきものの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】

皆さまの胸に持つておられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を発表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌半年分贈呈。

【レポート】

新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載分には本誌二分分贈呈。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集者や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにても結構です。つとめて誌上に紹介します。

【読者交歓室】

読者相互間の文通呼び掛け応答等の頁を新設いたします。御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単に明瞭にお願いいたします。文章はなるべく簡単に明瞭にお願いいたします。文章はなるべく簡単に明瞭にお願いいたします。

奇譚クラブ編集部

○本誌月極購読料○

一月分一冊(送料八円)二百円
三月分三冊(送料共六)六百円
半年分六冊(送料共十二)一千二百円
一年分十二冊(送料共二十四)二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊お申込みの方は必ず送料十六円の御加算を願います。半年分御申込みの方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込みの方は景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十巻第六号

九月号

定価二百円

昭和三十一年八月三十日印刷

昭和三十一年九月一日発行

編集者 人 箕田 京二
印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野区晴明通一丁目八番五番地
発行所 天星社
電話 阿倍野五〇〇四二番
電話 天下茶屋三六〇七番

本社に対する御送金は換込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下さい。確実で早く大変便利です。振替用紙御入用の方はお申込次第お送りいたします。

〔奇譚クラブ最近号総目次〕

奇譚クラブ最近号総目次
昭和三十年

○十月号（復刊第一号）

口絵 美しいドアー（四馬）
頭立二馬車（都築 数久画）
水中の女（都築 数久画）
緊縛フォト・オンパレード（川辺 砂登子）
黒のシユミーズ（伊吹 真佐子）
繻（萩 千恵子）
どういふポーズを（萩 千恵子）
ボリウム（加賀 利江子）
ながし（須川 令子）
朝日を浴びて（須川 令子）
うつつ（加賀 利江子）
着（藤田 節子）
旅の縛られ女（藤田 節子）
きものシリーズ（藤田 節子）
軍日記（白 紅次）
悪（白 紅次）
ホクの責め方（榎本 利子）
女性の下着について（榎本 利子）
鼻の下の写真（北谷 英二）
奈落の欲情（北谷 英二）
洗滌器と共（久利 須和雄）
お膳の型と種類（土屋 淑人）
自殺娘の死体（近藤 淑子）
二個のイチシク洗腸（花村 恵美子）
女性緊縛寸考（宝塚 三三夫）
完全なる隷屬（坂田 信治）
サディズムの難題（村岡 助浩）
再度の鞭を期待しつゝ（沼 正三）
（二侯志津子さんに）（沼 正三）
女工哀れ以前（南 洋一郎）
乗馬ズボンの女腹切（藤山 秀緒）
女性緊縛の女腹切（田辺 愛子）
切腹通信（津島 比呂史）
少年刑務所体験記（三根 耕二）
男性自虐の方法（岡村 文雄）

玉稿落穂集（編 集部）
アブ追々三〇年の回顧（山田 正実）
幽霊十ヶ月（伊藤 和彦）
女性切腹面に憑かれた男（高 原 正三）
素足秘譜（一柳 真砂子）
新しいコルセット（沼 正三）
あるマゾヒストの手帳から（数 久）
私の洗腸論（数 久）
映画に見た淡いマゾ（春 木 俊野）
アクロバット通信（九州 愛造）
明治年間の新聞覚え書（吾 妻 新）
残るは女性達（森 本 新）
一七化け小僧出現（萩 千恵子）
奇譚クラブ旧号主要目次（読者通信）
復刊に当りて（編 集部）
最新版アブフォト分譲 課題原稿募集

○十一月号（復刊第二号）
定価二百円（千16円）

口絵 みのむし（四馬）
小さな運動會（四馬 数久）
漂う女二題（都築 数久）
賭場の獲物（滝 純子）
小人島の捕われ人（北 純子）
女教師（杉 虹児）
上げてくる潮（依 昭平）
掃除日の出来事（古 増子）
告白（佐 東 増子）
変態小説論（春 田 一郎）
幽霊十ヶ月（宝塚 三三夫）
ボクの責め方（沼 正三）
切腹通信（村岡 助浩）
レスボスと洗腸（羽 京助）
命がけの遊び（藤山 秀緒）
あるマゾヒストの手帳から（沼 正三）
拷問に笑う女（辻 隆）
前上陸（三根 耕二）
賭けられた娘（宮 昭平）
お灸と腰巻（永 長治）

錯乱（山 真一）
私にも貴女の下着を（山 真一）
輝美談（伊 治）
接客婦（伊 治）
大和撫子の散華（宮 治）
残るは女性達（森 本 新）
被虐より嗜好へ（沖 野 美子）
明治年間の新聞覚え書（四）（吾 妻 新）
泉都の夜明け（坂 田 信治）
完全なる隷屬（村岡 助浩）
洗滌器と共（久利 須和雄）
或るソドミアの告白（朝 路 雄）
洗腸のお仕置（宮 治）
サディズムへの憧れ（京 柳 平）
掲載候補作品寸評（編 集部）
玉稿落穂集（二）（編 集部）
女優の素足（高 原 正三）
百合子の記録（波 田 規一）
長瀬昭子さんへ（近 東 規一）
映画雑誌芝居の緊縛場面（波 田 規一）
吹き溜り（近 東 規一）
アクロバット曲馬団（鍛 冶 真三）
統一・岩瀬祥一のお灸院（鍛 冶 真三）
統一・映画に観た淡いマゾ（鍛 冶 真三）
アル・バム第三集のアイディア（鍛 冶 真三）
セラー服姿の切腹写真（鍛 冶 真三）
女子アロレスリング難題（鍛 冶 真三）
密着（鍛 冶 真三）
同愛の士に告ぐ（鍛 冶 真三）
読者通信（並に読者交歓室）（鍛 冶 真三）
最新版アブフォト（前月と今月の分譲品）（鍛 冶 真三）
蜂の胸四十五センチ（鍛 冶 真三）
先祖の女腹切（鍛 冶 真三）

昭和三十一年
○四月号（復刊第三号）
定価二百円（千16円）

口絵 苦痛の夢（四馬 孝・画）
第二次会の披露宴（宮 昭平・画）

戦国夜盗（畔 亭 数久・画）
ナイロスのレインコート（萩 千恵子）
「こんなポーズで？」（佐賀 美智子）
「お首が痛いから」（加賀 利江子）
「お解いてエ！」（畔 野 当磨）
明治年間の新聞覚え書（吾 妻 新）
おしめ放浪記（畔 野 当磨）
フアンタジック・ストーリー（黒 岩 殿）
黒人少女の飼育（黒 岩 殿）
或る切腹マニヤの恋文（笠 原 孫之介）
楽しい正月映画の縛られ（嵯 峨 美也子）
幽霊十ヶ月（春 田 一郎）
山口式ボディビルの御紹介（山 幸一郎）
キヤルマタの美（榎 村 幸一）
魔の味（高 木 伸彦）
ドストエフスキの嗜好性（野 中 愛三）
女性乗馬考（原 美智子）
サシチンの独白（宝塚 三三夫）
ボクの責め方（榎本 利子）
女剣士の切腹について（青 山 芳樹）
ラブ・レター（青 山 芳樹）
少年矯正院体験記（みせしめ）（守 口 栄吉）
仇討（高 杉 正二）
私は訴えるアブ・放譚（水 上 流太郎）
腰巻使用許可願（小 菅 信治）
完全なる隷屬（坂田 信治）
私のイメージ（坂田 信治）
映画の緊縛断片（北 谷 英二）
マニア誕生（坂 野 猛比古）
体告白記（須 藤 信彦）
残るは女性達（森 本 新）
切腹願望と洗腸（沢 清克）
その後の緊縛女腹切伝（沢 清克）
縛られた女腹切（沢 清克）
映画（近松物語）より（升 岡 金吉）
悲恋栗田口（小 村 好介）
ああこの恍惚境（小 村 好介）



奇譚クラブ 復刊第八号 目次

美しい飼育物の調教	四馬 孝・画
吊りを加味した	北原純子・画
飛田良二のアイデア	(須川令子嬢)
緊縛フオート二題	(花坂道子嬢)
ナイフ投げの的	BIZARRより
女学生	北原純子・画
欧米式新スタイル二態(2)	LA・BONDA・画
寄生虫	壬生すみ子 18
流腸とおむつ	月岡映子 28
恋の脱殻	松井頼子 30
へんしゅう全滴	本誌記者 39
飯場往来なぐりこみ	沼正三 40
家畜化小説の登場を喜ぶ	沼正三 44
はつかねずみ	青山三枝吉 46
紅蓮(ぐれん)	青葉楓一 54
光りある中を	近東規矩也 62
文学に現れた同性愛	藤見 郁 70
懸賞応募作品短評	編集部 75
私の「ふんどし」	松原三千代 76

「レポート」	島直樹 78
『被虐哀歓』其の後	真金鍛次郎 80
禪マニアの女生徒の手記	池田ふみ子 88
奈子の恋愛について	門田奈子 90
沼正三の手帖	沼正三 98
お灸を据える女性雑誌	松原 一 106
映画に現れた拷問場面	左巻跋策 108
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正 116
探偵小説新考	東 一郎 120
芝居の責め 紅血欠血	本田由郎 126
女優緊縛映画速報版 最近の映画から	白石 稔 129
悦慮に関する一考察	菅原春夫 130
「新聞・雑誌」通信「切腹の歴史」	松原一提供 135
文献紹介私のコレクションより	角間莊吉 136
アイデア3 五種の責	失念 生 141
創作なめくじ	大谷絢子 142
玉稿落穂集	編集部 150
緊縛映画速報版 最近の縛り映画から	嵯峨美也子 151
女体切腹構成案図譜	156
天星社代理部特選写真集	160
アブフオート集	161
奇譚クラブ旧号主要目次	162
最新版女体緊縛フオート	164
読者通信	166
編集後記	167

〔奇譚クラブ最近号総目次〕

賣めのアイデア シノイ 眞め 澁陽雜記 洋曲に於ける緊縛場面 懸賞入選作品佳作第一席 接客婦 蜂の胸四十五センチに こたえて 倒錯の英雄織田信長 「女」の腹談 「女」のお腹談 アブノーマル雑談 「話の層籠」 王穂落穂集 赤い花は泣いている 失恋の告白 読者通信(並に読者交歓室) 代理部特選写真集 ○五月号(復刊第四号) (前月と今月の分譲品) 定価二百円(千8円)	永井昇次郎 狩井麗作 佐巻跋策 加治 信一 鶴間 洋子 空置 俊郎 川瀬 一美 緒台あふみ 辻村 隆 編 集 部 松井 彌子 城 秀人 孝・画	女サデイストより奴隷に 与える手紙 撫子の花散りぬ 奇妙な輝 賣めとフエチシズム 魔の白鳥 お臍の研究(二) 生理め願望 姉と弟 陰花への憧憬 去日の美女 女人散華 悲風塵上原 王穂落穂集 アブノーマル・モノローグ (あるアクロバット・ダンサーの記録) 拷問に笑う女 読者通信、読者交歓室、 代理部特選写真分譲品 今月の新版特選写真集、編集後記 ○六月号(復刊第五号) 定価二百円(千8円)	森山 美歌 北川 操 森 太一 畔野 当磨 加宮 敏一 須藤 律夫 長崎 俊一 佐次 浩介 青木 俊野 吉井 環 瀬川 泰子 編 集 部 竹谷 十三 辻村 隆 孝・画	女人散華 悲風塵上原 女サデイストより 奴隷に与える手紙 私のアイデアと回想 サデイズム小説 いっせいで湯 コレット・スクリ 変つた切腹の振 私のマゾ・スクラ ツア帳より 甘美なる被虐の幻想 脱腸に対する私見 小説 虎妻日記 現代マゾヒズム芸術時評 お仕置遊戯 フエチシズムの文学ノート マゾヒズム体験談 猪狩り 緊縛女体難考 「禪」先生 最近の縛り時代劇映画から お臍の研究 結髪の種類々相 王穂落穂集 映画に現れたムツキ 虐げられる娘 ナチスの暴虐 私の空想天国 娘の島探検 或る告白 春と女の素足 サデイズムイソクな漫画 十萬円懸賞原稿募集 限定版各種特集号発行予告 読者通信 一切腹面帖」発行中止について ○七月号(復刊第六号) 定価二百円(千8円)	瀬川 泰子 森山 美歌 菅原 春夫 泉 義明 林 靖彦 山中 同人 春木 俊野 沢 清克 伊藤 十三 竹谷 忠正 桜井 美智子 黒井 彌子 浮家 鷹三 青葉 模一 嵯峨 美也子 須藤 律夫 伊藤 晴雨 編 集 部 赤井 茂郎 嵯峨 仙治 藤木 仙治 東 坊 丸 由木 仙治 藤木 仙治 藤木 仙治	ネルソン提督 女土官 新人モデル嬢紹介 パイプの馬 凝 視 馬を御す令嬢 現代大衆文学に現れた賣めの描写 私のイヌーシ 若衆歌舞伎復興 奈子の自己愛について(二) 幽山十ヶ月 お灸を据えた女の魅力 赤い花は泣いている(第四回) ボデイビルマシンに依る少 私のコレクシヨンより 「眞め」の芝居難考 梶井君の恋 少年雑誌の恋 奇妙な倒錯の恋 女 痴 漢 活 火 山 玉穂落穂集 被縛の切腹幻想 女性の下着マニアの告白 潰滅の前夜 或る軍婦人の死 マゾヒズム断想 H氏の奇妙な告白 サデイズム小説 いで湯 私はおしめマニア スーダン 乙女の腹切抄 限定版各種特集号、発行予告経過報告 最新版女性緊縛フォト 奇譚クラブ旧号主要目次 天星社代理部特選写真集 読者通信 告知版 拾万円懸賞原稿募集 編集後記 編集後記 今月の新版	二丁拳銃の姐御 木製の兵士 花坂 道子嬢 北原純子嬢 佐賀美智子嬢 北原純子嬢 藤見 郁 小竹 紀夫 門田 奈子 春田 一郎 岩瀬 祥一 松井 彌子 熊谷 俊一 角田 莊吉 本田 由郎 真木 不二夫 山口 幸一 雪 俊 遙 青葉 模一 編 集 部 高村 民子 鳴竹 成太郎 古井 真哉 土路 草一 佐茂 半治 天 盛 英 北 谷 義明 泉 宏 多磨 京輔 川野 成太郎 鳴竹 成太郎 久野 成太郎
---	---	--	---	--	--	---	---

BI ZARRE NO10 の表紙

BiZARRE



N°10

新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1956年 9月号

(第十巻 第六号 通刊第八十八号)

寄 生 虫

壬 生 す み 子

ま え が き

その朝、研究所の私宛にかなり部厚い郵便物が届けられた。丈夫な包装紙の端が擦り切れ、新聞紙にくるんだと覚しい中味が覗けて見えることなどによって、私の手に届くまでには相当の期間の経たことが一見して察知された。裏返しにしてみたところ、差出人の氏名住所はどこにも見当らなかった。

研究所の私宛には時折り地方の未知の人々から郵便物が届いた。寄生虫研究で最近少しばかりジャーナリズムの話題にものぼるようになったため、素人研究家や小中学校の先生たちから学問上の問合せや研究レポート、資料などの郵送されることが時折りあったのである。

その郵送物も多分そんな種類のものであろうと判断した私は、やっと昼過ぎになって飼

育微生物の記録を終ってから自室に引籠り、実験用の電熱器にコーヒー沸しを載せて出来るまでの時間を利用して窓際の椅子に腰を下し、郵便物を解きにかかった。

その日は朝からラジオが台風の接近を告げ、空は嵐の前のどんよりと濁った静けさを保ちつつも、ゆっくりと、黒い不吉な雲の塊を攪拌し始めていた。

包の中味はやっぱり原稿であった。相当に教養のあると思われる婦人の筆蹟が数十枚の便箋に細かくびっしりとつまっていた。私は空模様を気にしつつ、それがどんな種類の内容をもつものであるのか大要を掴もうとして走り読みしはじめた。

しかし間もなく私は電熱器をとめることを忘れてしまうほどにその文面に夢中になって気をとられていた。それは手記だった。

以下私はその手記を、人名を変える以外は

殆んどそのままに再録しようと思う。

(一)

突然のことなので驚きになるかもしれませんが。妾は先生にお目にかかったことがありません。それにも拘らずこんな夥しい記録の束をお送りするその無礼はお許し下さい。いえ、拝顔したことのない故にかえってこんな記録もお送りすることが出来るのかもしれないせん。

先生の御研究の行績は主人からも聴き、素人考えではありますが御立派なものと存じあげております。新聞の家庭欄に御寄稿なさる生物学の解説や興味に富んだ挿話などもその都度熱心に読ませて戴いております。先生が同姓の新進学徒であることが多分妾に親しい気持を起させたのでしよう。

恐らく手記を綴ってゆくにつれ、妾という

女の素性がだんだんと先生にわかつて貰えるかと思ひます。従つて冒頭から何の某と名乗りを上げるとは避けさせて戴きます。出来ることならばこれから述べようとしている手記の中の出来事が日付のない、場所のない白昼夢の中の、影のような出来事であつたら！とさえ心の中で思っているのですから。

妾が同棲生活には入つたのは一年前でした。妾は某私立女子大（短期大学）の国文学専攻の学生でした。主人はH大学の研究室に残つて微生物研究に没頭している若い学徒でした。

日本人離れのしたすらりとした長身で、スマートな眉目秀麗の好男子でした。さぞかし女友達が多かろうと思はれるでしょうが、外見はそんな交友関係はありませんでした。このことは同棲生活にはいる直前、恐ろしい事実を妾に感付かせたのですが、それは後述することになります。さしあたって妾は彼を笹崎哲三郎と呼ぶことにします。

哲三郎と妾が親しくなつたのは彼の妹を通じてでした。彼女は哲三郎に似た美少女でした。妾は彼女の家庭教師をしていたのです。彼女はテニスの選手で小麦色に焦げた滑かな肌は野性的で健康そのもののように輝いていました。（妾は彼女を仮に笹崎由美子と呼んでおきます。）由美子はその通学している高校では誰一人知らぬもののない位信望を集めた

女王であつたようです。一見、孔雀のように派手な華かな性格の持主のように思われ勝ちでしたが、案外、心の中は堅実な考え方を抱いていて、何ごとにつけ学友間にも優しい気の配りを見せ男生徒との浮わついた噂もなく、大方そんなところに信望を集める秘密があつたようです。

哲三郎と由美子とは母親と共に三人で市の中心からやや離れた高台の高級住宅地に住んでいました。造船会社の重役だつた父は終戦間もない頃死亡したということです。

ヒマラヤ杉がこんもりと繁つて建物を終日翳らせているその家は陰気といへば確かに陰気な、妖精の眠つていそうな気配が漂っていましたが、浮世から離れた青年学徒と派手なように見えるがしかしんは地味な美少女と未亡人、——この三人の住居には相応わしいものだ、と妾は週二回訪れるたびに、手入れの施されていらない庭一面にうっそうと繁つた湿っぽい植物を眺めつつ感じたものでした。

或る夏のことでした。英語の復習を終えてから妾はカルピスをストローで攪きまわしながら、涼しい風を送ってくる窓外を眺め、「はだしであのあたりを弾ね廻つたら、さぞ冷っこくていい氣持でしょうね」と湿っぽい涼しそうな草の繁茂している庭を目で示して、由美子にいました。すると彼女は何故かはッとしたように、

「先生、庭におはいりになつちや駄目よ」

といひました。その語調に思ひがけず真剣な氣配が籠っていましたので、妾は好奇心を唆られて先を問ひました。

「どうして？」

「どうして……」と由美子は口籠りましたが、躊躇い勝ちに、「何故でも。兄がいけないって禁じますの。きつと研究に必要な植物を栽培しているんだと思ひますわ」

「温室以外でもそうなの」妾は由美子の言葉に何故か故意の詐りを感じて、何気ない様子でいいました。裏の方向に大きな温室のあることを垣間見たことがあつたのです。

「ええ、そうです。兄は何にでも……」

といひかけて彼女は不図貝のように固く口を噤んでしまいました。二人の間に兄のことが話題にのぼつたのはその時が最初だったのです。妾はもう少し突っこんで訊ねたい誘惑を抑えることが出来ませんでした。

「兄さんの御研究のテーマは何なの」

「私もはつきりわからないんです。研究室に行つたらいろいろの虫のアルコール漬がありますわ」

その日から四、五日後妾は偶然に彼女の禁止を侵すことになりました。当日妾が玄関先まで近づくと裏手の部屋からバツハの遁走曲をさらえているピアノの音が響いていました。妾の声はその音に消されると見えて幾度

呼んでも返事は得られませんでした。妾はふと思いついて、深く繁茂した草を踏みわけつつ庭を通って窓辺に近寄っていききました。妾は演奏の巧みなことに感心しながら、しばらく湿った草が脚にふれるのに任せてたたずんでいました。

ピアノの音がはたと止んだ時、妾は「由美子さん」と声をかけました。室内では聴耳をたてる気配がし、続いてスリッパの音が窓辺に近づいてきました。顔を見せたのは意外にも白晰の青年でした。怪訝そうな表情に出喰わすと妾はすっかり周章で、

「失礼致しました。由美子さんかと思ひまして」

「あ、妹ですか」青年は疑念を解いた様子でしたが、妾の足もとにチラと視線を走らせたその額に気難かしそうな縦皺が焦々と神経的に浮ぶのを妾は見逃しませんでした。妾は庭にはいつてはいけないという先日由美子の言葉をその時、電光が閃くように思い出し、自分の迂濶さにはツと顔の赧らむ思いがしました。

「どうもすみません」と妾が詫びて再び顔を上げたときには青年の姿はもうそこにありませんでした。後方で表扉のひらく音がし、振向くと青年はほとんど無表情に近いその白晰の顔を此方に向けて、

「妹はまだ帰っていません。しばらく上って

お待ち下さい」

と金属的な冷やりとした声でいいました。応接室に通された妾は凡そ小一時間余り由美子の帰りを待っていました。その間、家中は全く人の気配がなく、妾は何故か随分心細い思いをしたものです。幾度腰を上げて暇乞いをしようとしたかわかりません。

やがて母と一緒にいらした由美子の声が玄関から聞えてきました。

「あら先生だわ。先生のお靴よ」

彼女は室内にはいつてくると頬を上気させて駆けより、妾の手をとって幾度も詫びました。

「いいのよ、いいのよ」と妾は彼女をおしとどめ、「お兄さんがいらしたから」

「変屈でしょう」由美子は肩をすくめてみせました。「初対面の方にはほとんど口をききませんの。何時もそうなんですのよ」

妾の心に映じた哲三郎の印象はひどく清冽な感じの青年学徒でした。彼の無口な孤独な性格が妾には好ましいものに思われました。

妾の若い血は新鮮な異性を求めて烈しく脈打つのを感じました。身寄のない貧しい学生生活、異性の友の皆無な無味乾燥な日日。——そんな当時の妾として、それは当然の成行でありました。妾の胸に、哲三郎の面影が灯のように明るい光を浮ばせたのはその時からでした。

寮に帰ってから妾は哲三郎の言動が映画のカットのようには顔の奥をかすめるのを楽しんでいました。同室の者がその夜遅くから男学生を誘いをうけてダンスに出ていった後、妾の臉からは堰を切ったように涙があふれ、枕をぐっしり濡らしました。

翌日から妾は転身をとげました。恋に狂った女となっていました。

しかし間もなく、妾ははらわたまで赧むような恥しい事件に出会わねばならなかったのです。

(二)

旬日を経た或る日、妾が笹崎家を訪れると由美子が唯ならぬ気配を表情一ぱいに漲らせて現われたのでした。応接室に上るや否や、

「先生は約束をお破りになったのね」

彼女は臉に一ぱい涙を溜めて妾をにらみつけるではありませんか。妾はすっかり驚いて、「どうしたの、何のこと。妾はさっぱりわからないわ。何か由美子さんの気にさわることをしたのなら勘忍して頂戴」

と哀願するようにいいました。それほど彼女の詰問の調子はきびしかったのです。

「先生は、先生はお庭に無断でおはいりになったでしょう」

「ああ、そのことなの。ごめんなさいね、妾、悪気は少しもなかったの。つい貴女のいった

ことを忘れてしまっていたの。ピアノが聞えてきのでしよう。だから、てっきり貴女だと思って裏に廻ってみたのよ、そうたら……」

「駄目ですわ。先生はもう駄目ですわ」

由美子はヒステリックにそういう立ててわッと顔を被って号泣するのでした。妾には何が駄目なのやらさっぱりわかりませんでした。それで、彼女を慰める術もなく途方にくれてぼんやりと妾は、彼女の豊かな肉づきの肩が細かく顫えるのに見惚れていました。

やがて彼女は涙を収めるとき、顔を上、今迄ずっと掌に握っていたらしい小さな紙包を妾の前に差しだしました。それは薬と覚しいセロファン包みでした。

「これを、」と由美子は目で指していいました。

「お飲みになって下さい」

「何ですの、これ」

（毒薬！）そう妾は直感しました。妾は俄か



に顔の血が一度にすうーと引去るのを感じました。声が干からびて噎がれていました。妾は立っているのがやっとのことでした。

（何故これ、を飲まなければならぬのだらう）

（何故自分の行為が死に価するのだらう）

（何故自分是由美子に殺されねばならぬのだらう）そんな思いが一度に錯綜し、妾は熱湯を無理強いに吞まされたように胸の中が焦げただれるのを感じました。意志を喪失したように妾は「何ですの、これ？」と消え入るよ

うに繰返すことが出来ただけでした。

由美子はガックリと椅子に腰を下しました。そして力無氣に、

「先生もお坐りになって」といいました。

それから由美子は次のようなことを妾に物語ったのです。

「先生は自家の庭がどんなに怖ろしいか全く御存知ないのです。見た目には何処といつてとり立てて注意をひくようなことはありません。至極平凡な庭ですわ。でも、あの中をお歩きになった先生は、きつと繁茂している雑草類に皮膚の一部をお触れになったのに違いないのです」妾はここで先日庭先で脚に触れた雑草の肌ざわりを思い出して何故かぎくつとしました。由美子は妾の表情から動揺を探り出すようにじつと妾の目を凝視していました。

「先生はここ二ヶ月も経つと、恐らく原因不明の高熱に苦しまれることでしょう。しかし理由は解りません。医師は投薬するでしょう。しかし熱は下りません。先生は衰弱される一方です」

由美子は口を結んで窓外に目を転じました。彼女の顔半面を削ぐように翳らせた暗い憂愁と苦悶とに、このときはじめて妾は氣付きました。

「兄は寄生虫を研究しています」ややあって彼女は重そうに口をひらきました。「はっき

り申しますと病的な位です。研究室に参りま

すと普通の人なら一目見て嘔氣を催すような不気味なグロテスクな寄生虫の標本が数々並んでいます。兄は寄生虫を人工交媒させ、奇矯な種を作ろうとしているのです。ばけものを作ろうとしているのです。人間固有の寄生

虫ばかりではありません。馬や牛を宿主にするような巨大な寄生虫をも媒養しています。

それと人間固有の寄生虫を交媒させたらどんな結果になるでしょう。白い不気味な、名づけるやうもない恐ろしい変種が生まれてきます。勿論即座に死んでしまうこともありましよう。しかし、根氣よくその交媒を続けてゆくと、……申すのも怖ろしいことですが、

牛馬特有の一米余りの体長の寄生虫が人間の身体の中に入りこむことが出来るのです。牛馬と人間の体内交媒。空想です。妄想です。

妾は少しもこんなことを信じてやしません。しかし兄はそんな恐ろしいことを考えている人なんです。妄想家なんです。どうか、そんな兄を持っている妾を蔑まないで下さいね。

こんなお話はこれから妾が申出ることを快くひきうけて戴きたい一心からですの。引受けて下さいね。先生」

妾は余りのことに驚愕で一ぱいになって物をいうことが出来ませんでした。これから由美子のいい出そうとすることにも皆目見当がつかず、ただ意志に反してこっくりと頷くばかりでした。

かりでした。

「庭の雑草には夥しい数の寄生虫の卵や幼虫が附着しています。それに触れたら、それから皮膚の中に潜りこんでしまうのです。普通の寄生虫なら海人草やサントニンで下すことも出来ましよう。でも、ここにいる種類には効目がありません。徐々に薬に慣らされてもうそんな特効薬では酔わなくなった種類なんですから。人間の体内実験のために幾度も体外に排泄されているうちに、徐々に薬に対する抵抗力が出来てしまっているのです」

妾は由美子の言葉をききつつも、体内実験をされる人間は誰であるのか少しも氣付くとしなかったのです。由美子自身も何気なく口を滑らせたものでしょう。若しそれに氣付いたなら、彼女は自分の迂濶さに唇を覆うたに違いありません。

偶然に庭先に立ったことによって、幾人目の被実験動物になるべき運命が妾を見舞っていたことには、不幸にして妾はその時少しも氣付かなかつたようでした。

「先生の体内にもはいりこんでいる筈です。今頃はもう孵化して、幼虫が粘膜に吸いついて先生の体液をたらふく吸っていますわ。丸々と肥えた幼虫が目に見えるようですわ」妾は体中が鳥肌になっていくのを感じました。

「止して、由美子さん」

「この薬を飲んで下さい。兄の依頼です。虫を下してしまうのです。他の薬では効目がありません。今、ここで、飲んでいただくようにと兄が申しています。下剤が混っていますから、すぐに排泄されます。勿論排泄は兄がいただくことになっています。私の家以外で排便なさると不味い結果になると兄が申しています。それだけですわ。兄の伝言は」

由美子は語り終ると、ふさふさした髪をぐったりと仰向けに椅子の肩に寄せかけて、絶望的な暗い目を方途ない空間に放ちました。

「だって、そんなこと嫌だわ」

妾の頬は真っ赤になりました。由美子は気不味そうに視線を伏せ、空虚な調子でいいました。「そうおっしゃってても、駄目ですわ。」

駄目なことは駄目なんですもの」

「妾、これを戴いて帰ることにするわ」

妾は素早く卓上のセロファンに手を伸ばしました。由美子は鉄の鎖でも断ち切るように、短かく鋭く、

「駄目！」

といいました。此方を睨んだ双眸に燐が燃えるような妖しいものが無気味に底光りしていました。

(あ、この瞳!)と妾は瞬間思いました。兄の哲三郎の冷やりとした瞳を想い出したのです。妾は何故かその時、目に見えぬ不幸な細い糸でしっかりと哲三郎に結びつけられてゆ

く自分を感じました。

(三)

相手がたとえ生物学を研究している学徒であるからといって、自分の排泄物を年若い異性に恣にまきまきさせるということは妾の潔癖さが許しませんでした。しかし由美子の鋭い目つきは、妾にそのことを回避させませんでした。

服薬の後、妾はエナメル塗りの美しい便器を手渡されました。それからの妾の行動を詳細に書くことははばかれることです。(註数行が黒く抹殺されてあるので判読することが出来ない) 要点と概略のみにとどめておこうと存じます。

薬品中に下剤の混入していたためか、妾は間もなく腹部の蠕動作用が著しくなってきたように感じました。由美子に命ぜられるままに妾は便所に案内されました。

「すっかりそこに取っておくのですよ。先生。すっかりね」

由美子は扉を閉めながら念を押しました。

「どうしてなの？」

「兄がそういつてゐるんです。少しでも他所に流したらいけないんですって」

由美子の声は扉越しに人が変わったように陰気に聞えました。

下剤の効果は顔面でした。

通常の形が崩れてしまったその排泄物は紙とのりをどろどろに煮つめたあの模型地図のように容器一ぱいに拡まりました。何よりも嘔吐感を妾に起させたのは、その黄土色の泥沼の中で浮き沈みし身を藻掻かせている無数の白い虫でした。丁度拇指の爪を切った位の大さきの幼虫が勢んに蠕動しているのです。妾は得態の知れぬ冷たい手で顔中を逆撫でされたような気持がしました。

「先生、まだ？」

扉が遠慮勝ちに叩かれました。妾ははっと我に帰ったのです。同時に羞恥がどっと頭に向って逆流しました。(断じてこんなものを見せることは出来ない) 妾は心の中でそう繰返しました。

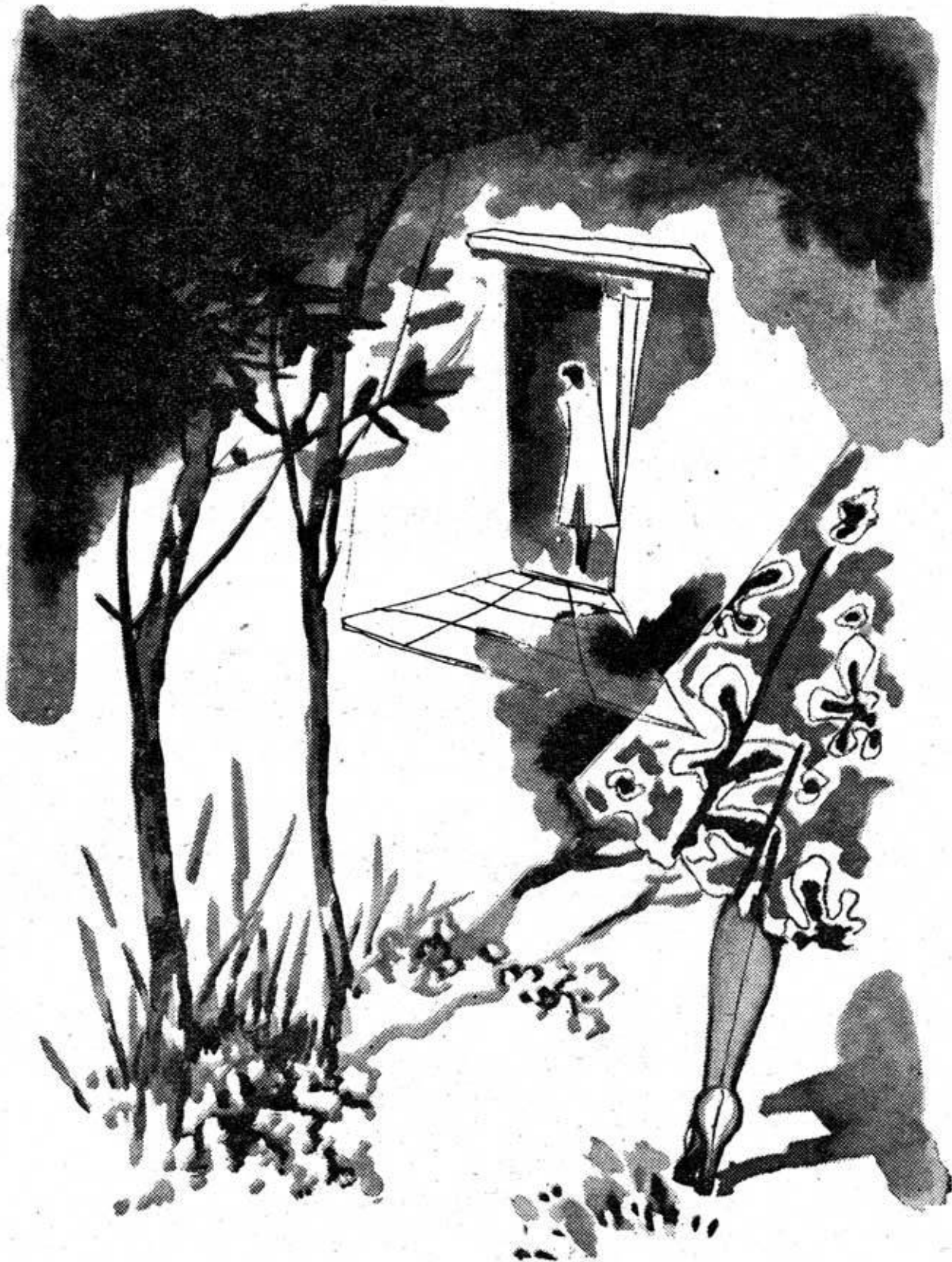
「先生、流しちゃ駄目よ」

真剣な由美子の声が又響いてきました。妾はその言葉に暗示を受けたかのように、反射的に水洗便器の中へエナメル塗りの容器の中味をあけ、水洗ペタルを力一ぱい踏んでいました。

轟々と烈しい響を立てて水は瞬く間に排泄物を流しつくしました。

「ああっ」と悲鳴に近い叫びを放って由美子

が妾の腕をとらえていました。まるで万力で締めつけるようにぎり／＼と腕を握みながら「何ていうことなさるの。何故こんなことなさるの」



と彼女は鋭い詰問の目を光らせて非難する
のでしい。妾が無言でいますと、エナメル塗
りの便器を由美子は取上げて妾の腕を引張っ
て廊下へ出しました。彼女は僅かばかりの幼

虫と排泄物の附着しているその便器を、まる
で貴重品を持っているかのように大切に取扱
うのです。妾は彼女の緊張したその表情を見
るにつけ、哲三郎が彼女の上に及ぼしている

勢力の強さを改めて感ぜずにはいられません
でした。

妾は応接室に戻ってくると、その場に倒れ
てしまいたいような重い疲労が肩にかぶさっ
てくるのを感じました。妾はそのま

まの突っ立った姿勢でいることが、
やっとのことでした。妾は眩暈を
え、声を励ましていいました。

「お兄様にお詫びしといて下さい
ね。妾、失礼させて頂くわ」

「待つて頂戴」

由美子はそういつて腰のあたりを
押して妾を坐らせようとした。

妾はまるで体の力が抜けてしまった
ようで、逆うことが出来ませんでした
た。妾はよろめいてソファに手を
つきました。

「お薬がきつすぎたのですわ、きつ
と。待つて下さいね、待つてて……」

由美子は妾の様子に落着を失った
ようでした。めりこむようにソファ
に体を沈めた妾を見ると、周章で
て廊下へ出ました。

「お兄さん」彼女の呼声が夢の中で
の呼声のように杳かに聴えたかと思
うと、妾は前後が分らなくなり昏睡
していました。

(四)

「先生、先生！」

ふと気付くと由美子の真剣な呼声が聞えていました。妾は全身が痺れたようになっていましたが、耳を傾けようとして懸命になりました。

「お気づきになったわ、お兄さん」

低い囁きが手に取れるようでした。妾は乳色に朦朧と煙った視界の後に、人の動くらしい黒い気配を感じはじめました。それは次第にぼんやりと形を調べて来ました。理科学生の着る白い手術衣の青年と由美子とが、じつと此方の様子を凝視めている様子がしばらくの間は月でも眺めるように他所々しく妾の目に映じていました。

「あ、そのままだ」

妾が起きようとするのを認めた由美子が静かに肩を押し返しました。

「失礼しました」と青年は始めて会った時よりは余程打ちとけた親しみの籠った表情を恐縮そうに妾に向けて、身をかがめこむようにしていました。「つい普段の調子で薬を配合してしまいました。お慣れになっていないから無理ありません。ほんとうに驚かれたことと思いますが不手際は重々にお許し下さい。しかし、生命に別状あることではありません。大丈夫です。すぐに恢復なさいます。」

嘔気はどうですか」

「はい」と妾は何方ともつかぬ曖昧な頷きようをしました。「少しばかり……」事実、妾はかなりひどい嘔吐感に悩まされていたのです。

「そうですか。しかし間もなく良くおなりです。時間の問題です。寮の方へは妹が御連絡した筈です。ごゆっくり休息になってください」

「ええ、先生」と由美子は兄に代って話しかけました「舎監の先生へお電話でお断り致しておきましたから、今晚はお泊りになって下さいね」

「いえ、そんな御迷惑をかけては」妾は急いで遮りました。「帰らせて戴きますわ」

「だってまだお帰りになれないじゃありませんか」

由美子は、やや憤然としたようにいいました。

妾はそのときになってようやく周囲の状態を観察する余猶を持ちました。妾は六畳ほどの日本間に床を敷いて横たわっていました。電燈は青い小さい豆電球でした。開放された窓からは除虫用金網窓ごしに夜風が流れこんで部屋を静かに洗っていました。

薄い夏布団の下には浴衣をまとった妾の体が熱っぽく息づいていました。妾は何時の間にか下着類まで着換えさせられていることに

気づきはっとしました。妾は首をもたげて衣服を探し求めました。

「服でしたら、お隣にあります」

由美子は此方の意嚮を察したようにいいました。

「先生が失神されてから直ぐに洗腸致しました。下剤に刺戟された幼虫たちが毒素を出しましたから、そのまま放っておいては危篤になるのです。そうしたらまだ腹腔内に残っていた寄生虫もことごとく排泄されましたわ。先生のお体がそれだけ知らぬ間に疲労を重ねた訳ですが、でも仕方がなかったんです。そのとき、勝手にお召換えさせていたいたんです」

(この兄妹は)と妾は赧くなりつつ考えました。(妾が意識を失って獣のように排泄する様子を終りまで見ていたのだ。醜い妾の生理行為を恣に取扱ったのだ。妾の体は自由にされたのだわ)

妾は哲三郎と視線が合ったとき、もはや体の自由の効かないかのような状態になって、真っ赤になって伏目になるより他のことは何ごともなしえませんでした。

「今晚はゆっくりお休みになって下さい。是非そうして戴かなくちやあ」

そう哲三郎がいったとき、妾はへびに見込まれた小兎のように頬を染めてこっくりと人形のように頷いていました。

翌朝になると妾はほとんど元氣を取戻して
いました。由美子は学校からキャンブに出か
けていった後でした。上品な母親が柔和な微
笑を浮べて妾に朝食を摂らせてくれました。

「御氣分はもうおよろしいようですね」

「ええ、お蔭様ですっかり善くなりました。」

御心配お掛けして申訳ございません」

「何ですか哲三郎が非常に熱心に、ゼヒとも
研究室の方を見ていただくのだと昨夜から申
していますのですよ」

妾は朝食の後、母親が研究室の片付け工合
を見てくるからといって部屋を出ていつてか
ら、しばらく独りになってぼんやりと考えに
沈んでいました。妙に自分の体が心もとない
空虚な頼り気ないものに思われはじめまし
た。

妾の体内に寄生虫がひそんでいて、それが
妾の摂取する食物を悉く食べつくしてしまう
という妄想が妾を極度に不安にしました。エ
ナメル容器の中で浮き沈みしていた真っ白の
よく肥えた幼虫を思い出すと妾は身慄いしま
した。しかし間もなく妾はそんな妄想を忘れ
去って羞恥と飲みの入りまじった複雑な微笑
を浮べねばなりませんでした。哲三郎がはい
ってきたからです。

「御氣分はよくなったらしいですね。一つ氣
晴らしに標本を御覧になりませんか。御案内
します」

「ありがとうございます。でも」と妾はため
らい勝ちに辞退しました。「学校が御座居ま
すので……」

「ああ、今日はもう行かれますか」と哲三郎
はあっさりうなづきました。「では、又今度」
と妾は相手がいうべき文句を思わず口にして
いました。何となく物足りない氣持がしたの
です。

母親と哲三郎にいとまごいをすませた妾
は、その足で学校へ行きました。

(五)

生れて始めて感じ得た不思議な心のときめ
き——それが恋というべきものだった。妾
は恋の虜になっていたのです。終日妾の想
いは哲三郎の上にあつた。冷静な学者型
の彼には庄しつけられた情熱が心の何処かに
静かに堪えられている、そう妾には思われる
のでした。

翌々日の日曜日に妾は菓子折りを持参して
笹崎家の門を潜っていました。看病になった
お礼の心算でしたが、もうその頃から妾の魂
は目に見えない蜘蛛の糸に搦みとられて毒液
に五体が痺れさせられていたので、健全な理
性が充分に欠く隙がなかったものと思いま
す。妾は哲三郎の調合した薬に何かそのよう
な麻睡薬のような妖しい粉末が混じられては
いなかったのかとさえ疑う氣持です。しかし

その頃の妾はそんな疑念をさしはさむ心のゆ
とりを持ちあわせる筈ありませんでした。
健康な思慮判断をもっている自分では思
つていても、それが少しずつ調子の狂ったも
のだったのです。だから全体として夢と現実
とが重なりあつたようで、何となく責任とか
義務などという鹿爪らしいしきたりをなげや
りに思うようになっていました。

その日、哲三郎にすすめられて彼の研究室
に足をふみ入れた妾は、もう常日頃の妾とは
違つたものだったのです。若し妾が世間でい
う常識に強く支配されていたならば、妾は凡
らく早々に笹崎家を辞去していただしよう。
「まあ、見て御覧なさい」と哲三郎はいい、
妾を導いて応接室を出ました。

哲三郎の研究室は相当に広いものでした。
裏庭に位置している洋室がそれでした。窓辺
には鬱そうと茂つたヒマラヤ杉の枝が触れ、
室内を昼間でも電燈の入要な位に陰氣に翳ら
せていました。

「何分仕事の仕事ですからこんな工合にして
おかないと都合が悪いのですよ」

哲三郎は螢光燈のスイッチをひねりながら
いいました。

大小多数の試験管やガラス製水槽が並んで
いました。「これが寄生虫の成長過程です」
哲三郎の指さす方向に目を転じますと、太い
丸いガラス容器が十数本も戸棚の上に並んで

いました。アルコール漬の寄生虫でした。妾が今迄に見たこともない種類ばかりでした。

凡そ一米はあろうかと思われる長い寄生虫は不気味なブヨ／＼とした白い身体を幾重にも曲げられて密封されてありました。三角形の頭部には肉眼でもそれとわかる鋭利な鉤状の口が具わっていました。

「あれでしつかりと腸壁に喰付くのです」

哲三郎は囁くようにいいました。室内の空気が陰気に冷えこんでいた上に、一種独特の酔いようなにおいが漂っていたのでいささか気分が悪くなりかかっていた妾は、その言葉で急に体中が冷えこんでしまったような気がしました。

「あんな巨きな虫がいますの」

「馬に寄生する種類です。学名をパラアスカリス・エクオルムといいます。その横のが犬に寄生する種類です。トキソカーラ・ガニス」

哲三郎は呟くようにいうと、もう一つの標本瓶の貼紙を此方へ向けました。

「トキソカーラ・ミスタックス。猫の寄生虫です」

「随分沢山の種類ですわね」と妾はいいました。「人体には宿りませんの」

「宿りませんね」

「そうでしょうね、あんな巨きな虫に喰付かれたら一堪りありませんわ」

「それでもありません」哲三郎は首をふりま

した。「どんなに巨きな種類であっても数が多くつても、それだけで危害をこうむるということは必ずしもありません。戦前に台湾の患者が二千匹も蛔虫をもっていた例があります。三百匹、七百匹という例は屢々報告されていますよ。宿っている寄生虫の数と被害とは並行しません」

「じゃあ、そんな虫は何を食べて生活していますの」

「宿主の体液、血液、營養物、消化残渣などですわ」哲三郎がそう答えたとき、庭の方で悲し気な犬の鳴声が聞えました。

「実験動物です」妾の物問いたような眼差しに答えて彼はいいました。「数匹の犬と猫を飼っています。鼠もモルモットもいます。大学の研究室にはもつといろ／＼な獣や鳥がいますよ」

「人間がいませんね」

妾は冗談のつもりでいいました。

「いますよ」

哲三郎は冗談とも真面目ともつかぬ調子でいいました。「ぼくなんかも被実験者です。慎重にやれば無害です。寄生虫の卵をのむ。成虫になったころ、薬品で排泄するのです。慣れると成虫に親しい者同志のような気持を感じます。血を分けたものですからね」

「いやですわ」

「ほんとうですよ。あなた方は寄生虫という

と不潔なもののように思い勝ちですが、絶対にそんなことはありません。自分自身と同じものをたべ、体内で養い、血をわけた者なんですからね。不潔だと思ふのは偏見ですよ。人間の利己主義です。むしろぼくは愛玩物のように思っています。自分の体内で育てたものだと思ふと何となく親しみを覚えるじやありませんか」

妾は由美子が何時か語った哲三郎の考えを思い出しました。

「そればかりではありません」と哲三郎は情熱的に瞳を輝かせていいました。「自分の体内で育てたものを今度は恋人の体内で発育させる、それをもう一度自分の体内で……。そんなことを考えるのです。先刻犬の寄生虫は犬以外の宿主には育たないといいましたね。しかし繰返し人体実験を重ね、少しずつ交媒させていくと新しい種が誕生するのです。人体にも育くまれるような種が……」

哲三郎の手は妾の手を強く握りしめていました。「協力してくれるでしょう」彼の言葉が妖しく耳朶をくすぐりました。妾は全身が痺れるように思いました。何時か妾は崩れるように彼の胸に落ちこんでいました。彼の指が顎にかかったかと思うと、妾は下から見上げるような恰好で彼の唇の真下に在りました。情熱的にキラキラと輝く彼の瞳に魂を吸いとられたようでした。

(以下次号)

私の裏面の生活

浣腸とおむつ

月岡映子

浣腸の持つ魅力を一口で云い表すことは難しいことですが、あの冷い液体が注入される瞬間と、その後に起きる生理現象に耐える苦しみに伴う恍惚感にあるように思えます。

浣腸に対してこの様な魅力を持つようになったのは、それこそ遠い幼い日からであり、病弱であった私が、始終母親に浣腸をされた経験が、いつの間にか私にこんな性癖を持たせてしまったのでしよう。

そして成長するに従い益々浣腸に対しての執着が強くなり、浣腸のプレイにも思いつくまゝいろいろと異った方法を用い一人の秘密を楽しんでおります。

勤務先の都合で両親の許を離れ、親類の方の経営しているアパートに移る様になってか

ら思いついたプレイの一つを皆様にお話し致したいと存じます。

先ずお部屋の扉に鍵をかけ、その鍵を又鍵のかゝる小箱に入れます。それを二つのダイヤルによって開閉出来る手提金庫におさめ、更にタンスの引出しに入れて鍵をおろしてしまします。その様にお部屋のドアの鍵は、三重の扉を開けねば手に入らぬ様にしておきます。そして浣腸の用意にとりかゝります。

お部屋の灯はスタンドの淡いピンクの光りだけにして私はパンティーとシユミーズだけでベッドに横たわります。

浣腸後の烈しい生理現象がおきてくると同時に、扉の鍵を手に入れるため、二重三重の扉を数ある似た様な鍵の中から合鍵を探し求

めて一つ一つ開け、目的のお部屋のドアの鍵の入っている小箱を探し出さねばなりません。

そしてやっこの思いでドアを開け、階下のトイレに走ってゆくのです。それは慣れているとはいっても、大変手間のかゝるもので、その間、ずうと我慢し続けねばならないのです。あせりとその肉体的苦痛は言葉では表現出来ません。それだけにマゾ的な気持には心ゆくまで浸ることが出来ます。私はあまり我慢強い方ではないのか、浣腸をしたあといくらか我慢をしても十分とは辛抱出来ず、このプレイは、何度繰り返してもスリルのあるものです。

ある夜のことですが――。お部屋で出来るだけの苦痛を味い、慌てゝ階下のトイレに走ってゆきましたが、もう十時もとくと過ぎた頃なのにかゝわらず、三つある女性用のトイレが生憎とふさがっておりまして。我慢しながら洗面所で顔を洗い、空くのを待っていました。中々出てくる様子もなく、私も我慢の限界まで来てしまいましたので、仕方なく、自分の部屋の方へ戻りかけましたが、動いたのが却っていけなくとうとう間に合わず階段を登りかけた所で粗相してしまいました。

本誌の旧号で花村さんのお書きになった手

記に、浣腸をなさり月経帯をして映画館へいらしたことが書いてございましたが、あまり我慢強くない私にはとても怖しくて出来そうもありません。そのくせ、私も花村さんの真似をしてこんだ映画館に入り、急にトイレにゆくことも出来ぬ様になった時のことを想像致しますと、烈しい恐怖の反面、妖しい魅惑のとりこになってしまいます。

私が若し実行するとしたならば、月経帯の代りにおむつを利用しようと考えています。

これは階段の所で粗相をした後で考えつきその後浣腸のブレイのアクセサリーとしておむつを使用し続けているのですが中々素晴らしいものです。浣腸マニアの方でしたらどなたでも御気付のことと存じますが、浣腸後の生理現象の際には必ず排尿の作用が起ります。それも出来る限り耐え、急いでトイレに行き瞬間的に排泄してしまうより、おむつの中に我慢しつつ少しずつ洩らしてゆく方が、はるかに被虐的汚辱感が素敵な様に思えるからです。しかし、このおむつを利用しての浣腸プレイも一番困るのは汚れたおむつの後始末でアパートに一人で住んでいる私が、他の洗濯物と一緒に屋上の物干で乾すことはとうてい出来ません。それで現在は金網で出来たおむつ干し器を用い、残りの炭火で乾しております。

赤ちやんと異りもう大人の私ですのでおむつの枚数がどうして余計に入り勝ちですが、出来るだけ少なくて済ませたいのと、それからスタイルの上からも特別なおむつカバーを自分で考案致しました。外側は色模様の毛織のやゝ厚手の布地で作り、四つのスナップで止めるようにしました。内側のビニールは自由に取りはずしの出来るようにし、洗濯の簡易化を計っております。着古した浴衣をほどきおむつを作り、それをヒップの横に二枚、後から前に三枚程当てがい、その上からおむつカバーをぴっちり当てると、決して外部へ洩れたりすることはございません。

思った程腰のあたりが醜くなる様なことなく、夏の薄着の時は別ですが、冬の頃オーバでも着て外出でもすれば絶対に他人から気付かれるようなことはありません。

夜ねる時は勿論、気が向けば家にいる時は日中もおむつを当てゝ、その布地の柔かい感触とぎゆうと締めつける密著感を充分に楽しんでおります。

然し、自分から浣腸等をして、その後に起きる生理を期待しその苦痛を味うのとは異り急に、それこそ予期しない時に思いがけぬ場所排泄の苦痛に耐えるのは一層苦しいことです。昨年の冬、会社のスキー部でバスを借りM高原へ参りました。バスは途中どこも止

まらず長時間走り続けるので女性の私達はトイレにゆくことも出来ず全く困ってしまいました。

男の方々は時々バスを路端に止め用を足しておりましたが、私達女性はそれも出来ず、普段でもトイレの近い同僚のTさんは本当に困っておしまいになり、今にも泣きそうな顔をして懸命になって我慢なさっているのが見えているだけでもお気の毒でした。私もその中に段々と尿意を感じてくると、こんな時こそおむつを当てゝ来ればよかったなあと内心思ったりしました。

やっとなある小さな汽車の駅でバスは止り私達をほっとさせてくれました。その夜ホテルに着いてから、私達はTさんを中心にしてバス旅行のトイレにゆかれなかった苦しみを話し合い、みんながもうこり／＼だと云い、帰りはどうしようかと相談していました。誰かゝあんなバスに乗るならおむつでも当てて乗らなくては……と云い出した時、私ばかりでなく誰もが、あのバスに揺られながら尿意を我慢していた時、ひそかにおむつを想い浮べていたのかもしれないと思いました。

普段、あれ程に愛用しているおむつとカバーを用意してこなかったことをこの時ほど残念に想ったことはありませんでした。

戀^{こい}

の

脱^{ぬけ}殻^{がら}

松井 籟子

北原 純子・画

私にはどうしても夢のようにしか思えませんでした。

音楽会で曾我さんに会ったのも夢なら、夜の暗い道を一緒に並んで歩いているのも夢のように思ったのです。

私は再び、そんな風に曾我さんに会えるとは思っていませんでした。

そりや、いくら広い世の中でも、同じ大阪にいる以上、どこかで会うことはあるでしょう。けれど、もし会ったにしても、話をするどころか、多分、かたい表情で目礼して、そのまま、右と左に別れてしまうのではないかと思っていました。

私はよく曾我さんに会う夢を見ました。夢の中で、微笑しておじぎをするのです。ただそれだけの夢でした。でも、それだけなのに朝の寝床を離れがたく思う程、心がふくらんで、夢の中の曾我さんの微笑を目の前にうかべていたものでした。

それが、今日の音楽会で、廊下のソファアに腰をおろしている私の前へ、曾我さんが立って

「しばらく……」

と、微笑みかけてくれたのです。

私は、背中がカーッと熱くなって、急に汗がういてきて困りました。

「お元気でしたか？」

なおも親しそうに話かける曾我さんは、私と親しくしていた一年前と一寸も変わらないのです。その微笑に私もつられて

「本当に、しばらくでした」

と、いうのが精一杯だったのです。

「おひとりですか」

「ええ」

云っているうちに、開演を知らせるベルがなりました。

目礼して席へ戻ったものの、私は次の曲をほとんど聞いていませんでした。

久し振に会ったのに、あのまま別れてしまうより他にないのだろ

うかと思う心と、だって仕方がないじゃないか、今更、曾我さんと会って何の話があるんだという気持と、そして、もっととりとめなく、曾我さんの言葉の調子とか、やわらかい目差しとか、頭の中を右に左に横切っていく想念が後になって、その間に舞台の音楽が入りまじって、いつか私は泣いていました。

夢のようだと申しましたが、外国からはるばるおとづれた今日の楽団を、曾我さんが聴きにくるだろうということは、心の底で承知していた筈です。土、日、月と三日間ある公演の、どの日にくるかということは賭のような感じで、私は決して、不用意に、この音楽会の切符を買ったのではなかったのです。

やっぱり会いたかったのです。視線をあわせなくても、曾我さんの姿を見るだけでもいい……そう思ったのです。

それなのに、終演の人波の中に、曾我さんが私を待っていてくれたのです。

やっぱりこれは夢なのかもしれません。

一年振で聞く曾我さんの声は、やわらかい響きを持っていて、そよ風のように私の体の何か奥底にあるものを、心よくゆするのです。

(私はやっぱりこの人を愛している！)

と切ない程にそう思いました。

二人で並んで歩いて駅まで来た時に

「もう少し歩きましょうか」

そう云ったのも、曾我さんです。

「ええ」

と答えながら

(何故? 何故?)

と、私の心は問いたくて仕方ありませんでした。

(何故私にやさしくなさるの? 一年振だからですか? 御迷惑じゃないんですか? 私を嫌っていらっしやるんじゃないんですか?)

私は心の中で曾我さんに問いかけました。そして又しても、同じ問い……

(何故? 何故……?)

と、叫んでしまいたい気持で一杯だったのです。

一年程前、私は曾我さんのお仕事を手伝っていました。曾我さんは音楽雑誌の編集をしていたのです。

私は曾我さんに惹かれました。曾我さんも私に好意をもってくれているように思われました。いいえ、そううぬぼれたのです。

でも、私は曾我さんに奥さんがあることを知っていました。だから、私がどんなに曾我さんを愛しても、口には出すまいと思っていました。ただ曾我さんの傍でお仕事をする……それだけで嬉しいと思っていようと思いました。時々夕飯に誘って下さったりしましたが、話といえば音楽のことや、文学や、映画など、話題が豊富で思わず時間のたつのを忘れる他は、男と女が二人で食事をするような特別な色がつくような話はありませんでした。

でも、時には、ビールを一本で目もとをうるませた曾我さんが、何でもない話の中で、私の心の奥をさぐろうとするような、目の色をふっと漂わせることがあったのです。

そして、私はあの日、云わなくてもいいことを云ってしまったのです。

多分、すすめられてのんだビールが、私の舌をなめらかにしたのかもしれない。

私は曾我さんを愛しているということを云ってしまったのです。

「僕も……」

と、云ってくれたら、どんなに嬉しかったことでしょう。

けれど、曾我さんは

「酔ったね」

と、笑って、その話をそらしてしまつたのです。

いいえ、今考えれば曾我さんが話をそらしたのではなかったのかもしれません。その時、丁度、そのお店の人が、何か注文したものを持ってきてくれて、曾我さんに話かけたので、私はもう一度あらためて、自分の心を云い出すきっかけを失ってしまったのです。

それっきりだったら、私はべつに、曾我さんが私を嫌っているとは思いませんでした。

でも、私は他の人の口からそれを聞いたのです。

丁度、その頃、月岡という画家が、曾我さんの音楽雑誌のカットを書くので、時々事務所に来ていました。

月岡は私の遠縁に当るので、曾我さんの仕事を私が手伝うようになったのも、月岡の紹介だったのですが、久し振の休日に、私が家にいる所へたずねてきました。

その頃私は友達の家で下宿していたのですが、その友達夫婦と一緒に田舎へ行っていて、私はひとりで留守番していました。

月岡が前から私に好意を持っていることを知っていましたが、私は兄のような感じがして、心の中で何かと頼りにしてはいても、愛情とは別のものでした。

むしろ、私はその日、月岡の顔を見て、私の曾我さんに対する苦しい気持ちを聞いてもらいたいようにさえ思っていました。

しかし、それを私がいうよりさきに

「あんまり自分の心の中を、つとめ先で出すなよ」

と、月岡がいうのです。

私は、私が心の中で曾我さんを好きになつていても、きっと、何かの態度に出るので、事務所の人の噂にのぼっているのだらうと思いました。

「誰か何か云っていた？」

私は笑いながら問い返えしました。

「仕事をしている場所で自分を赤裸々に出す男なんていやしないんだよ。いいかげんにあしらわれているのを君だけがむきになつていたら、君の恥なんだ」

月岡はいうのです。

「それ、どういふこと？」

私は何かしらん、胸もとへ棒をさされたような気がしました。

「まあ、僕は君が好きだから、君を笑いものにしたくはないんだ」

「誰がどう云つたの？」

「そんなこともういいよ」

「よくないわ。誰にきいたの？ 誰がそう云つたの？」

私はたたみかけて云いました。

「君はね、淋しかったら、僕のような者を相手にしている方がいいんだ。僕はべつに、うぬぼれもしないし、迷惑だと思ひもしないし人に云いもしない……」

「どういふ意味なの、それ……？」

私は不安に胸がどきどきしてきました。

私が曾我さんの感情をうぬぼれたというのでしょうか。いいえ、それより、曾我さんの口から、何か、私のことを月岡が聞いたのでしょうか。

私は曾我さんを愛していました。でも、そんなこと、曾我さんが人にいうなんて……。それでは、私をからかって面白がっていたのでしょうか。

「ねえ、云って、誰が何と云つたのか云って」

私は月岡の膝へ思わす手をのせました。月岡がその手をかたく握りしめても、されるままになっていました。

ただ、うわ言のように「云って、おねがだから、教えて」と、くり返えすだけでした。

「それを云つたら、君は、自分の感情を変えられるのか？」

「私が曾我さんを愛している感情？」

「そうだ」

「あきらめるわ」

私はいいました。もし、曾我さんが何か云ったのなら、曾我さんが私を愛していない証拠になると思いました。

だって、私は本当に曾我さんが好きだったのです。だから「愛している」と云ったのです。「苦しくて眠れない」と云ったのです。

そんな、ひとの真剣な感情を、月岡に話すなんて、そんな軽薄な人だとは思えせん。でも、それを云ったのなら……

「そんなら云ってやる。僕は君が可哀想だからいうのだ。曾我さんが云ったのだ。僕に、恵津子さんに惚れられて迷惑しているって……」

「曾我さんの口から？」

「そうだ。何とかして下さいよと笑いながら云っていた」

（あんまりだ！）

私は思わず曾我さんをうらみました。でも、恨んでみたところで、もとはといえば私が好きになったのがいけないのです。いえ、惚れたといいましょう。惚れる……

いやな言葉……でも仕様がな……たしかに、私は曾我さんを愛しているんだから……。曾我さんの知ったことではないんです。曾我さんが、ただ、仕事の上で、私によくして下さる延長に、夕飯をお



ごって下さったのを、私がうぬぼれたとしたら、本当に迷惑だったでしょう。まして、奥さんも子供さんもあるのに、私に好かれるなんて、わずらわしいことでしょう。でも、私がそれを他の人に云ったのなら悪いけれど……。曾我さんが私を好きだなんて云ったこと

もないし……。ただ、私は自分の心の中だけへしまっておくには、あまりに曾我さんへの愛情がふくらみすぎてしまったので、言葉が器から水がこぼれるように、私の胸から外へあふれ出てしまっただけなのに……。

私は急に、自分がみじめで、どうしていいかわからなくなりました。

月岡の膝へ突っ伏したら、涙が出てきて……。

「君は馬鹿だよ」

月岡がいいながら、私の涙を自分の唇で吸ってくれるのを、されるままになっていました。

「そうよ、馬鹿よ」

曾我さんに失恋した自分も馬鹿なら、月岡も馬鹿だと思いました。

何か狂暴な力で押しつぶされてみたいような気がしました。

「馬鹿だから、私を打って！」

私は月岡に云いました。

「よし打ってやろう」

月岡はなかば笑いながら、私のお尻を平手でたたきました。

「痛くないわ。もっと、強く！」

私の心の苦しさからしたら、肉体的な呵責なんて、一寸も痛くはありませんでした。

それよりも、胸がはりさけそうな苦しさをどうしたらいいのでしょうか。

私は曾我さんを愛していたのです。妻があっても子供があってもそんなこと、どうでもよかったのです。愛情というものは、いくら押さえたって、好きなものは好きなんです。

それなのに、そうまで曾我さんに云われて、どうして、これ以上曾我さんの傍で仕事が出来てしょう。

「迷惑している……何とかして下さいよ」

自分の愛している人の口から、そんな言葉がはかれるなんて……。(恥しい！)

と、私は思いました。

多分、月岡だけではなくて、他の人にも云っているんでしょう。

(あいつ、曾我さんを好きだといって、ふられやがった)

人はそういうでしょう。

いったい私はどうしたらいいんだろう！

「私を押しつぶして！」

私は月岡にそういうよりなかったのです。

「私をめちゃ／＼にして！」

私は泣きながら月岡に云いました。

「僕のものになるか」

月岡がいうのに

「なる！」

私はこくんとうなずいてしまったのです。

×

月岡は私が曾我さんを愛しているのを知っていて、それを口実に私を苛めました。

苛めるといっても、なぐったり、蹴ったりするわけではありません。それなのに、私の体は疵だらけになってしまふのです。

何故でしょう？

私がそうしてくれというからです。

私は曾我さんが私を愛してくれていないと解っても、どうしても自分の気持を変えることが出来ないのです。

けれど、愛してはいけない人を愛するなんて、自分で自分が癪なのです。曾我さんを忘れられなければ、忘れられない程、自分自身が癪にさわってならないのです。

もっと、さっぱりと、浮気心のように、風に吹きとばしてしまえ

ないものでしょうか。

どんなに愛してはいけない人であっても、向うも愛してくれてい
るなら、私の心の中だけで、愛しつづけるのに躊躇は感じません。
月岡なんとか、愛欲の夜をすごしはしません。ひとりですと、自
分の愛情をいたわって、ただ夢の様にたのしんでいます。

でも、相手が何とも思っていないのに……まして、迷惑だと思っ
ているのに、自分の恋情をどうして、消すことが出来ないのですよ。
自分の未練がましさが憎らしいのです。憎いから、打ってもや
りたいのです。

いいえ、それよりも、月岡がもっと私をしつかりつかまえてくれ
たら、私が曾我さんのことなんか考えないですむようにつかまえて
くれたら……と、人だのみな気持さえおこるのです。

束縛してほしいと思いました。

私は月岡が外へ出て行く時、柱に縛ってもらいました。

それも、後手に柱へつながれているだけでは物足らず、後手に柱
へ手をまきつけて、その手首を縛ってもらい、さらに体を動けない
ようにぐる／＼とまきつけてもらうのです。

私はそうされると妙に安心しました。

(月岡の家から出て行けない……私は月岡のものなのだ……動けな
いのだ)

そう思うのです。

けれど、いくら体が縛られても、心は決して縛られません。

外から鍵をかけて、月岡が出てしまったあと、ひっそりとした家
の中で、私は柱にくくられたまま、大抵隣の家のラジオを聞いてい
ました。

手がしびれてきて、だん／＼苦しくなってきました。

(苦しい! 痛いわ!)

ひとりごとを云いながら、私はやっぱり曾我さんのことを考えて

います。心は自由なのです。縄でしばるわけにいかないのです。

(本当にそんなこと曾我さんがいったのだろうか?)

そうした疑いが頭に一杯になってきます。

(いいえ、云わないとしても、云ったと思えばいいのだ。曾我さん
に愛してもらうことは曾我さんの家庭をこわすことになるのだもの
やっばりいけないわ。これでいいのよ)

私は私に云いきかせます。

(でも、会いたい!)

そうも思います。

(だって、会ってどうするの、この体はもう月岡のものなのに……)

そして、私は、もっと／＼月岡のもののだと、自分に云いきか
せる証拠がほしくなります。

私は柱に縛られたまま、体中に月岡のものだというしるしをつけ
てもらいます。

月岡は何故私がそんなことをいうか知っています。

「まだ、曾我のことが忘れられないのか?」

そういう月岡に、私は

「ええ」

というより仕様がありません。

「あなたが忘れさせてくれないんですもの」

そういうと月岡は

「よし」

といって、私を鞭打つのです。

お隣へ聞えないように、口の中へハンケチを押しこんで、その上
からしっかりと猿ぐつわをはめて、まるでお掃除をしているように
「ひどいほこりだ」

なんて云いながら、細い竹で、私の背を打つのです。

そんな時は、柱に抱きつくような形で縛られます。背中がまとも

に月岡の方へ向くようにです。

私の背中には鞭のあとが、幾すじもの縞になって、しばらく銭湯へ行けなくなります。

私は私の体に醜い痕が点々とつけられていると

(こんな体で、曾我さんを思っているはいけない。曾我さんに対する冒瀆だ)

と、やっと少し気持ちがらくになるのです。

柱につながれたまま眠ってしまうこともあります。

私の手首にはまるで腕環をはめたように、縄のあとがいつでもついています。時には本当に銀の太い腕環でごまかして外出する時もあります。

手首に縄をかけなくても、二の腕だけ縛って、手のさきだけ自由になるおかしい恰好でお炊事をする日もあります。

私が曾我さんのことを忘れていられると、私達は普通のノーマルな夫婦にかえるのです。

でも、愛人同志として一緒に食事したこともない曾我さんなのですが、お箸の持ち方などの小さな癖が私の頭から離れてくれません。街を歩いても、この街角に一緒に立っていた時があったなんて思い出したり、ああ、あの喫茶店で紅茶にウイスキーを入れてのんだっけ……なんて思い出したり……。

人間って、どうしてこうつまらないことを覚えているんだろうと思う程、些細なことが頭に残っているのです。

それでも、丸一年間、とうとう私は曾我さんに会いませんでした。事務所へたずねて行けば会えることは解っていましたが、私は月岡の前で泣いた日以来仕事もやめてしまいました。事務引きつぎのいろんな連絡も、すべて月岡にやってもらったのです。

私は用があつて外出しても、恐い所のように、事務所をさけ、街を歩くにもそそくさと下を向いて歩いたものです。

そして一年、心の中では会いたい、会いたいと思いつながら、目や耳や体をかたくして、会うまいと骨折ってきたのです。

それなのに、今日、この音楽会で会ってしまったのです。

一年も経ったあとなので、曾我さんは月岡に何を云ったか忘れてしまったのでしよう。そして、ただ同じ仕事をした女としてのなつかしさで、へだてのない声をかけたのでしよう。

でも、駅へ来たのに、もっと歩きつづけようとするのは、単なるなつかしさだけだったのでしょうか。

「元気ですか、少しやせたようですね」

曾我さんが云いました。

「ええ」

私は靴のさきを見てうなづきましたが、又しばらくだまっただま歩きつづけました。

「月岡君にもしばらく会わないが、元気？」

「ええ」

それもそういうよりありません。

「僕はね、今だから笑い話に出来るでしようが、うぬぼれていたんですよ」

曾我さんが云うのです。

「君が月岡君を愛しているなら、あんなこというんじゃない」

「あんなことって？」

「一年も前のことだし、今となつては笑い話ですがね」

そういう曾我さんは笑っていましたが、何だか私には笑いながら曾我さんの瞳から私の心臓へブスツと音をたてて突き通るような光が出たような気がしました。

「月岡君にいつだったか、のみに行こうと誘われたんです。丁度、僕の家内の友人で未亡人になった人がいて、くらしの為に酒場を開いたものだから、一度行ってあげなければいけないと思っていたの



です。それで月岡君と一緒にその店へ行っただんですが、月岡君が僕のことひやかしたんですよ。僕は家内の友人の前で、君のことを好きだとは云えなかったんです。僕は君の誠実さというものを尊敬していました。今だから云えるけど、僕も君に対しては、他の女の子をからかうような気持にはなれなかった。もっと真面目な愛情を君に対して持ち出していたんです。それだけによけい『ああ、あの子

なら僕も好きだよ』というような、軽い冗談で答えられなかったんです。男って、見栄坊で、嘘つきなものです。月岡君の前で、僕は自分の心とは全然反対なことをいってしまった。云いながら、あなたが聞いたら怒るだろうなと思った。あなたのことから、きつと、だまっていられなくて、今度会った時、僕に何かいうだろう。そうしたら、僕はあなたに、僕の本当の気持ちを云ってしまおう。そう思っていたんです。滑稽でしょう？あなたが冗談に僕のことを好きだと云ったのを、うぬぼれていたんですね。男の気持って、こんなもんなんです。本当に好きなら、僕がそんなことを云ったと聞いたら怒る筈でしょう？でも君は何にも云わなかった。そして月岡君と結婚してしまった。君の答はそれではっきりしたわけだし、冗談をまにうけて、かたくなたり、どきまぎして嘘をついたりした自分がおかしくてね」

「曾我さん」

私は思わず立ち止ってしまいました。

「曾我さん」

私は唇を求めました。言葉で説明出来なかったのです。

曾我さんはじっと私の目を見ました。そこから私の言葉を引き出すように……。

そして二人はしばらく無言でみつめあっていたのです。でも、気弱く下を向いたのは私でした。

私はもう、曾我さんに愛されることは出来ないのです。私の唇は月岡の唾液で汚れている筈です。

「曾我さん。私の今の気持ちだけ云います。嬉しいんです。とても、嬉しいんです。でもそれ以上、どうすることも出来ません。今此処で死んでしまいたい程、嬉しい。でも、さようなら！」

私は下を向いたまま、合わせてあったものを引きちぎるような気持で、かけ出しました。息のつくかぎりかけました。後から、曾我さんが追う足音がしましたが、丁度、空いた車が走っていたのをよびとめると、

「次の駅まで、急いで……」

そういつて乗ってしまつたのです。

私はその晩、家へ帰りませんでした。

たった一晩でも嬉しさを抱きしめて眠りたかつたのです。

寝巻に着かえる時、私はいとしいもののように自分の体を鏡にうつしてみました。

傷痕の一杯ついた私の体……。

もし、この傷痕がなかったら、私は曾我さんとどこかへ泊っていたでしょう。夢のような嬉しさを、私は私の体ごと曾我さんにぶつけて行つたでしょう。

（あの人も私を愛してくれていた！）

こんな嬉しいことがあるでしょうか。

（もし、曾我さんと……）

私は、曾我さんと抱き合うことを考えると、私の体がとけてしまひはしないかという喜びを想像出来ます。

でも、私は赤い色や、紫色や、それがうすくなって茶色になっているアザだらけの私の体を曾我さんに見せるのは厭でした。

もし、接吻したら、おそらく接吻だけではすまないでしょう。私は私の体を抱きしめて、ひとりで寝ました。

（これでいいの）

私は私に云いきかせました。

（曾我さんの家庭をこわさないで済んだ）

それでいいのだと思います。奥さんはともかく、小さいお子さんから家庭をうぼうことはいけないことですもの。子供にとっては、どんなことがあっても、父親や母親はそろっているべきですわ。それは私自身のおい立ちからいえるんですけど、それを説明すると長くなるからやめましょう。

でも、でも、曾我さんが私を愛して下さつたなんて……なんて嬉しいんでしょう。このまま死んでしまいたいときえ思います。この嬉しさのまま死ねたら、私の死顔はさぞにこやかな顔をしているでしょう。

それなのに死ねないのです。

もし、自殺したら、お医者さんが検屍にくるでしょう。そして、私の体のアザがみんなの前へさらけ出されるでしょう。

月岡はいうに違いありません。「恵津子がしてくれと云つたのです。あいつは変態です」と……。

それを曾我さんが聞いたらどう思うでしょう。私は死んでからまで、曾我さんに愛されたいと思う程、愛に貪慾なのです。

私は自殺することは出来ないのです。

×

今、私はお庭へ穴を掘っています。

女の力がかたい土を掘るのはとても苦しい仕事です。その上、私は囚人のように、足首にくさりがかけられ、庭の木につながれているのです。

毎日、毎日、雨が降っても、雨の中で私は穴を掘っています。い

いえ、月岡の命令で、掘らされているのです。私の体の埋まるだけの大きさの穴を、私は私の手で掘ることを命じられました。

私が一晩家をあげた罪なのです。

私の肩までの深さの穴が掘れたら、私は首だけ出して、その穴へ埋められます。そして、何日か、庭のすみで、晒し者のように、身動き出来ず、じっとしていなければなりません。お天気なら、灼けるような太陽を浴び、雨が降ったら、頭から濡れそぼれて……。

もしかしたら、乳から上を土の上へ出して、動けない体を、月岡はいたずらするかもしれません。何をされても、私は彫刻のように動けないでしょう。犬が来て、彫刻と間違えて尿をかけていくでしょう。猫が来た、私の体の上で爪をたてて、恋猫をよぶでしょうか……。

私は私のお仕置きの為の穴を掘っているのです。

(おわり)

へんしゅう余滴

本誌記者

○モデル志願者は男性に断然多い。略歴に写真

真を添付した人があるかと思えば、中には住所もなく、仮名といった人も大分ある。連絡はどうしてとるかと言え、○○新聞の三行広告にしてくれ、といった変ったのもあれば×月×日、××へ迎えにきてくれ、といった心臓男もある。

○しかし彼等の共通したところでは、モデル料をいらない、と言ってくることだ。女性であつたら大枚のモデル料を払うところだが、男のモデルなら、無料でいくらでもあるということになる。

○とは言っても、大抵の志願者には但書きが

ある。写真は発表して貰っては困るというものの、顔だけはかくしてくれといったもの、そして、相手のサジスチンを誰々と指名したものの等々。殆どが強烈な被虐のイメージを文字で描いてくる。

○どんな事をされても、絶対に服従します。と誓約書に捺印して送ってくる人、春日ルミ嬢の話では、男の人は少しの責めでも、すぐ悲鳴を上げるそうだが、志願書だけを読んでみると、不死身男のようで中々勇ましき限りであるが、何事もイメージだけの方が無難であるかもしれない。

○女のモデル志願者の方が現実的のようだ。モデル料は一回いくらほしい、と値づけをしってくる人もある。中には、今急に一万円入用なので、その金額だけの分だけ一週間位で連続に撮影してしまつてほしい、という虫のよ

いのもある。

○さすがに、男性モデルと同じように、モデル料をいらない、という人からののは、いろいろと条件がついている。ポーズ等について精しい絵入りの希望が入っているのなんかは、読むだけなら興味も持てるが、現実となるとどうも頂きかねるものが多いようだ。

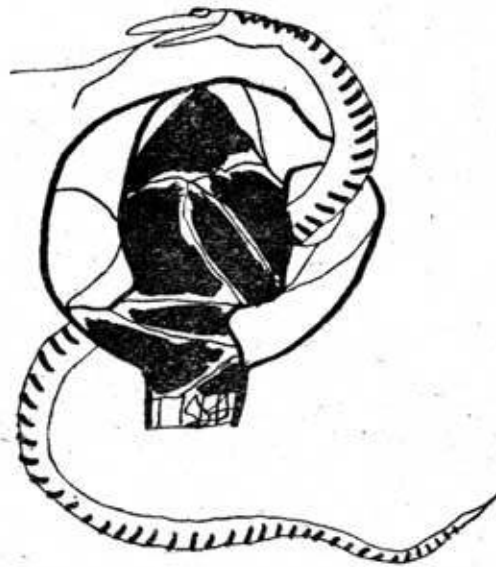
○本誌の長い間の読者で、しかも理解あるモデル志願者、萩千恵子嬢のような方は中々見つからないものである。毎日、暇のあり余っている遊閑お嬢さんで本誌の愛読者、全く以てお誂え向きなのだが。

○昨年春、緊縛志望のモデル嬢が数人応募してきて、その中、誌上にて撮影場所日時等を連絡する予定だったものが、本誌の休刊で立ち消えとなつたのは残念だった。

飯 場 往 来

な ぐ り 込 み

二 木 良 雄



◎

日支事変が始まったばかりの昭和十二年の秋、丁度二十才だった私は、つまらぬいざこざから故郷をとり出し、県境の山の中にある或る炭坑の飯場に仁義を切って、生れて初めて他人の飯を喰ったときの話です。

その日は、霜の降りたうそ寒い朝でしたが私はいつものように入坑するため、繰込場に入りました。繰込場というのは、坑夫たちが切羽（きりは）と員数の指定を受けるため、毎朝集る坑口の小屋のことです。朝の小屋の中は、入坑を待つ坑夫たちの大声と、それを

整理する労務係の怒声がワン／＼渦巻いています。汗に混った男たちの強い体臭と、燃えこぼれたカーバイドの臭気が一緒くたになって、あたかも半人半獣の集団でもあるかのような、妖しい雰囲気がかもし出しているので

す。

私は、ツルハシ、カンテラ、ノコなどの探炭夫の七つ道具を持って相棒のMを待ち合せていました。探炭の仕事は、炭函の操作の關係上、先山（さきやま）後と山（あとやま）と二人いなければ仕事が出来ないので。と

ころが、その日に限って相棒のMは中々現れません。

「次は誰だッ、お前達か、よし、お前達は右零片だッ」

伝票片手の帳場の指示に従って、坑夫たちは次々と入坑してしまつて、繰込場には殆ど人影もまばらに空きましたが、Mはまだ姿を見せないのです。請負作業である、この探算の仕事は時間が金です。私は最初のうちは、いら／＼して待っていました。が、次第に諦めてきて、

「今日はなぐれか、帰って朝から一杯引っかけるのも悪くないな——」

などと、一寸生意気な事を考えてみたりしていますと、

「おいッ そこにいる若い奴、何しとるか」

いきなり怒鳴りつけられました。顧ると、労務係のカマキリが、口ヒゲを蓄えた顔に威厳をいっぱいたゝえたつもりらしい様子で睥みつけているのです。痩せてノツポの上に、三角形の小さい顔がついているので、坑夫たちからカマキリとアダ名されているのですがまるで、坑夫などに優しい顔を見せたり普通の言葉を交わすのは損でもするといった顔付です。

「ハ、まだ相棒のMが来ませんので待つとります。」

「なにッ、Mが来ん？ なして（何故）それを

早く云わんかッ」

相棒が休むときは、帳場に届け出て代りの人を受取る事になって居るのです。私は理由をくどくどと話すのも面倒なので、黙っていますと、

「今からじゃ、代りはもう誰も居らんゾ、これからMを呼んできて二人で入れッ」

「もう時間も晚いし、仕方がないから今日は休ませて貰います。」

探炭夫は朝の掛りの気分が大事です。こんなクサ／＼した気持ちで入坑しても、今日は仕事にならないと思いましたが、私はきっぱりと断りました。

「なに休む？ さてはお前達、今日はしめし合せて仕事をなぐらかすつもりでいやがるナ、俺達をなめる気か、このまゝでは帰らせんゾ」

カマキリは筋張った顔を真赤にしてからみはじめました。朝の一仕事ですんだ後、よくある労務係の坑夫いじめです。それでなくさえ、長い間待たされて気をくさらせていた私は少々むっとして、

「私はちやんと来ているじゃありませんか。Mの来んことまで、私にとにかく言われることはないでしょう。」

と言いつ返えしてしまつたのです。すると、「なにいッ」とカマキリはずか／＼と近寄ってきて、私の袖を掴かむと、「貴様ッ、反抗

する気か、生意気な、事務所へ来いッ」と言うなり繰込帳場をのぞいて、「おいッ、誰か二、三人行つてMの奴を事務所へ引っ張つてこい」とどなるように声を掛けました。またかといった顔でニヤリとして、二、三人の若い者が駆け出すのを見て、私は、これは大変なことになった、と心の中で青くなつていました。

——（こゝで昔の炭坑の労務係の実体を御存じない方のために簡単に説明してみますと、当時の炭坑は、その殆ど全部が一種の匿名組合になつていて、限られた人達、例えば頭取の親族、縁故など、同族の者が出資して頭取は個人でその資金を貸り受けた形で炭坑を設立します。そして事業の利益を出資者に分配するといった形です。つまり炭坑の資産は頭取の私財産の形で運営されるのです。そして利益を分散させないため、決して一般の人を出資者の中に加えません。職員も月給取りではなく、出資者又はその家族の奉仕によって勤められるのであり、この型は典型的な同族会社であり、利害感情の一致する同族によつて固められ、強力なシステムにもとに、収奪に近い利益が挙げられるようになって居るのです。従つて職員は年中、殆ど無給で働き年二回の配当によつて生活するわけですが、その配当金の多寡は、事業の成績如何に左右されるのですから、職員の端くれである労務

係も坑夫の狩り出しには、真剣になるわけでした。そして、炭坑といった特異な社会性のもとでは、労務係の仕事も一般の人の想像も出来ない程の異状なもので、普通の所謂労務管理の外に、坑夫の住む納屋内外の秩序を守るために警察権に似たものを持つていて、納屋街で起る犯罪、喧嘩、逃亡、賭博、などの取締、事務所内に私設留置場のようなものを置き、此処では仕事を休む者や、その他私怨をも含んで目に余るリンチが毎日のように行われたものです。労務係はニツカズボン、編上げ靴、ノータイの背広上衣にハンチング、という刑事スタイルで、木刀など提げて常に納屋内外を徘徊して坑夫達に睥睨を利かしていたものです。——

◎

さて、事務所へ連れて行かれた私は、納屋から引つ張つて来られたMと共に、坑内に杭木を下げるときに使う、麻の直径一寸もある台車綱で縛り上げられ、職員食堂の天井に六尺棒一ツで吊り下げられたのです。

「貴様あ、山田組に居ると思つて、大きな面をしやがるんだらうが、今から性根を入れてやる。ちつたあ（少しは）身に染みた方が、身のためだぞ」

股倉火鉢をしながら、カマキリはさも憎々しげに言います。素肌三巻、からんだ太い麻縄は十八貫の全体重を受けて容赦なく皮肉

に喰い入ります。「ウウウ」と、こらえようとしても、知らず知らずの中に呻めき声が口から洩れます。

怒りと屈辱と苦痛、そして少しばかりの恐怖が、私の心を反抗へとかり立てます。

「エエイ、殺せッ、カマキリ、外道ッ」

私は声を限りに罵倒します。今の私に出来るのは声による抵抗だけです。

「よし、見ちよれ」

腰掛けを蹴倒して立ち上ったカマキリは、両足をふんばって木刀をふり上げました。

「ひとつふたつ」

数をかぞえながら、カマキリは木刀をふりかぶっては、力まかせに殴りつけます。

「畜生ッ」骨にじかにこたえる木刀の痛さ、腕に当れば腕の骨が、腰に当れば腰の骨が、微塵に砕け散ってしまうかと思うばかり、木刀が当る度に、ぐらぐらと揺れる身体、吐気を催して気分が悪くなってきました。吊られていという感覚はなく、まるでハンモックにでも乗っている感じ、「やあーい、こいつ」といったカマキリの声が、水中を透して聞えてくるようでした。

幾度か失神し、覚醒し、自分で何か叫んでいるようでしたが、それも自分の耳に入りませんでした。気がついたときは、私一人が食堂の床にころがされ、組長が駆けつけてきてくれていました。晒の六尺褌は鮮血に塗れ、

我れながらすさまじい姿でした。カマキリはいつのまにか姿を消していました。

「二木、俺はこのままではすまさんぞ、口惜しかろうが時期を待て」

山田老組長は、私の縄を七首で切り放ち、輩下の者に背負わせ、事務室を横切ってカマキリを探しましたが、見当りませんので、居合せた課長以下に、「今日は又、二木がいかに御世話になりました。有難う存じます。いづれ日を改めて御礼に上ります。今日の処はこれにて失礼申します。御座います」と、押し殺した気味の悪い声で云うと、あてつける様に、「馬鹿たれッ、早く連れて行かんかッ」と若い者に怒鳴りつけ、足許に落ちた血を地下足衣でふみにじりました。

◎

「親爺さん、俺は口惜しい」

全身、身動きも出来ぬ位腫れ上り、その痛さもさることながら、年の若い私には、生れて初めて経験した侮辱だったのです。同じ人間から思いきり打たれ殴られながら、何一つ抵抗出来なかったという事が口惜しかったのです。今まで喧嘩には多少自信があつて、只の一回も負けたことのない私としては、この一方的な仕打には堪えられなかったのです。会社からは、すぐ鄭重な詫言と共に、数々の見舞品が届けられましたが、そんな事は今の私としては、心をやわらげる問題とはなり

ませんでした。「やるか」腕組みを解いた組長は私の目をじっと見ました。「今日、事務所から帰るとき、時期を待てといったろう、この仇はきつと俺がとってやる、然し、お前がやると云うなら、俺はとめん、今晚でもええぞ、清水のやつを叩き斬ってしまえ」

傷害前科四犯の山田老組長は事もなげに云つてのけます。清水というのは、カマキリの姓です。

「親爺さんに御迷惑はかけません。私が蒔いた種です。私がやります」

「そうか、男だ、やれい、このまゝで引ッ込めるか、仁義を通して来い」

遂に組長の方が昂奮してのりかゝってきました。その言葉をきいて、私は身も心もぞくぞくしてきて、恐怖とも武者振いともわからない、ちぐはぐな感情が、たとえば、極端に熱いものと冷たいものが重り合つて心臓の中を廻り廻っているような気持でした。

「今から行きます。ドスを貸してつかさい」

歯の根も合わない恐怖心を押えるためにも私は、殺してやる。カマキリの奴、殺してやる。と心の中で云い続けていました。

その夜、繃帯だらけの身体に、真新しい二反の晒木綿を腹から胸へかけて、きりりと巻き、別に六尺をぶち切つて褌にすると、その上から黒の単衣をさりげなく着流して、組長達一家に見送られて飯場を出ました。今晚無

事に、この飯場の敷居をまたぐことが出来たら、福島県の炭坑にとぶ用意は組長がしてくれている筈です。

組の者に別れてたった一人になって、大分気も落着いてきますと、心の底で後悔の念が動いてきます。だが今更どうなるでしょう。男が仁義を切つて飯場に入った以上、やまの男が組の名に於ては仕終わせねばならない厳しい掟なのです。云えば空しい意気地なのです。若し私が行かねば、年老いた組長が自ら行くでしょう。過ぎ来し二十年のうたかたが煙のように胸中を流れます。

俺は死に行くのだ、倒錯した英雄観が、未熟な私の心を悲壮さに昂らせます。昼間木刀で殴られた二の腕が痛んでドスが重く感じられます。一尺八寸の脇差を右に提げ左に持ちかえ、筋々の痛む身体をいたわりつつ、足を早めました。歩き乍ら、なんとはなしに涙ぐんでいました。

役員社宅の横まで来ますと、いよ／＼だと身ぶるいがします。その時、家のかげからヒョイと出て来た男が、闇をすかして此方を見ていましたが、刀を提げた私に気がついたのでしよう、さっと身をひるがえして消えました。足音も聞えなかったのは、前から其処の物陰に息をひそめて伏していたためでしょう。最早や、猶予はなりません。一気にカマキリの家まで寄り走り、刀を抜くなり、戸を

叩き「清水さん」と小さい声で呼びました。

とう／＼来た。身体が小刻みにふるえてきて仕方ありません。家の中から「はい」と女の声で返事があります。何故か、立っているのさえ切なくて、しやがみ、これではならぬと、また立ち上りました。「どなた？」と戸が半分開いて、妻女の白い顔が外をのぞくのと同時に、その手を掴んで、「だれ？、あッ何を？」と叫びかけるのを、表へ引きずり出すのと入れ違いに、自分ながら素早い動作で家の中へとび込みました。

「カマキリ、二木じや、来たぞッ」

自分ではせい一杯の声を出したつもりでしたが、我にもない唖れ声で私の耳に返ってきました。拔身の切先を突つつけながら馳せ上りました。今朝の今晚、まさか、と思っていながらカマキリは、晩酌の酒をしたたかに飲んでいたらしく、何か動物的な叫び声を挙げて、起きようとして、よろめき、つまずいて倒れ、酔いに赤かった顔は、みる／＼青ざめて、

「待て、まつ、まってくれ、俺が悪い、話に行こうと思っていた、一寸待て」

と、とぎれ／＼に叫び、あわてふためいていざりつゝ次の瞬間、はね起きると、脱兎の如く、裏口へ走りしました。私はその背後を追うなり、無我夢中で水平に持った刀を突き出していました。背中と思つたのが、切先が腰

を突いていました。石に突き当てたようなゴクンとした手応え、刺された腰を押えて、カマキリは声もなく裏口から走り去るのを追つて、二太刀、三太刀、突き出しましたが、いずれも届かず、遂に家の裏でとり逃してしまいました。

人を斬るなどと、初めての経験ながら、刀を持った手にあつた相当な抵抗からして、かなりの傷を負わしたことでしよう。ほっと息をつきますと、家の表の方で人を呼ぶ妻女の悲壮な声が甲高く続いています。人を斬るということは、こんなものか、妻女を引きずり出してから、カマキリの姿を見失うまで、時間にして僅か二、三十秒ぐらいのものだったでしょう。

これで私の仁義はすんだ、逃げたカマキリは最早や、人前に大きな顔は出せないでしょう。激しい緊張の連続から解放されると、心の中を寒い風が吹き抜けたあのような淋しさに襲われました。この索莫とした思いは何んだらう。これが勝者の悲哀というものなのでしょう。勝利心をかき立てようと努めながらも、私の心は次第に沈んでゆくのをどうすることも出来ませんでした。

常時、切った張った炭坑の血臭い風を呼吸し、喧嘩は何度もやってきた私でしたが、人を斬つたのは始めてです。刀が人の肉に喰い込んだときの不気味な手応え、なんとも云

えぬあの瞬間の私の全神経を貫いた異様な感覚は、やがて、私の名の上に冠せられた空しい「金箔」とともに、私をして、更に第二、第三の刃傷へとかり立てることになるのです。そして遂には、殺人まで犯さしめること

になるのです。

刀の柄を握っている右手の小指が、さっきから膠直して痛むのを、神経の一部で感じとりながら、それを解きほぐそうという気も起らず、息を殺して誰一人顔を出そうとはしな

い社宅街を悠々と通りすぎて、血のしたたる脇差を提げたまゝ飯場へ立ち帰ったのは、それから暫くしてからでした。

(終)

家畜化小説の登場を喜ぶ

——『潰滅の前夜』頌——

沼 正 三

最近まで奇クの復刊を知らなかった私は今頃になって復刊以後の諸号をまとめて通読する機会を得たのですが、その時私を一番喜ばせた作品は、七月・八月号の土路草一氏「潰滅の前夜」でした。作者自身も含めて、他の人には、これは意外に聞えるかも知れませんが、この作品は明らかにサディズムの傾向に属し、その凌辱ぶりは、かつて好評だった飛田良二氏の「蜘蛛と蝶蝶」に通ずるものがあった、マゾヒストからはむしろ反撥が期待されると考えられたでしょうから。事実「蜘蛛と蝶蝶」には私は何の共感をも持たず、むしろ反感を覚えたのでした。その私が、この「潰滅の前夜」か

らは、「二百字讃歌」や「美しい暴君」などの名作から受けるのに匹敵するような強い感銘を受けたのです。サディズム作品からこのような感銘を受けたことは、私としては初めてです。これはこの作品が単なるサディズム作品に終らず、マゾヒストをも喜ばせる特殊な性格を持つことを何より雄弁に物語るものでしょう。

今までのマゾヒズム小説には、(それぞれの独自の価値を認めるにやぶさかではありませんが)おしなべて私には不満がありました。それは女と男の関係が女主人対奴隸という類型を脱していなかったからです。真砂氏の作では主人の側が複数になり

馬族氏の作では奴隸の側が複数になる、そういう小異はありますが、大同を見ればすべて女主人対奴隸の関係です。それは世間の無数の男女結合の中から選ばれた特殊な一対なので、その限り、女が男に加える凌辱には自ら限界があります。二人きりの時いくら犬や馬にしたとて、それが世間一般に通用するわけではないので、根本においては女は男に人格を認めないわけにゆきません。敘述の上では女が男の意志を圧伏して責め虐げるようにかかれていても、その前提が動かない限り、本質はサド・マゾ・プレイを合意でやっているのと大差ないことになってしまいます。そしてこの場合何より嫌なのは、女の側に罪障感が免れ得ないことです。(そうでしょう、無視してはならない相手の人格を敢て否定しようとする以上、女主人の責めが甚だしいほど、その罪障意識は強くなるのが当然です。——これが私には不満でした。この罪障感を生ぜしめないためには男が

本当の家畜になるしかありません。本当の馬なら人前で乗り廻せます。本当の犬なら平気で鞭でます。あの慎しやかな「細雪」の雪子さえ兎の耳なら足の指でつまむのです。サド・マゾ・プレイの不純な遊戯感の家畜と飼主との間には生じようがないのです。家畜になりたい！

然し、私達は人間の身体をしています。馬や犬への転身空想に喰い足りぬ私達は、結局「人間の肉体を備えつつしかも家畜と同様に取り扱われる存在」にならねばなりません。人間家畜こそが私達の理想です。これはマゾ・プレイで犬や馬になることでは勿論ありません。彼は人間家畜であることは、彼女だけでなく、世間からもそう扱われるのでなければならぬからです。そして、これは「制度として人間の家畜化が認められた社会」を想定することを意味します。ここでこそ彼は完全に人格を無視せられた存在になり得るのです。私が空想科学小説を愛好するのも（手帖、第八十三項）、この人格物視の世界に憧憬れてのことでした。奴隷制度の時代を懐しむのもそれでした。……

漸く本題に戻って来ました。私は「潰滅の前夜」において、初めて、私以外の人の

脳中に描かれた人間家畜の世界を眺めることが出来たのです。（厳密に言えば、もう一つ六月号に東坊丸氏「娘子島探険」があります。これは制度化としては「潰滅の前夜」以上に徹底しており、その点、ヨリ価値高いものを示していますが、惜しいかな余りに短いため筋書に過ぎず、筋書としては私の脳中に既に存するイメージに全く摂されてしまうので、それほど感銘を受けませんでした。しかし人間家畜の世界を文字にしたものとしては、旧号麻生氏の「第七天国」は別論としてこれを最初の文献とすべきでしょう。東氏に敬意を表する次第です。この作品の特殊な意義はここに在ると思います。

制度化としては、まだ理想境に達せず、その前夜たるに止まっています。（この点は「娘子島」の方が完璧です。しかし、調教が、人間を家畜にするためというより、家畜に家畜らしい芸を仕込むために行われているのでも分るように、Y国人にとってははじめから伶子達犠牲者の人格は無視されていますから、叙述から与えられる昂奮は、既に制度化せられた場合のそれと大して違いません。虐待は男から女に加えられるているのですが、私は「Y国人への日本人

の隷属」を味うため、関心圏を日本人全体にまで拡げて、（手帖第八十三項参照）、読みますから、性別は大して邪魔になりません。殊に最後の厩の場面で、Y国人の美女が、厩の臭気をいやがったり、餌のことを訊いたりする場面では、その人格無視的描写に充分にたんのうさせられます。自転者のペダルに仕掛をつけて踏ませたり、肉野菜混合雑炊をコンクリートの餌皿から与えたりするところ、まるで私の頭の中を覗き見されたような思いをして、異常な昂奮と歓喜に導かれました。また、今までの私自身の空想では常に「白人種の家畜たる日本人」がテーマだったのですが、白人種でないY国人への隷属にもこの位昂奮したということから、「白人崇拜」と「家畜化願望」とを無意識の中に結合してしまっていたことを自覚させられたのも、私としては収穫でした。

マゾヒズム（？）小説も遂に新傾向を打ち出した。出るべきものが出来た。——そんな気持ちで、嬉しくこの作品を読んだことです。作者土路氏に感謝すると共に、更にこの種の家畜化小説の出現することを期待しつつ、筆を擱きます。

はつかねずみ

青 山 三 枝 吉

1

小さい蜜柑箱の上に無細工に金網がうちつけられ、その中に二十日ねずみが二匹うごめいている。玩具のように小さい白い生き物。

「仙さん、ねずみにエサやってくれた？」

千鳥のしやがれた声をする。刀のサヤの剥げた箇所には黒いエナメルを塗っていた仙二郎は顔をあげて、

「ああ、まだだった」

ガサガサした声が、今度はキンキンと、

「死んだら仙さんのせいよ。頼んでおいてもすぐ忘れちゃうんだから」

「ごめんよ」

仙二郎は立って、二十日ねずみの箱をのぞいた。箱の隅をガリガリ齧っている。もう一

匹は寸時の休みもなく、せまい世界を走りまわる。

衣裳をつけ終え、かつらも被った桂之助が真白な顔で、

「放つとけよ、仙さん。ガキの云うこと一々きいていたらクセになる」

「うん」

桂之助の言葉に好意があつて、仙二郎はふと彼の顔をみた。真白な白粉の顔に表情はつかみ難く、仙二郎は微笑して、

「まア、殺すのも可哀想ですから」

と、ひとにぎりの米を金網ごしに中へ落した。

「幕があくぜ」

と、桂之助は舞台へ上っていた。舞台では敵役の源三が怒鳴っている。

「ロップだ、おい仙さん、居ねえか、ロップ一本」

仙二郎は小道具箱に掛っている縄をはずして舞台へ持つて行く。

「縄はどこへ？」

赤ツつらの源三が顎でしやくった。

「ついでに那美江を縛ってくれ」

「はあ」

結わた、黄八丈の那美江が、手をうしろにまわした。

「衣紋をもう少し崩したほうがいいな」

仙二郎は那美江を縛る。

「座長の仕度がきたらいこうぜ」

源三がまた怒鳴る。レコードが鳴りはじめる。柝が入る。三番目切狂言「仁義双六」の開幕。仙二郎は柝の音につれて幕をひく。引

き終ると、今度は照明係。安物のスポット・ライトの運転。赤や青のゼラチン紙を舞台の動きにつれてぐるぐる廻す。

座長、坂東波津子。女剣劇。座員十二名。そのうち衣裳方一人、床山一人。道具方は居ない。いや、一人居る。仙二郎。その他に若い俳優たちが手わけして舞台を飾るのだ。場末の寄席まわりの劇団。然し、人気はある。二枚目、志摩桂之助が舞台へ出ると嬌声が乱れ飛ぶ。

「志摩さアん、桂ちやアん、こっち向いてえー」

寄席で叫ぶのは、しかし少女ではない。三十五、六から四十前後の中年女。かっぽう着を着て、買物袋を膝に置き、それぞれのひいき俳優を声援する。買物袋から煙草をつかみだして舞台へ投げる。煙草は三箇所づつ縛ってあり、俳優がミエをきると、いっせいにそれが飛ぶ。舞台の二枚目は、投げた客に向って媚をふくんだ眼で、ニッコリとつくり笑いすると、又、キヤアキヤアという興奮の歓声。

この世のものとは思われぬ不思議な光景。せまい客席内に充満した煙草のけむり、埃、汚れ切った空気。この劇場の陶醉は演劇鑑賞の興奮からくるものではないな、と仙二郎はライトを合せながら考えている。あの取り乱した中年女たちから感じるものは、性の興奮だけ。少女歌劇のそれと違って、この成熟しき

った性はどぎつく、なまぐさい。

俳優たちの舞台での媚は、身体を売る女たちの姿勢と大差ないようだ。舞台と客席との完全な融和、うまい言葉だが、実態は性と金との融和だな、仙二郎は苦笑する。照明係の苦笑には誰一人気づかない。仙二郎の若さと理性がまだこの雰囲気反撥する。熱っぽい異常な渦の中に、ライトを合せる男の心だけが一人冷えている。

この町へ来たその初日の晩に、桂之助はインテリ風の女を客にした。桂之助の白塗りの舞台姿に、もろくも恍惚となった大学教授の妻。どんないたずら心があるのか、夫に不満



があるのか。芝居がはねてから、桂之助を料理屋へ呼んだ。金で買った若い男。アカぬけた美しさ。手を握られたまゝ、その手を引けば、ひかれたまゝやわらかく女の膝に寄る。この技巧は舞台の型と同じだ。四十才の女が少女のような夢心地で、桂之助を抱く。

「可愛い坊や」

「はい」

一挙手、一投足、眼の動かし方、すべてが媚。これが本職だよ、と桂之助は思う。上戸になればと云われゝば上戸に、下戸にといえはその通りに、二十三才の青年が何時何処でこの技巧を覚えるのか。疲れた朝を迎えると、もう女は居ない。枕元に包み。「御祝儀」あけてみると三千円。これが本職だよと、また思う。劇団の給料は食費を引かれて月にたった三千五百円。布団の中でもぞもと煙草を吸いながら、あの客は今後も二、三回は続きそうだと、桂之助に満足な予感がある。

俳優のひいきの多い少ないが、一座の人氣に直接影響する。若い俳優にひいき客が少なくと座長にイヤな顔をされる。だから、やぐざの子分でも白塗りに塗って客の眼を惹こうとする。やくざだが、顔だけが町家の若旦那のように白い。しかし、芝居の演出効果よりも、座員に客がつくことが第一義で、座長も不自然と知りつゝそれを見逃している。

桂之助が舞台からおりて来た。煙草を両手に抱えている。

「仙さん、煙草やろう」

「すみません」

仙二郎の手に「光」を三つ渡すと、得意気に桂之助は楽屋へ戻る。

仙二郎は床山のお兼さんの所へ行く。

「お婆さん、煙草もらったからあげよう」

「ああ、ありがとう」

お兼はせっせと島田を結び直している。

「人気あるねえ、桂さんは、仙二郎さんも早くあなるんだね」

「そうだね」

と、仙二郎はまた苦笑する。このお兼さんの世話で一座に入ってから、もう一ヶ月になる。坂東仙二郎という名前をもらったが、道具方だの、幕引きだの、照明が忙しく、まだ舞台には出してもらえない。

「早く舞台に出してもらえないように、あたしから座長さんに頼んであげようか」

「いいよ、いいよ」

仙二郎は断った。大学の演劇部で勉強した演劇理論は、ここでは通用しない。

夕方五時半から始めて、はねるのが十時半すぎ。五時間の大サービス興行。終演後の座長の部屋に、仙二郎は呼ばれた。

押入つき三畳の小部屋が女座長の部屋。小

さな卓上三面鏡の化粧前。酒好きの波津子らしく、ウキスキーの角瓶が白粉刷毛と一緒に並んでいる。

「お呼びですか」

「仙さんかい。すまないが、肩をもんでくれないか」

酔っているな、と仙二郎は思った。強いから顔にはでない。

「はい、しかし、下手ですよ」

「下手でもいいよ、仕方がない」
生れてから人の肩など揉んだことはない。

仙二郎の心に少しの抵抗があった。(まるで昔の下男奉公だ、今はボーイだって肩なんか揉まないだろ) しかし(おれは死にぞこないだからな) 仙二郎に自虐があった。膝をついて前に進むと、座長の肩に手をかけた。

「痛い、痛い、すごい力だねえ、お前さん」

「すみません、馴れないもんですから」

瘠せた肩だな、と仙二郎は思う。三十前の女にしては肉が薄いようだ。或いはもう三十を過ぎていくのかも知れぬ。表向きは二十七才、独身。田舎の劇場の楽屋で生れ、旅の楽屋で育ったという、生れついてからこの稼業が身にしみついた女だ。他の世間は知らない代りに、このどさ廻りの社会のことは、てのひらのように詳しい。

「仙さんは大学で、芝居を勉強していたって

いうじやないか」

「ええ……いやあ」

「お兼さんにきいたよ。女で失敗したんだって？」

「くだらないことです」

「世間にはよくあることさ。だけど、だからといって女剣劇に入ってくるという気持は判らないね」

「好きなんですよ」

「だけど大学でやる芝居っていうのは西洋ものばかりなんだろ」

「ええ、まあ……今夜、千鳥さんの姿がみえないようだけど、どこへ……」

仙二郎は話題を変えた。心が痛い。酔った女に、アンマと一緒に聞せる話ではない。

「千鳥はごひいきさんがついて、さっき出て行ったよ。だから代りにお前にアンマを頼んだのさ」

「千鳥さんにもごひいきが？」

「あの子も色気づいてきたからね。これから稼ぎ時さ」

十五才の売春か。しかし下積みの社会では珍らしいことではあるまい。仙二郎はふと蜜柑箱の二十日ねずみを思い浮べた。二十日ねずみを飼う少女を、どんな男が玩具にするのか。波津子にとって千鳥は実の妹である。

波津子の手が、肩を揉んでいる仙二郎の手を握った。そのまま自分の胸に引いた。思わ

ず仙二郎は小さな抵抗をする。空気が乱れて白粉の香が急に仙二郎の鼻につく。女は無言のまゝ執拗だった。三面鏡の中の波津子の顔が、仙二郎の驚いた顔をみてわらっている。指先にむっくり乳房の隆起。

「だめですよ、座長」

なおも無言で波津子は男の手をひく。もつれて顔と顔とがぶつかった時、アルコールの匂いがプンと仙二郎に匂った。

「酔っているんですから、座長」

波津子の眼が真向いになって仙二郎の顔をのぞく。媚にあふれた眼。若い男の心が崩れそうになる。

「座長」

部屋の外で声がした。源三のふとい、だみ声。

「だめよ、今」

波津子があわてもせず、返事をする。

「もうちよつとあとで来て」

「へえ」

と、声は消えた。

「いいじやないの」

と、媚の眼が、又、男の眼をのぞく。

「逃げると、一座に居られなくなるわよ」

しかし、男の心はもうこの冒険に負けていた。このタイハイの欲情は仙二郎に新らしかった。強烈な白粉の香が男の理性を抹殺していた。

2

舞台裏の暗い片隅。幕あきが近い。那美江が仙二郎を呼ぶ。

「仙さん、ちよつと手を貸して」

「なんですか」

仙二郎が寄っていく。

「悪いけど、また縛ってよ」

と、那美江が縄を渡す。

「また縛られる役ですか。あなたもたまらないな」

「仕方がないわ。役者ですもの。芝居ですもの」

「痛くないようにそつと縛っておきますよ」

「だめよ、ちゃんと縛らなくちや。手首もしつかり結いてよ」

那美江は仙二郎に背中を向けて、両手をうしろにまわした。二人のそばを旅合羽に長脇差のやくざ姿の波津子を通った。仙二郎の胸に、にがい水が湧いた。あのやくざ男は昨夜は女だった。倒錯した不思議なこの後味は、しかし、にがい。仙二郎はそれを打ち払うように頭を一つ振ると、那美江を縛る手に力をこめた。ギリギリ縄を巻いた。衣裳の下乳房が、縄に締められて、ぶくん、と盛りあがった。

「痛い」

「痛いだろう。女は汚ないな」

「思わず心が口にでた。那美江がきいて、
「なにさ、汚ないって」

「いや、こっちのことです。さあ縛りましたよ」



那美江は不自由な身体をよろよると舞台脇へ運んだ。汚ないのは自分も同じだ。誘惑にはつきり敗けたのだ。仙二郎はライトについた。

舞台でまた那美江が源三扮する悪親分に責められている。借金のカタの娘である。きまりきったやくざ芝居の筋書。善良な客は、わかりきったサスペンスに手に汗を握る。割れ竹で散々打たれた那美江は倒れて気を失った。狂言は毎日替りで、これは昨夜の続き。客の気を引くため、娘はなかなか助からない。波津子の男装美男やくざが、さっそうと現われて娘の縄を切りほどくのは、あと二、三日後のことであろう。仙二郎はスポットを青色に変えて那美江を照らす。つよく縛ったのでみるからに不自由に身体を屈めて、背中を客に向け倒れている。

ボンと肩を叩かれて、仙二郎は振り向いた。桂之助の顔がわらっている。

「ゆうべはどうだったか」

「なにがですか」

「わかってるよ、どうだい座長の味は」

ああ、と仙二郎の胸に冷たいものが走る。この男が知っているからには、他の者も大方知っているのだ。

「座長の趣味さ。きみばかりじゃない」
また桂之助は仙二郎の肩を叩いて笑った。卑しい、好奇のわらい。

幕がしまった。仙二郎は舞台へ行つて、那美江を抱き起した。抱えながら舞台の裏へ連れていく。黒幕のかけで誰の邪魔にもならない。

「きつく縛つて、わるかった。あやまります。すぐ解くよ」

「いいのよ」

「こんなに縄が喰い込んでいる。本当にわるかった」

「いいのよ。あたし、きつく縛られるの好きなよ。かえっていい気持なのよ」

「そんな馬鹿な」

「ほんとよ」

「マゾヒストか」

那美江にマゾヒストなどという言葉はわからない。縄を解くと、手首に縄の痕が紫色についている。

「いい気持だったわ。明日もまたね」

縄を束ねている仙二郎の首へ、那美江の両手が揃みついた。

「あっ」

思わず顔をねじると、那美江の唇は外れて

仙二郎の頬へベツトリと口紅がついた。

「よせよ」

鋭く云った。女を、張り倒したい気持だった。色きちがいばかりだ。へどがでそうだ。

どこの社会も男と女はこうなのか。それをやゝ離れて波津子が眺めていた。

一日の仕事が終つて、疲れきつた仙二郎は楽屋のせんべい布団に横になつていた。若い俳優たちは客に呼ばれたか、夜遊びか、誰も居ない。戻るのは明朝十時過ぎである。

お兼が入ってきた。

「おや仙さん一人かい。皆さん夜遊びが繁昌だ。座長さんが呼んでいるんだがね、すぐ行つておくれよ、仙さん」

ヒヤツとして、いやな気持。お兼がじつと仙二郎をみてニヤニヤとわらう。意味ありげなわらい。仙二郎は立つた。不潔な記憶の中に、またそれを求めたい欲望もひそんでいるのに気づき、仙二郎の顔が歪んだ。

座長の部屋。三畳の襖をあけると波津子の他に、那美江が居た。不安な予感が仙二郎にきた。妙な室内の雰囲気だった。

「来たね、まあお坐りよ」

三畳の部屋に三人。坐ると膝が付き合うよううだ。

「いっぱいおやりよ」

茶碗にウキスキーを注いだ。

「ぼくは酒は全然いけないんです」

「まあ、いいじゃないか。座長の盃は受けるもんだよ」

きびしい調子。なにかある。仙二郎は受けざるを得ない。ゴクリと飲む。にがい。口の中がしびれる。仙二郎はアルコールに弱かった。熱い液体が胃の腑へシリシリしみ渡る。

うまいとは思えない。しかし、この息苦しい空気を耐えるには、この液体が絶好かも知れない。

「いけるじゃないか。飲めないなんて嘘はいけないよ」

波津子はコップでチビチビ飲んでいる。

「仙さん、お前、今日舞台裏で何していた」
うわめ使いに仙二郎をみて、波津子の口調は冷めなくなる。

「なにもしません」

「キスしてたら」

「しません」

「嘘つけ」

正直に云うより仕方がない、と仙二郎は思った。

「那美江さんとぼくは、そんな、キスするなんて仲じゃありません。さっきは急に、ぼくが知らないうちに、無理にそんな格好になっただけです」

「そらみる」

と、波津子は、今度は那美江に向つて云つた。

「お前のいった事はみんなでたらめだったじゃないか」

那美江は拗ねたような白い眼で、波津子にらんでいる。

「那美江は東北の田舎町でパンパンをやっていたんだ。借金が増えて逃げ出したんだ。そ

れをあたしが助けた。やっと一人前の女優にしてやったのに、まだパンパンの真似をしやがる」

那美江は今度は知らぬ顔で壁を向いていた。こんな場面には馴れ切っているといった感じだ。

「にくらしい顔している」

と、波津子は唇を噛んだ。

「お仕置きをしてやる。仙さん、縄を持っておいで」

「しかし、那美江さんは本当にそんな悪いこととはしません。ただ……」

「いいから持っておいで」

仙二郎は仕方なく立った。座長は酔って機嫌が悪いのだから、すきを見て逃げ出せばいいのだ。明日になれば何とかなるのだ。仙二郎は縄を持って戻った。が、那美江はまだじっと坐っていた。

「こいつを縛りな、仙さん」

「……………」

「さっきみたいに縛りな」

「あれは芝居のためです」

「こんどは一座のみせしめのためだよ。男と女の仲がだらしなくなっちゃ、とても一座のまとまりはつかないからね」

「しかし……しかし座長、この人はマゾヒストらしいから、縛ったって仕置きにはなりませんよ」

仙二郎はこの酔った女の悪戯をやめさせようと努力する。

「マゾ……ってなんだい」

「……縛られたほうが気持がいいという体質です、いや習慣かな」

「おもしろいじゃないか。那美江がそんなヘンな女だとは知らなかった。やってやろうじやないか——ネをあげさせてやろうじやないか」

「やめたほうがいいですよ」

「やるんだよ」

「やめたほうが……」

ピシリッと波津子の手が、仙二郎の頬に鳴った。仙二郎はカッとなった。ウキスキーの酔いが屈辱にどっとでた。仙二郎は縄を持って立った。その勢いに那美江は一瞬たじろいて、チラと仙二郎を見上げた。

「はだかにしな」

ちよつと抵抗した。が、すぐあきらめた。

手荒く浴衣を脱がすと、下はシュミーズ。仙二郎には、それは剥げない。しかし、肉づきのいい身体。若さが匂っていた。手をうしろにねじあげる。二つの手首を一つにくくる。胸へ縄をまわす。一卷き、ぎゅつとしぼる。二巻き、またぎゅつとしぼる。三巻き、しぼられて乳房が大きく前へ出る。

「そうだ、そうだ、首にも縄をかけるんだ」

そばで波津子のはやす。仙二郎の額からフツフツと汗が湧いた。シュミーズの裾がまぐれて白い太股があらわである。波津子が手を伸してそこをキュッとつねった。

「ああっ」

と、大きな声で那美江がうめいた。

「猿ぐつわだ、仙さん、猿ぐつわ」

仙二郎はあり合せの布きれで那美江の口を縛った。

「うろう」と、咽喉がうめいた。ウキスキーにかき廻された心臓がドッキン、ドッキンと鳴って、仙二郎の顔は真赤だった。この加虐に弾みがついて、ドッキン、ドッキンという音が、ユカイだユカイだと聞え、それに調子を取って仙二郎は那美江を縛る。興にのった波津子が足をあげて那美江を蹴倒した。俯伏せにさせて、豊かな尻の上に足をかけ、ぐいぐい踏みつけ揺った。

「ハハ、ハハハ」

酔い痴れた口から、よだれをだして笑いこける。この悪戯が愉快でたまらない。

「ハハハ、ハハハ」

と、仙二郎までがわらう。眼まで赤く濁っている。咽喉からはだけた胸まで赤く酔っている。(おちろ、おちろ、おちる所までおちろ) そんな声が何処かでする。

「仙二郎、その衣紋竹で、こいつの尻をひっ

ばたいてやれ。ピシピシ叩いてやれ」

「よしきた。」

衣紋竹をとると、仙二郎は声に出して、それぴしり、それぴしり、と那美江を打った。せまい三畳の中に酔った男と女は、ぶつかり合い、もつれ合いながら無抵抗の女をなぐり蹴った。うしろ手に縛られた女はうめきながら身体を転がして、二人の狂人の暴行を避ける。シユミーズがめくれ、破れ、肌には打たれた痕が赤く幾条も腫れた。

身体が冷えて眼がさめた。仙二郎は深夜の舞台に這いつくばって眠っていた。いつあの部屋から脱け出したのかわからぬ。頭がズキン、ズキンと痛かった。よろよろと立ち上る。まだ足がふらつく。水が飲みたかった。壁に身を支えながら歩く。衣裳棚の下あたりでドタリと音がした。暗い。すかしみると、女の白い肢がみえた。ギョツとした。なおも眼をこらすと、そこにいるのは源三だった。女はお兼だった。ググツと吐き気が仙二郎の胸にきた。よろめきながら水道口へたどりつき、思いきりもどした。

楽屋へ戻って自分の布団にもぐる。他の者はまだ誰も帰っては居ない。午前二時頃か。まだズキンズキンする、苦しい。布団をかきむしる。

「飲みすぎたのね。苦しいのね」

声がして、誰かが背中をさすってくれる。

小さい手だ。千鳥だな。仙二郎はうめいた。

「み、みず……」

「今、もってくるわ」

バタバタと乱れた足音。それが戻る。

「はい、水よ」

云うと同時に、コップの水が、いきなり仙

二郎の顔にぶちまかれた。

「あら、ごめん。あたしも酔っているのよ」

千鳥が仙二郎の上にくずれて来た。かなり酔っている。

「子供のクセに酒なんか飲むんじゃないよ」

コップの底に残った水を、咽喉を鳴らして

飲み干す。うまい。蒲団の上にかぶさっている千鳥をずらして、おろして側に寝かせる。

小さな唇に紅がついて剥けている。卑猥な

感じ。仰向けにしてやる。かすかな寝息。ひ

らいた胸。意外に豊かな胸。悪夢の続き。ま

だ酔っている意識、そして、また、ねむっ

た。

割れガラスの楽屋窓が、かすかに明るくな

っている。眼をあけるともう酔いはさめてい

る。仙二郎の胸に、あどけない寝顔を寄せて

いる千鳥。ハツとした。記憶がおぼろげによ

みがえる。仙二郎は髪をかきむしった。突き

さすような悔恨。

「けいこ、おれはこんな男だ、けいこ」

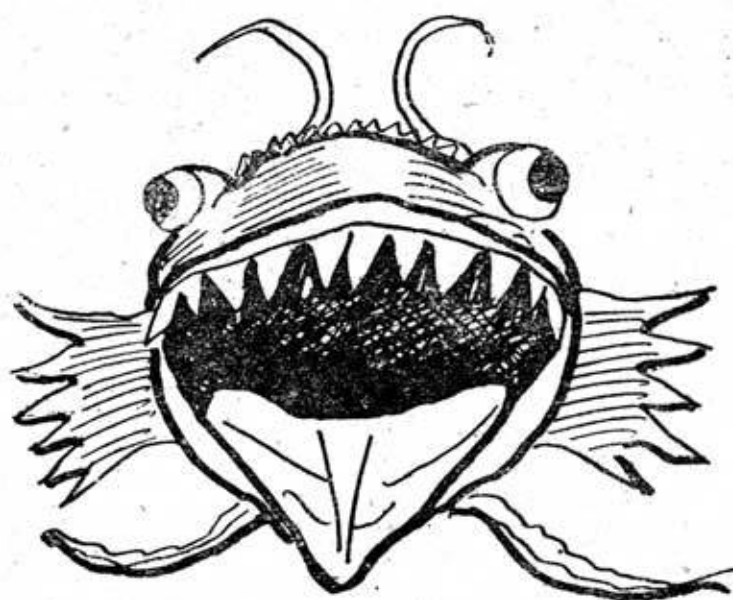
言葉となつて口をでた。絶望と後悔。すがりつくものは何もなかった。自分を捨てた女の名を呼んだ。すると、わけのわからない恋情が青年の心に湧く。手ひどい裏切りかたをした女の名を、何故また呼ぶのか。ここまで逃れてきて、まだ心にまといつく女。

千鳥がううんと寝返りを打った。破れ毛布をかけてやる。ムキだしになった肩までかぶせてやる。ふうと、やさしい気になった。

ガリガリ、ガリガリと小さな断続的な音がする。仙二郎は気がついて立った。金網を張った蜜柑箱。二十日ねずみが二匹。夜明け近い楽屋の片隅で、しきりに箱を噛っていた。小さな、白い、愛らしいけもの。(朝になったら、また米を入れてやろう)仙二郎はそう思って箱のふちをトントンと指ではじいた。たてつけのわるいガラス戸をあけて、朝の空気を吸いに、外へ出て行く。(完)

告知板

○限定版各種特集号は、目下のところ急に完成を見るのは困難な事情でありますので、蒐集した資料の中の一部は、御希望の方々に分譲したいと思ひます。八月号の一六〇頁に紹介しましたサディズム並にマゾヒズムの外国文献はあの外にもありますので、原文のあるものは原文入りにてお分けいたします。



紅 (ぐれん) 蓮

青 葉 楨 一

美 少 年

太平洋戦争も末期に近く、人々は云い知れぬ不安に圧しつけられ、前途に希望のない絶望的な日々を送り迎えていたが、それでも季節は変わりなくめぐって来て、初夏の空には葉桜が豊かな繁みをそよがせ始めていた。

北陸中学四年生の小宮山光は、三月半ばに感冒をひき込んだのが軽い肺炎を併発して、とうとう二ヶ月近くも欠席してしまった。余後を注意しないと肋膜炎を悪くする虞れがある、と医者には云われていたが、学校の事も気に掛るし、学課の授業だけでもと思い、彼はもうすっかりと陽射の熟れた道を登校した。

二時間目の国語が終ると、次の時間から二時間続いてある軍事教練の見学届に行こうとして廊下に出た光は、後から組長の山本に呼び止められた。

「小宮山。君、見学かい？」

「うん——」

「君はずっと欠席だったから知らないだろうけど、新学期から配属将校が変わったんだぜ」

「教官が？一寸も知らなかった——」

「驚尾って云う中尉でね、何しろ戦歴があるんで物凄いな。一時間の中にキット一つや二つのピンタは飛ぶんだから——」

「へエ、、、、、」

「とにかく用心した方がいゝよ。此の前も井

口が見学届に行つて殴られた事があるんだからね」

「……………！」

「——尤も井口の方だって悪いんだ。足を一寸ばかしスリ剥いただけで見学しようとしたんだから。そんな精神で実戦が出来るかってんでやられたんだよ。それから、前に比べてグツと欠課が減つてね。よくの理由でも無けりや駄目なもの——」

「僕も、未だ運動は医者から禁じられてるんだ。でも、学課が余り遅れても困るから来たんだけど、教練や体操なんかは、もう暫く欠課しようと思つてね」

「そう、君のような場合はいゝんだよ。チャ

ンと正当な理由があるんだから——」

「ウン……………」

「大丈夫さ。サ、早く行って来いよ」

山本に促されて歩き出し乍ら、光は新任の配属将校を何んな男だろうと考えていた。

幼い頃から、光は軍人が大層好きだった。

好きと云っても、その時代の少年なら大抵は抱いていた軍人に対する憧憬と云ったものとは違う、もっと本能的な、謂わば性欲の対象として、可成りハッキリとした意識を持っていたようである。

山本に脅かされて怖くもあつたが、それよりも、鷲尾中尉と云う男への異常なまでの期待に、把手を握る光の手は細かく顫えた。

「——四年一組、小宮山光。鷲尾中尉殿に用事があつて這入ります」

直立不動で声を張って云い乍ら、室内を眼で探すと、窓際に二、三人の職員と雑談をしていた軍服の男が、

「おう——」

と太いバスで答えて、椅子へ掛けたまゝ上体だけを振向けた。

軍服の鮮やかなカーキ色だけが、光の眸に映った。彼は真直に其の方へ向って進んだ。

「何だ？」

鷲尾八郎は、射悚めるような視線で、光の色白の面を見据えた。

光は頬の辺りを少し染めて、

「ハイ。昨日迄欠席して居りました小宮山光であります。医師から未だ運動を止められていますので、第三時限・第四時限の教練は見学させて頂きたいと思ひます」

「よし」

と中尉は肯いた、そしてそれきり何も云わなかった。光は胸を撫で下す思いで、一礼すると室を出た。身体がポツと燃えるようになっていた。

鷲尾中尉は自分の机に戻ると、煙草を取出して火を点け、一息深く吸ってから、

「——似ている……………」

と低く呟いた。

中尉が南支の戦線にいた頃、三原と云う一等兵を可愛がった事があつた。三原は間もなく戦死して了つたが、その昔の従兵に、光は生うつしと云つていゝ程よく似ているのである。光の方が一層色も白く、弱々しくもあつたが、何処か高貴な血でも引いているような気品の深い美しさは、二人が共通に持つ感じだった。

「小宮山光。か……………」

もう一度呟くように云うと、中尉は太い吐息を洩した。

光が教室へ帰つて来ると、皆はもう校庭に出ていた。彼は帽子をとると昇降口へ下りて靴を穿いたが、脳の中は鷲尾中尉の事で一杯だった。

広い額、鋭い眼、引締った頬、一文字の唇——。その何れもが、好もしく、慕わしかった。あの逞しい腕にと考えると、それだけでもう胸がワクワクして来る。

光は、跳むような足どりで外へ出た。

始業のベルが鳴り響いた。

「気ヲツケ——」と云う日直の号令がかゝり隊伍はピタリと動かなくなる。

まもなく、太股に砂利を踏む長靴の音がして、肩巾の広い、上背のある、鷲尾中尉の姿が現れた。

光はポブラの下に立って、ジッと彼を瞞めていた。

人員の報告を終つて、日直の差出す出席簿を受取ると、それを開き乍ら、中尉はチラと光の方を見た。視線が合うと、光は羞らうように長い睫を伏せた。

中尉もすぐに眼を逸すと、次々と生徒の氏名を呼んでいった。

そして其れが中程迄来た頃、光はやつと顔を上げると、おず／＼と、併し灼きつくような眸で、鷲尾中尉を瞞めるのだった。

接吻

重い梅雨空は低く垂れ込めたまゝ、中々降り出そうとはせず、不快な曇天を執拗に続けていた。二時間ブツ通しの教練が、やつと終りに近づいた頃、光は不意にクラ／＼と眩暈

を覚えた。危うく倒しそうになった銃を、周章てゝもとへ戻そうと引いたはずみに、今度は脚が浮き、（いけない……！）と思った時は、もう意識が半ば薄れかけていた。

彼の身体の異変に、誰よりも速く気付いたのは鷺尾中尉だった。生徒達がハッと息を呑んだ時は、中尉はもう軽々と、失神した光を両腕の中に抱き上げていた。

医務室のベッドへ運び、応急手当を加えろと、光は間もなく深い睡りから醒めるように静かに眼を開けた。

「小宮山、気が付いたか——」

「——ハイ……」

「心配はいらん、軽い脳貧血だったんだ。少し静かにしていればじきに良くなる——」

「はい、申訳ありません……」

光は小さな声で云って、目映ゆげに中尉の顔を見上げる。白蠟のような頬に、薄紅を刷いたように血の色が差し始めた。

「サ、一眠りしてみる。俺は此処にいるから——」

「ハイ……」

光は子供のようにコックリと背いて眼をつぶった。あるか無しかの風が流れて、中尉の体臭が匂ったように思えた。光は、中尉と二人だけでいる幸福に心が充ち足りていた。

未だ幾分苦しそうな寝息を立て、光が微睡み始めると、鷺尾中尉の眸は俄かに熱を帯び

て、喰入るように少年の美しい寝顔を凝視した。かつての、三原一等兵との思い出が、次々と脳裡を掠めては消える。

彼は妄念を払おうとするかのように頭を振った。

だが次の瞬間、鷺尾中尉の唇は、餓えた山犬のように光の唇を食った。

強い圧迫感に、光はハッとして眠りから醒めた。

窓の処に、中尉が後向きに立っている。肩で呼吸をしているのがよく判った。

光は、殆ど直感的に接吻されたと覺ると、カッと身体中が熱くなった。

掃除当番に当たっていた光が、机の位置を換えてみると、窓の外から、

「オイ、小宮山——」

と呼ばれた。

驚いて其方を見ると鷺尾中尉だった。

「——小宮山、一寸用がある。靴を穿いて廻って来い」

光があわてゝ出ていくと、中尉は黙って歩き出した。窓から二、三人の顔が、不思議そうに此方を見ている。光は高くなる動悸を押えて、中尉の後に従っていた。

学校の西側は、運動場のはずれからすぐに松の多い山になっている。鷺尾中尉は、便所の裏手からその山へ登っていった。笹の中を

ズン／＼分けて進み、校舎の屋根の见えない辺迄来ると、中尉は立止って振返った。少し遅れていた光は、息をはずませて近寄った。

と、いきなりだった。鷺尾中尉は土の上に坐るとピタリと両手を前についたのである。

余りの事に光は呆然とした。併し直ぐ此れは冗談だと思った。そして笑おうとしたが、何か頬がこわばるようで笑えなかった。

「——小宮山……」

と中尉の口から出た声は、思わず光がハッとした程真剣だった。

「——小宮山。済まない……！一昨日の俺の行為が、何んなにお前を傷つけたかと思うと、ジツとしては居れなかったんだ——。お前はさぞ怒っているだろう。怒るのが当前だ……。済まない——此の通りだ……！小宮山。どうかお前の気の済むようにしてくれ——。打つなど蹴るなど、お前の好きなようにしてくれ——！」

何うしていいか判からず、光は立ちつくしているより他なかった。

中尉は、哀願するように眼を潤ませて、

「——小宮山。頼む、お願いだ。俺を存分にしてくれ。お前のその泥靴で俺を蹴ってくれ——その白い手で俺を殴ってくれ——！それでないと、俺は気が済まないんだ。頼む、頼むからそうしてくれ！ナ、小宮山……」

「ソ、そんな事——僕には出来ません……」

！一昨日のことはいゝんです——僕、中尉殿になら、何んな事をされたって——」

そこ迄夢中で叫んで来て、フト光は人の来るような気配を感じた。

「誰か来ます。お立ちになって下さい！」

何故か光はひどく狼狽して、中尉を急ぎたてた。

笹を踏む音がして、現れたのは、図画担任の河野だった。手にスケッチ・ブックを持っている。

鷲尾中尉は、佩剣を鳴らし乍ら、怒ったように一人で山を下りていった。

「——何うしたんだ、小宮山？」

中尉の後姿が見えなくなると、河野は光の顔を覗き込んだ。

「——何でもありません……」

「怒られていたんじゃないのか——？」

「いゝえ、別に——」

「そんならいゝが——あの中尉ドノ、暴力が大分好きのようだから——」

「……」

光は何も答えないで、下を向いていた。心にはホッとしたものもあったが、その一方、河野を邪魔者と思う気持は、何うしても否めなかった。

浴室

「警戒警報解除——」

メガホンで繰返し呟鳴りながら、警防団員が走り過ぎていった。

足許の舗道には、何時か宵闇が這い始めている。

何気無く鷲尾中尉が足を止めると、見覚えのある建物の前だった。其処は以前、叔父の松永少佐に一、二度連れられて来た事のある軍関係専用のクラブである。

（飲んでみるか——）

元来は飲めない方だったが、彼は急に飲んでみる気になった。そうして、地階へ下りる階段を一段々ゆっくりと下りて行った。

大して広くもない室内には、軍服や国民服の先客が大分あった。

物悲しい軍歌のレコードが、針の音を立て乍ら廻っている。

不意にボンと肩を叩かれて、振り返ると松永少佐だった。

「何だ、叔父さんですか——」

「叔父さんですかは無いだらう。何うだい近頃——」

「えゝ、まア……」

「併し珍らしいじやないか。エ、？一人で此んな処へ現れるなんてさ——。飲むようになったのか——？」

「いゝえ、それでも——」

「まあ、とにかく結構だ、今夜は儂に付合えよ。ナ——？」

「えゝ——」

「そう云う事に決ったら——何うだ、やる前に一ツ風呂を——？」

「そうですか……」

奥へ行くと、三坪ばかりの浴室が二つあって何時でも入浴出来るように沸かしてある。

「お先へ——」

と云って中尉が浴室の戸を開けようとする、突然隣の浴室から怒声が起り、続いて殴られているような音が聞えた。

「——誰か亦酔っぱらってんだらう。ほっとけ——」

「えゝ、併し——聞いたような声ですから、一寸見て来ます」

「かゝわるなよ」

「えゝ、大丈夫です——」

裸のまゝ中尉が、隣の浴室へ這入っていくと、二等兵の服を着た若い兵を、色の黒い瘦せた士官が殴っている処だった。

「——オイ、秋田」

と鷲尾中尉が声をかけると、その士官は一才愕いたように此方を見て、

「オウ、鷲尾。貴様も来てたのか——」

「うん——オイ、いゝ加減にしてやれよ」

「何だと、此奴を殴るのは俺の勝手だ。貴様の指図は受けん」

秋田中尉は酒臭い息をプウツと吐いた。

「それはそうだが——まアいゝじやアない

か。その代り未だ殴りたいなら俺を殴らせてやる」

「フ、こいつは面白い。——なら勘弁してやってもいい。オイ畑、お前は運のいい奴だ——もうよし、向うへ行つてろ」

「はい——」

と答えたが、畑二等兵は未だ何うしていいか判らないように、泣き出しそうな表情で鷲尾中尉を見た。

「心配いらん。其方へいつてろ」

と中尉が顎をしやくると、それでやっと安心したように、畑は急いで出ていった。

「フ……、鷲尾、貴様も変った奴だな。身代りになって迄、俺に殴られたいとはヨ」

秋田中尉は充血した眼で、舌舐ずりをするように、鷲尾中尉の顔を眺めている。

「おい、シロ／＼見てばかりいないで、やるなら早くやつてくれ」

「本当にいゝのだナ——やつても——」

「軍人に二言は無い」

「有難い。俺にしたって、あんな餓鬼をやるより貴様をやった方が、何んなに殴り甲斐があるかしれん。フ、——よウし、いくぞオ——」

酔っている秋田中尉は、子供のように面白がつて拳を振り上げる。

鷲尾中尉は眼を閉じて、小宮山光を想い浮べた。

フラ／＼しながらも、秋田中尉の鉄拳は可成りの確に飛んで来る。鷲尾中尉は、今自分は光に殴られているのだと想い乍ら乱暴な殴打に身を曝していた。それが、あの果せなかった松山の欲望にとつての、せめてもの慰さめだったのである。

懲 罰

アツと思つたときにはもう遅く、光は三鞭余りも銃口を土の中にめり込まして了つた。

隣の山本もハツとしたようだった。

足早に近寄つて来る長靴の音に、光は全身を硬直させ顔が上げられなかった。忽ち激しい叱咤を浴せられ、続いて息つくまもない程にビンタが反復されるだろう。それは光だけでなく、その時教練を受けていた四年生全員が予期した事だった。

鷲尾中尉は、俯向いている光の前でピタリと止つた。

誰もが思わず息を呑んだ。

だが、中尉の口から出た言葉は意外に静かだった。

「——小宮山、後で武道場へ来い。精神を入替えてやる」

「はい——」

「銃は特別によく手入れしとけ」

「はい」

そして其のまゝ教練は続行されたが、光の

心はもう平静には戻れなかった。

放課後の武道場の隅に、光は壁に凭れて立っていた。高い窓から、斜陽が床に落ちていく。もう随分長いことそうしているように思えた。

ガチャリと音がして扉が開いた。

光は反射的に直立不動になり、つきつめた気持で鷲尾中尉を待った。

中尉はシロリと光を見ると、ゆっくりと扉を閉めた。

「もっと此方へ来い」

中尉に促されて、光は床の中程へ進んだ。

「——小宮山。今から俺はお前に懲罰を加えねばならん、判つてゐるな？」

「はい——」

「今日は裏山のとくと違つて、俺の云う事には、何んな事にも逆えん筈だぞ——」

「はい」

「よし！今日はお前をうんと懲してやる」

鷲尾中尉は、ニヤリと白い歯を出して笑うと、何を思ったかやにわに上衣を脱捨てた。そうして見ている間にズボンも脱ぎシャツを脱つて、とう／＼褌一つになった。

胸毛の濃い広い胸、コツ／＼と肉の締った腰。強靱な腿。それは逞しくも美しい、男性の発達した肉体である。

光は頬を上気させ、まばたきさえ忘れたように、中尉の身体を瞞めていた。

鷺尾中尉は、自分のズボンから抜きとった帯革を光に突きつけると、異様に光る眼でジッと見据え乍ら、

「いゝか小宮山。こいつで力の続く限り俺の軀を打ちのめすんだ。判るな?——それがお前への懲罰だ!」

「はい……!」

わけの判らない昂奮に、光は全身をワナ／＼と慄わせて、恐ろしいもの／＼ように帯革を受取った。

鷺尾中尉は仰向けに床へ転がると、

「よし、やれ!」

と命令した。

光は、身体中の力を振り絞って、帯革の鞭を叩きつけた。

学校中から鬼のように恐れられている鷺尾中尉が、今脆弱な自分の足許に屈伏しているかと思うと、光は骨の髄迄痺れるような優越感に気が遠くなりそうだった。

鞭が唸ると、中尉は傷ついた獣のように、咆哮し乍ら転がり廻った。弾力のある浅黒い皮膚には次々とミミズ脹れが這い、その幾つかは血を噴いている。

幾つ打ったか、幾十打ったか、光の身体からは次第に力が抜け、遂にポトリと帯革を落とす、そのまゝクタク／＼と、中尉の上へ折重なるように倒れ伏した。

夕闇が次第に濃く塗り込めていった。

空襲

学徒動員が始まると、身体の弱い光は、受持教師の勧めもあり、当分休学する事にきめてその手続きをとった。

それでも、昼間の中は鷺尾中尉に逢うことも無くなってしまったが、夜になれば何時でも彼の下宿先へ訪ねていけばよかった。

観音寺の門の前迄来た光は、一寸足を止めて、半分は駆けてきて息切れがしているのを鎮めてから、何時ものように生垣に沿って裏へまわる。そこから墓地を通りぬけて行くと大きな樟の下に鷺尾中尉の住む離れの灯が見えるのだった。

「小宮山。お前、俺を縛ってみんか?」

吸差しを灰皿へ抛ると中尉が云った。

「縛るって——」

「俺を裸にして、自由の利かないように手足を縛って——その辺の柱に繋いで——後はお前の好きなように料理すればいい。何うだ……?」

「はい……!」

光が眸を輝かして答えると、中尉は押入れから麻のロープをズル／＼と引張り出し、ゴロリと仰向けに寝転がった。それから手足を大の字にして、

「サア、何うにでもしてくれ——」
と云った。

白い蛾が一匹、壁に止ろうとしてパタ／＼と舞っている。

幾ら力を入れても、跳ね反りそうになるのを、やっとの事で腕を後手に振上げて縛り、足首も固く縛しめると荷物を転がすように引摺っていった、廊下の角の柱へ腕の縄を括りつけて繋いだ。

その惨めな姿を眺め乍ら、光が帯革を握り締めたとき、ズ／＼と地の底を伝わるような重く鈍い響が二度続けて起った。オヤと思つて光が中尉の顔を見ると、途端に狂ったようにサイレンが鳴り始めた。

「空襲です——!」

「畜生——警戒警報も出さないでいやがって——」

「もう敵機が来ています。爆音が聞えます——!」

と云ったとき、ザ／＼ア／＼という落下音がして、庭の繁みが一瞬にザワめき動いた。

「中尉殿。危険です! 壕へ這入りましょう——」

光が急いで鷺尾中尉の縄を解こうとすると

「待て——」

と中尉はそれを制して、

「小宮山。お前一人だけ壕へ這入れ」

「何故です? 何うしてそんな事を——!」

「いゝから、サ早く——危い……!」
「中尉殿! 気でも狂われたんですか——此の

まゝでいて、もし死にでもしたら何うしますか——！」

光が云いも終らぬ中、至近弾が落下して、窓の硝子が微塵に砕け散った。

「中尉殿！」

「小宮山——解るか……？お前が俺を此のまゝにしていく——後から——爆弾が投下される——俺は逃げようとして助けを呼ぶ——だが誰も来てはくれない。身体の自由は奪われている、逃げるにも逃げられない——恐ろしい死の恐怖に俺は身を藻掻いて泣叫ぶ——何うだ、小宮山。お前はそれが見たくはないのか——？」

そう云い乍ら、鷲尾中尉は自分で自分の言葉に酔っていた。

光の指は、暗示にかゝったように縄から離れた。そして何か襲きものでもしたように、中尉の姿を凝視し乍ら、後退りに縁側から沓脱へ下りた。

市内の数ヶ所から火の手が上り、炎々と空を焦がしている。

凄まじい落下音や爆発の轟音が間断なく起り、熱風となった空気は渦を巻いて吹きつけ逆流する。

此の市にとっては初めての大規模な空襲である。

光は防空壕の口へ身体を入れたが、眼だけは出して、柱に括りつけてある鷲尾中尉を見

守っていた。

中尉は必死となって身を藻掻き乍ら、声を限りに助けを呼ぶが、その悲しい絶叫も忽ちの中に吹き消されて了う。

光は、生きた責め絵を見る喜びに胸を顫わせ、死の恐怖も忘れて立尽していた。

本堂の大屋根が突然紙屑のように舞上ったのと、強烈な爆風とを殆んど同時に感じると光は一瞬気を失ったが、引裂くような鷲尾中尉の悲鳴を聞くとハッとして我に返った。

激しく痛む眼をこすって見ると、天井は垂れ下り、襖は飛び畳の裂けた中に、中尉は血まみれになって、力無く手足を藻掻かせている。

光がよろめき乍ら駆け寄ると、中尉は太腿と左腕を破片で負傷していた。救急囊から三角布や油紙を取出すと、光は手早く傷の手当てを始めた。

遠くで、解除を告げるサイレンが細々と鳴っている——。

切腹

やがて、敗戦の日が来た。

天皇の重大放送があつてから、十日余りした夜である。

蠟燭の光に照し出された観音寺の離れの中は、爆弾で破損した痕こそそのまゝだが、キチンと片付けられていた。

「小宮山……」

そう呼んだ鷲尾中尉の声には、思いなしか深い沈痛の響が感じられた。

光はハッとするものを覚えて顔を上げた。少し蒼褪めて見える中尉の面には、濃い弱が漂い凝っていた。

「——小宮山、俺は此の十日余り考えに考えぬいて決心した。——日本は敗れた……！俺は軍人だ。——来るべき時の来た今、俺は此の手で、己の仕末を立派につける覚悟だ——！」

「中尉殿！」

「小宮山。お前になら、俺の気持が解って貰えると思う……」

「ハ、はい……」

「俺は——陸軍歩兵中尉鷲尾八郎は、見事に腹を掻切つて、軍人として恥かしくない最期を遂げるのだ……！小宮山。お前、見届けてくれるな——？」

「中尉殿……！」

光は中尉の膝に倒れ伏し、肩を顫わせて咽びあげた。

鷲尾中尉はその背を優しく擦り乍ら、

「——泣くな……泣くんじやない……」

俺は今大きな感動で一杯なんだ——！——幸福感に全身が包まれているのだ……！——だからお前も、もう涙なんか拭いて、俺の為に笑顔をを見せてくれ。俺にとっても、お前にとっても

最も幸福な瞬間をこれから迎えるんじやアないか！え、小宮山——」

「はい……」

「——では俺は身を浄めるから、お前、水を汲んで来てくれんか？」

「はい——」

光が水を汲んで来ると、鷲尾中尉は静かに着ているものを脱ぎ庭石の上に下りたつた。

そして頭からザツと水をかぶると、真新しい手拭で軀を拭き、床の間の前に端坐した。

「——何時も佩していた軍力はなまぐらで、此う云う時の役にたゝんだ……」

と云うと、何時の間か用意してあったのか、鷲尾中尉は一振りの白鞘の短刀を取出した。

膝の前でスツと鞘を払うと、吸い込まれそうな冷たい切先が現れ、脅えたように蠟燭の火がチロ／＼と瞬いた。

鷲尾中尉は改めて姿勢を正すと、晒布を巻いた短刀の柄を握り左脇腹に擬した。

全身の筋肉が一瞬、ピンと緊り、崇高な美しさと犯し難い威厳が、光の心に緊々と迫った。

「小宮山。眼をしっかりと開いて、よく見ていってくれ。——腹を断ち割ったら、自分で腸を掴み出し、その後で頸動脈を断って死ぬが、もし万一腸がうまく出せなかった時は、小宮山、お前が掴み出してくれ——。俺は死

んでも、腸は生きている……！小宮山。いか、わかったな——？」

そう云い聞かすようにゆっくりと云うと、

光が強く肯くのを見て、中尉はニツコリと笑った。

それから一とき瞑目した鷲尾中尉は、右手にグ、と力を加えた。

「うっ……」

と思わず歯を洩れる呻きへ重なるように、ギリ、ギリ——と、深く突き刺さったまゝの刃が右へ移動していく。

そして遂に右脇腹迄到した時、ピンク／＼と大きく脉うつような痙攣が起り、噴き出す真ッ赤な血にまみれて、上下に開いた傷口から、少しずつ腸が押し出されて来た。

鷲尾中尉は紙のような額に油汗を垂し、最後の力で苦痛を恠え乍ら、ワナワナ／＼となる手を腹の中に突込むと、ズル／＼と腸を引摺り出した。

「あウ、ツ——ツ、うツ、うムツ、ツ、……：……うム、うツ——コ、コ、コミ——コミ——小宮山……」

断末魔の足掻きの中から、中尉はモク／＼と熱い腸をのたうたせて光を求める。

生臭い強烈な臭気が部屋中に満ちた。

吸い寄せられるように側へ寄った光が、我を忘れて腸を掌に触れると、中尉は安心したように太い息をして、二再握った短刀で頸動

脈を断ち切った。

蠟燭の焰が、フウツと暗くなり、又すぐパチ／＼と赤く燃え上った。

蠢めく腸を胸に抱いた光は、突然絞り出すように号泣すると、紅蓮のように開いた傷口へガブツと顔を伏せた。

(完)

代理部通信

○本誌臨時増刊号「アリスの人生学校」は売切れとなりました。アルバム、美しき縛しめ第一集、並に晴雨画集「美人乱舞」は残部僅少につき、御希望の方はお早くお申込み願います。いずれも再版不能です。

○アルバム、美しき縛しめ第二集は売切れとなりましたが、未製本の分が少し残っていますので一揃三十二葉三百円（千六百円）にてお送り致します。売切れぬうちお早く。

○復刊号は各月号に亘り、若干部数保有しておりますから、欠号の方はお申付け下さい。

○休刊以前の旧号は売切のものが沢山ありますので必ず代品を御指定下さるようお願いいたします。

○フォト類もお差支えなき節は、品切の際の第二希望の品を御指示頂ければ幸甚です。

○御注文は特別の支障なき限り、厳重荷造りの上、即日発送をモットーとしておりますから御安心して御申込下さい。



〔体験記〕

光ある中を (二)

『我が自殺行の記』

近 東 規 矩 也

第二章

鄙の夜は更け易い。暫くは床の中で、この旬日の生命の日々を回想してみるのである。

「花のいのちは短かくて、苦しきことの多いものだ」と誰やらの一節にもある。哀しい人の世ではある。と悟ったような観念をする。ふと、底冷えの寒さに時計を見ると、もう十二時だった。私は弟からの借着であるズボンやジャンパを丁寧にたたみ上げて枕もとに整理して置いた。用意の剃刀も忘れずに布団の下に挟む。意識がおぼろ気になった折を待って、逸早く腕の血管を断つ心算だったのである。今度はプロバリンもアダリン錠も倍量を準備しておいた。三度目の正直と云う事もある。よもや失敗はあるまい。生き恥をさらすような浅ましい恰好は見せたくもないものである。私はなるべく落付いて動作するように努めた。錠剤もやや大量に過ぎると思え

る程の白湯で吞み降ろした。冷水では容易に溶けぬことが前回の失策で身に泌みて応えていたからである。百錠を越した時には、胸が悪くなり、嘔吐を催したが、眼をつむって残り全部を、ひと息で、胃に押し込んでしまった。

輾転としてなかなか眠りに就けない。何か心が定まらないのである。一時を打つ柱時計が妙に鋭く響いて来た。駄目かな——また死にそこなうのかな、そんな不安が胸のなかに拡がり出したりする。凍み徹る夜の深さに柱がきしみ反える。時折りは襖風さえ、頬を撫でるような肌寒さを覚える。動悸が急に早やまって来たようにも感じられて意識はますます冴え澄んでしまふばかりで、一向に睡魔は襲って来そうにもない。

(こりやア、いけないぞ)

と、唇を噛んで精神を鎮めようと、はかるのだが、奇怪な妄想や過去の想い出などが、断片的に頭の中を去来して、とうてい無我の

境どころではない。泣きたいような切ない心地がして来る。私は仕方なく思いきって剃刃をおしひろげて頸筋に当てて見た。ひやりとした肌ざわりが思わず、きりつと四肢をこわばらせる。その儘、掌で刃先を押しようにして力を籠める。鈍い痛みが感覚出来る。もうひと押しだと今度は指の腹に力を入れて、すうっと引いてみようとした。——手が動かない。

(畜生ッ——)

そんなことを口走り乍ら、懸命に手を動かそうとするのだが、痺びれてしまった手先がいうことを利かない。もうひと息だ、と云うのに——そんなことを何回も考えては、動かそうと試みた。そして、手も力も意識の底に沈み込んだ時、私は全く自分を喪失しきってしまった。

翌日も、その又明くる日も、私は昏々と深い眠りを続けていたのである。遠くでしきりと私の名を訊ねている若い女の声がある。

「——お客さん、分りますか、お客さん、貴方のお名前、何て仰言るの。宿帳にある——でいいんですか」

細い澄んだ声だ。

「ええ、僕そうです。——規矩——」

そんな問答をひとしきり繰り返して、又、莫とした冥い路を歩き続けていた。そこは煙りと霧で霞みきった佗びしい世界だった。三日目の夕方、はじめて眼が醒めた思いだった。

重い瞼が、うすい膜を剥がされるようにして次第に開いて来る。沸き返っている薬罐、桐火鉢、薬瓶、真白い掛布を掩った膳の物、見馴れた女中さん達の顔、眉を寄せた女あるじの眼もあった。私はそれ等を、ひと通り見渡して、始めて

(しまった)

と思った。はっきり自分の失敗を意識したのである。リンゲル注射をしたという太ももがひどく疼く。その朝、女中さんは部屋の異

様な、むっとする薬の臭いに驚いて私を起したのだと云う。その私は剃刀の背を、うなじに当てた儘、横向きに眠っているので、あわてて大声で人を呼んだのだそうである。二駅も先の町医者が来て、薬物を吐かせた上で注射を打った。鼻の腔から長いゴム管を押し込んで吞ませると、激しい勢いで白く溶解した液状の薬剤が洗面器一杯に溢れたそうである。ビタカンフア剤と葡萄糖を注射した。

私は布団いっぱい放尿していた。女中さん達が三人がかりで丹前を着換えさせるやら、汚れ物の始末をするやらで大変であったとこぼされてしまった。私はもう言葉もなかった。ただひたすらに恐縮してしまふ。女あるじはそれでも、私のそうした申し訳なさそうな顔色に、いっそ、滑稽さを感じたのであろうか、笑い乍ら

「でも貴方は同情出来てよ。この前の人のときなど、余っ程恥しかったのかしら——」気が付いてから急にヒステリックにきんきん怒鳴りつけて——本当に私達も腹が立ったわ。きつと照れ臭かったのでしょうね」

と云う。全くその通りである。私はもう平身低頭というところであつた。

旅館から電報が打たれた。五日目の昼下り、父がしよんぼりと這入って来た。その潮垂れた姿をひと眼みた瞬間、私は言葉なく頭をかかえてしまった。父は私には一言も云わなかった。そして、あるじに向って

「——御迷惑をおかけして何とも申し訳ありません。どうぞお恕し下さい」

と詫び続けた。

六日間の滞在費、及び医療費、それに布団、衣類の汚損料や、なにかやで取り合せて七千六百円程の嵩になってしまっていた。

勿論父にはそれ程の額を払いきるだけの経済的な余裕はないし、加えて現在の父の会社からの収入能力では、その見透し策すらも、

あるべき筈はなかった。女あるじはこの辺の事情もよく了として呉れた。

私達は父の来た次のバスで帰ることになり、番頭と三人して市の警察に寄ることにした。バスで小一時間、群馬県の太田市の警察署を訪ねて、ここで警察が仲に入って借用証を渡す事になった。返済期間は、来月から向う七ヶ月の間、無利子で——と云うことであつた。

秩父連峯の朝風が肌に痛い。父は家に着くまで終始無言の儘であつた。私も何も語ることが出来なかつた。貧しい家の灯が無性に哀しかった。

三月——曆の上では既に春の訪れではあつたが、巷の人々はまだ冬仕度から容易に解放されそうにない。私は狭い二階のひと隅に臥つた儘無為の日を送っていた。病人の栄養など、どうてい摂れる筈もないし、まして服薬などは及びもつかない。一日二食——それも僅かばかりな粥食である。洗濯も出来ず、入浴は勿論出来ない。着替えの肌着類さえ代りがなかつた。おびただしい盗汗と体臭に、ひからびた生きている屍がそこに転っているだけという恰好だつた。

息苦しい症状は日増しに甚だしくなる。背筋は割れそうに痛む。咳は夜に入ると、きまつて息をつく暇もなく、こみ上げて来て切なかつた。二十三日の朝——と云つても、それは九時を一寸回つた頃だつたと思つてゐる。私は又しても自殺病にとり憑かれてしまつてゐた。それ



は藪塚温泉から戻つてすぐ思ひついた考である。前にも増して継母の私に対する扱いは冷めたかつた。矢張り今はもう死ぬべき道以外に私の安心はあり得ない。そんな結論だけが、頭の隅から消えなかつた。私は、母が市役所に扶助料の申請に出掛けたすきを見て、古簞笥の中から、帯と羽織とを出して風呂敷に包んだ。弟の服を着

ると急いで表通り飛び出していた。靴が見当らなかったのも、父の雨靴をはいて、色の褪せたレインコートを着込んだ。駅前古着屋で風呂敷包みの衣類を七百元に売りつけた。その金を握って私は上野行の電車に乗り込んだのである。

下痢が止まらなかった。腸結核を併発していたのである。都電で浅草に出た。六区の映画館へ自然と足が向く。セキネ食堂で久しぶりに中華丼とカレーライスを食べた。須田町食堂でオハギと親子丼を食べた。美食を忘れていた胃の腑はそれでも飽きない。天婦羅そばとオヒイを追加して、更に洋菓子を買った。宝塚劇場でエノケンの「落語長屋は花盛り」とトニー谷の短篇物を観た。七時半だった。割引きから、もう一度常盤座に入った。七百元はこれで消えてしまった。下痢が激しくなった。便所へ通っているうちに映画も終わってしまった。何の写真か、それも分らなかった。熱っぽく頭が重かった。館を出ると暗い夜が寒々として湿っていた。星が渺い春の宵はもう静かであった。観客たちは、思い思いに散ってゆく。皆それぞれの家に帰るのである。あのひと達はうらやましい。私には今夜は泊る処さえない。下痢に悩む身体をもて余すようにして電車通りを歩き出した。当てもなかった。たゞ脚だけが前に出てゆく。三十分程すると私の姿は肩で息をつき乍ら再び上野駅の広場に佇んでいた。夜の女や靴磨きの子供達が群がっていた。しかし彼等は旺盛な生活力をもって生きていた。疲れを知らぬ生活があった。私はたゞ生きていくだけの自分がうとましく、うら哀しかった。西郷さんの像が冷えていた。その下の地下道を抜けて七軒町の通りに出た。ボオト場の池の水は遠く根津の町の灯を映して濡れて淀んでいた。私は斃れそうな身体を僅かに意志でかゝえるようにして池の巡りを歩いた。焼け跡に建った水族館の裏手に入って、その軒下に坐った。もう半歩といえど歩けそうにない。身体全体が燃えそうにほてり反っている。何も考えなかった。唯、無性に眠むく、気懶る

かった。前後もなく眠りこけてしまった。朝が来ても私は容易に起きようとしなかった。

「行き倒れだよ」

「死んでるかね——」

そんな声がした。子供達が集まって一齊に私を覗いている。警官が来て私にこゝから出てゆけと云った。私はうなづいて立ち上った。しかし、ものの三步とあゆまぬうちに斃れてしまった。手で土を掻いた。立ち上ろうと努力しても手足が痺れて動きがとれなかった。

(あゝ、動けない、立てない——)

自由の利かぬ自分が情けなかった。人の情けに訴えたいと思うのだが、口が渴いて言葉にならなかった。陽ざしのやわらかい日曜日であった。ボオトに興じる人達が群れ歩いていた。私にコッペパンを呉れた中年の婦人もあった。食慾は更にならない。頭の芯が重く痛い頬を泥土に押しつけた儘の恰好で、たそがれ時のうそ寒さまで動けなかった。砂風が吹き立った。宵のうちとはともかく、赤電が池の水を染めて駛る。多分十一時近い時刻かも知れないが、鋭い寒気が足のさきから射しあがって来た。動くのは辛かったが、どうにもこらえきれない悪感が骨の随にまで浸み入ってやりきれなかった。少しづつ、身体を転ろがすようにして這った。眼の前にペンキを塗り上げたボオトが舟底を上に向けて六艘ほど並べてあった。私はその中のひとつに身体をめり込ませるようになってしまった。もう土は夜露にしっかりと濡れていた。春の嫩葉は青い匂いにむせ返るばかりである。空腹がはげしく感じられた。生爪に血が滲んでいた。土を掻いた時に傷めつけたのかも知れない。別に痛みも気にならなかった。ハンカチーフで首を締めてみた。呼吸が詰って涙が出て来た。咽喉が膨らんで頸動脈がびく／＼鼓動する。思いきり力を籠めて締めてみる。口が開け放しになって、渾水がどろりと流れた。たまたまなく苦しくなって熄めてしまった。ポケットをさぐる。家を出る際

に持ってでた安全剃刀の刃がまだ失くさずにあった。それを持って手首を切ってみた。二の腕まで十二、三回も切りつけてみた。黒い血糊がねばついて刃が深く肉に入らなかった。痛いだけで血脈まで切断が出来ない。左腕が一面に血まみれて傷だらけになった。血膏に刃がすべって、もう、どうしても深く切りつけることが出来なかった。仕舞いには多量な出血で、腕が重くなってしまった。ひんやりと冷めたく膠着して感覚がまるでなかった。レインコート袖まで血まみれになった。血餅が凝固して来た。頭のうしろが冷たく痛い。意識が湿って来ると、もう視力も弱り、口から肺を吐き出しそうに苦しい。耳が鳴り、まなかいが眩い。死ぬことだけが意識だった。星が小さい夜だった。見ているとその星がだん／＼数が減ってゆくようにさえ思える。

(もう死んでいるんだなア、あゝいゝ気持ちだ、実にいゝ)

眩くように官能の底で自分にひとり合点をしてみる。三時間近くも悶えぬいて蠢めいた。下痢がはげしく下腹に襲ってきた。水便が股間を濡らしてしまった。こらえるだけの力もなかった。曉闇の冷えに小さく縮まった儘、私は自分を完全に喪ってしまった。

寒い朝が明けた。昨夜の警官が連絡したのか、派出所の警官が二名、私を探がしていた。私は歩道を越した前の黎明診療所に連れ込まれた。女医さんが白い眼で私を睨んだ。手荒い療治をして呉れて云った。

「貴方、死ぬなんて馬鹿なことよしてよ。みんなが迷惑するだけ。安全剃刀で死ねたら苦労はしないわよ、だいち、手首なんか切ったって死ぬるもんじゃアない。もうそんな真似はやめ、よくってネ」私は苦しい笑いしか出来ない。

「それに——貴方、肺が悪いようね、変な咳が出てるわ」私はだまって頷く。

(死ぬ程になるんだから、いろ／＼事情があるのでしょ、でも死

にそこなったのは、とにかく一度死んだのも同じ事だ。福祉に行つて頼んでみなさい。ヤマに寝ているといえ、何処かの病院へ入れて呉れると思う。上野は比較的容易に保護して貰えるようだから——)

と思いの外、親切に教えてくれる。

診療所を辞すと重い足を引曳り乍ら喘ぐようにして駅まで出た。執拗に下痢はまだ続いていた。公衆便所に踏み込んでみると、その儘、身体が崩れ落ちてしまうのではないかとさえ思えた。切なかった。咳が肺をしぼり上げて発作的に繰り返した。身体中から汗が吹き出て来た。発作が熄むと汗が冷えて肌着が気持ち悪かった。血便が出ていた。便といつても、殆んど水みたいなものばかりであった。腸結核の症状であった。今朝から声も思うようにならなくなった。風邪ひきのしわがれ声のようだった。この分では咽喉もおかされていのではないだろうか、そんな心配もあった。死のう——と云う人間が今更とも考えるが活動している肉体がしきりにそれを訴えるのだ。台東区の福祉事務所は金杉にあった。都電で駅前から乗って、ふた停留場であったが無一物の私は、たゞ歩いてゆくしかない。春先の風陽は病身に眩めくおもいだった。行き交う人が私を振り返って足を止めていた。二度目に巡邏中の若い警官に道を訊ねると、わざ／＼一緒にいて来て呉れた。大きな母子寮の裏側にその建物は小さくあった。主事と称する中年の男が私の来意を聴くと

「住所不定だね、じゃア仕方がないだろう。病院へ送致したげるから、兎に角、この先きの下谷病院へ行つて診察を受けて来て御覧」と事務的に私の顔もみずに、書類を書き上げて封筒に収めてくれた。

下谷病院までかなりの道のりであった。柳通りの花街を抜けて都電の裏通りに建っていた。道々二度ばかり、はげしく咳き上げて淡

い血の滲んだものを吐いた。血痰であった。受付時間を過ぎていたが、親切そうな女の事務員が便宜をはかって特別に診療券を切って



くれた。待合室で疲れを憩う間に、また咳が出た。背骨がぎし／＼痛んだ。胸の中が変に冷めたくなったと思った瞬間、そのひや／＼としたものが咽に押し上がって来て、咳と一緒にかなり大量の血を吐き棄てた。明らかに今度は咯血であった。看護婦があわてゝ駆けつけて来た。トロンボゲンと云う止血剤のアンブルを割って注射してくれた。やゝ濃い目の食塩水をコップ一杯飲まされた。診断は早やかかった。透視をするまでもなく、すぐ所見を書いて呉れた。体温三十九度六分の高熱、脈膊は百二十であった。咽喉結核及び腸結核を併発、高度の肺結核症ということであった。若いインタアン上りの医師だった。

「とてもラッセルがはげしいですネ、すぐ入院しなければいけないですよ。困りましたねえ、この病院はいまベッドが全然明いてないし——」

と、クレゾールの溶液で手を洗い乍ら云った。「でもほっておくと生命とりになります。よく書いておきましたから、何処か、他所の病院をさがしてくれるでしょう、まあ心配しないで——」

と慰め顔に笑う。

もう一度福祉事務所まで引き返す肉体の元氣はなかった。ごろ／＼鳴り続ける下腹をおさえながら上野駅に戻ってしまった。待合室は満員で空いている腰掛はなかった。なんとなく又地下道に降りて地下鉄入口の須田町食堂の向いの壁に凭りかゝって眼を閉じてみた。ラジオが六時を告げた。棒のように脚が重い。横になりたかった。空腹が感じられた。しかしそれにも増してたゞ身体をやすませたかった。

宵のうちは乗客が夥だしい。十一時の終車が發つ迄、ごろ寝も出来なかった。ぼんやり酔客や女の足を見て立っていた。加代に肖た女の足もあった。ナイロンのストッキングは見た眼にも美しい、やわらかさを感じられた。地下道の食堂が灯を消した。私は新聞紙をひろってそれを敷いたコンクリイトのごつ／＼した冷めたさに又、下腹が痛み出して来た。浮浪者やパタ屋の群れが集まって来ると、思ひ／＼の場処に筵や莫莖をかむって寝転び始めた。板片れを燃して暖をとる組がそち／＼に出来た。天井のひくい地下道が煙りの中に燦って火の粉が舞い上った。手拭いで頬かむりをした男達はコッペパンを嚙り乍ら、大声で卑猥な歌を唄った。シキパンが焼酎を飲んで尻を振って踊り出した。男達がそれに合してオコサ節を唄う。二時近くまで皆、ごそ／＼身体を動かして眠れなかった。私はそれでも暫くすると、うつら／＼とまどろんで来た。腕の傷が疼く。容易に寝入り切れない。ふと、顔を上げた。若い娘が私の横に寝ていた。安もの、桃色のセエタアを着ていた。ストッキングの上から白足袋をはいている。下駄の鼻緒だけが赤かった。

「遊んでよ——」

と云う。

「冗談じゃない、僕は金を持ってなんかいいえ」
わざと乱暴な言葉で応酬する。

「——じゃ、たゞでもいゝ、寒いから私を抱いておくれ」

十六か七だ。まだ女になるには早い年頃なのに、もう肉の世界を識っているこの娘が可哀想だった。縹緲は決して良くはない。人並みな顔立ちだが真っ白い歯だけが印象的だった。それに胸のふたつの隆起が美事に豊かだった。膨れた乳房をセエタアの上から撫で、みる。暖かい柔らかな感触は矢張り女を意識させた。忘れなくてはいけない。これはみだらな妄想なのだ。——
私は強い力で娘の身体を除けた。

「身体が良くないんだ」

私はにべもなく云って横を向く。

「いゝよ、そんなこと——ね」

ドロップを三粒ほど口に入れてくれた。

「パチンコで取ったんだよ、お兄さん、パチンコは上手かい」

せつせと足袋を脱いで手提げ袋に入れた。娘はひとりで私のレインコオートを脱がすと、自分の肩にも掩って私の傍に横になった。私は知らん顔をして眼をつむっていた。

起き直ることも叱ることも、この際は苦痛だった。腕が鈍い痛みをくり返してしびれ切っていた。

朝の白い光りが地下道に流れて来た。娘は私の背の後で眠っていた。六時になった。駅員が掃除に降りて来たので私達は地下鉄を抜けて公園の裏口に出た。娘とこゝで別れた。別れしなに、いらないと云ってきかぬ女に無理にレインコオートを渡した。

「百五、六十円には売れるよ、ものはいゝんだから」

——父が鉄道省技官の頃、伊勢丹で作らした注文品であった。彼女は

「パチンコをするよ」

と云って御徒町の方に去って行った。家は三河島にある。父と二人で京城電車の踏切小屋の四畳半に住んでいるのだ。だから三日に一度しか家には帰らない。パンパンを始めたのは愚連隊の兄にだまされて、博奕に貞操をかけられてしまっただと云う。

「兄ちゃん、あたいをバアジンだから、おゝ一個の値打ちがあるって、かけたんだって、お兄さん、バアジンでなアに——」

そんなことを昨夜訊ねていたようだった。千円で肉体売ったことを、むしろ誇らし気に話す、この娘が、いとしかった。

その日は公園で一日中、陽を浴びていた。夕風が立って来た。私はまた駅に引き返した。空腹であった。丸三日、何も喰べていなか

った。下痢だけはそれでも続いているのだ。

地下道で踏み込んでいた。ぼんやり考えることもなく、虚ろな心で、たゞそうしていった。肉体だけが死にきれないのであった。今は自殺する気持ちは無くなっていた。自殺の手段を考えることすら嫌だった。何も彼も面倒臭かった。たゞ生きているだけだった。上野駅の地下道では毎年冬期には、きまって、四、五人の行き倒れや、凍死があった。私も飢えと寒さで、そうなるのを待つ外ない。その夜も浮浪者達は焚火を始めた。悪魔のような焰がめら／＼と、すゝけた低い天井をなめて燃え熾った。ズボン下もパンツも下痢で汚してしまっていたので、公衆便所に捨て／＼しまった。素肌にカアキ色の作業ズボンだけだった。弟の小さなジャンパーでは丈が短かくて腰が寒かった。焚火にあたるには木屑か板切れを提供しなければならぬ。でないとシヨバ代として拾円とられるのだ。私は革帯を代償にして、とにかく暖を探る権利を得たので、どうやら今晚だけはいくらかしのぎよいだろうと思った。火は疲れた身体をやわらかく揉みほぐしてくれた。あたゝまると睡気が催して来た。この儘ずつと眠ったなりにあつてくれ／＼ばい／＼。そんなことを頭のどこかで思っているうちに本当に眠り込んでしまった。頭を強く蹴られて吃驚して眼を覚ました。地下道全体が物凄く明るくなった。公園口も山下口も百人近い警官でふさがれていた。新聞社のカメラ班が大きな照明機を持ち込んで、あたりを照らしている。NHKの録音器もあった。ニュース映画のカメラがじい／＼廻転している。一斉狩り込みと云うやつであった。私達は四列になって地下道の一方に集合させられた。四百人近い浮浪者やバタ屋だった。女も二十人程、まじっていた。病人が残されて、他はそれ／＼の寮に送致された。民生局員が私の差し出した診断書を見て、

「――病院ゆき」

と肩をたゞいて係官に云った。

すぐにコッペパンが二個与えられた。夢中でそれに啖いついた。朝の六時頃までにはトラックで始んどの人間が送られて行った。私と他に二名が肺病らしい――と云うことになって特別に東京寝台自動車に乗せられた。

車は根津の宮永町を抜けて、池の端の黎明診療所に寄る。茲で患者を一人収容することになっていた。ラジオが、もう朝のニュースで上野駅の今朝の狩り込みを報じていた。車は新宿から中央線に沿って駛った。

昭和二十九年三月二十七日。――私はこうして北多摩郡の現在の病院に生活保護患者として入院することになった。

病院には十一時に着いた。今も陽は暖かい。有名な村山の貯水池は、すぐこの近くだった。

(未完)

アイデア

(1)

城秀人

○逃げようとする女の後より、細引を巻きつけ、絞め殺そうとする仮定のもとに行う。(例えば、映画「ダイヤルMを廻せ」の電話を掛けている女を締め殺そうとする場面の如し。)

○首に細引(余り細いとフィルムに取った場合、効果が悪いので、むしろ単に写真のためだけにあれば、荒縄の方が効果的である。を掛け、や／＼上向き加減になってもいい、それを斜

め下より写す。

○モデルは肩を寄せ、鼻孔を意識して大きく開き、口は半開きの状態となり、舌がや／＼口の外をのぞき苦痛の表情をする。

○両手は苦しさのため、自分の髪をかきむしっている。目は薄く閉じる。(目はかっと思ひらくというが、実際はどうであるう。)

○これは特に表情に重きを置くため、顔のクローズアップとしたい。これも、伊吹、萩、のよりに演技の巧い人にやってもらったらいと思う。

文学に現れた同性愛

藤 見 郁



異常性愛をテーマとした小説を三篇ほど紹介してみようと思う。文芸雑誌に発表されたこれらの小説が一般の読者に読まれても、ああそうか、そんなものかと読み過されてしまふのがオチであろう。然し、ひとたび、この小説が奇クの読者の眼に触れた時には、又、異った意味での色彩を放つのである。読み捨てるには惜しい特異な主題を持った小説をここに取り上げて、本誌の文献性の一助になれば幸甚と思ふ筆をとる。

はじめに、芝木好子作「第二の結婚」(小説新潮、昭和三十年新年号所載) 芝木好子氏は衆知の通り、現在第一線の中でも最も活躍している女流作家の一人である。この芝木氏が、男色者を描いて妙味ある短篇としたのがこの作品で、女性側からの観察描写なので、

男色者の心理にまでは立ち至らず、その点、物足りぬ所もないではないが、それが職業とはいへ、よく調べたと感心せざるを得ない。原文をとりあげながら、筋を追って紹介してみよう。

女主人公の名は由貴子。この由貴子をはじめてその男と逢ったの

は、伊豆の温泉場であつた。

『……夕暮だが、温い伊豆のことで寒くはない。その小径の大きな雪柳のかげから人の気配がして、若い男が現れた。その手に引かれて母親らしい老夫人が見えてきた。若い男は夕空に浮き出すほどの色の白い美しい男で、その母親と瓜二つの上品な表情と物腰だった。どちらも相手の出現に驚きながら接近してきた。……』

この色の白い美しい男に由貴子は心を惹かれる。この最初の出逢いの描写には、まだ何らの異常性はないが、その次に、はじめて由貴子が男に対して奇異な感じを抱く場面がある。

『……夕食の前に祖母と浴場へいった帰り、やはり浴場へ下りてきたさっきの親子と出会った。祖母は挨拶を交して、ついでに由貴子を紹介した。

「孫が来てくれました。」

「いつぞやお話のお嬢さま」

「いゝえ、あれとは別の孫でございますよ」

「お孫さんが多くて、お賑やかですこと」

「はい、あなたまごまご致します。」

一同は笑ひながら別れた。親子は一緒に家族風呂へ入っていった。一緒に入ったことが由貴子には少し奇異に思はれた。……』

しかし、この程度では特に異常ということもなく、由貴子はなんの疑いもなく、この男、

和倉静也と結婚する。もちろん読者にもこの小説がなにをテーマにしているのかは、まだ全然わからない。

「……彼はある私立大学の歴史の講師をする傍、女子大学へも出講していて、女子学生間に人気があるさうだが、これまでついぞ噂一つない品行方正の教師だといふことも、人伝てに分った。二人の結婚はすらすらと纏って、結婚の式を挙げる日になった。……」

この、女子学生間に人気があっても噂一つない品行方正というのがクセ者で、これから、この静也のそうした性情の伏線が次第に張られてくる。

「……由貴子は初々しくて愛らしい花嫁だった。宿に着くと、静也は誰の手も借りずに一人で着替へをして、由貴子のために軽い食物を取ったり、自分の出てきた風呂場までまた連れて行ったりした。由貴子が風呂から上ったとすると、静也は退屈だったのか鏡台の前に彼女の化粧道具をひろげてゐた。戯れに鼻の頭へお白粉をつけてゐた。

「あら」

と由貴子は、笑ひ声を立てた。

「こゝへいらっしやい、お化粧して上げます」女に紛ふほど色白くうつくしい静也の前では、由貴子は身が竦むやうだった。湯上りの静也の唇は女のやうに赤く濡れてゐたし、呼吸の触れるほど近くに坐ると、戯れの彼のお

白粉も妖しくあでやかだった。静也は彼女に化粧の種類をたづねて、試みにパンスティックを彼女の頬に伸ばした。彼女は羞かしさで真赤になりながら、後じさりした。と静也はわらひながら、由貴子の手をとって引止めたが、その彼の手は氷のやうに冷かった。彼は自分の膝で彼女の膝を押しながら、愉しうに、熱心に彼女の顔をかざっていった。彼の眼はこの戯れに酔ってゐるやうだった。由貴子は彼の冷い手が皮膚に触れる度に、身体の底から慄へるやうなショックをうけたが、次第にこの遊戯に溶けていった。皮膚を滑る接触の感覚は、彼女の生れてはじめてのエクスタシイだった。彼女の顔は、夜の鏡台の前で華かに仕上った。

「これ、あたくし！」

由貴子は眼をあけてみたが、鏡にうつる自分の顔が晴れがましかった。それは夜の灯の下では少々毒々しい濃化粧だった。静也は熱中したあそびに、あ、おもしろかったといふやうに、寝ころんで、煙草をふかしはじめた。

「そろそろ寝ませうか」

彼は立って、自分の寢床へ入っていった。

彼の口からは将来を誓ふなんの言葉も出なかった。彼はすぐやすやすと寢息を立てはじめた。由貴子は何事もない結婚第一夜に、ほっとしながら、

「——をかしなひと」

半ば茫然とさう感じたのだった。……」

ここまでくると、賢明な奇巧の読者には、この静也がウールニグではないかと、ほほ察しがつく。しかし一般の読者はどうか。新婚の初夜に花嫁を抱かない男を、たゞ漠然とおかしな奴だな、と思う位であろう。この由貴子のように。

当然この結婚はうまくいかない。しかし二年目に由貴子は身籠って瑠璃子という子供を生む。

「……夏になると幼児の健康のために、夫婦は湘南の海岸へ小さな家を借りて住んだ。この海辺へは静也の教へる予科の学生が幾人も泳ぎにきた。彼は女子学生に対して案外なほど愛想が悪く、むしろ男学生を歓迎した。……」

「……静也は裸かになると、をかしいほど生白かった。それでも男の肉体に間違いはないので、学生達と混って戯れながら海へ出て行った。彼のお気に入りには重川といふ逞しい学生で、彼と一緒にだと特に燥いで、静也には精彩があった。由貴子は見送りながら、吐くやうに、

「おゝ、嫌！」

と思った。なんといふしなやかな肌理と弾力をもった肉体だらうと思ふ。その白くかぼそい四肢に、自分の眼がきらきらと嫉妬に光ってゐるのを由貴子は感じる。彼女はまだほ

んたうにあの肉体に届いてゐない自分を感じた。良人は少しも自分のものになつてゐない。この焦燥はたまらない。……」

ここで初めて、静也の同性愛の相手に、重川という遅い肉体をもつ学生が登場してくる。静也は次第にこの重川と深い関係におち入り、由貴子との間は冷却の一途をたどる。重川は自然、由貴子の敵となるのである。

『……ある晩静也のところへ、学生の重川が尋ねてきて、泊った。彼はしばしば遊びにきてゐたが、泊ったのは初めてだった。次の日も帰らなかった。静也と重川は一日中二階にごろごろしてゐた。』

「どうだらう、重川君をしばらく置いてやりたいのだが」

静也は由貴子に相談をもちかけた。重川は北陸の農家の息子で、これまでは僅かの仕送りとアルバイトで暮してきたが、仕送りの事欠くやうになり、寄宿先を追はれて途方にくれてゐる。次のねぐらが見つかるまで見てやりたいと云ふのだった。由貴子は貧しい学生のことだし、反対のしやうもなかった。しかし彼女は本能的なほど重川が嫌ひなのである。

重川は次の日から静也の家の一員になったが、彼はいつも静也とくっついてゐて、食事にも外出も、寝るのも静也と共にした。静也に向つては諂ふやうな態度だが、由貴子には決

して面と向つて物を云はなかった。なんとなく彼女をけむたく思つてゐる態度だった。まだ二十才そこそこの若さだが、彼がそばにくると、なんとも云へない男臭さがあつて、その堂堂とした大きな身体や、脂肪くさい体臭や、色の底しれず黒い、面麴の出た顔をみるだけで、由貴子には不潔感に誘はれた。彼が泊つた次の日、彼は静也の使つてゐるタオルで顔を洗つた。そのタオルで静也がまた顔や身体を洗ふのかと思つただけで、由貴子は吐きさうな気がした。彼が庭下駄を履くと、それは一度で油ぎつてしまふし、庭の松の枝先から下つてゐる毛虫を、ひよいと無難作に掴んで捨てるのを見ると、彼女は嫌悪で身慄ひが出た。……」

『……静也の生活は重川が来てから少しづつ変化をみせはじめた。元々瑠璃子が生れてから夫婦の臥床は別々になつてゐたが、彼は寝るから起きるまで重川と一緒に行動をはじめると、自然家の中の生活は二分されてしまった。食事でも男同志で済ませるし、狭い風呂に入る時も静也は重川を呼んだ。』

日が経つにつれて、重川はだんだん横着になつてきて、反対に静也は卑屈なほど彼に対してやさしくなつた。重川のそばにゐて、彼の面倒をみるのが、静也にはたのしくてならないらしいのだ。由貴子が重川の汚れ物を洗濯しないと、静也は風呂の中で自分で洗つ

てやった。……」

『……それにしても重川の身体を洗つてやつてゐるかもしれない静也を想像すると、由貴子はぞつとする気持だった。……』

『……由貴子は結婚した初めの一年は、それでも一月に一度ほどは良人に愛された。そのことが少しづつ距離をおいてゆき、瑠璃子が生れてからは、まったく稀になった。世間知らずだった彼女は、初めのうちこれが当り前のこととばかり思つてゐた。しかし次第に眠られぬ夜がくるやうになった。一年に一度か二度良人に触れることは、却つて刺激になつた。彼女は子供が生れてからは、心を傾けて育児に専念することで、自分の裡の女を殺そうとつとめた。静也はさうした由貴子の苦しみや悩みには、全く無関心だった。彼女が憤しみといふべしでつゝんでゐる忍耐を理解しようとはしなかった。彼女はある時思ひきつて積極的に出てみた。すると彼は当惑しながら、訊ねた。』

「君、どうかしたの」

こんな言葉を浴びせられては、由貴子は錯倒してしまひ、もしかしたら自分は色情狂ではなからうかと思つた。……」

『……良人は自分を愛してゐないのだと思ふ。それなのに彼は重川といふ学生を愛してゐる。……』

こうして最後の破局が近づく。この頃にな

って、いくら世間知らずの由貴子でもやっと静也の救われない異常をはっきりと知るのである。

『……ある朝、講義の時間が早いのに、静也は仲々二階から起きて来なかった。由貴子は妻の権利を思ひ出して、二階へ上っていった。雨戸を閉ざした奥の部屋は暗かった。彼女は二三度呼んでから、障子を明けた。殆ど同時に彼等は飛び起きた。彼等の狼狽がその極に達していたので、由貴子は暗い敷居に突っ立ったまゝだった。やゝしばらくして彼女は階段を駆け下りた。……』

『……由貴子は静也に向つて、最後の切札を出して争った。妻の自分が残るか、重川が残るか、そのどちらしか有り得ない。流石に静也は重川を出す方を選んだ。だが一度ひひの入った夫婦は、容易なことでは元通りにはならないだらう。』

その日の夕方、由貴子が家の門を入ると、静也が縁先で瑠璃子を遊ばせながら、ぼんやり庭先を見てゐる顔が写った。いくらか憔悴が目立って、物さびし気な男の顔は虚ろだった。由貴子は足を停めて、硝子越しにうつる良人の顔を見た。美しい魂が宿るものと思つた日のゆめは還らない。しかしそこに写つてゐる男の顔は、少しも悪意を宿してゐるとは見えなかった。由貴子はふと哀れを覚えた。彼といふ男が限りなく哀れであり、その彼に

連れ添ふ自分が哀れであり、二人の間の無心な幼な児はまして哀れ深かった。……』

『……静也はそれからあとも重川とは手を切つたと云ひながら、ずるずるとその関係を断つことは出来なかったのである。……』

こうして、結局、由貴子は静也と別れる。そして、やがて伊組という誠実な男と第二の結婚をする。伊組は由貴子にとって「美男子でも、傑れた人物でもないが、この世で一番愛せそうな男」だったのだ。

『……静也からは一度だけ、仙台のある私立大学へ転任したいといふ通知を受けた。彼は色々な意味で東京にゐられなくなり、地方へ移らざるを得なくなったのだらうが、重川がやはり一緒らしいことも彼女の耳に入つた。……』

このダイジェストだけを讀んでも、同性愛の男とその妻を主題として、ここまで描いたこの小説の特異性がおわかりになるだらう。

しかし、残念なことに作者が女性だけに、妻の立場からのみ描かれて、夫静也の心理が置きざりにされてしまった。夫としても大学の講師を勤める知識人なのだから、その苦悩は深く複雑だったに違いないのである。その相互の心理を描き、更に重川という学生の心理をも追究して立体的に描いたら、この一篇は本格的な同性愛小説となったことだらう。然し、この問題はその作家に或る程度の、この

傾向に対する興味がなければむずかしいことかも知れない。さりながら、この「第二の結婚」は、同性愛を扱って珍らしい小説である。作者の近辺にモデルがあつたにせよ。

次に丹羽文雄氏の「女靴」を紹介する。この小説は最近の氏の作品の中でも佳作と呼ばれ、単行本となつてでているから小説好きの読者ならば、既にお読みになつたかも知れない。

——寿々子には海津という男が居たが、終戦後しばらくたつて外地から帰つてきた海津に、寿々子は情熱を失つていた。そのうちに野々宮可久という洋服生地店の女店主と知り合い、この女店主の誘惑にのつて、寿々子も女同志の愛に快感を知るようになる。その前に、海津とその本妻の弘子との間のいざこざや、その弘子の新しい恋愛などの話があるが作者はこの寿々子と可久の恋愛に紙数を費してよく書きこんでいる。

寿々子をはじめて可久に誘われて、塔の沢一の湯旅館へ泊りに行く描写から紹介してみよう。

『……番頭に案内されて、ロビーを渡つた。五尺四寸五分、十六貫の可久は、外人に時々みかけるみごとな体軀である。色が白くて、脚が長かつた。腰が上の方についてゐて、胸が張つてゐる。うしろからついていく寿々子がひどく虚弱に見えた。ロビーの客が、びっ

くりしたやうに二人の女客を見送った。

丹前に着かへて、縁側の椅子にかけると、いつそう男のやうに可久は見えた。たばこをくはへてゐた。髪は短めに剪られ、カールがされていて、可久はふくよかな頬をもつてゐる。万事に可久が男らしく振舞うことに、寿々子はよく慣れてゐるが、時々、どきっとして、女の可久の顔に眼のさめるやうな瞬間があった。

「お風呂へ、どうぞ」

可久が歩くと、部屋がみしみしと鳴った。可久のうしろから歩く寿々子は、無意識にも小娘のやうにふるまうてしまふのである。寿々子は苦笑してゐる。地下室へ降りていくやうな湯殿であつた。可久が、鍵を下した。先に下りた可久が湯を鳴らしてゐたが、やがて湯舟に沈んだ。階段を下りて来た寿々子は、白い熊を聯想した。にやにやしてしまふ。可久は染まるやうな白さであつた。

「あまりが悪いわ」と寿々子が云った。

「何が」

「ママがあんまり白いんだもの」

「ふふん、白いだけが、とりえさ。だけど、子供を生んだ割には、寿々の肌はあれてないね。乳も処女みたいに張つてゐる」

「ママと並ぶと、自信がないわ」

「鳩胸、出尻……よくよく日本の着物が似合はないよ。洋服の生地屋をひらいてゐるのは

身の程を知った仕事だよ」

寿々子が相手の時は可久は伝法な口調になつた。男のやうな口調の時が、可久には気分がいい時であつた。いかにも自然である。客を迎へて、女らしい声を出してゐるのを見ると、芝居をした風で、をかしかった。首だけ出して、二人は互を眺めやうとした。寿々子は不安を抱いてゐる。「何故自分がこのひとに、これほど可愛がられるのか」自分以上に魅力のある、美しい女が他にゐないわけではない。野々宮生地店には、十人近い若い女が居た。男社員も居た。偶然生地を見にいって、寿々子は可久に逢つた。その日、可久は寿々子をフランス料理屋につれていった。それからダンスホールへ案内した。客を大切にすることと思つたが、何か調子外れであつた。可久は寿々子を抱いて、踊つた。恋人を抱くやうにして、男が女を抱くやうにして踊つた。寿々子の服の仮縫には、可久がひとりであつた。相手が同性なので、寿々子は安心して、裸になつた。出来上ると可久は半分しか金をとらなかつた。……」

「……気味が悪かつた。可久は寿々子を必ず料理屋につれていった。映画を一しよに見た。持物まで気をつける。「いまに生胆をくれ」と云はれるのではないか」と寿々子は、可久のひいきを素直に母親に報告することが出来なかつた。誤解されてしまう。何かまっすぐ

に云へないものがあつた。

「軽いわね」

「ふふふ」

寿々子はくすぐつたがる。湯の中で、可久の膝に抱かれた。可久の顔は上気してゐた。動物の親が仔を眺めるやうに眺めてゐる。

「洗いっこしよう」

寿々子は容積の大きな白い壁にぶつかつてゐる思ひで、可久の背中を洗つた。可久の背中はつるつるとして、あぶらが浮いてゐた。豊饒な、白い世界。代つて寿々子のからだを石鹼の泡だらけにした。可久は笑ひながら寿々子を抱いた。石鹼のぬめりで、寿々子は可久の脇の下へ落ちこんだ。ぴったりと抱かれてしまつと、母親に抱かれた子供のやうになつた。可久はいつかあぐらをかいてゐた。どちらもつるつるしてゐた。骨張つてゐない。寿々子は大きなあぐらの中にはいつていた。自分が段々と、子供供してしまふ。「こんなにも可愛がられてゐる。何故だらうか」と寿々子は、何か今ごろになつて、やつと判りかけてゐた。しかし、不快でなかつた。むしろ、あまえかかりたい。可久は片手で寿々子の後頭部を支へ、片手のタオルで寿々子の胸から、乳の間、腋の下をこすつてゐたが、何気なくその顔を落してきた。予想もなかつた。防ぐ隙がなかつた。あつと思つた時には、寿々子の唇は上手に可久の舌を蓋をされてゐた。

寿々子は逃げなかった。可久の両腕がおもむろに寿々子を抱きしめた。寿々子は気が遠くなった。幼ないものが、年長者に可愛がられる場合、もつと上手に可愛がられたいために、じっとしてゐるのに似てゐた。

「判ったらう？」

と、可久が云った。半分は判った。が、寿々子にはまだ安心が出来なかった。

「今日は新婚旅行だよ」

と、可久が云った。……」

このあと風呂からでた二人は、ビールを飲み、最後の、たゞならぬ関係に入る。さすがにベテラン作家だけあって、このようなアブノーマルの世界を描かせても実によく調べ、当事者の心理を巧みにつかんでいる。

「……寿々子は可久の膝に抱かれた。すると自然に朗といふ男の子のあることを、寿々子は忘れてしまひさうになった。唇の感じも、抱擁も、海津とちがってゐた。モデルになつてからの数々の経験のどれともちがってゐた。「同じ女性だからだらう？」と、この感覚は、寿々子も好きであつた。きれいだと思つた。可久のからだは、いい匂ひがした。いい味があつた。女中がはいって来た。客がふざけてゐるのだと女中は思ふらしかつた。可久ははなさない。……」

「……笑ひ声をたてる寿々子に、大きなからだがかぶさって来た。ぎゅっと寿々子のから

だが鳴った。口を封じられた。それは異性さながらの隙のない圧迫感であり、海津にはなかったものである。寿々子も想像しないわけではなかったが、初めて知つた世界は、想像を絶してゐた。たしかに別な感覚であつた。嫌ふどころか、この世界にやがて自分が深入りするだらうといふ感じが強い。……」

以上二つの小説を御紹介したが、丹念に調べれば一般の文学の中にも、まだまだ異常性を扱つたものがあるに違いない。読者の中で気がついた方は編集部と協力して、誌名、題名、簡単な内容などの記録をつくつたら面白いではないか。

(絡)

懸賞応募作品短評

編集部

締切日までに到着しました懸賞応募作品は左記の十七篇に過ぎませんでした。発行部数が以前の何十分の一にも満たない現在ではありますが、嘗て、応募作品数が数百篇の多きに達したことを考え合せて、転た感慨なきにしもあらずですが、それにも増して、十七篇を通読しましたところでは、本誌の掲載に耐え得る程度のもものが、二篇あるかないか、といった実情は、全く淋しき限りでした。

次に、内容のしっかりしたものから順に題名と作者名を掲げてみます。

○或る守衛の日記 (間島 進)

- | | |
|---------------|-----------|
| ○終戦奴隷 | (雪俊 遙) |
| ○マヤの黄昏 | (山川 和男) |
| ○カラーシヤの教典 | (西小路公彦) |
| ○愛情流転 | (佐保 無情) |
| ○欲情の川 | (小竹 紀夫) |
| ○ブローズの追憶 | (並原 新一) |
| ○世界に於ける刑罰の種々相 | (荒巻 充助) |
| ○姫塚物語 | (吉備 団子) |
| ○惑溺者 | (近東規矩也) |
| ○愛すべき雌 | (近藤 一) |
| ○蜃気楼 | (奥田 滝夫) |
| ○姑の嫁いじめに泣く | (青木志保子) |
| ○倒錯日記抄 | (久保征一郎) |
| ○双頭の白い蛇 | (葉山 千春) |
| ○ナルチシストの鏡 | (羽村 京助) |
| ○無題 | (カオル・サヤマ) |

私の「ふんどし」

松原三千代

各地の女性のみなさま方から最近続々「禪愛用」の声が聞かれますことは、私も早くからの愛用者の一人として本當にうれしく思っております。私も「奇ク」休刊以前に一、二回読者通信欄に、書かせていただきましたがその後結婚いたしましたので暫く遠のいていました間に、こんなにも同好の女性が多くなりまして何だかわくわくするようです。以下断片的になりますが私の「禪」への気持を書かせていただきます。

まず私は「禪」という言葉は実に何ともいえない魅力と美しさを感じますが、この漢字から受ける固いイカツイ感じにはなかなか馴染めません。やはり私のような女性には平がなで「ふんどし」と書いて読む方が気持が良い



のです。やわらかい、ふっくらした感じが「ふんどし」と書くだけでもう、うずくように湧き上ってくるのです。あゝふんどし、ふんどし、……何度でも……

私が「ふんどし」を締めはじめたのは中学の終りか高校のはじめ頃だったと思います。それ以来二十七才の人妻の今日まで毎日、必ず取り替えて、ピッタリと締めております。そして夫も結婚後半年たった今では、すっかり「ふんどし」愛用者になってしまいました。私は「ふんどし」着用以来ずっと、もう長い間、パンティもズロースも穿いておりません。せっかく「ふんどし」でピッタリ締め上げたものからお尻へかけてのサラリとした気持の良さを、どうしてパンティなどのモヤモヤしたもので、損うことが出来ましょうか。ことにこれから夏の季節になります、が、「ふんどし」一本で短か目のフレヤースカートをなびかせて歩く感触はたまらなく快適です。

はじめて「ふんどし」を締めた日のこと――それは七月頃でした。私は水泳部の補欠選手で泳ぎの方は自信がありましたので、よくお友達に引張り出されて海水浴に出かけたのですが、そのある日、海からざーっと上って来ると、みんなが私を眺めて笑いたいようなヘンな顔をしているのです。はじめは何のことか、よく判らなかつたのですが、みんなの視線を追ってゆくうちに、ハッとそのわけがわかり、思わずシャワー室に飛び込んでしまいました。私はいつものようにその日も、

何の気もなく、競泳用の、薄い絹の水着を着て行ったのですが、競泳用のは腰の回りも二重になっておりませんし、おまけに絹が水に濡れて、ベッタリと肌に吸い着いているのです。その時以後、私は学校の練習のときでも、水着の下に自製の黒い小さい三角ふんどしをぐっと締め上げるようにしてみました。

× × ×
 こうして「ふんどし」を着けることを知った私は、日常生活でも、すっかり「ふんどし」愛用者になり、高校卒業の頃には、同好の友も五人以上になりました。私たちは「ふんどし」の美しさと快適さについて、お互いに自分たちの手で作品を作って、くらべ合い、意見をのべ合ったりしました。結局、六尺ふんどしが、誰でもみんな一番気持が良い、ということに一致しました。新しい真白なサラシをキューツと力一ぱい締め上げるときのあの緊迫感。あの肌ざわり。しかし、六尺ふんどしは日常の普段着にはなりません。腰からお尻にかけて結び目や布がカサばって、和洋いずれの服装にも邪魔になりますので、普段着には三角ふんどしが、女性用としては最も好適だと思っ

× × ×
 六尺ふんどしというものは、これはやっぱり男のものだと思ふようになりました。締めると、気持が良いので離せなくなるので

すが、男のキリリとした「ふんどし姿」にはとても及びません。六尺ふんどしの美しさの秘密というものは、あの真白い色と男の肌の色との対照の鮮やかさと、もう一つ「ふんどし」の前のふくらみだと思ひます。六尺ふんどしこそ本当の男の象徴なのです。女には六尺ふんどしの美しさはただ後ろ姿の緊迫感だけなのです。

× × ×
 私は六尺ふんどしは日常はあまり使用してはおりません。誰か女性の方で、みるからにスマートに、キリリと締め上げた六尺ふんどしの正面姿を拝見したいと思つております。私の日常は三角ふんどしです。越中ふんどしも使つてみましたが、後ろから股をくぐらせて前へ締め上げて残り布を前へ垂らすのも、前後ろとも紐を通すようにした残り布無しのものもどちらも越中ふんどしは、シマリがなくて私には気に入らないので全然使つていません。三角ふんどしは、男の水泳用ふんどしに、前が逆三角で後ろが縦一本のものですが、男物のように余裕ヒタは不用ですから、全部が一枚布で出来ます。前は腰布一杯に広くとって急に三角形に狭くなるように裁ち、丈は、余り穿き込みが深くなると野暮ったくなります。細い縦一本の中は一寸から一寸五分位で、左右の縁を納め縫うとき少し絞りが加減に糸を締めて行くと、自然真中の部分に

× × ×
 弱いタルミが長く出来て、腰のところではギューッと締めても、中のタルミにビタリと収まつて密着します。この密着感の肌ざわりといったら、もう二度と他のものは穿く気がしません。

× × ×
 布地は綿のブロードかデシムなんか良いと思います。私の一番好きな模様は、紅白の細かいシマか、ブルーの水玉です。海へ行くときは濃い赤系統です。水着が薄手ナイロンの白のシングルワンピースですから、水から上った時には透けて、この赤い三角ふんどしがよくみえるだろうと思ひます。知多の海か、鳥羽の海かで、もしお目にとまりましたら、それは私でしょう。

× × ×
 夏になると私の家では能率的にというので私はフレンチスリーブの腰までのシャツブラウスに、下は三角ふんどしだけで、お仕事をします。そうすると「ふんどし」はもう下穿きではなくなりますので、いろいろ楽しい可愛らしい工夫をしてみるので、腰で締めた紐に短かいヒラヒラをぐるりとうしろの方まで取付けたり、割合に広く取つてある前面の三角の真中に丸か三角かのくり抜き穴をあけてみたり、小銭入れのハリツケポケットをつけてみたり、ビイ玉で長さ二、三寸の房をいっぱい作つて紐にギッシリ並べてぶらさげで南

海情緒を出してみたりするのです。私の一番好きなスタイルは白いシャツ、赤い三角ふんどし、黒ナイロンストッキングにサブリナ・シューズです。

× × ×

私の「ふんどしについての意見」としては

① 第三者からみて男女ともに、美しくなければならぬ。

② しめている自分として、気持がよくなければならぬ。

③ 日常生活上において便利で実用的でなければならぬ。

以上のような点に常に気をつけているのです。

①の「美しい」ということは、ことさらふんどし一本になって見せるということではありせんが、やはり家の中でも、外出時でも、

どうかした時にパンティなどが目につくことがあり勝ちですが、そのパンティの代りにしているふんどしですから、もし他人の目にふれる時があっても、むしろそのために美しさをふりまくようにと注意してしまっています。私の一番気にかけているのは、例えば、街角で突風にでも吹かれてスカートがパツと上った時のお尻です。私はそんな時の、ストッキングと丸いお尻とキレイなふんどしとの対照の美しさには、自信があるつもりです。

②の快感については、股下だけ布をたっぷり使って六尺ふんどしをネジッた効果を出してみました。が、とてもいい気持でした。けれどもこれは①の美感とは両立しない様な気が致します。どうでしょうか。ご意見を聞かせていただきたい。越中ふんどしが、美感、快感ともに最もダメです。

③の実用的という意味は主として便所の際のことですが、これは私の経験からいえば、三角ふんどしの後ろを、ヒモに縫いつけないで左右にズレるようにしておけば、一番簡単に用が足せて、パンティを一々下ろしたり上げたりするより余程便利です。

女性のみなさま、もっともふんどしは、女性の日常普段着に愛用されていると思いますがいかがでしょうか。とくにこれからの夏の水に親しむシーズン。男も女もふんどし一本にアクセントをつけて、伸び伸びとび跳ねたいと思います。

「もしこの一文が幸いに誌上掲載していただけたら、続いてふんどし写真やふんどしエピソード男(私の夫)の意見など寄稿させていただきます。よろしくお願いします」

〔新聞・雑誌〕通信

レポート

島 直 樹

フオルマリンで「カン腸」

長男死ぬ 父親が手当誤り

—五月二十八日付、朝日新聞夕刊—

【太田発】群馬県山田郡毛里田村市場、農業櫛田茂雄さん(三三)方で二十七日朝、長男の勇ちゃん(五才)が発熱したので茂雄さんがグリセリンでかんちようするつもりで、誤ってフオルマリンを使ったため勇ちゃんが苦

しみ出し、同朝九時ごろ足利市栄町鈴木医院
 Ⅱ鈴木栄太郎氏Ⅱに担ぎ込んだ。鈴木医師は
 ヘントウセン炎と診断してペニシリンやリン
 ゲルなどの注射を続けたが、同夜九時ごろ死
 んだ。

右の記事の如く、三段見出しで掲載される
 程の、珍しいニュースに何気なく新聞を広
 げた瞬間、ドキリとさせられました。

而も、この記事の下段に「イチヂク浣腸」
 の広告が出ており、記事と広告の組合せが、
 偶然とは云え、余りにも対照的だったので。

× × × × ×

長田博之著「痔の話」

創元医学新書一〇二頁

「両親と添寝している可愛い子供が毎夜むず
 かるので、医師に見せたところ、ぎょう虫症
 と診断された。医師は醋酸の浣腸を行い、通
 院をすすめた。

両親は家に帰ってから考えてみると、医師
 の行ったのは醋酸の浣腸であるから、醋酸の
 浣腸なら家でもやれないことはないと思い、
 奥さんが洗濯に使用している醋酸を使えばよ
 いではないか、なんのことはない、醋酸の
 濃度を考えずに濃い醋酸を二〇〇Cも浣腸し

た。

お医者さんの所で浣腸した時には、子供は
 ちよつとむずかったただけなのに、お父さんが
 家で浣腸したあとの、むずかりようはただご
 とではない。

激しい苦悶と叫び声に驚いた父親は、子供
 を抱きかかえて医師の協力を求めに走ったが
 時既におそく、子供の直腸は氷醋酸で焼かれ
 てしまっている。それでも医師はアルカリ溶
 液で洗腸を行い、直腸内に残った酸の中和に
 つとめ、殺菌剤を含んだ油を塗布して応急の
 処置を終り、経過を観察した。経過は潰瘍を
 起し、ついに狭窄がやってきた。

私はブーシ法をおこなって治すことができ
 た。これは「サルまねの危険」を教えている。
 笑いごとではない貴重な例と考えるので、書
 いた次第」

× × × × ×

文芸春秋 漫画読本4 四〇頁

人生最大の感激

御婦人方のトランプ遊びが終って四方山話
 に移ったとき、一人の若い女性が自分はい
 に先晩恋人から結婚の申込みをうけて人生最
 大の感激を覚えたとお披露におよんだ。する
 とそばにいた、これは既婚の婦人が、「いや

く、そんなのは最大の感激でも何でもない
 自分が人生最大の感激を味わったのは、結婚
 初夜のことだった」と一日の長のあるところ
 を示した。

すると、第三の女性が仲へ割って入って、
 自分が人生最大の感激を味わったのは、長い
 便秘のすえ浣腸して貰った時だったといっ
 た。

× × × × ×

軍配は第三の女性にあがった。

浣腸マニヤにとって、絶対見逃がせになら
 ない雑誌を紹介します。

「看護学雑誌」一九五五年三月号

巻末付録、写真でみる看護技術、治
 療処置（胃洗滌及び導尿の介助）

グリセリン浣腸及び石ケン浣腸の方法を、
 十六葉の写真入りで、詳しく説明しており、
 看護婦がガラス製浣腸器の先端にカテーテル
 を連結している写真や、イルリガートルの直
 腸管を肛門に挿入している写真等、浣腸マニ
 ヤにとっては感激おくあたわさるばかりの写
 真が豊富に、しかも鮮明に、医学的解説記事
 と並んで掲載されてあります。導尿の写真は
 八葉、これも又素晴らしいもので、とにかく
 一見をおすすめ致します。

『被虐哀歓』

其の後

真金鍛次郎

△昭和二十九年九月号「被虐哀歓」同年十月特大号「続・被虐哀歓」の二篇に依つて、その赤裸々な告白を物された筆者が、更に筆を新にして、その偽りのない生活をこゝに公開された。前二稿と関連して読んで下されば幸甚です。▽

前に書きました通り、外部の圧迫に依つて屈折的な進路を辿った私の性癖は、ある方面から解釈すれば極めて滑稽な事でしょうし、私から言えば不幸の極みと言わざるを得ません。私の知る範囲の友人は総べて、忠実に社会の法則に従順して、自己と子孫の将来の為に各々の基盤を礎きつゝあります。折にふれそれ等の人に接した時、私はハツとして正常な自分に立ち還える事があります。常日頃、変則的な官能活動のため、半睡半醒とでも言いましようか、迷夢の中にあつて一進一退を続けていた正常な心の眼が、豁然として開くのです。正と変。おなじ大気を吸っていながら此の二つは異った道を進まなければなりません。向う三軒両隣りに通用する暗黙の条

件を携えて、彼等は従順に進んで行きます。そこには安定した本能の樂園があり、そして輝かしい前途が待ち受けて居るに相違ありません。

そうした周囲の刺激に醒まされ時、私の五体は清浄な血液が正確な鼓動を続けるのです。そんな時、心の中で私にそつと囁く者があります。「一緒に行ったら如何だ」

彼等とは反対に、私の歩んでいる道は不健康な、そして極めて危険な状況にあるという事が日頃不安と恐怖に憑かれる原因となつていたのです。以前に書いたものの中には、こんな心の苦悩などには少しも触れていませんでしたのであれをお読みになった後



で、私がどんな人間として皆さんの心に映つたでしょうか。喜々としてあゝした遊戯にふける半面、なんとかしてこの泥沼から這いあがらなければならないという焦躁の念が、絶

えず私の心の中で渦巻いていたのです。そんな訳ですから心の中で誰かがそつと囁いた時一も二もなく私は諾意を以て斯れに答えました。そして今迄のコースを変更して彼等と同じ歩みが続ける必要を痛切に感じたのです。私にはそれが極めて安易に実行に移す事が出来るものと信じたのです。そうしなければ自殺的な前進より外に道がないという不安と恐怖が、正常な心を刺戟した結果、マゾの神経を黙認させたのかも知れません。

間もなく私は、ある一つの職業を得たのを契機として、以前の不健康な遊戯をすっかり忘れてしまう事が出来ました。蛇足かも知れませんが私の職業を一寸記しましょう。近郊で伯母が旅館を経営しており、そこに番頭として住みこんだのです。其所で私は規則正しい生活を始めました。朝は早く起きて色々と雑用をやり、午後は廊下の拭き掃除、庭の手入れ、其の他色々の雑用が多く、広い家ですし、前の番頭がやめたため勝手も解らず、馴れる迄は大変でした。夕方は客引と連れて来た客を各部屋におさめる世話迄やかなければならず、深更に到ってぐったりとして床に就くのが毎日の日課でした。そうした慌だしい毎日を過すうち、何時とはなしに以前の自虐的な遊びなどはすっかり忘れていました。と言ふよりも、そんな意欲など起らぬ程、私は忙しく、そして日々の仕事に疲れていたの

す。私は喜びました。ことに依ると或はこれで私の心持が一変して新しいコースを進む端緒になるかも知れないと思つたからでした。そして其の事自体は私に大きな希望をあたえて呉れました。

私は楽しかったのです。どんなに忙しくとも何の不平もなく黙々として動き、そのため周囲の一部の人達から非難された事もあった位でしたから。

そんな毎日をひと月ふた月と順当に繰り返して半年あまりも過ぎたでしょうか。ふだんもあまり痩せている方ではありませんが、この生活に移ってから更に目に見えて顎なども二重にくびれる位に太つて来ました。その頃にはもう新しく人を入れて、私が今迄やつて来た一切の慌だしい仕事は総べてその人に任せてしまひ、私は単に部屋の世話文を受持つて毎日樂に過していましたが、それが又以前に縊を戻す結果になつてしまつたのです。縊を戻すというよりももっと強烈な力で自虐の本能は私の体内で燃えあがるのです。忘れ様考えまいと努める程益々強くマゾの神経を昂める様になり、遂に敗北した私は、ある夜軽いトレーニングを行つてしまいました。一時中断されていた自虐の本能は中断されていたがため、新鮮な刺戟が五体に浸透し、激しく燃えあがつてしまいました。

昼は多数のお得意の客の接待などで、席の

たび酒や其の他脂肪の多い食物を御馳走になるのが二度三度です。し仕事は楽ときいているのですから、夜の私はいくら激しい責を試みても容易に参らないのも無理はありません。昼は君子然として客をもてなし、夜は醜い一個の痴体と化すのです。然も斯れを知つてゐるのは、広い世界に天と私があるだけだったのです。私はこんな矛盾した生き方をしななければならぬ宿命にあるのでしょうか。私は焦りました。夜と言うものが永久に此の世からなくなれば良いとさえ考えた位です。再び縊の戻つた私の体内で、異常な意欲が神経を支配している時間といへば、眠っている時以外はそれ等の事で脳が充満していたと言つても言い過ぎではないと思ひます。実際にその意欲を満す時は夜を措いて外にはなかつたのですから、夜が来れば決して訝かりながらも自然と其の方に足が向くのでした。

もし此の文を読んでなんにも感じない人が有るとしたら、其の人は此の世の中で最も幸福な人だと思ひます。その人は未だ此の様な苦しみを味つた事のない人なのです。この様な苦しみを一生知らずに過して行ける人は、なんと幸福なことでしょう。此の様な苦しみを抱いて煩悶している私を眺めながら、馬鹿じみた事を、と笑つて過せる人なのでしようから、私は其の人達を羨ましいと思ひます。そんな事を考えると、心の中でまた私に

囁く者があるのです。何故一緒に行かないのだ、ともう取り返しがつかないとすっかり絶望していた私は頭をかゝえて呻く様に呟くより外に方法がなかったのです。やっぱり駄目だったよ。と、

最早私の体内に宿る正常な神経はなんの反応もなくすっかり沈黙してしまいました。それからの私はもう夢中でした。そしてこれだけが私に取ってたった一つの生きがいを感じるものとなってしまったのです。そして激しい自虐行為のち、決して全身の骨がバラバラになってしまった様な虚脱感に襲れ、その虚脱感から逃れ様として更に激しい責めを自体に加えるのです。それが又より深い空虚の世界に誘う原因となってゆくのでした。こうして何処迄も果てしない異常な世界の曠野を独りとぼくとして歩いて行かなければならない私は、世に多く存在する不幸な人間の一人として数えるには行き過ぎた考えでしょうか。

泥濘の中を行く如く一歩／＼と深みに嵌り遂には足をとられ、腰をとられ、全身が没してしまうのではないのでしょうか。然し首迄嵌り後少して頭が泥の中へ入ってしまう様になった時でも、私は決して助けを求めたりしないでしょう。

今では寧ろ、そうなる事を心から望んでいたのかもしれない。

最近の私は病的と名づけても良い位、自虐を欲する様になりました。頭の天辺から足の爪先に致る迄、強烈な刺激を与えずには一時も過す事が出来ない様になりました。近頃私は、自分の両足が責めの苦しみを受けて喜び悶える独立した生き者の様に感ずる様になりました。風呂へ行った時など、他よりも念入りに、丁寧に、足の手入れをします。軽石を使ったり化粧水を使ったりして事更大切にします。昼も靴下を離さず水虫に罹らぬ様に細心の注意を払い、剃刀も時々あてたりして女が顔を化粧するのと何の変りもありません。聴て激しい苦痛をあたえて醜い恰好で苦しませる為に。足にも一種の表情があります。

むだ毛一本ない迄に手入れされた綺麗な足が、高く吊られて縄や鞭の苦痛に指先が醜く歪み、足全体が激しい痙攣を起す時、そこに足以外では表し得ない独特の美しい表情を読み取る事が出来ます。その時の足の表情を満足する迄眺め様とすれば、苦痛を与えた時、それに耐えられる、又は耐え様とする特種な運動が自由に出来る様にして置かなければなりません。私は色々工夫して、表情を最高度に發揮でき得る様な自由を、この遊戯の度に自分の足に与えております。尚、それには昼である事と人目をさける事が必要ですので、最も危険の少ない山を利用しておりますが、私の住んでいる所からは大分離れている為、

新しい靴下を履いて出掛けても目的地へ着くと汗と埃の為指の間などが汚れていますのでいつも雑布を用意して行きます。適当な木に麻縄を下げると濡らし持った雑布で、綺麗になる迄念入りに足を拭いてから吊るすのです。叩かれた時、それに耐える運動が自由に出来る様に足首の所を二巻き程縛って吊します。衣服は勿論全部脱いでしまいます。そして足の裏、爪先、甲、踵等を棒や細竹などで力一杯叩くのですが、自分の足を自から叩くのですから、痛みが激しくなると、どうしても加減してしまいます。爪先がツキン／＼と痛んで来る様になると叩く意欲は全然ない位疲れて来ます。「そんな事位で参ってどうするんだ、これからが本筋に入るんだ、こんどは続けて八つ打ちのめすんだ、辛抱するんだぞ」と自分に言い聞かせ、息を詰めて思い切ってビシ／＼と叩くのです。痛くてたまらなくなると決めた半分も叩かれず、細竹を投げて痛い所を両手でかゝえて泣いてしまう事があります。然も私の意志はまだ／＼と不満を訴えているのです。「こんどこそ血が吹き出す位やってやる」斯う言い聞かせると竹を拾いあげ、息を詰め、はずみをつけてビシ／＼と叩くのですが、激痛のため指全体が醜くひん曲がり、足全体が前後に、上下に、左右に激しく痙攣し、あまりの苦痛に竹を投げ捨てて両手で痛む所を抱えて泣いてしまいます。綺麗

麗に手入れた足がめちや／＼になる位責め苛み、苦痛とそれに伴う表情を十分に堪能して、結局帰る頃は蚯蚓腫れが無数に交又し、爪の中なども内出血で赤く滲んで漸く歩いて帰る位です。

近頃、私はテープレコーダーが欲しいと思う様になりました。自分の好む体位で責められて、呻き喘ぎ絶叫する迄の過程を具さに録音し、後でそれをゆっくりと聞いたらどんなに楽しみな事でしょう。勿論此処に書く迄もなく、気絶する前などは、(いや、もっと前から)この声を録音するのだ等と言う悠長な意識を仿かす余裕など微塵もない断末魔の世界でしょう。だからこそ楽しいのです。意識されぬ悲鳴、想像すら出来ない様な絶叫を、余す事なく手に取る様に聞かれる事でしようから。恐怖の観念を遙かに超越した壮嚴な気持で、生唾を呑みながら一心に斯れに聞き入る事でしよう。

贅沢を言えば限りがありませんが、十六ミリにでも撮り、声姿相和すれば私の日頃の欲望は更に満たされるかも知れません。御誌などを拝見しますと、責映画などが密かに作られている記事が載っています。あれは空想した作品か、あるいは実際にあるものなのかは、解らぬながらもマゾとしての立場から大変面白く、飽きずに何度も読んでおります。自分が責められる姿を一挙一動に致る迄記

録される。考えただけでも何かあついものが込みあげて来る様な気がします。

以上今迄に書いたのでも解る様に、昨今の私はすでに病骨肉に浸透したかの感があります。何とかしてこの窮地から逃れたい、等と考えた事自体が、杞憂であつた事に気づいたのです。職業を得たのを契機として正常な歩みが続けて来た私の進路は、斯うして急角度に傾いて壊れてゆきました。ただ幸いな事に私の五体は益々健康を獲得していく様です。

それは外国に有る鞭打ち屋の女たちの尻が日益に立派な形を型造っていくのと同じ現象なのかも知れません。それ共体質そのものが異常なのでしようか。前後の見境もなく随ちる所迄おちていくとする気持とは反対に日益に逞しく肉づいていく体を見た時、あれこれと考えた事が尚の事馬鹿らしくさえなつて来ました。と同時に未来に対して一種の安心感を見出したのです。

私は今迄、二十九年九月号、十月号と二度に涉つて私がどんな人間かと言う事を残さずに書き記した積りです。もうこれ以上なにも書く事はありません。もしあるとすれば、益々深まってゆく激しい自虐行為の恥晒しな、くり事ばかりでしょう。然しこれも現在の私にとつては楽しい人生の一コマです。一日のうちで安らかな心を持つて居る時と言え、これを書いている時と、寝ている時以外には

殆んどないと言っても良い位なのです。直接と間接の違こそあれ、私の書いたものを他の人たちが読む、千人だろうか万人だろうか? 想像しただけで胸の中があつく来てる様です。これを読んだ人たちの視線が、御誌を通じて私に向けられている。考えただけでも動悸が高まって来る様です。こんな風に近頃の私は誰か他の人達に責められるのをひそかに憧がれています。

これから、私は貴重な頁を拝借して、恥晒しな告白をしたいと思ひます。それは男女老若を問はず、どなたでも結構ですから私を奴隷として雇って欲しいのです。自分をパーゲンセールに出す訳ではありませんが、既に一般社会に通用しない我身を役立てる方法として選んだ最良の策と考えたからです。この文を読んだ後で気の向いた方はどなたでも結構ですから御一報承り度いと思ひます。個人的な事にお使いになろうと利益の為になろうとそれは雇傭主の自由意志にお任せ致します。過日、私は六法全書を繙いて見ました。なまいきな、と笑わないで下さい。先ず他人を監禁した場合、どの様な法に依つて処罰されるか調べて見ました。又軟禁した場合、独断で行つた場合、合意のもとに行われた場合、と各頁を開けて見ました。何故そんな事を調べたのかと不思議に思ふ方もあるかも知れませんが、現在では認められていない奴隷制度を

復活させた場合、雇傭者側はどんな処罰を受けるか、無理な事をお願いして後でとんでもない事にでもなつてはと一応調べた迄の事です。詳しい事は解りませんでした。が、刑法に次の様に記されてありました。

刑法第三十一章 逮捕及び監禁の罪

第二百二十条 不法に人を逮捕又は監禁したる者は三ヶ月以上五年以下の懲役に処す、自己又は配偶者の直系尊属に対して犯したる時は、六ヶ月以上七年以下の懲役に処す。

第二百二十一条 前条の罪を犯し、因て人を死傷に致したる者は傷害の罪に比較し重きに從つて処断す

尚、章は変わりますが略取及び誘拐の罪の章の中に、営利の目的に出でざる場合に限り、告訴を待つて之を論ずとあり、被害者が訴えでもない限り、先ず大丈夫である事をたしかめました。自分からお願ひして置いて訴える訳はないのですから。

さて、お願いする私の方としては、別に条件とてありませんが、許される範囲内で二、三書かせて頂きましょう。手か足には（首でも腹でも結構です）永久に取れない鎖でも着けて置いて下さい。服装は自由ですが身分に適したものを与えて下さい。食物は胃を痛めない物なら何でも結構です。おみおつけの出しながら、残飯、魚の頭や骨などを足でぐちや

／＼に踏んで喰わせるのも面白いでしょう。寝ている時以外は、必ず労働を強制して下さい。然も絶対に逃げられない様に両足の間隔を詰めて鎖で繋ぐか重りでも着けて置いて下さい。鞭は十分に与えて下さい。少しでもぐず／＼していたり、主人の意に背いたりした時は遠慮なく罰を与えて下さい。マゾの私には苦痛が世界で最大の御馳走なのです。若し仕事がなくなつた時は（そんな事はない筈です。探せば、いくらでもあるのですから）最も苦しいポーズを取らせて休ませて置いて下さい。その他、気がいら／＼したり退屈な時などは生きた玩具として弄び、楽しく過して下さい。部屋の中は足など使わず必ず奴隷の背中を利用して下さい。おや／＼、未だ誰も使つて遣ると言う人もないのに注文が多すぎたでしょうか。此処迄ひと息に書いた時、ふと二十九年八月号の伊吹嬢の写真を思い出しました。食事の時以外はあんな風に、もしくはあれ以上に緊く猿ぐつわして置いて下さい。若し置いて遣ると言う人があれば、どんな遠い処へでも喜んで行き度いと思ひます。その時、トランクには何を入れて行つたら良いでしょうか、帯金で手枷や足枷などを鉄でとめてしまえば永久に取れない様に造つたり、厚い巾の広い板を二枚合せ、足首に合せて穴を繰り抜いて足枷を造つたりしてしまふ。其の他鎖錠などを揃えいつか心ゆく迄使

える様な気がして、音をたてない様にあたりに気を配り、毎夜飽きずに眺めております。それ等の物で充満したトランクを持ってお伺いしましょう。お宅の門を潜る時、そこに何か書いてはないでしょうか。

永劫の呵責に遇わんとする者は此の門を潜れ。

日毎夜毎苦しみを受けんとする者は此の門を潜れ。

此の門を入る者は一切の希望を捨てよ、そして、永劫の呵責に会わんとして、鎖のついた手足の枷に鉄を打ち込まれるべく、自から手足を差し出します。その時の気持はどんなでしょう。最後のハンマーが打ち降ろされカーンと鉄を留め終えた時、私は未来に対する一切の希望を捨てなければなりません。

身分賤しき奴隷として、鞭の下で戦きながら毎日を過ぎなければなりません。手足の自由を奪われ発言の自由も奪われたのち、只一つの自由を呼吸のみに求めて毎日を過ぎなければなりません。此の苦しみは、風雪の吹きすさぶ冬の野に葉落ち枝折れた枯木のひとり立つよりも激しい事でしよう。然し私は、此の境遇を世界で最も楽しい人生の在り方と思ひ毎日を歓喜して過す事でしよう。

主人が用を言い付ける時、私は語尾が終らない内に立たなければならぬかも知れませんが。だから私は緊張して土下座してなければ

ばならないのです。主人の気がいら／＼した時、私の体は骨も砕ける程床に蹴り倒されるかも知れません。いくら痛くても急いで起きなければ、次にどんな罰を受けるか知れたものではありません。だから私は急いで起きなければならぬのです。主人が怒った時、私の頬は変形する位撲たれるかも知れません。だから私は意に違わぬ様全力をあげて奉仕しなければならぬのです。主人が鞭打つ時、私の体は縞馬の様に全身が彩られるかも知れません。だから私は絶叫して、少しでも此の苦痛を口から逃さなければならぬのです。奴隷には、奴隷としての名前が必要です。奴隷に最も適した名前、屈辱を意図した名前がつけられます。どの様に恥しい名前であるうとも、呼ばれた時はハイと明瞭に答えて主人の前にとんで行かなければなりません。我は賤しき奴隷なれば、終日繋縛の身に加えて、更に厳しい規律が科せられます。室内は這って歩くべし、人なみに立って歩く事は堅く禁ぜられております。我は賤しき奴隷なれば、勝手な行動は慎しむべし。朝起きてから寝る迄の時間は、総べて主人への奉仕の為にのみ費やされます。たとえ一歩たりとも勝手に動く事は許されません。我は賤しき奴隷なれば、不用な言語は慎しむべし。日常使う言葉も厳しい制限が加えられます。ハイ。ご主人様。お願い致します。有りがとうござい

ます。この四つの言葉以外は固く禁ぜられてどんな場合でも絶対に使う事は出来ませんし反した時は嫌応なく口を閉塞されて、怒りが解ける迄何時間もとっては貰えません。

時に依り一日も二日もその儘で置かれる事があります。辛苦な生活の中にも最も苦しいのは用便の時です。身勝手中な行動を禁ぜられて以上、その都度主人に申し出なければなりません。それも主人をおど／＼した眼で見あげながら「お願い致します」とより外の言葉は使われません。主人は自ら、奴隷である私をトイレ迄連れて行って、私が手を使わなくとも良い様に色々世話をやいて呉れます。主人にその様な勿体ない事をして頂くのですから、用を済ませる前後に恐ろしい罰を受けるのは当然の事です。

その罰が恐ろしさに出来るだけ休めて、もうどうにも我慢が出来なくなった時、始めて申し出るのです。「お願い致します。御主人様」手は後手に締めあげられ、両足は間隔を詰めて繋がれた浅ましい恰好でよろめきながら連れて行かれます。此の時だけ特に両足で歩く事を許されます。口には二巻きも厳重に麻縄が食い込み、不明瞭な発音より出ませんし、口を縛った麻縄は両頬から二本に別れ中腰でしか歩けない様に、身体をくの字に曲がる迄締められて両足首に括りつけられています。後手の縄尻は上に吊る様に御主人が片手

で持っていますので、手首の痛さを少しでも軟らげ様とすれば反身に成る様に勉めなければなりません。すると両頬から足首に繋がれた縄がピンと張ります。右足を出して左足が後に成り、懸て宙に浮く時は、右の頬が引っぱられて顔が左を向き、左足を出す時は右を向き、一歩／＼顔を左右に振って引き立てられて行く奴隷の私をよく想像して見て下さい。

少しでも歩くのが鈍ると片手の棒（針か千枚通しの方が良いかも知れません）で尻を笑ついたり叩いたりして主人は情容赦なく私を引き立て、行くのです。（この家でも便所は比較的近くにありますが、此の様に工夫するか、又は各室を廻らせてから行くか、要するに時間を長びかせれば責の効果は向上する事でしよう）愈々トイレに着くと主人は聞きます。どっちだ、前にも書いた通り、言葉を決められている為その問に対して直接の返事は許されません。自分の求める場所へ歩いて行くより外に方法がないのです。前迄進んでお願い致します御主人様。主人は時計を見て命令します。十分。

十分以内に用を済ませば重い罰を覚悟しなければなりません。然し十分間も此の儘の姿勢で待つ事は最早や耐えられぬ私は、即座に良しという命令を、不明瞭な言葉で哀願します。お願い致します御主人様。主人は仲々許しては呉れません。まだ／＼、まだまだぞ。恐

ろしい痼高い声と共に、持っている棒で私の尻を突つくのは、反した時は此の棒で撲られるという恐怖の観念を新らしく呼び起させる為でしょうか。戦のきながらも生理の作用だけは如何んとも出来ません。突つかれたのが却って導火線となり、快音と共に淡黄色の液体が勢い良く迸り出ます。時間の指令よりも早い程重い刑罰を受けなければなりません。命に従い忠実に奉仕するこそ奴隷の本分でしょうに、如何に生理の世界が儘ならぬとは言え何たる不逞でしょう。奴隷の身をも弁えず当然極刑は免がれません。縄尻を引く中也乱暴に、撲たれ、蹴られ、突つかれながら、よろめき／＼庭に引き出されます。懲戒用の柱に胸、両手と縦横に縄がかかけられ、両足の小指は針金で縛り合され、親指には各々別に細引が付けられます。足の裏を顔にびったりつく迄曲げられ、親指についた細引を頭の後へ幾重にも交互に廻してしっかりと縛りつけられます。口と鼻をきたない自分の足の裏で蓋がれるのですから、その苦しさは想像外です（この場合、小指が離れない様にしっかりと縛らなければなりません）。それには細い針金か、又はやや太い位の綿糸が適当です。両足の裏で襲われた口と鼻の間に雑布かその他の布を濡らして入れると呼吸が非常に苦しく、責めの効果は倍加します。又、口を細紐などで二巻位しっかりと巻いて

からその余りでしかに足の裏を縛りつけると鼻汁、唾、涎などが足のよごれを混合してべど／＼になり、それから叩くと悲鳴をあげた後大きく息を吸い込む時、間に溜ったべど／＼の液を吸い込むことになりますので、これも面白い方法だと思えます。そして肉の柔かい内股や丸見えの尻などを力一杯撲たれるのです。その時主人は十とか二十とか叩く数を予め数えて呉れます。主人は、私が良い奴隷になる様に非常に努力して下さるのですから。

叩かれる度にお礼を申しあげなければなりません。有難うございます御主人様。その声が判然と聞えなければ、それを理由に又撲たれる数が増えるのですから、どんなに焼ける様に痛くとも、どんなに屈折の身が苦しくとも、どんなに呼吸が仕難くとも、大声ではつきり申しあげなければならぬのです。有難うございます御主人様。予め定められた数だけは、寸秒の間隔を置いて的確に与えられます。有難うございます御主人様。同じ所を何度も叩かれると苦痛の度もそれに正比例して来ます。息を詰めてこれに耐え様とする努力の為に礼を申しあげる方は疎かになりがちです。結局、ぐず／＼してお礼の言葉が全部済んで終わらない内に次の答がとんできます。有難うござアーツ。語尾のと切れたのも又数を増やすに良い理由になります。

何時しか悲鳴の絶叫に変わり、只ワア／＼という声も湿り気を含んで足の裏から出すだけとなり、汗や涎や黥のよごれなどで顔はめちや／＼になる事でしよう。絶叫する力も尽き果てた頃、時により手数を省く為に浣腸器がかけられる事もあり、排泄が完全に済むとバケツやホースで頭から冷水をかけられて私の排泄行為は終わります。誰もが一番恥かしい排泄行為を、如何に奴隷とはいえ、人に見られながら済ませなければならぬとは思われない事でしよう。然も両手足の自由を奪われて済ませなければならぬとは、なんと恨めしい事でしよう。かてて加えて、自由に放尿する事すら許されず時間を決められ、反した時は重罰などとは恨めしいのみか情ない事でしよう。然し私はマゾヒストの常として、それらに耐える忍耐力は有り余る程全身に貯わえられております。そして限りある身の力試さんと、じつと其の日の来るのを心待ちに待っているのです。そののみか、恨めしいとか情ないとかを考える余裕もない程の激しい虐待を望んでいるのです。幸いにして望みが叶った時の日常の空想などを、纏めてもう少し書いて見ましよう。

与えられた衣服は、たとえどの様に破れても、決して修理などしてはなりません。破れてちぎれた所があっても決してその切れはしを捨ててはなりません。千切れた所へ粗雑に

縫いつけて置かなければなりません。奴隷衣は奴隷である事を象徴する意味で承わった貴重なものです。最後のひと切れ迄、鄭重に身に纏っていないければなりません。衣服がぼろぼろになればなる程、それ事態が奴隷にとつて最も名誉な事なのですから。

与えられた衣服は、たとえどの様に汚れても、決して洗濯などしてはなりません。汗と垢に塗みれてぎら／＼光っていても、決してそれを身に纏う事を厭ってはなりません。泥などの様に干して揉めば落ちてしまう様なものは、もう一度水で濡らして、良く衣服にしみ込ませてから干さなければなりません。一度付いた汚れが落ちてしまわない様に。衣服が汚れば汚れる程、それ自体が奴隷にとつて最もふさわしい事なのですから。

与えられた衣服は、たとえどの様な事をしている時でも、決してきつちりと身に纏ってはなりません。いつ御主人が鞭を振るわれても、素肌でお受け出来る様にあらかじめ準備して置かなければなりません。どの様な処に鞭を振るわれても、激みなく開いて、待ちあけて、脱いで、お受け出来る様に絶えず心がけておかなければなりません。致らぬところはどし／＼鞭に依つて是正して戴き、一日も早く立派な奴隷になる、それ事態が奴隷にとつて最も望ましい事なのですから。

とすると、衣服を纏った中の五体は如何し

たら好いでしょうか。いつかの御誌に載っていた写真の黒人奴隷の様に真黒にして置きましようか。頭髮も伸び放題にしておきましようか。何かで読んだ様に、頭髮は長く伸ばしてコットの替りに足拭きに使いましようか。

頭髮はさて置き、髯は何時も奇麗にしておきたいものです。口の中や身体も同様な事が言えるでしょう。御主人が何時どの様な処を奉仕する様な事を命ぜられても、不快な感じをお与えするのは此の上もない不躰な事なのです。最近、私が最も気になる事は自分の足の指です。靴の弊害なのでしょう。爪が四本ばかり醜い恰好をしたのがあります。

これなどは一層の事、抜いて終って新しいのを生やした方が良くかもしれません。生えて来て完全に伸びて終う迄気を付けていさえすれば、癖のない、奇麗な爪に成ると聞いた事がありますし、そうすれば必らず良くなるものと信じてはおりますが、勇気のない故か醜いままに放つてあります。幼い頃、素足で草原を走り廻って生爪を剥がし、一晚中眠れずに泣き明かした事もあり、知らずに剥がしたのと違い、身動きは愚か声も出せない様にされて、ゆっくりと楽しみなが剥がされるのはどんなに苦痛な事でしょう。想像しただけでも胸の中が熱くなつて来る様な気がします。そんな時には、声をあげて泣く事が出来る様に、口だけ自由に置いて下さい。

泣き叫び、許しを乞う顔が良く見える様に鏡を前に吊して置きましようか。然し、その心配も不要かもしれません。私を良い奴隷として仕上げる為に、御主人はあらゆる事を心置きなく遣つて下さる事でしようから。只、私が心にかかります事は、現代の社会が奴隷制度を認めては居ない事です。若しそんな事が人々に知れ渡つた場合、私は兎も角としても雇傭者は世間から兎角の非難を受ける事でしょう。そんな事にでもなれば、私自身御主人に済まないと思うばかりでなく、奴隷としての地位を保つていく事さえ危ぶまれます。

少し贅沢な要求かも知れませんが、永久の奴隷としての地位を望んでおりますので、お雇い下さる方は其の点に御留意の上、地下室などを寝所や其の他に御使用の場所として与えて下さるか、又は人目につかぬ所を早急に御用意願ひ度いと思います。此所で又一つお願いがあります。現在の私は何の束縛もない自由な生活をしておりますので、奴隷の生活に入つたとしても時には従来の随性で自由な空気を欲する事があるかもしれません。もしその様な事を訴える時がありました場合には他志を抱かぬ為に最も重い刑罰を与えて下さい。一昨年あたりから一冊も缺かさずK誌を拝読しておりますが、其の中に最も穢ない人間の排泄物を好む記事がたくさんあるのに、いささか驚いた位です。考えただけでも厭な

禪マニアの女生徒の手記

池田 ふみ子

読者通信で何回かみな様に呼びかけました通りわたしはどうしても禪を着用せずには居られぬ習癖を持った女です。私はどうしてこんな禪マニアになってしまったのでしょうか。私のこのさゝやかな告白を読んで下さいませ。それは二年前の初夏、わたしが高校の一年の時のことでしたが、ふとした機会に、映画と二本立になったストリップを見たのです。

ストリップの人たちはみんな黒のツンパをはいて居りました。「ツンパ」というのは、皆さまもごぞんじの通り一種の「もっこ禪」です。そのツンパは股下をきつくしめて、お尻の割れ目にふかくふかく喰いこんで居ました。わたしはそれを見た時、胸の高鳴るのを感じ、どうすることも出来ませんでした。そうしてわたしは小学生だった頃の海水浴の時のこと

事です。一、二度目を通してただで、其の後は大抵読んだ事ありません。世にいう最高刑とは好まぬ事を強制される事かも知れません。そうした事を前提として思いついた事を二三書き添えましょう。朝顔や虎子に顔を仰向けて縛りつけ、用を足す度に尿が顔や口にかかる様にして置くのも良いでしょう。雨の日であれば顔だけ出して土中に埋め、鼻先に悪臭のぶん／＼たる排泄物を置いておけば、しぶきで顔がくちや／＼になる事でし

よう。又は、よごれた虎子を頭に冠せて置くのも一方法でしょうし、使用済みの襦袢カバ―などで顔を包み、気絶する迄鞭を振るのも効果がありません。視力を損ねぬ様に厚い板などを両目にあてて、唇、頬など顔面の悉くが紫色に腫れ、所々血を吹く迄鞭を振るのは最も効果があります。ふた目と見られぬ程無惨に腫れあがった自からの顔を鏡に写し見た時、マゾの世界を執拗に憧がれていた私が完全に敗北に帰した事を始めて悟るでし

よう。そして呟く事でしよう。『我は吾がシステムに依って敗れしなり、他人の慢すところにあらず、』と、自からに弁護する如く、要は、単なる遊戯と異り、身心共に完全な奴隷になる迄、激しい訓練を施して下さい。そして、主人は恐ろしいもの、という観念を徹底的に骨身に沁みる様に植えつけて下さい。(此の項終)

を思いうかべたのです。男子の生徒たちはみんな黒の水泳禪をはき陽にやけたお尻を出して泳ぎましたが、私たちは女であるがゆえにパンツのついた海水着をむりやりに着用させられた時のことを。

「女でも禪を着用することが出来る。現にあるストリップの人たちは着用している」このひとことが私をどれほど元気づけもし、有頂天にもしたことでしよう。わたしは家に帰ってひとりこっそりと黒の半巾の布で一つの「もっこ禪」を作りました。そうして胸をときめかせながらそれを身につけたのです。何ともいえない気持でした。あのストリップの人たちのように、前をきれいに三角形にととのえ、後もしきれいに三角になるように布をお尻の割れ目にくいこませました。

禪とはこんなに気持ちのよいものだったのだわ、私はおどろきました。禪の股部にたいする圧迫感の何ともいえない快さ……。股部を強くしめあげればしめあげるほど、お尻の割れ目に充分にくいこませればくいこませるだけ快いものであることを、私ははっきりと知りました。それからというものの、私はいろんな禪をつくりました。六尺禪、越中禪、水泳禪、いろんな大きさのもっこ禪、等々。それから近頃では男子用として発売された禪型ブリーフも着用して見ました。わたしの経験から申しますと、越中禪は実につまりません。すぐたるんでしまって、前のたれが恰好が悪くて。六尺禪、これも横浜のB子さんがいつか読者通信に書いて居られたように、女子用としては曲尺三寸位のぐつと巾のせまいのが良いようですが、圧迫感という点からは満点ですけれど、スタイルの点、はずすのに時間がかかる点などに難点があります。近頃売りに出された禪型ブリーフは一寸シヤレたもので好ましいと思いますが、型が大きすぎてお話になりません。ウーリーナイロン製の小型のフリーサイズのものに近いうちに売り出されるとかきいていますが、そうなら禪マニアには一大福音でしょう。

以上のように、それぞれに難点がありますので、わたしはもっぱら最も型が小さく、もつとも露出面積の大きい水泳禪を用いている

のです。私の水泳禪は本当に最小限をおおうだけのものです。だから洗濯などもほとんど干す必要もなく机の下にそっとしまっておくだけですぐに乾きます。まだ黒の小型のもっこ禪をいくつか用意していて、これは専ら生理時に用い、まだ母や其他家人の前などで脱衣する時に用います。もっこ禪は、わたしは家でも公認なのです。生理バンドの代りにはこれが一番良いという理由で母をむりやりに納得させたのです。

元来、女子が禪を着用してはならないという理由はないはずですが。あとで知ったことですが、海女は一種のもっこ禪をげんに着用しています。(対馬方面ではこれを「なわふんどし」とかいいうらしい)まだ前に述べたストリップにしても、りっぱに禪を着用しているのです。まだ、よく外国の水着写真などで見る、いわゆる「ビキニ水着」なるもののパツなども一種の禪と考えられると思います。

このように、女子が禪を着用してはならないということとは全くないのです。多くの女の方は禪を着用されたことがないので、その快感がお分りにならないのです。一度、もっこ禪でも着用されたらわかると思います。禪一つ縫う位、時間は大して要しないでしょう。是非一つためしてごらん下さい。股からお尻にかけての割れ目にくいこんだ布の感触はと

ても筆舌につくすことは出来ません。わたしは、男の方よりむしろ女性の方が禪を着用した時の股部の圧迫による快感は大きいのではないかと存じます。

ダンス部の脱衣場などでわたしはお友達の下着をよく注意して見ることもあるのですがお尻が半分位出るような短い、ほとんど禪に近いようなブリーフをはいている人は非常に多いのです。これは不思議に思われるかも知れませんが事実です。ダンスや体操をやるものは下に短いキヤルマタ式パツをはきますので下ばきはどうしてもこうなります。しかしながら禪を着用している人はまた私以外に見あたりません。そこで私はこの「奇ク」を通じて一人でも多くの女性の皆さまに禪を着用されるよう呼びかけたいのです。女性の皆様、禪を着用しましょう。まず「もっこ禪」を。そうして股部の圧迫になれるに従って水泳禪に。せめて禪型のブリーフが婦人用として売り出されるまで、わたしたちの叫びをもうり上げましょう。

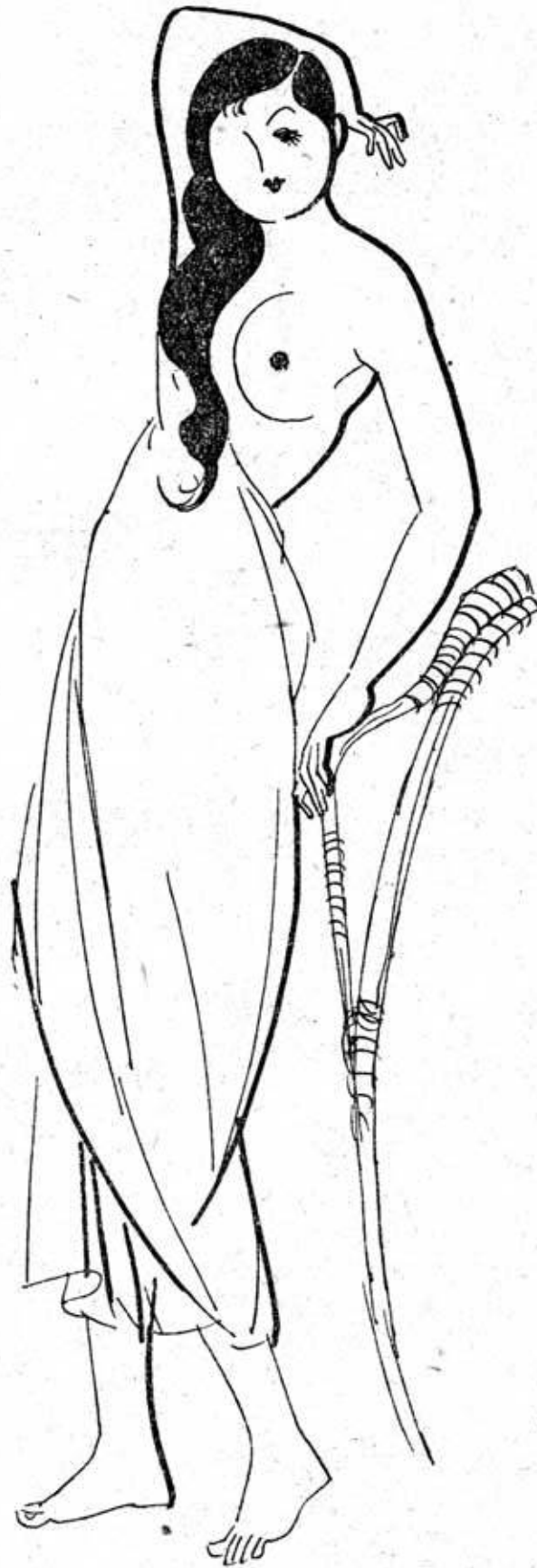
(付記)

読者の皆様、わたしがこゝにあげた以外の変った禪を御存じの方は御教示下さい。まだ女子が禪を着用している例を外に御存じの方は誌上に発表して下さい。

(おわり)

奈子の恋愛について

門 田 奈 子



この告白を

幾山河こえて

Mお姉様、そしてK先生へ――

奈 子

一 奈子の思春期

奈子が、自己愛と云う小さなくらいホール
の扉をひらいて、この奇妙な裸身を、皆様方
の前にさらし、ものごころついてからという

もの、かたく／＼秘めつづけてま
いりました、密室の内部を、すこ
しづ／＼お見せする様になりました
から、もう何カ月かの月日が、ま
るで夢のようにすぎ去ってしま
いました。そして、五月雨のそぼ降
る深夜、今日もまた奈子は、一日
のお仕事を終り、自分だけのお部
屋で、窓に真紅のカーテンをひき
鍵をおろして、机に向っているの
です。

あゝ、われとわが身に恋をする女のこころ
の中のせつない思いを、たとえその十分の一
でもいゝ、皆様方にお察しいたくことが出
来ますでしょうか。まだ、一度も人の眼にふ
れたこともない、奈子の肉体の深奥からたち

のぼる、あの南国的な芳香に酔い痴れながらみだらともいうべき空想の雰囲気に変色した素肌に、ある時は全身がわな／＼とふるえ出すほどの激しいイメージを描き、ある時は一本の絹糸のように細く張りきった神経を、ほとんどその限界まで責め虐まずにはいられない自己愛の発作的な情欲——。奈子はあれ以来、まるでものにとりつかれてもしたかのように、自分自身の秘密をあばきたて／＼まいりました。

奈子は、もう自分だけの胸に、この限りなく若々しい肉体を秘めておかねばならない焦らだ／＼しさに耐えきれなくなってしまうたのです。うすも／＼いろの瑪瑙のような裸身を堂々と白昼のシヨウ・ウインドウに陳列して、道ゆく人々の讃嘆と羨望のまなざしをこゝろゆくまで全身に浴び、ぞく／＼と心の底から湧きあがってくる優越感、あの得体の知れない不思議な蕩酔を思う存分味ってみたい欲望にと／＼敗けてしまったのです。

奈子は、装いをこらして皆様方に媚笑を投げかけ、その乳房を、腹部を、禁断の樹の蔭から得意気に見せびらかしている。

いかゞ？ この胸のかたち、肌の色、腰から両肢に流れる曲線のコントラスト、そして身体のすみ／＼からたちのぼるはちきれる若さ。誰にもあげないのよ、ほしがっても駄目みんな奈子だけのものなのよ。

こうして奈子は、数限りない人々の露骨であからさまな野望に満ちた視線を、体内でひそかに自己愛という麻薬に合成して、みずからの情欲をみたま糧にしようとかくらんでいる淫蕩な娘なのです。

孤独で排他的で、一切の他人からの干渉を拒み通そうとする密室の中の奈子と、薄絹をもかなぐりすて／＼妖しい七彩のライトを浴びて、貪欲の香のたちこめるフロアで踊り狂ってみたいという奈子。奈子の過去は、そのほとんどが矛盾と倒錯の羅列であつたように思われます。奈子のさまざま／＼な記憶の中でも、最も鮮烈な映像を残しているあの事件——それは、奈子の自己愛に決定的な影響を与える結果になったのでしたが——にしても、やはりその例外ではありませんでした。

奈子は、少女時代の大半を、あのいまわしい戦争の真只中に過してまいりました。そして、ようやく精神的に解放され、我にかえって自分の周囲を見まわしたときには、もうすでに奈子の身体は、わずかながら柔らかな丸味をおびていたのです。だから、奈子はうまれ落ちると突然、思春期という、女にとって最も神秘的な好奇と恐怖にみちた花園の中に放りだされたようなものでした。眼にうつるあらゆるものが新らしく、不思議な圧力をもつて奈子に向って迫ってきたという気持でした。

そんなある日、奈子は学校で、午前中の体育の時間に、二、三日前から気にしていた下腹のチク／＼と刺すような痛みが、突然今までに経験したこともない重苦しい感じに変わったのに驚いてかけこんだトイレの中で、思わず立ちすくんでしまいました。半年程前に、一応の智識は先生から与えられていたとはいえ、やはり瞬間的に鍵がかゝっているかどうかを確かめ、せまいトイレの中をあわただしく見まわして、自分ひとりであることを確認せずにはいられないような気持でした。ぼんやりと宙をみつめながら、奈子は、今朝、下ばきを新しいものにとりかえて来ていたことを、何となくほっとしたような気持で思い出していました。それは、奈子が女学校二年生の秋深いある晴れた日のことだったとおぼえております。奈子の第二の人生が、ようやく具体的なかたちとなつてあらわれはじめたのもこのころからのことなのです。それは最初、ごく一般的なその年頃の私達にとつては、ありふれたといつて差支えのない同性愛と云う形で、奈子のこゝろの中にめばえてまいりました。

やがて、奈子は三年生になりましたが、その当時は丁度新学期へのきりかえどきで、学校には、中学と新制の高校とが同居しているような状態でしたから、奈子は上級生からそうした誘惑にこと欠くようなことはありません。

んでした。何回か、奈子をめぐってお姉様たちの、心理的なくらい争いがくりかえされましたが、奈子は、そのみだらがましい同性の相剋を、第三者としての立場からなんとなく快いといった気持でみつめていたのです。そして、自然、自分自身のもっている美しさとか魅力とか云うものが、奈子以外の他人に対しても強い反応を与えるものであるということとを奈子は、はつきりと自覚せずにはいられませんでした。私はそんなに魅力があるのかしら？という面映ゆさが、次第に自信に変わり、次にはそれを一層磨きたてて、相手を挑発してやろうと云う努力に変わっていったのです。そのころは、まだ今ほど具体的で、確立されたものではなかつたにしても、奈子にはたしかに先天的な『自己愛』と云う普通の人だつたら、淡い思春期の一エピソードとして終ってしまうような血潮が、この体内に強く流れていたのにちがいません。

その間に、いろいろな曲折はあったのですけれど、奈子がこうした数多い誘惑者たちの中からえらんだのは、Mという二つ年上のお姉様でした。小麦色の肌を持った中性的で粗野な、いわば奈子とはおよそ正反対のその方の感じが、とても奈子の氣にいったからです。そして、二人が言葉を交すようになってから丁度四日目の日曜日、奈子は、Mお姉様のお宅に招ばれました。

同性愛と云うものが、どれほどアン・ブラトニツクな遊戯であるものか、奈子はその細部にわたつての智識はまだもっておりませんでしたけれど、その日のお姉様の態度には奈子の予想だにしなかつた、たしかに息のつまるような迫力が感じられたのです。真夏の陽光がギラ／＼と照りかえるお二階の、小さな勉強部屋で、奈子はMお姉様と向いあつて坐っていました。まだ幼い奈子の胸に、逞ましくさえ映つて来た健康的な小麦色の腕、お姉様のいつになく荒い息使いを右の頬に感じ、ツンとつきさす様な髪の毛の香りを身近に嗅ぎながら、しばらくの間、といつてもほんの数秒間、奈子はそうやっているのが幸福なように思っていました。

しかし、突然、奈子は唇をふさがれ、いきなり半袖のセーラーの胸元がひらかれ、スカートのホックが、プツ／＼とはずされる音を聞いたとき、奈子はハツとして我にかえり自分だけの世界にひき戻されてしまったのです。

何をされようとしているのか、本能的に悟ることが出来ました。奈子は、夢中になって身をもがき、お姉様の指先から逃れようと努力したのです。けれど、ほとんど暴力に近い程の強い力で抱きしめられ、その時奈子に出来ることゝいったら、全身をくねらせて嫌やだという意志を伝えようとするのが、本当に

精一杯の抵抗でしかありませんでした。狂った様に燃えているMお姉様の眼、どの位の時間、争つたのかわかりませんが、奈子はとう／＼驚く程大きな声で悲鳴をあげてしまっていました。そして、さすがにその悲鳴にハッとして力をぬいたお姉様を突きつける様に、奈子はそのまゝ階段をかけおりてしまったのです。

その夜、奈子は眠られませんでした。理性のある人間とは思れぬあの時のお姉様の顔、そしてあの体臭、奈子には、それらがすべてとっても不自然で、その上非人間的な不潔さを持った衝動としてしか感じられなかったのです。奈子が半年ほど前から、ようやく意識する様になったそういった気持が、お姉様にとつて興味深い、というよりもむしろ、愛するために必要なものであつたということは、本当に驚くべき発見でした。何故？ 何故かしら――、奈子は、真暗なお部屋の、眠られぬ夜具の下で、もう一度あのときのことを反芻してみたいではいられませんでした。

そして奈子は、背椎骨の中心を下から上に激しい勢いでつきぬけていった熱い塊りが、まだ全身にかすかな震動を伝えているのを感じながら、うまれてはじめて知った生物の不可思議さに戦慄に似たものを覚え、たゞ忙然としてしまったのです。

いつまでも、奈子はまっくらな天井を見つ

めておりました。そしてはからずも思い当ることがあったのです。あゝ、これなのだ。お姉様が、奈子からさぐりあてようとした気持ち、これがあの時の、Mお姉様の『目的』だったのだ——と、

奈子は、このことに思いあたったとき、自分の胸の中にあつた乙女じみたプラトニックな甘い感傷が、音をたてゝ崩れ去つてゆくのを感しました。そして奈子は、奈子の身体の中に深く深く眠っていた未知の感覚が、第三者によつて呼び覚められようとしたことに、たまらない程の屈辱を感じたのです。

愛情とは、動物的なゼスチュアや絶叫とひきかえに与えられるべきものなのでしょう。愛されるためには、自分の肉体の内部にわきあがってくる感情の変化、それにもなつて起る無意識的な反能までを、その人の眼の前で思う存分鑑賞されなければならぬのでしようか。奈子は嫌です。奈子の感覚は、絶対に奈子だけにしかわかりはしない。それを他人に支配され、思うがままにあやつられるなどという奈子自身に対する冒瀆には、とても耐えられません。その方のこゝろの中にあるものは、仮面をかぶった好奇心と征服欲、そして、奈子を独占したことによる優越感、たゞそれだけではありませんか、それを肉欲と呼ぼうと愛情と呼ぼうと、奈子はそんなものゝ犠牲にされることは絶対に嫌です。奈子は

愛情と云う言葉の持っている魔力、抽象的でそのくせすべてのものに優先しようとする厚かましい内容に、激しい恐怖と反撥を感じないではいられませんでした。

自分が美しければ美しいほど、そして求められれば求められるほど、奈子は自分自身を大切にしなければならぬのです。そして尚一層、この美しさを誇示しないではいられない。何という皮肉な宿命なのでしょう。この奇妙な堂々めぐりは、今日にいたるまで、奈子の体内でくりかえされているのです。

Mお姉様だけに限らず、奈子の何げない巧まざる媚態は、そのころから四方八方にふりまかれるようになりました。奈子は、すべての人々の関心の対象として、それらの数多くの視線の中心にいたかつたのです。それは、とりも直さず奈子自身の美しくしさを、自分でもたしかめることの出来る唯一の方法でもあったのですから、——

その後、Mお姉様との間には、当然のことゝはいえ、何回となく不気味な争いが続きました。ある時は嫉妬から、ある時は胸苦しいような焦らだゝしさから、そうした争いの責任は、すべて奈子の八方美人的な行為にあつたのです。自己愛という孤独な殻の中に、かたくかたく閉じこもりながら、一方では自分の魅力とか媚態とかいったものを他人に見せびらかさずにはいられなかつた二重人格的な

行動のかずかず。Mお姉様にとっては、それは何よりも残酷な仕打ちであつたことでしよう。

やがて、お姉様の高校卒業も間近に控えたある日、奈子は突然、警察からの呼び出しをうけました。学校では極秘にして下さいましたけれど、Mお姉様が自殺をはかれたのです。教頭先生につれられて警察に出頭し、そこで遺書が奈子にあてられたもの一通だけしか発見されなかつたということを聞かされたとき、奈子は自分が恋の勝利者であることをはっきりと自覚いたしました。

幸い、それは未遂に終つたのですけれど、Mお姉様は、それっきり卒業式にも出席なさらずに奈子の前からも姿を消してしまわれたのです。恋の勝利、それはとりもなおさず、ほんのわずかな妥協さえ許さない絶対的なエゴイズムにはかなりません。お姉様の自殺未遂事件には、奈子はさすがに動揺せずにはいられませんでしたが、ともかくも奈子はギリ／＼の一瞬までMお姉様に対して精神的に君臨することが出来たのです。でも、お姉様にもうあと一回だけでも、奈子を所有しようとする強い意志が、それを要求なさるだけの勇気があつたとしたら、奈子はおそらくお姉様の『愛情』にまけて、恋の奉仕者となることに甘んじ、みじめな恋の奴隷に転落していたかもしれません。その方が奈子にとって

どの位幸福であつたかどうか、それは私自身にもわかりません。
そんな事件があつて後の奈子は、以前にも

まして娼婦性をおび、自分自身の魅力に耽溺するようになりました。奈子の二重人格、言いかえれば二人の奈子は、そのころから奈子



の体内に、公然と同棲するようになったのです。すでに、奈子の生活は、その感受性も具體的な行為も、同じ年ごろの乙女たちが感ずる正常な範囲から、相当逸脱しておつたのではないかと、奈子は自分ながら思わずにはいられません。

奈子が折にふれてお話をいたしました『女学校三年生の夏——』の想い出というものは（復刊六月号他）、正確に申しますと、その後約一年半にわたるこうした一連の出来ごとを指しているのでございます。それも今では、はるかに遠い追体験の彼方へとびさってしまったことですから——。

二 奈子の青春時代

そのころ、奈子はまだ奇譚クラブなどという雑誌がこの世の中にあるということには、すこしも気がつきませんでした。だから、奈子は奈子なりに、自分だけの思春期のひととき、ピンクのベールに包まれた秘密の世界を築きあげていったのです。奈子はたしかに自分のこのろの中に、サジズムやマゾヒズムをはじめ、浣腸とかフェチズム（下着崇拜）とか、いろいろ／＼なアブノーマルと呼ばれるものゝ要素を持つてはおりますが、それは、奈子が奇クを知ってから後、勝手にあてはめてそう呼んでいるだけのことで、勿論、その当時の奈子に、何の智識も経験もあつたわけで

はありません。奈子はたゞ自分の欲望（それが異常なものであるのではないかということにはうす／＼気がついておりました）をみたすために、手あたり次第、本能的にそれを実行していったにすぎないのです。奇クにはすでにこうした傾向に対する定義と申ししますか、代表的な型がある程度出来上っている様ですけれど、これにくらべると、奈子の場合と同じサジズムといっても、かなり内容の異った言わば、そういった定型からははずれたものではないかと思っています。

例えば、森山美歌様のように、積極的に男性を屈服させることを切望なさる正統派（失礼お許し下さいませ）方々から見れば、奈子のサジズム——といえるかどうか知りませんが、何と他愛のない、ひとりよがりの感傷にすぎないのではないかと仰言られるかもしれません。御批判がどうあるとも、奈子にはそれに対して反駁することが出来るほどの知識や経験の持ち合せがありません。

でも、奈子は森山美歌様の様に、男性を対象として欲望を感じになる方々がうらやましい。貴重な奇クの誌面を奈子のためにこれだけ割いていたといても、奈子は誰を求め、誰に呼びかけることも出来ません。たった一人で、この奇妙な告白を書きつゞけ、かたくな鍵をおろした小さなお部屋で悶え苦しまな

ればならないのです。しかも、奈子は苦しいと文字には書いても実際には自分自身を愛することには限りないよろこびをさえ感じます。

反省、それこそ甘い／＼一片の感傷の花びらにすぎません。奈子は、もう一人の奈子をつまでも愛して愛して、愛しつゞけてゆく、誰に笑われてもかまいません。たとえそのゆくすがどれほど悲惨なものであったとしても、奈子は決して後悔しないつもりです。

あゝ、これ以上の孤独な生活がほかにあるでしょうか。奈子はこの気持のために、今日まで幸福と呼ばれるものゝすべてに背を向けて生活してまいりました。恋愛、結婚、乙女の青春に、はなやかないどりをそえる想いの出のかず／＼は、奈子にとっては何の意味もない別世界の出来ごとだったのです。理想の妻とか、女の魅力などゝいっても、それは結局閨房の中の女性が、男性に対してもっている鑑賞価値の多少によって決定されるにすぎないのではないのでしょうか。

奈子がかつて何人かの男性に対して、その方々が奈子自身に対して持っている強い関心をはっきりと意識しながら、その眼の前に触れば落ちんの媚態をふりまき、丁度飢えた山犬の前に血のしたゝる肉片を振ってみせる意地悪い飼主の様に、彼が耐えきれずにとびついてこようとする瞬間、高々とそれを手の届かぬ所にさし上げては、その失望と憤怒と、

哀願とに満ちた表情を眺めて嘲笑を浴びせかけた経験を持っております。そんな時、奈子の心の中には、表面の何気ない微笑とはうって変って、奈子自身の身体を今度こそはとう一人の奈子に奪いとられてしまうのではないかという激しい恐怖とスリルを味あう反面、奈子の肉体に慕いよってくる男達へ、吐きすてたい程の不潔感を感じるのです。そうしてこういった矛盾する二つの気持、即ち自分だけがこうして独占しているもう一人の奈子に対する狂熱的な愛着とが交錯して渦をまいていくのです。

そしてその結果、大部分の求愛者たちは、奈子の冷たく固いまるで蠟人形の様な、無言の反撃にあつてみじめに引き退ってゆきました。ある方は、すてられた野良犬のように頭を垂れ、失意に涙を流しながら、又ある方は肩をいからせ、去ってゆく足音をわざとらしくたかたかとひゞかせながら――。

でも、奈子にはたゞ一度だけ、それは奇妙なプロポーズをうけた経験があるのです。

はじめにお話致しました通り、そのころの奈子はマゾとかサジとかいった言葉さえ知らぬ小娘だったのですけれど、その後一年位たつてから、はじめて奇クを手にしたとき、すぐにこの方との間におこったいろ／＼の出来事に思いあたりました。奈子は今でも、その方は本当にマゾヒストではなかったかしらと

思っております。

それは、奈子が女学校を卒業して、洋裁師の勉強をはじめてから、まもないころのことでした。その方（K様とお呼び致します。もしかしたら、奈子のこの告白をお読みになつていらつしやるかもしれません）は、偶然、何の予告もなく奈子の領域にうかび上つて来たのです。奈子にとっては、別の意味で尊敬すべき地位をもつていらつしやいました。そして二カ月あまりというものは、とりたてゝお話する程のこともなく、至極平凡な御交際がつゞいのです。その間にも、何かと思ひあたることもあつたのでしようけれど、奈子はその時はただ、やさしくてどちらとも言へばとても上品な小父さまとしての印象だけしか持つていなかった様です。

この、奈子にとってよりきりーダーであつた筈のK様が、突然、奈子の前にひざまずいて愛の告白をなさつたのは、丁度奈子がK様のお宅に、展示会用のウェディング・ドレスのことでお伺ひした時のことでした。その日は、奥様もお留守で、お部屋には奈子と二人きりでしたので、奈子は、身に迫る恐ろしくて腹立たしさに、じつと立ちすくんだまゝK様の顔をにらみつけていたのです。

その場の情景を、なが／＼とお話する必要はありません。K様も他の男性と同じように、あのきざで齒のうく様なありきたりの愛

の言葉を羅列なさつただけでした。そして次には予定どおり、奈子に対して腕をさしのべてきたのです。K様が、強い力をもつた無軌道的な若者であつたとしたら、奈子は恐らくこの時に征服されてしまつていたかも知れません。それほど、K様の前に立つた時の奈子の立場は不利だったのです。K様の顔が、奈子の間近に迫つて来た時、奈子にはもう身をもつてお部屋の外に逃れ出る以外に助かる方法はありませんでした。

奈子は夢中でK様の頬をうち、足をばたばたさせてもがきながら、やつとのことでドアの所までたどりついたのです。そして、なおも首筋にまきついてこようとする腕をふりほどいて、力一杯K様の顔に爪をたてゝしまひました。あゝ、その時のみにくゝ歪んだ男の顔のクローズアップ！

それから後は、格闘というよりも、一方的な奈子の独り舞台でした。

「犬、犬、けがらわしい——」

奈子が思わず口にした罵声に、K様ははつと我にかへつたように力を抜き、意気地なく奈子の足元に首うなだれて両手をついてしまつたのです。奈子はその時たしかに「犬」と叫んだ様な気がします。それがK様にどんなシヨックを与えることになったのか、今となつては勝手におしはかることは出来ませんが、

「悪かった、いくらでもぶつて下さい」

と仰言つて、両手で奈子の足をしっかりとつかゝえ、その間からさしのべた顔のひたいや眼のあたりを何かわけのわからないことを口走りながら、夢中になつて打ちつゞけながら奈子は涙が流れて来て困りました。奈子もとのぼせていたのだと思います。K様の顎は、丁度奈子の脛のあたりに押しつけられ（そのころ、すでに奈子は下ばきに香水を用いていました）ておりましたが、その閉じた眼の底には、やはり涙のかげがあつたのではないでしようか、奈子は今でもそんな氣持がしてならないのです。

そんなことがあつてから、しばらくの間、奈子はK様を何かにつけて警戒せずにはいられません。でも、ふだんのK様の紳士的な洗練された物腰を見てみると、これがあの時の無頼漢なのだとどうしても思へなくなり、奈子はいつの間にか、又以前と同じように何のわだかまりもなく、K様とお話出来るようになっていました。そしてしばらくの後、奈子は再び同じような出来ごとに出合つたのです。しかし、その時のK様は、むしろ奈子の暴力だけを求めていらつしやる様に思われました。奈子は、乙女の敏感さでそのことを直感的に覚えることが出来たのです。

精神的な愛情といったものが、あつたかどうか、というようなことは別として、奈子の

美“そのものに魅せられ、その足下にひれ伏して信仰者としての苦行をも厭わない。それどころか進んで美の奴隷となることを望むK様のこゝろを知った時、奈子の全身は名状出来ない程の歓喜にふるえました。すでにK様に対する恐怖心や不潔感の影をひそめ、その代りに絶対的な権力を持つ女王として君臨する誇りが奈子の心の中に目生えて参りました。

『足の指を舐めさせてほしい。』というK様を床の上に腹這いにさせ、足をつき出して拇指を口の中で小さきみに動かし、そのくすぐったい様な生あたまかい感触にふくみ笑いをうかべながら、男性を屈服させたという優越感を味い、不規則な動き方をするK様の上半身を見つめていた奈子、そのこゝろを、サジズムと呼んではいけないのでしょうか。でも奈子は、K様をうったり縛ったりしたいというような気持は少しもいたしませんでした。またそうする必要もなかったのです。奈子はたゞK様が平身低頭して、奈子の美しさの前にひれ伏している姿を眺めているだけで十分たのしかったのですから。

こうして、社会的には奈子の指導者であった筈のK様は、個人的には丁度宮庭の貴婦人にかしづく黒人奴隷のように、あわれな被征服者としての存在に転落してしまったのでした。自然、奈子は、人前でもK様に対して対等以上の言葉使いをする様になり、それが奈

子の周囲にあまり感じのよくない印象を与えてしまう結果となった。のも無理からぬことだったのではないかと思います。いつの間にか、二人の関係についてあれこれとデマやゴシップが伝えられ、K様は奈子のパトロンなのだということが、噂以上の半ば公然と確信をもってまことしやかに云いふられるようになってしまいました。

事実、K様は奈子のパトロンなのだと言われても仕方がなかったのです。奈子が経験もまだ浅いうちから、有名なデザイナーの先生方と御交際いたゞくことが出来るようになったのも、すべてK様が奈子のためにその機会や環境を与えて下さったためなのです。そのために、奈子は同僚たちからことあるごとく嫉妬と羨望の入り混った激しい非難を浴びせられ、ずいぶんひどい迫害を受けるようなことになってしまいました。その時の経験については、又詳しくお話致したいと思っておりますが、結局、こうしたかすかすの噂は奈子の自己愛をカモフラージュするためには、かえって何よりのかくれみのようになってくれたのは不思議な因縁です。でも、実際には、K様は決して最初のときのように、対等の女性としての奈子を求めようとはなさいませんでした。奈子はK様の前に出たときだけは、そんな警戒心を全くゆるめることが出来たのです。その時の、K様のお気持がどの様なもの

であつたのか、そしてどんなかたちの満足を味っていらつしやつたのか、奈子は今でも理解することが出来ないまゝであります。或は、奈子の鞭や縄を期待なさっていたのかも知れません。でも奈子がこの世界に対して無智であつたためか、そんな経験もとうとう一度もなしに終ってしまいました。

と申しますのは、やがて病いがちだった母が亡くなり、奈子は止むを得ず、郷里に帰らねばならなくなつてしまつたからです。そして、奈子のこの小さな部屋での一人ぼっちの生活がはじまりました。

想えば幼かりし自己愛への胎動、奈子の今までの生活の中で、恋愛とまで呼ぶことは出来ないにしても、少くとも第三者に対して直接にある関心を抱いたという経験は、文通による交際（復刊六月号、奈子の同性愛）を除けば、こゝにお話致しました以外には、何も無い出することは出来ないのです。

やがて、奈子は奇譚クラブを知りました。そして奈子の自己愛も、当然奇クの強い影響をうけて、ますます複雑で淫蕩な異常性愛の世界への成長してゆくことになったのです。

(終)

×

×

×

×

×

×

沼正三の手帖

沼正三

第九十三 「燈台鬼」

唐の大暦十四年上巳、代宗皇帝が招宴において、日本の遣唐使小野石根は、序列が新羅より下位にあることで異議を唱え、新羅側を怒らせた。間もなく市中で怪漢に襲われ、石根は行方不明になってしまった。帰りの船が難船したのを幸に、帰途病死したもののよう

に報告されるが、さすがに遺族には事の真相が私的に明される。三十年後、石根の子の道磨は、遣唐使の随員として憧れの国に渡る。ひそかな目的は行方不明の父の搜索である。然し、長安では手掛りは全く掴めない。失望して揚州に行くが、ここでの搜索も成果が上らない。引揚の前に、節度使陳太弁の宴に招かれた。

余興に芸人が出される。身体容貌の酷似した三ツ児の娘達の歌、三人とも盲目なので聞くと、三ツ児を買って来てわざわざ目を潰したのだという。幅が二尺、高が三尺、足は五寸足らず、手は胴と同じ長さの、四角な身体で、その上に首が四角い壺の上部のつまみのように附いている滑稽怪奇な畸形児が登場する。聞けば、箱櫃シヤンクヱイル児として幼児から四角な箱に入れて、そんな形に育てられたのだとか。

座を照す三基の燭台と見えたのは、実は燈台鬼だと分る。両手兩足の頸を背に立てた三尺余の鉄杖に鎖で縛られたまま直立不動の姿勢を取った三人の奴隷、下帯一つ、全身を彩り、顔は悪鬼に似せてかたどつてある。その頭に鉄のたががはめられ、十本の蠟燭が立ててあるが、とけた蠟が額から頬に流れて固まる……生きたまま燭台と化した人間……しかもその一人は道磨の姿を見ると、唇を噛み破って滴らせた血で足の指をわずかに用いて「石根」の二字を記した。道磨は卒倒した。

陳太弁から譲り受けて来た変り果てた父石根を持衰（祈禱者の一種）としてひそかに船に收容した道磨は、父から身の上を聞こうとするが、石根は薬を飲まされて啞になつてゐる、書かせようとしても手の指を十本とも切断されていて筆が握れない。……しかしその中に何とか筆を動かすような持ち方を練習し、身の上話を記す。新羅の者に襲撃されて負傷し、意識不明のまま人さらいに救われ、啞にされ、指を切られて、燈奴に売られ、十余年、遂には、燭台鬼とされて、昼は繋がれて眠り、夜は燭台と化して立ち、少しでも身動きすれば、背中を鞭で裂かれるような生活を十余年の間送ってきた。

たのであった。……一夜石根は投身してしまった。後に残された詩は 経年流涙蓬蒿宿 逐日馳思蘭菊親 形破他州成燈鬼 争帰旧里 寄斯身 とあった。

これはオール読物三一年五月号所載の南条範夫「燈台鬼」の梗概である。奇ク旧号の村田誠一氏「大衆文芸に現れた責」の文中、田中貢太郎「旋風時代」の中で、ある大名華族が下司の者の頭に燭台を置かせて燈台鬼を作る条りが紹介されていたのを御記憶の方もあらう。燈台鬼というのは、もともとは、燭台を鬼に捧げさせた彫刻をいうので、奈良興福寺の有名な天燈鬼、竜燈鬼の像が好例である。しかし唐代の貴族文化の人間蔑視は、奴隸にこの鬼の代りをさせ、人間燭台を使用して怪しまなかったというわけである。

マゾヒズムの度合は（天泥氏も復刊七月号で指摘されたとおり）奴隸たるより家畜たる方が深く、家畜たるより器物たる方が深い。少くとも観念に支えられねばならぬ部分が増加する。けだし、主体性の皆無な無生物に己れを擬することは決して容易なことではないから。この際、最も助けになるのは、人間も器物代用とした過去の事例であって、これによって、私達の想像は活発な燃料を与えられることになる。右の燈台鬼の故事などはその尤なるものといえる。勿論石根個人の故事としてではない、こういう話の背景にある人間燭台使用のノーマルな日常性が大切なのである。谷崎潤一郎の名作「少年」において、美少女光子は馬丁の子仙吉と「私」とを縛って仰むかせ、その額に蠟燭を立てる。少年達は熔けた蠟に顔を埋められながら光子のピアノを聴く。又邦枝完二の紹介した江戸末期のサディスティン小説「忍草」（奇ク初期大型誌時代にも緑氏によって紹介された由）。この女主人公も、求愛者の一人である美少年を縛り、両手を合せてその手に燈明皿を持たせて縛ったまゝ捧げさせる。手がふるえて覆せば顔が大火傷という趣向。——これらはいずれも

マゾヒスト好みの場面であるに相違ないが、残酷さの点で、右の話と感銘の度が異なるのは何故だろうか。これらの人間燭台が、復讐であり折檻であり、結局人間に加えられた一時の気紛れの状態に過ぎないのに対し、石根の人間燭台は、ノーマルな家具として日常生活に取り入れられている点に重要な相違があるのである。そして、かかる異常アブノーマルの日常化こそマゾヒストの夢なのだ。空想の未来も、奴隸制の古代も、要するに、現代の日本ではアブノーマルでしかない空想の自己が、ノーマルな制度の中の存在として受け取られるような時代を求めて、漸く到達した彼のパラダイスだといえよう。箱櫃児については虞初新誌に記事がある。第五十四項で書いたように、畸形児製造については、別に一項を予定しているので、ここでは詳説しない。

第九十四 「幻 炎」

これは昨年八月号で終刊したあまとり誌の七月号で完結した連載物で、速報一及び六五で扱った「暗い欲望」の続篇である。類似誌のように世間では見ても、内容的には奇クとは大分違って正常性愛が主なので、奇ク読者必ずしも同誌を見ていないだろうし、既に廃刊したことであるもので、手帖でその作品の一つを取り上げることも許して貰えると思う。

「幻炎」は「暗い欲望」ほど面白くなかったが、最終回だけは良かった。ここにはそれを紹介しておきたい。主人公は考える。もしここに無力な、何の警戒も要らぬ男、非力で臆病で薄馬鹿でしかも女性への奉仕をのみ望んでいる男があるとしたら、どんなに謙譲で優しい女だって、あの本能的に残忍な征服心のとりことならぬ筈はない。きっと己れの便利や好みの為に、その男を利用するに違いないのだ、と。この哲学を實踐すべく、彼はある美容院に近づく。猫がいる。彼はその猫に対して劣等感を覚える。犬や猫は家畜であるが

故にどれほど自分より幸福であることか！ この猫は美容院の廊下に鼻を押しつけながら歩くだろう。廊下に鼻を押しつけて歩くことさえ許されるのなら、自分は猫より鋭敏に、しみ込んだ女主人達の足の脂の臭いを嗅ぎとるだろうに！ この猫は魚の骨を貰う。もし自分にもそれが許されるなら、猫よりも鋭敏に、女主人達にしやぶられた唾液の移り香を味い取ることが出来るだろうに！ 彼よりも自分にこそ資格があるのだ。だのに彼は満足し、自分は渴きに苦しんでいる……こんな想念にかられて彼は猫をしめつける。猫が逃げ、騒ぎに奥から若い女が出てくる。

主人公は例の如く、痴愚者をよそおい、玄関のたたきに坐って女靴をズボンの裾で磨き出す。玄関から続く廊下の上り端に立った女達は彼を見下し、彼と問答して、痴愚者と悟って、笑い出す。女はいたずらが好きだ。弱者が生真面目な顔でむきになればなるほど、余計いたずら心をかき立てられて、意地の悪い微笑をもらすものだ。「じゃ、いいわ、その代り、きれいに磨いとくのよ」

こうして、彼は遂に靴磨奴隷として受け入れられ、日毎にいそいそとして通うようになる。美容院の女は五人、客は近所の若い有閑マダムや令嬢が主だ。彼の仕事場は、彼女等の仕事場と一枚硝子戸で続く庭先である。「Kちゃん、これも」と渡される女靴の一々を彼は愛撫しつつ磨き上げる。ドライヤーをかぶっている退屈な時間を客達は彼の異常なまでに熱心な仕事ぶりを注意することと費す。皆面白そうに観察するが、その目付きは奴隷や家畜の仕事振りを監視する女主人としての目付きである。……彼は己れの奴隷としての任務を更に拡張しようと決意するのだった。

この作者のマゾヒズム的感覚は私と全く同質で、共感する点が多い、家畜に対する劣等感ということばは、痛いほど私の心にひびく。前に第二十四項でも引いた人間探究誌所載の症例で、男は英国婦人

の夫君よりも、その愛犬であるシミーに嫉妬を感じ夫君でなくシミーこそ変仇であるといっているが、やはり同様の感じ方だと思う。靴磨きという作業にも、相手方の女性に奥様や令嬢や良い身分の人を選んだ点にも、私は共感する。いわゆるマゾヒスト中に分類されていても、縛りや鞭打に重点をおく苦痛淫楽を狙う人は私には興味はない。勿論趣味的選択の問題に過ぎないので、両者に列を附すべきものではないが、オーソドクスなマゾヒズムの感じとしては私達の方をあげるのが正しいと信じる。

なお、あまとりあ終刊号の「女の学校」と題する東京女子大寮のルポもこの作者の文である。ゴミステ場の残り物を哀願して貰い受ける条りがある。

第九十五 手

紙 (その六)

編集長様。この春の復活祭以来私は菓子屋に丁稚奉公しています。奉公の時の約束で「家事一般を仕込まれること、女店主又はその委任した人の懲戒権に服すること」になっています。店主は後家さんで、店の仕事は古い職人がやっています。私は住込みで、着物も貰います。はじめ一月は女中がいましたので、私には、女主人とその姪御様達——お店で売子や出納係をしています——とこの春堅振札をなさったお嬢様、それから同居してる二人の御婦人、この方々のために長靴を磨いたり服にブラシをかけたりする仕事の時たまあるだけでした。ところが二月目からは、女中が暇を取ったところへ、今迄寄宿舎にいらした上のお嬢様お二人が帰ってらしたので、私は今ではこの八人の御婦人の靴全部をいつも光らせていなければならなくなりました。毎日少くとも十六足から二十足は女靴や長靴を磨かねばなりません。それを全部毎朝寝室の扉口から集めて来て磨いて光らせてから皆それぞれの御部屋に戻しておくのです。まだ

その外にも、チヨイチヨイ長靴をお穿きになったままで磨けとおっしゃる方もいらしやるし、まだ学校に行つてらっしゃる下のマルタお嬢様のは、毎日こうやって磨きます。毎週一度宛は御婦人の方の靴類全部を取り出して磨かねばなりません、優に四十足からあります。御婦人の靴を磨くことは、元来難かしい仕事ではありません、殊に皆様残らず、粹で上品なラツク革や山羊革の靴をお召しになつてゐるんですから。けれど、私にとても辛く屈辱的に思われるのは、私が御婦人方に召使同様に仕えねばならないという点です。しかしこんなことは、女主人やお嬢様や姪御様からの打擲の数さえ少なければ、我慢できないではありません。一寸した不手際でもすぐピンタを張られます、或いはよく撓う答を自分で持つていつて両の手を四回乃至六回手ひどくぶたれます、時には腰掛や椅子の肘に腹這つてお尻に物凄いのを十二発も喰らわされます。殊に若い御婦人達はぶち方がひどく、私を罰するのを慰みにしているように見えます。お嬢様方は女主人や姪御様の指示を受けることなしに私をぶつのですが、この指示は、その気になれば簡単に与えられるので、女主人に「カルルはこんなことをしませんでした」とか、「あのことを忘れていました」とかいった様なことを云うだけでいいのです。女主人はすぐ「カルルやマルタ嬢（或いはオルガ嬢なり誰なり）からピンタを二発貰いなさい」とか「答を持つて行つてマルタ嬢（なり誰なり）に両手に六答下さいませと頼みなさい」とか云います。もういくら頼んでも駄目です。答を持つてお嬢様の所に行つて「お嬢様両手に六答下さいませようお願いします」とか「お嬢様から二発のピンタを頂戴することになりました」とか云う外ありません。そして特にマルタお嬢様——十八歳になったばかりの高慢ちきな美しい令嬢です——の嘲弄的な皮肉交りのお説教を聞かれます。こんな風です。——「ねえ、カルルや、私から両手を六答もぶつて貰える

んで嬉しいだろ、有難いと思わなきや駄目よ。お手々を揃えてお行儀よく出し。お前が嬉しいがするように上手にぶつてあげるから」とか「おや、お前、また手が痒いの？ そのお薬には答が一番効くよ、すぐ分るわ」——そして私が痛さをこらえかねて叫び声を出すと、お嬢様は明るい笑い声でこれに答えて「声をあげて喜んだところを見ると、私のぶち方が大分気に入つたようね。賞められて嬉しいから、もっと上手にぶつたげるわ。さあ良くつて。今度のはもっと気に入るに違いないわ。」そして一段とぶち方を強めるので、手は真赤に腫れ上ります。ピンタの時だと「ほつたがどんなに見事な赤さか鏡を見てごらんよ。お待ち、もう二発行こう。二発きりじや骨折甲斐がないもの」こんな風にして罰の終つた後、「さあ、カルルや、私はお前のために骨を折つて一仕事してあげたんだから、その代り、今度はお前が私の靴も長靴もすっかりうんと綺麗に磨いておくれ。それから私の自転車だよ。云つとくけど、良い加減な仕事したらひどいよ。長靴の表に顔が写る位に光らせてなかつたら、もう一度この答だから。……」といわれるのです。

お嬢様方、殊にマルタお嬢様は、長靴磨きの仕事を無用に沢山私に押しつけます、というのは、お嬢様は必要以上に長靴を汚したり泥をつけたりするのに熱心で、しかも一日に三度も取り代えることが少くないのです。マルタお嬢様については確かにそう云えます。それはお嬢様が自転車乗りの時お使いになる深い長靴さえ、上の方まで泥がはねているからです。現に私はこの間、お嬢様が長靴——私がピカピカに磨き立てておいた奴です——を穿いたまま、広場でわざと泥んこの中を通るのを目撃しました。そこで私は云いました。「お嬢様、お願いですから、あんなに泥の中を歩かないで下さい。お靴が湿っちゃうと、仲々また光らせることができませんから。」ところがお嬢様がおっしゃるには、「長靴がチヤンと汚れてなかつたら、お前がそれを磨く仕事がなくなつてしまふじやないの。それで

はお前のためにならないわ。お前には、自分が長靴を磨くことの意味がちつとも分つてないのね。綺麗な女長靴を磨くことはもともとお前にとっては楽しみの筈なのよ。私の穿いたままのこの長靴をすぐお磨き。」で私はお嬢様の前に跪いて、わざと汚した長靴をまた磨いて光らせねばなりませんでした。

私は女主人に、そんなにしょつ中私をぶたせないで下さいとお願いました。また他の誰かが靴を磨いたっていいのじやないかと訊ねました。ところがその返事は、「私はお前に靴を磨けと命令できるんだよ。そしてお前が何かちゃんとやらなかったら、自分でも罰せるし、他の人に罰させても良い、そういう権利があるんだよ。そういう約束になってるんだから、お前のいうことは聞くわけにいかないんだよ」そこで私は、継父に手紙を出して、あまりひどくぶたれないよう女主人にとりなして欲しい、と頼みました。そして御婦人方皆様の長靴を磨かなければならないのなら、喜んで磨きもするがあとと奉公期間（まだ二ヶ年半あります）全部を長靴を磨くことだけで送るのは閉口だ。本当に何か失敗した時に女主人にぶたれるのはちつとも嫌じやないが、あと二年半を若いお嬢様方皆から、ほんの些細なことや、ちつとも悪くない時にまで、打擲を蒙るのは、辛抱できないし、殊に一つにはお嬢様方が私と大して年の違わぬ点で私として非常に辱かしい思いがする。こんな若いお嬢様方の手から私は毎週何回も答だのビンタだの頂戴してるのだから……そんなことを書き送ったのです。

私とはうまく行っていない継父の返事はこんなでした。

「お前が奉公期間の全部を御婦人方の穿いてる長靴を磨かねばならないとしても、それがお前の損になるとはいえない。お前が奥様やお嬢様方の御満足の行くように仕事をやらなかった場合、その御手から手ひどい打擲を受けるということは筋の通った話だ。お前は今少くとも、他の人の意志に屈伏し服従することがどんなに大切かを

悟ることができたのだ。」どうも継父には、私がこんな窮屈な奉公をしているのが嬉しいのです。私への返事と同時に女主人にも手紙を出して、私をこれからも厳しく扱って欲しいとか、私がこんな不平を云つてることに対してでも私を本式に罰し打擲するに充分だとか、私がマルタお嬢様に一番畏敬の念を持っているようだとか伝えたらしく、私は返事を読み終ると同時に、女主人に呼ばれました。そしてそのいいつけで私はマルタお嬢様の所に行つて、「お嬢様、お願いですから私奴をうんと打擲なすって下さいませ」と云わされました。そこでマルタお嬢様は先ず両頬に二発宛のビンタを下さり、次に私を腰掛の上に腹這わせてから、お尻に十八発乃至二十発の猛烈な答をお見舞下さいました。そして私は終わったあとで、お礼のことばをいわされたのです。——投書欄において、然るべき御教示を賜わりたいのは、私が奉公の期間中こんな待遇を我慢しなければならぬものかどうか。ずっと御婦人方の靴全部を磨いていなければならぬのか、それとも場合によってはここから脱け出せるか、といったことについてです。どうぞよろしくお願い申します。十月十四日。署名。」

前項と関係の深い「手紙」をモルの報告してる中から訳出して見た。独乙の有名な家庭新聞への投書である点で、今迄のものと異なる。モルは長靴フェティシズムとマズヒズムの例にしているが、必ずしもそう解せず、事実どおりの報告と相談の投書と見ても良い。独乙では戸主たる父親の子供に対する権利が強大なので、こんなことは充分ありうるのである。自分の意志でもない契約に縛られて女世帯の奴隷となり、若く美しい令嬢の弄り物にされる——これは「幻炎」の主人公のみならず私達マゾヒストすべての理想境であろう。丁稚奉公の間は丁稚と主家という地位の相違があるが、もともと奉公中に技術を学んで将来は店主になる修業なのだから、この手紙

の女主人一家のような富裕な家の生れではないにせよ、身分としては対等といえる商人階級の少年なのである。だから、本来は奉公中も、技術見習として扱われる筈なので、然るに契約書に「家事に使用し得」の条項があったために、下男の地位に転落したのだ。ここが大切である。山本有三の「路傍の石」で、主人公が小学校を出て奉公すると、昨日まで学校友達として親しかった主家の令嬢が、もう見向きもせず、呼び捨てで履物を揃えさせ、不手際だといって叱る場面がある、この屈辱感ほこれに共通するものであるが、そこでは結局身分の相違があり、学校での友人関係は仮象だったことになるのに対し、この手紙の少年では、本来は平等で、下男たる地位が仮象なので、それだけに屈辱感が増すわけである。

殊に靴磨きという仕事が下賤な労役として把握されねばならぬ。モルがこの手紙のあとに関係ありとして紹介しているもう一つの投書は、大戦中兵士の苦勞を偲ぶため近所の洋品店の女売子達の寄宿舎の靴磨きのアルバイトをして、その給料を赤十字に寄附する感心な十七才の少年の善行を顕彰する店主の報告であるが、文中、少年の感想として、毎朝三十足からの長靴を磨いてもう一度各部屋に配ることは榮でない、殊に中には全く高慢で見下すような態度をとる人がいるのがたまらないが、その時には兵隊さんの苦勞を考えて我慢する、靴を磨くから下賤な者だと思われたって私自身には変りはないのだから、とある。報告者も、若い婦人の多くが靴磨人がずっと目下の者と見、ひどい取扱いをすることを認めて、「ちやんとした身分の教育ある若者の自発的屈従」の献身と寛大を称揚しているが、靴磨きに対するこういう感じ方を前提にしてこの手紙を読まされたいのである。

靴の名称等については余り詳しい解説をする力がないので、天泥氏などに譲ることにし、ただ、ラック革と山羊革シヤフクロの区別について、右の後の手紙の筆者が、少年の仕事振りを証するためあげているあ

る土地貴族令嬢——毎日一刻を乗馬に費すひと——のことばを引いておく。「あなたの所では何て素晴らしい靴磨人を備ったんでしよう。私の山羊革の乗馬用深長靴がピカピカに磨かれて、まるでラック革製見たいに見えるのよ。他の長靴もみんな新品見たいになったわ。」

なお、訳文は、少年の手紙らしい感じを出すために、今迄の「手紙」に比して、意識の程度を強くしてある。

雑 報 欄

この前の手帖の稿以来、一年以上の間隙ができてしまった。稿を続ける機会があるうとは必ずしも期待しなかったもので、以前の速報欄執筆中のようなある程度網羅的な収集を目指すメモを休刊中は作らなかった。そこで、手帖再開にあたって、過去一年間の目ぼしいものを拾って、速報欄の番号を続けるけれども、これは私の記憶にあるものだけであって、落ちていくものが沢山あることを、御承知おき願いたい。例えば宮本幹也氏の作品で某大衆誌で見かけたものに女剣戟一座の座長に奴隸的な愛情を捧げる青年が、特志を容れられて座長の身の廻りを世話することになり、その甲斐々々しいサービス振りを詳叙したのがあったが、掲載誌も作品名も忘れたので、以下には記せなかった。又単行のユーモア小説で、空手の強いM型女性女性が、暴漢に襲われた美男子で踊りの師匠のW型青年を救ったことから、二人が恋仲になって結婚する。しかし、家庭内の仕事はすべて夫に押しつけられ、妻は選挙に打って出るが、応援の夫の優姿を女性候補者本人と錯覚した投票が多くて当選する……といった、倒錯味の濃いものがあったが、題名（「空手奥様」だったかも知れない）も作者名も忘れたので、やはり記せなかった。かような例は他にも多いのである。なお、右のMとかWとかいう用語も、手帖休載

中に流行した用語であつて、これに関する小論や漫画には、「女の男装、男の女装」(サンデー毎日特集記事)の問題とならんで、本来ならここに出したいものがいくつもあつたが、現在では詳示できず割愛するしかない。

九 石川淳「落花」(新潮三〇年九月号)

新興宗教の教祖の娘佐岐子が地下牢内部で洪水に出逢つてからの行動。「馬鹿ども。おまえたちはみんなあたしの奴隷だよ。……」とピストルを突きつけ、男たちは足をすくめて、水にひざまずき、彼女をふりあおぎ、おがむ様な姿勢をとる。そこへヘンリ熊山という何とも屋、女に頼まれたことなら何でもする便利な奴として、蔭ではベソリとよばれている男がくる。佐岐子は面と向つてニゴリをつけて、「おい、ベソリ。おまえは馬におなり。……なにをまごつてゐるの。さつさと水の中に這えばいいんだよ」這った熊山の背に、佐岐子はとたんにまたがった。奴隷より以下の待遇というものがあればあるものと知れた。……佐岐子は竹の棒を鞭にして、便利屋の馬を追いたて馬上に背をそらせ、髪をなびかせて、疾駆する。……

一〇〇 村上元三「医生記」(週刊朝日別冊三〇年一〇月号)

東大寺施薬院で修業中の医生雅広は創腫(外科)を得意とする。飛火野で行き逢う美しい尼僧に恋し、彼女が瘡瘍にかかつて重態と聞き進んで志願して老女の手引で近づき癒す。彼女は公家の息女であるがやがて姿を隠す。雅広も業成つて典薬寮医師となる。やがて右大臣藤原忠実が三条の少納言の娘を還俗させて愛人としたと聞き、あの尼僧であつたと知つて、医師として口外してはならぬことを忘れて「彼女には右の腰に腫物の痕がある」と喋る。……酔つて五条の橋に来た時、数人の男に襲われ、賀茂川の流れに投げ込まれる。その前に彼の聞いたのは、聞き覚えのある女の声で「美しい人は、そのまゝ傷つけずにおくがよいのじや。医者に似合ふね要らざるこ

というて、罰がおのれに返つて来たと思うがよい」——弱点を吹聴された貴婦人の怒り、その残酷さといった点で、手帖第九十二項のボンパドウル夫人を思い出させる。

一〇一 遠藤周作「白い人、黄色い人」

近代文学に載つた「白い人」が芥川賞になつてから注目された人だが、私から見ると、白人崇拜的な有色人種の卑下感が基調になつた作品が多いので、嬉しい。「白い人」より「黄色い人」がよく、「アデン迄」がもっと良い。只今手許にないので原文が引けぬが、日本人の主人公が白人娼婦から奴隷扱いされる回想の部分がある。白人同志ではノーマルな娼婦が、有色人種のお客には容易にドミナとしての意識を持ち、行動に出るといふことは、甚だ私を興奮させる事実である。

一〇二 遠藤周作「青い小さな葡萄」(文学界三一月一月号乃至六月号)

この中にも日本人の白人に対する卑下感が出てくるが、他に、作中のふしぎなこびとが、ナチスの病院で看護婦から受けた虐待を物語るところがいい。小さな箱に入れて育てられ、犬として扱われ、「お前は畜生なんだから……」彼女の好きな時に、歌を唱わせられる。……これはできれば、手帖の一項に取り上げよう。

一〇三 藤原空爾「続みななが見てゐる前」

「男性の暴力に屈する女性というテーマは、私を喜ばせないが、白人男性によって日本人男性が無視されている点で興奮させられる。例えば「白人の天国」という一篇は、妻と離婚したい男が高価な代金で白人の色事師を傭い、妻を犯させて裸で記念撮影させ、離婚の理由を作る。色事師の方はそれを商売にしている。……という話である。この白人の色事師が狙つた以上どんな貞淑な女性でも陥落する。決して強姦ではないのである。生活程度の高さから来る魅力もプラスするにせよ、日本女性が無意識に持つ白人崇拜感なしには、こんな職業は成立しないだろう。彼等にとって日本が天国だというのも無理はない。

一〇四 「一寸法師」(漫画タイム、お伽読本一号)

五尺に足ら

ぬちびの書生が主家の八頭身美人の令嬢に恋している。令嬢の方では彼を玩具扱いして、デパートの買物のお伴を命じて荷物を持たせたり、食堂で彼が子供並みに見られたといつて、公然とからかったり、昔の宮廷侏儒を扱うのと同然で、一人前の男としては見ていない。そこに現れた好男子は……あとはお伽噺の一寸法師のパロディである。令嬢と書生という設定はパギストを満足させる。昭和二十一年、二年頃の「くいーん」という雑誌の「花開く」という小説で富豪の令嬢が入浴後、素裸のまま書生を呼びつけ、拝跪する彼に命じて身体を拭かせ、香水を吹かせる場面があったのを思い出した。

一〇五 「一人の女性に多くの男性がかしづく話」(同誌) 未来小説。女性主権下、男は経済力を失って男妾の地位に転落し、妻が他の男を愛するのを黙って我慢しなければならぬ時勢である。——この設定は面白いが、話自体はあまり感心しなかった。

一〇六 秋好馨「ますらお派出夫会」(週刊読売連載中) 手帖第四項で旧版を取り上げたものだが、文春の漫画読本(速報四八参照)以来、改めて好評を博し、週刊読売に連載されるに至った。週刊新潮の告知板によると、高峰秀子は、こういう派出夫を使いたい希望がある由。なお週刊読売によると、鎌倉方面には実際にこういう家事向き「派出夫会」が存在しているそうである。週刊読売連載分は以前のと異つて、派出夫会の「少年部」だの、御婦人専用の「喫茶店」だの色々と倒錯的な新案を加えている。

一〇七 映画「ますらお派出夫会」同続篇「お供は辛いね」エノケン、ノリ平、トニー谷、金語楼等総出演の喜劇。前篇では使用主だった金語楼の亀山氏が転落して後篇では派出夫として登場する点を除いては、秋好の原作(旧版)の倅を充分に残しており、以前の愚劣な映画化に比してずっと良かった。但し女会長が退陣してしまう点は、この映画の基調たるMとWの倒錯を強調するという精神に反し、あらずもがなであった。とにかくマゾヒストの召使願望を

刺戟してくれる点では必見の価値あり。

一〇八 映画「青銅の基督」山田五十鈴の遊女君香が滝沢修のころびパテレン、フェレラを、犬扱いにし、足を舐めさせるシーンがある。長与善郎の原作(役所の密偵に対する似た場面はあるが)にはない場面で、非常に印象深い。この種の場面が通常男の側からのマゾヒズムの実現として演じられるのに反し、この映画では、フェレラは君香に恋しているだけでマゾヒストではない。君香は彼を軽蔑する余り、彼を犬として扱おうと決心し、彼の抵抗を征服して無理に足を舐めさせるのである。自尊心から一度は憤然座を蹴ったフェレラが結局彼女の意志に屈服されて犬になるところは、まことにマゾヒストを喜ばせる。なおフランスでもこの場面が話題となり、名女優アルレッティが山田の演技を賞めたときくが、このアルレッティこそ、手帖第十三項(二八年七月号)で紹介した映画「北ホテル」の女王様ごっここの場面で、男に足を舐めさせる役を演じている女優である。単なる偶然であろうか。

一〇九 映画「無頼の谷」(チャカラツク) もう一つ映画をあげる。百万弗の脚を持つといわれたマルレーネ・ディートリヒが西部伝説の女性オルター・キーンを演ずるが、彼女の若い時のエピソードとして、酒場での人間競馬で、男を馬にして騎乗して一着をとる場面がある。

一一〇 真鍋呉夫「ダイナマイト・ドン」(文芸三一年六月号) カフカの「変身」に学んだとおぼしい蛙に変身して追われる場面がある。又、犬と人を一体にした動物の見世物がある。後者はいずれ「手帖」で扱う予定。

一一一 室生犀星「三人の女」(週刊新潮六月一〇日号) 冷血な女蕩しに弄ばれた女達が連合して男に復讐を計る。そのプランとして、ピストルを突きつけて、四つ這にしてぐるぐる這い廻らせ、疲労困憊するまで這うことを強いる、というのである。——マゾヒス

トの眼からすると、随分物足りない、もっとくひどい恥かしめ方がある筈だが、特殊文学でない以上、この程度で満足すべきか。

一一二 ハイライン「人形つかい」科学小説全集第二巻）科学小説がいよいよブームに入ったらしいのは、私には嬉しいことである（手帖第八十三項参照）この小説も書名だけは、速報二七の後の号外で紹介しておいたが、今度翻訳が出た。ここに出てくる他星人は、人間の身体に取り付くと直ちにその意識を支配する。作者も喻えているとおり、丁度人間が馬に跨って、馬の能力を自分の目的に利用し、馬自身は乗手の目的を知らずにその時々^{ネーリゲン}の命令に応じて行動する生きた道具に過ぎぬのと同様に、この他星人^{ネーリゲン}に乘られた人間は、自分の能力の凡てを乗手に利用され、しかも次々に与えられる命令に応じて行動するだけの生きた乗物と化してしまう。しかも乗られ、支配されることに無上の幸福感を得るので、決して叛逆を企てない。永久に馬同様の奴隷として主人である他星人^{ネーリゲン}に奉仕しようとする。

いう気持になるのである。——これは科学小説の傑作として、夙に有名なものであるが、私のいわゆるマゾヒスト向科学小説の好例でもある。

以上休載中の目ぼしいものを思いあたるまま拾ったが、私の個人的事情から、今後も従前のような「速報」欄を維持することは困難なので、これからは「雑報」欄として、手帖の一項とするにも当たらないようなその時々^{ネーリゲン}のものを気づいた時にだけ、この欄に掲出するということにさせて戴こう。

追記

原稿を送ってから、復刊第二号を入手したところ、春木俊野氏「続・映画に見た淡いマゾ」で「無頼の谷」「青銅のキリスト」等が紹介されていたのを知った。私の記事は無駄であったが、右の事情を諒とされたい。

【体験・告白】

「お灸を据える女性雑記」

松 原

一

七月号、岩瀬祥一氏の（告白）「お灸を据えた女の魅力」を拝見し私も同感です。女性の豊満なお尻に、そして、あの滑らかな美しい背中に、ポツポツと煙を上げる艾、

やがてジリジリと、その美しい柔肌を焼け焦してゆくその瞬間、全身を打震わせ、腰、そしてお尻を妖しくくねらせながら堪えがたいお灸の熱さをジッと辛抱する女性——

私は或る機会からお灸を据えられる女性と何度も接することが出来、亦、直接私もそう云った女性にお灸を据えた経験があります。これは私が或る灸点師の元に弟子入りしていろいろ教えて貰い、助手として研究のため多くの一般の病氣治療を目的とする女性の患者に据えたわけでありました。その時の経験によりますと、案外女性は大きなお灸には驚かないものです。極く年少者としては、十二才の少女までも、今の十円銅貨位のお灸を、別に泣きもせず背中と腰に据えているのを

見たことがあります。勿論これは弘法様のお灸です。若い美しいタイピスト嬢、それからフアッション・モデル嬢などは、人目につかぬ腰へ据えてくれと注文して来ました。

岩瀬氏の文中にもあるように、或る美しい夫人の会話に「大きなお灸の痕でしょう、宅に据えて頂きましたの、随分熱かったけど……愛の灸痕……云々」というように艾で肌を焼かれる堪えがたい、身を切られるような熱さの中にも何にか恍惚とした魅力がお灸を据える女性にはあるのではないでしょうか。

お灸を据えに来る人達の中の七割は女性といつても過言ではありません。そういったところから、案外女性の心の奥底にひそんでいるマゾヒスチンとしての素質から、お灸を好んで据えて貰いに来る女性がこのように多いのではないかと考えられます。前記のフアッション・モデルにしても、一週間の中、五日も連続で据えに来ました。ただ冷性で腰が痛むというだけで、腰ばかりに据えてくれというのです。そして体が空いている中でないというのです。来られないといって、その後も一週間に一、二度は必ずやって来るといった熱心さで、仕舞には「どんな大きなお灸だって私もう驚かないわよ……」などと冗談を云ったりしていました。が、仲々御婦人方は、十二才の少女にしろ偉いものだと男性側の施灸者である私は腕組で感心して見ているといった有様です。

昭和二十八年の夏、こんなことがありました。三十四度という暑さにむせかえる午下り一人の、年の頃と云えば未だ二十になるかならずの可愛らしい感じの女性が、〇〇灸療院から私に据えて貰えといわれて来ましたと云って訪ねて来ました。どこが悪いのですかと聞くと、別にこれといった病氣は無いが、冬になると冷えて困るから夏の中に治したい。それにはお灸が一番だと思うのでお頼みに来たというのです。どうも灸療院から駆出しの私などを名指しで寄こすとは一寸変だと、私は一度は断ったものの、遠方からわざわざ訪ねてきたのだから、是非据えて貰いたいと熱心に頼みますので、むげに追い帰すわけに行かず、手、足の三里にでも据えて帰って貰おうと思っていると、これ亦、手、足は表面に出ていて、人に見られてイヤだといって、しかも腹部に据えてくれと云うのには驚きました。そして私に何才か、と聞くので二十四才になったと答えますと、それでは済まないが貴方の年の数だけ、是非下腹へ二列に並べて据えて欲しいと切なく願望するのには年若い私には誠に困ってしまいました。どうもこの女性は普通ではない、と気が付きましたが、しきりに頼むので、仕方なく、言われる通り二列に相当大きな灸を十四個処据えて帰してしまつたが、後で聞くとところによりますと、或る脳病院に入っていたのが、この女性は、

軽症だったので退院して間もないという話でした。それで灸療院ではうまく断られたのですが、まさか私の所まで来るとは思わないので、私の所へ行けとうまい口実で逃られたものらしいのです。

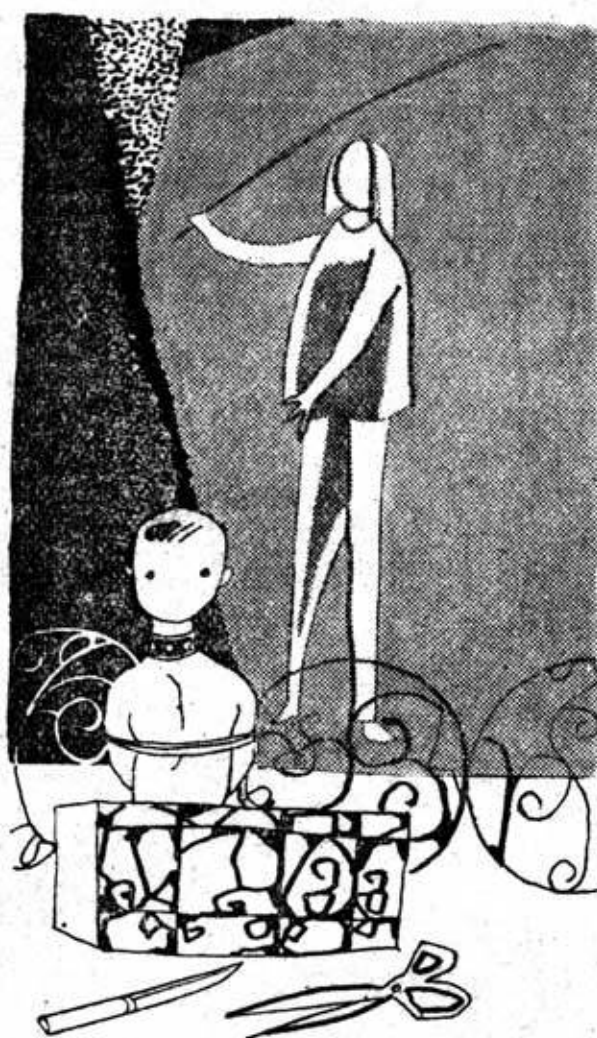
夏の暑さのために、お灸で身を焼きたい衝動に駆られて下腹部に据えて貰いたかつたものか、或は切腹マニアの刃物がお灸と化けたのか？ とにかくそのいわれは、私には分かりませんが、何れにしろ、その女は、確かにマゾヒスチンには違いないと思えるふしがありました。小さい時に、お仕置で度々お灸を据えられた女性、又、幼くしてお灸の本当の味？ を体験した女程、お灸マニアとして成長して行くのではないのでしょうか。

尚、亦何かの機会に一度お灸を据えて、その恍惚とした熱さの中の桃源境を本当に味つた女性は、それから以後必ずお灸マニアとなるものだと思います。

「お灸を据える女性雑記」として取止めもないことを記しましたが、まだ女性の「お灸」に関した、マゾの立場からの告白、体験談、などが、現在までの奇巧に掲載されてないのが残念です。どうか忌憚ない御意見、告白、体験談などを、お灸に関心を持つ多くの女性の方々に発表して頂きたいものです。

(おわり)

映画に現れた拷問場面



左巻拔作

映画には様々な場面が現れる。接吻、暴行裸体、果ては拷問、喧嘩とエロ、スリルもあればグロもある。此れ等のシーンは観客にとって一入の眺めに相違ない。かく申す私も映画狂で、いつも一番前の座席でかぶりついて

眺めている。其処で私は今迄見た映画の中から夫々のシーンを分析して書いてみる事にして、先ず始めに拷問場面を探って見る事にした。但し私自身がアブレなる故、戦後の作品にて御勘弁願ひ度い。拷問の場面となると圧倒的

に男性が多いのは止むを得ぬ事だが男女同権の今日、これからは女性の場面も数多く取り入れて貰い度いものである。

では始めに一つだけ戦前の作品を拾って見ると、東映の重役であり、時代劇の大御所でもある片岡千恵蔵の当り役、日活作品、宮本武蔵にて豪雨の中、大木の頂上に荒縄にてギリギリに縛られ、悲痛な声で沢庵和尚の名を呼び続けていた場面を読者の皆様は未だ記憶に新しいと思う。あの場面は決して拷問とは云えぬかも知れないが、私は必ずしもそうとは思はない。剣聖と云われた武蔵も若い頃は無法者で手がつけられなかったのを沢庵が氣にし精神修養の意味であの様に木に縛りつけて叩き直し後世迄も名を残した有名な武蔵にしたのだから責め道具を使わないで直接心に与える精神的拷問と思う次第だ。若しあの時、沢庵が木に縛りつけなかったら武蔵は一生無法者として終った事だろう。故に私はあえてあの場面を拷問の部に取り上げて見た。何しろドシヤ降りの中、セットではなく実物の大木に縛られるのだから千恵蔵にとって相当身体にこたえた事だろう。俳優も辛いと云う処。これが戦前の作品として唯一つ私の記憶に残っている。では戦後のものを振り返って眺めて見よう。

戦後版愛染かつらと云われ爆発的人氣を得た松竹の、君の名はの主演者佐田啓二が現

在程人氣が無い時に撮った松竹の「七つの宝石」で悪の巢に入り込んで探る刑事に扮し、大活躍するが運なく敵方に捕われギヤングお定まりの凄惨な拷問を受ける。但し役から云って佐田の刑事は失敗。先ずギヤング団の巢窟の地下室が写し出され其のまゝキヤメラを移動させて部屋中央になると数名のギヤングに囲れた佐田啓二が椅子に縛りつけられているのがスクリーン上に現れてくる。胸の上から幾重にも後手に縛られている佐田の悲痛な姿。其の傍では恋人である紅あけみが矢張り後手に縛られて床の上に転がされている。「七つの宝石」とは財宝を埋めた場所を記してある地図の秘密の鍵。ギヤングの一人、佐田の前に歩み寄り隠し場所を白状せよと脅す身動きも出来ぬ位嚴重に縛られている佐田無言。努ったギヤングいきなり数回顔を殴打する。見る見る佐田の口から血が流れ落ちる。然しそれでも頑として口を割らない。たまりかねた紅あけみ秘密を話そうとする。だが佐田それを目で阻止する。あくなきギヤングの拷問は更に凄味を加えあく迄も口を割らせると壁際に寄って真赤に焼けた鉄の棒を持って来て佐田の眼前に突き出す。佐田の顔恐怖に歪む鉄棒を持った男、焼鉄を更に顔へと近づける其の時は既に両側から動かぬ様二人のギヤングが佐田の顔をしつかと押えて動かさない。佐田の顔クローズアップ。流れ出る血を拭う

事も出来ず額は汗でビッシヨリ。あわや顔に押し当てられようと云う時、恋人の苦しむ様に我慢出来なくなった紅あけみは縛られた身体を乗り出し秘密を話してしまふ。危機一発と云う処を佐田は助かる。

以上が画面に写った七つの宝石の拷問シーンだが殴打して焼鉄を押し付けるあたりはかなりの迫力があり佐田フアンの女性の気をもませる事受合ひの場面だった。尚この七つの宝石には紅あけみが他のシーンにて両手を頭上で縛られ焼けくずれたビルの中で吊し上げられる一シーンもある。

拷問の中には逆さ吊りと云う非常に効果的な責めがあるが此れだけは映画でも仲々現れて来ずそれだけにちよつと見られないが僅かに此の手の拷問を受けた俳優に嵐寛寿郎があげられる。それも一回ではなく二回と云うのだから私等から見れば役得と云い度いが当の嵐寛にとつては、たとえ少時間たりとはいえず辛かった事だろう。始めは新東宝が製作した「風雲七化ヶ峠」昨年度の作品だが従来の嵐寛とは打って変った役で主眼はもっぱら山中に置かれた時代劇。私は此の映画のストーリーは忘れてしまひ、何故嵐寛寿郎が捕まったかは記憶にないが悪人に捕われた事だけは確か。淡い演技で活躍している清川莊司が悪玉の親方で其の時の模様を記憶をよび起して記して見ると断崖絶壁から谷底に逆さに吊される嵐

寛の遠景がフアストシーン。直きにカットとなり次にスクリーンに写ったのは断崖の中腹辺り。可笑しいなと思いつゝ見ているとキヤメラの上部から逆さに吊された嵐寛の苦しむような顔が下つて来て、次第に上半身も画面に現われてくる。顔をキヤメラの方に向けたまゝ目をつむりすっかり覚悟を決めた嵐寛寿郎の表情は一見したところ何でも無い様に思えるが逆さ吊りの経験がある私には烈しい苦痛はありありと感ぜられた。太い荒縄で胸部を縛られている嵐寛。縄のよりで体が一回転しキヤメラに背中を見せる。両手は見事に捻じ上げられて、重ね合わされた手首にはしつかと縄が巻きついて本当に縛られているのは驚いた。再び一回転してこちらに向き直り其のまゝ下へずり下っていく。場面は変り、着物の上から堅く縛られている両足のシーン。それにピンと張った命を支える一本の縄。これ等の場面を二・三回繰り返し写し出されて逆さ吊りの場を表現していた。以上の場面が全部大写真だったのは私の氣持を満足させるに充分だった。

第二回目は東映の作品で、嵐寛寿郎十八番の「鞍馬天狗危し」の中にてラスト近くにあった。先ずタイトルに京都での天狗の活躍は此れ位にして、こゝいらで江戸に於ける活躍をお目にかけますようとして、確かに舞台は江戸に移っていた。幕末近く幕府と薩長が穏

かでない時、幕府は多大の金額を費して外国から武器弾薬を買入れようとする。これを阻止するのが天狗の役目。相も変らず画面一ぱいに暴れ廻った天狗、ラストで敵の本拠に乗り込み一大決戦を試みて危機に瀕し一まず逃れようとするが御存知の杉作と何時しか味方になった宮城千賀子の二人が捕われているのを知り自ら刀を捨て、捕われる。画面は此処で一応切られて、次に写ったのが天狗拷問の場面である。近写で宮城千賀子が後手に縛られ床の上に坐っているのを正面からうつしキヤメラは其の位置でそのまゝ後退して暫しの間、宮城の悶る姿を見せる。次に左に移動させると井戸（古い）が移り滑車を中にして左の縄に天狗（嵐寛）逆さ吊りに縛られている足首を嚴重に縛られ両手は背後で同じく縛られている。周囲には岡譲二を頭とする若干の武士が天狗を見つめている。岡の顔クローズアップ。天狗に同志の在所を云えと詰問するスクリーンに逆さになった嵐寛の顔大写しされ歯を喰いしばったまゝ無言。それではと岡隣の侍に何やら目くばせすると嵐寛寿郎の身体少しづゝギギという音と共に井戸の底へと落ちていく。前者のも確かに逆さ吊りには違いなかったが何やら迫力に欠け凄味が湧いて来なかったが、後者の此の場面は逆さ吊りと云う名の拷問のスリルをゆっくり堪能させてくれた。滑車の回転する音。天狗の身体は

底の方へ沈んでいくにつれ反対側の縄から縛られた杉作が次第にキヤメラに接近して来る杉作とて監督は容赦せず完全に縛ってあるがちと可愛想。私は吊し責めの杉作を見て不図自分の姿を杉作の中に見た。と云うのは少年時代、私も悪友から素裸にされ逆さ吊りはもとより様々な拷問を受けた経験があるからだ宮城、此の場を見て大声で悪侍をのしる。再び天狗逆さ吊りの姿を井戸の外に見せる。岡、後二・三回繰り返せば杉作は死ぬぞと云う。天狗それでも無言。強情な奴と怒った悪方、再び滑車を廻し天狗を井戸の底へ吊り下げていく。此処で始めてキヤメラは井戸の上部から沈んでいく天狗の姿を捉える。上部から写すと丁度、観客が井戸をのぞき込む恰好となる。一本の線を描いて逆さになっている嵐寛寿郎の背中に一ヶ所後手に縛られている手が出ていて印象的。下ってゆく天狗と上ってくる杉作がすれ違う時、杉作思わず、先生と叫ぶ。それに答えて天狗始めて口を開き、杉作許せよと可愛いゝ杉作をこれまでに苦しませねばならぬ自分の辛さを謝罪する。後は杉作の先生、先生、の聲が聞えるだけで次第に底に溜っている水中に近づいて行く天狗の姿。此処でひとまずカットとなり、次に写ったのは、おそらく井戸の水であろうスクリーンに水が現れる。其処へ画面の上部から嵐寛の逆さになった顔がずり下って来て、やがて

スクリーン一ぱいに現れる。如何にも無念と云った顔の表情。間もなく天狗の顔水中に没し去りラストに井戸の遠景が出た処で文字通りの絡りとなっていた。

次に取り上げるのは拷問の中で最も活用された叩き責めを二つ拾って見よう。始めは山手樹一郎原作の桃太郎侍を映画化した衣笠貞之助監督の『修羅城秘聞』の続編で責められる俳優は堅実な演技で定評ある加東大助。処は城内の牢中。ファストシーン後手に縛られあぐらをかいて坐っている加東。傍らに割り竹を持った牢番直立してお定まりの詰問をする。加東「うるさい」と江戸っ子らしい威勢の良いたんかをきる。同じく捕われた轟夕起子隣の牢から心配気に加藤をみつめる。其処へ悪方の張本人大河内伝次郎現われ何やら轟に云う。轟烈しく言葉を返す。一方加藤背中を思い切り叩かれ呻き声を洩らす。続いて聞えるビシッ、と云う割竹の叩く音。中接写縛られた加東の背に続けざまに割れ竹が打ち降りて来る。呻く加東。呻き声と共に畜生と叫ぶ非痛な声が観客の耳に聞えてくる。危うく失神しそうになる処へ主人公長谷川一夫が助けにきて此の場を見て大河内に釈放を命ず許された加東手を合せて長谷川に感謝す。とまあこんな処だったが叩き独特の雰囲気盛りに上ってこなかったのは惜しかった。

今一つは東映の正月映画『新選組』第二部

である有名な池田屋事件の張本人古高俊太郎（映画では河野秋武扮す）が捕われて新選組の屯所にひよっぴかれ其の場で縛られ割れ竹で一つ叩かれた処でカットし後は呻き声だけで拷問を表現していた。一説によると古高俊太郎は叩き責めの外、吊り責め、逆さ吊り外幾多の拷問を受け最後に罌丸をろうそくで焼かれる苦痛にとうとう白状してしまったと云う説がある。然し余り当てにはならぬ説。尚この外、沢村アキオも東映の『疾風雲母坂』の中で道場の柱に文字通り大縄でグルグル巻きに縛られ竹刃で胸部をビシビシ叩かれるシーンがあるがこれは全然凄味が湧いてこずお話しにならない。

では女性の方はどうかと云うと既に本誌の「縛られた女優達」の中で殆んど云って良い位発表されているので改めて私が申す事は全然無い。が其の中から代表的の一つだけ取り上げ出来るだけ詳細に書いて見る事にする。前に述べた男性の拷問場面は思い切り残酷に撮られて居たが女性の方はそれ程の凄絶な場面は無い。けれど次に述べる場面は数ある女性拷問の中でも特筆される場面と私は思う。

では如何なる作品かと申すと評判倒れの作品に終わった大映の『振袖狂女』長谷川一夫、山根寿子、宮城野由美子主演でストーリーは豊臣の残党である長谷川と宮城野が何とか徳川

家康を倒さんと苦心し首尾よく家康の寝所に忍び込み襲った時は、既に家康は死んでいたという戦国時代のもので、此の二人に山根が巻き込まれる。拷問を受けるのは宮城野由美子で、宝塚で純情な乙女役として人気のあった彼女が映画界入りして間もなく、こんな役をさせられるのだから映画とは罪なもの。恒例の家康の御前にて踊りを舞う機会に恵まれた宮城野。復讐は此の時と懐刃を忍ばせて一心に舞う。そろそろ舞踊もクライマックスに近づいた頃、突如として宮城野踊りを止め片手に懐剣を握りしめて家康目がけ二・三步前進したが取り押えられる。後はお定まりの自白強要の拷問となるのであるが、此の場面が素晴らしい。

フアストシーンは、拷問室の中央に宮城野後手に縛られ今にも吊し上げられんとする遠景。だが一瞬にして画面が変わり、次に写ったのが人相の悪い一人の武士。誰かと見れば岡譲二なのには驚いた。然し岡は本映画の最後で慈悲心ある処を見せる。「誰に頼まれたのか云え、云わぬと痛い目にあうぞ」と得意満面なる岡の台詞。それに応えて髪を乱した宮城野の顔、クローズアップ。可細い声で「誰にも頼まれず私一人の考えです。」此処で再び画面は変わり、宮城野の膝から下の脚部がクローズショット。キヤメラは足に沿って身体

れる肉付き豊かな腰部を過ぎ胸部のどこへ来た時あつと私は驚いた。可愛想に宮城野着物の上とは云え乳房の辺りを肉に喰い込む程堅く巻かれ両手は後へ捻じ上げられて縛られているのである。これほど堅く縛ってあるのは映画の中で今迄見た事が無い。

奇クの二十八年五月号におそらく川端多奈子嬢と思われる女性が、荒縄による緊縛感のスナップなる写真で胸部を強く縛られている真横よりと斜め横よりと同一の写真二枚があったが、正にそれと同等の緊縛なのであるあわれなるかな宮城野。その部分も一瞬の事で更に移動してゆき、やゝ苦痛に満ちた宮城野の横顔を暫し移してカットとなる。再び岡の顔、大写真。何やら目くばせする。目くばせの方向にキヤメラを移動させて一本の太縄を二度、三度手前にたぐる。それと共に聞える滑車の廻る音。「あっ」と云う声と共に床から序々に吊り上っていく宮城野の全身。更に全身をクローズアップで分析する。宙に浮いている二本の足。此の時の素足が何とも云えず悩ましい。再び胸部が写り今度は手首だけの縛られた部分。此の部分が現れて二度私は驚いた。まさかと思つてはいたが完全に縛られているのである。両の掌を固く縛っている宮城野の両手首は背中の上へ捻じ上げられてX字型に組まされやゝ太い荒縄が縦に幾重にもひしと巻きついているのである。私は

監督の大胆さに感心すると共に余りの見事さに思わず固唾をのんで見惚れてしまった。更に横顔。歪んだ口からあまりの苦痛に洩れる「ああ……ああ」と云う呻き声。此の時の宮城野の演技満点。此の間、ひっきりなしに廻る滑車の音は観客の耳に聞えてくる。最後に宮城野の上半身が写り（クローズショット）肩の辺りを割れ竹で叩かれ「ううう……」と云う声と共に宙吊りの宮城野の身体が廻る処で終っていた。暇つぶしにと何の気なしに観に行ったら私は思わぬ拾い物したと今でも喜んでいるだけでなく二度とこんな場面は出て来ぬだろうと忘れられぬシーンだった。

尚余談だが完全に縛られた女優として野上千鶴子が「遊俠一代」で代官殺しとして捕われ「酔いどれ八万騎」中浪治はるかが同じく人を殺して役人に捕われる。両者とも後手で縛られている手首が大写しでスクリーンに現れたがどちらも堅く縛られていたので印象に残っている。女優の拷問ではこの外松竹の「治郎吉格子」で高峰三枝子が後手に縛られた手首の間に十手を指し込まれグツと捻じ上げられる一風変わった場面や、宮城千賀子が東映の「酔いどれ八万騎」にて矢張り後手に縛られ鞭でビシビシ打たれ痛さに裾の乱れもかわず転げ廻る場面等があるが、先程も述べた通り奇巧の「緊縛女優」の中で詳細に出ているので此処では省略致し目を洋画に転ずる事

にする。

洋画では日本にない様々な拷問があるが、其れ等を簡単に拾って見ると、先ず始めは石投げの場面。西部開拓者とし後世迄有名なバップアロービルの伝説映画「西部の王者」此の中にほんの一場面だが出て来る。ビルに扮したジョエルマックグリーが映悪の始めインデアンに捕まり石投げの責めにあう。スクリーン上では上半身裸にされたマックグリー、後手に手首だけを縛られて立木につながれ並んでいる。縛られているのでよける事の出来ない。縛られていてるのでよける事の出来ない。ビルの裸身に石は容赦なく当り、流石の王者も危い処へ顔見知りの酋長の息子が来てほいて呉れ危機一発のところを助かる。だが此の場面は拷問等よりもジョエルマックグリーの実に見事な裸身の方は見応えある。私は此の場面を見て、再び自分が受けた拷問の事を思い出してしまった。それは私が未だ中学時代、悪友数名に無理矢理に一軒の家に連れて行かれ抵抗したが及ばずパンツに至る迄全部はぎとられ素裸にされて柱に縛りつけられくすぐられた。身動きも出来ぬ位きびしく縛られていた私は、執拗にくすぐる悪友の手に、死ぬかと思った程苦しんだが続いて同じく後手に縛られたまゝ部屋中央の中央に逆さ吊りにされバンドで嫌というほど腰部を打たれた。全身の重みで足首を縛ってある縄はグイ／＼と肉に喰

んでくる。更に勢いよく肌にくぐる様に飛んでくるバンドの痛みに私は危うく失神する処だった。

おっと大分脱線してしまった。

再び本筋に戻し次は西洋版焼鉄のシーン。『剣豪ダルトニアン』でちんがくしやみした様な顔のコーネルワイルド、三銃子の息子として女王の為親に恥じぬ働きをするが悪者に捕まり城内の牢獄に連れて行かれる。上半身裸にされて両手を頭上で縛られた姿が先ず写る。頭上で縛られている故伸びきった腋に見事な腋毛がゆっくり拝見出来、女性の方なら溜息が洩れるシーン。其の後、焼鉄を直接露出せる腹部に押しつけられジュウツと肌が焼ける音がし煙が立ち登る。肌の焼ける熱さと苦痛にワイルドの顔歪み、見る見る額に大粒の汗が流れ出して来るが、残酷な拷問に比べ凄惨味が缺けていたのは残念だった。尚この種の拷問はほかに「剣俠ロビン」「ドンファン」の冒険」等にも登場してくるが此処では省略したい。又珍しく蒙古の責めを見せたのに「黒ばら」がある。

大根役者の汚名をこうむる美男タイロン・パワーが劇中友人を逃した罪として名優オーソン・ウェールズ扮す隊商の親分から受ける責めがそうである。大い綱を一尺位の高さで横に長くはり両側には無数の剣が指してある其の上を歩いて行き無事に向う迄たどりつい

たら罪は許れる。だが廻りに見ている者がさわたり押し下りして落そうとする。此の為幾度か危機に瀕するタイロンパワーの苦悶する模様をカメラは全身、顔、綱上を歩くフラフラした足並みと交互に写し其の間群衆のざわめきを挿入して観客をハラハラさせるのは監督の指導よろしきを得て仲々印象が深かった。おそらく此のシーンは蒙古人独特の責めとして珍重さるべきものの一つだろう。タイロンパワーはこの外、大々的に伊太利へロケして完成したという「狐の王子」にて愛人の前で目をくりぬかれる場面があるが非道い拷問もあるものだ。又旧約聖書の映画化「サムソンとデリラ」でヴィクタ・マアチュワが怪力の元である髪の毛の秘密をヘディ・ラマの色仕掛に引っかけた話した為坊主にされて無力のそこを捕られ鎖にてグルグルに縛られ前に述べた焼け鉄を直接目にあてないで焼きつづす。此の時の模様が変っているのを書いてみると、刀をぬいて火の中に入れた兵士赤く灼けた刃をサムソンの前にかざす。サムソン大写し。灼熱の刃が彼の顔に近づけられる。アトウル（敵方の大将）の顔から刃へ。画面は次第に真赤な刃に占められる。サムソンの肌に触れてはならぬぞというアトウルの台詞のうちに画面は真赤に蔽われる。と変わった演り方でキヤメラをサムソンの目としたデミル監督らしい演り方。次に日本には全然な

く西洋特有の伸し責めは「アリババと四十人の盗賊」「海の征服者」「砂漠の鷹」等数多くあるが私はそれを省略して気に入った拷問の場面があるのでそれを詳細に書いて見る。戦前封切られて好評を博し戦後再封切となった同じくハリウッド随一のセシル・B・デミル監督が撮ったゲイリー・クーパーと往年の人気女優ジーン・アーサー主演の「平原児」がその一つ。筋そのものは単純なものだが鉄火な女「厄病神」のジェーン（ジーン・アーサー）がインデアンに捕えられ前手に棒縛りされ首には逃亡を防ぐ為縄をかけられている姿で連れて行かれるのを見たクーパ扮するワイルドビル・ヒコックが愛人を助けんと自らも故意に捕まり酋長の許に連れて行かれる。此の処ちよつと不可思議。画面が変って天幕内に二人共両手を頭上で縛られて片隅に繋がれている。其処へ酋長が供を連れて現れ二人に弾薬を運んだ騎兵隊の道順を云えとつめよる。二人共無言。酋長怒り暫くの猶予を与えたと出て行く残された二人は、余命幾許もないと察し縛られたままの奇妙なラヴシーンが展開される。ジーン・アーサーの色白な肌の手首にどす黒い縄が幾重にも巻きついて、悩ましいアーサーの姿態と共に情慾をそよめる。お互いに愛し合っていた事を告白した時、再び酋長が現れクーパを外へ連れ出す、外には地を大きく四角形に

堀り中で木をくべてどん／＼燃している。クーパ哀れにも両手を万歳型に手首だけ横棒に縛られ其のまゝ吊し上げられ火の上に持つて行かれて火焙りの刑とも思えぬ拷問を受ける傍らで見ているアーサー、恋人の苦しむ様に幾度か白状しようとするが苦しい息の下からクーパそれを必死に阻止する。火焙りの拷問？も次第に最高潮に達しクーパの足がまさに火の中に入り焚殺されんとした時、たまり兼ねたアーサー遂に白状してしまう。同時にクーパ、火焙りから解放され地上に降して貰った時は既にグッタリと氣を失っている。此の場面を天幕のラヴシーンから息もつかせずにつけて見せ最高潮の火焙りのシーンはインデアンの太鼓の音とクーパ演技、それに大胆な描写にすこぶる実感が溢れており、拷問を受けるのが、世界一の二枚目だけに興奮させる場面だった。

今一本は異色西部劇と大々的に宣伝したパブリック会社の「地獄の銃火」がある。主演者のウィリアム・エリオットが命の恩人である牧師の遺言通り教会設立を一念に無法者から足を洗い、先だつものは金とお尋ね者の女賊（メリー・ウィンザー）の懸賞金欲しさに彼女に自首をすゝめ嫌がる彼女につきまとう或る時彼女を父の仇と狙う三人組を懲らした事から後日復讐を受け豪雨が降りしきる夜、馬小屋で雨乞いをしていたエリオット、突然

三人組の不意討を受ける。其処に殴る殴られつの大格闘となつたがいくら腕力が強くとも多数にはかなわず、卑怯にも主謀らしき一人に後方から拳銃を突きつけられる。エリオット舌打ちして口惜しがる。一人が荒縄を持ってエリオットをベルトのところで前手に縛り上げる。エリオット無言、縛り上げた男縄のはしを梁に掛けぐいと引っ張る。エリオットの手、前手から一気に縛られたまゝ頭上に持つていかれ吊し上げにされる。縛ってから吊し上げる迄は珍しい吊り上げ方。吊し上げられたエリオットに彼女の行方を云えとつめよるが睨みつけるだけで無言、彼女は馬小屋の前のホテルにエリオットの友人とたわむれている、抱きあった二人の蔭がガラス窓に映る。ウィリアムちらと其れを見ながらやゝ表情を曇らせるだけで無言、業を煮やした主謀者残酷にもエリオットのシャツをたてに引き裂き背を露出させる。更にランプをはずして手に取りむき出しとなつて背中に押し付ける。背中が焼ける熱さにエリオット顔を歪めウムと苦しむ。更に云えと続けてランプを押しつける。見る間にランプ責めの連続にエリオットの額に大粒の汗が流れ出し苦痛も増して危うく失神しそうになるが依然口を割らない。キヤメラは前面から写しているので背中に押し付けるランプ責めは見られないが拷問の凄絶さを思わせる。エリオットの顔大

写し。

如何にも苦しいといった表情、更に上部にキヤメラを移動し手首だけを写す。十字に組んだ手首に縄が縦にギリ／＼と縛つてある。但しやゝ緊縛感に缺ける。再び全身を写し重なるランプ責めを見せている処へ保安官が現れ危い処を救われる。以上が「地獄の銃火」に於ける拷問の場面であるが私が気に入った理由はランプ責めと云う変つた拷問だったからである。だが惜しい事に迫力に缺けていたのは残念だった、未だこの外男性の拷問場面は沢山あるが長くなるので省く事にし女性の方へ移る事にする。

女優の方ではレディ・ファストのお国柄の故か余りスクリーンには見られぬが、代表的なのを二つだけ取り上げて見る。一つは見世物監督セシル・Bデミルの一大スペクタクルもの「**征服されざる人々**」の中に主演者のポーレットゴダードが鞭刑を受ける。街中の奴隷市で売られている奴隷夫婦が別々に売られてゆくのをゴダードが見るに見兼ねて奴隷主に意見する。怒った奴隷主ムンズとゴダードの腕を掴み引きずる様に裏へ引っぱって行く。画面は変りちよつとした広場に連れてこられたポーレット抵抗する間もなく幕際に連れて行かれ宙にぶら下つている二本の縄で観客に背中を見せる姿で両手を頭上で縛られてしまふ。縛り終った奴隷主、無惨にゴダード

のワンピースを破り背中を露出させる。そして一本の鞭を手にいきなり無言で露出せる背中に打ち降す。鋭い痛みを呻き声を洩らしつ身体を前方に突き出し弓なりになつて堪えらる。奴隷主笑みを浮かべて見ながら続いて二回、三回と鞭を打ち降す。天然色映画なので色白のゴダードの肌に二筋三筋と赤く鞭の跡が描かれてゆくのがすこぶる印象的。惜しい哉此の場面は此処で終つていて、中頃になつて今度はインデアンに捕れた彼女、両手を立木に縛られなぶり殺しにあわんとする場面があるが、どちらもちよつぱり戴ける場面。

第二は米伊合作映画「**地中海の虎**」の中に名は不明だが、一女優が伸し責めを受く。然し此の映画は話にならぬ凡作で日本で云えば三流以下の作品と云う処。海賊シロッコ（ルイス・ヘイワード）の行方を云えと悪方の頭ルドルフ・ヤラトウ直接の拷問を受ける。

キヤメラは拷問室を先ず捉え数名の者が様々な拷問を受けているのを移動させて画面に写し一人の処へ来てはたと停止する、梯子を丸くしたようなものへ肩も露わに片手を頭上で今片方の手は身体ごとという珍妙な縛られ方のすこぶる美人。大分前に責められたらしく髪は乱れ吐息も既に乱れ勝ち。女性の前には残忍なヤラトウ椅子に腰かけ女の苦しむ様をジツと見つめ執拗に云えと迫る。烈しく苦しむ女のグロースアップ、苦痛に歪んだ顔。

苦悶する姿態等。如何にも苦しいといった表情。それでもヤラトウの詰問には堅く口を閉して白状せず。やゝ怒りに満ちたヤラトウ、クローズアップ。つと目を横に走らせ顎をしやくって部下に何やら命ず。今度は中接写で縛られた女、ギギギという異様な音と共にぐっぐつと身体が伸び見る間に烈しく顔は歪み呻き声洩れて苦しむ。露出した肩が烈しく上下する。見守るヤラトウの好色に輝く目。苦しむ女優の上半身、すると数度にわたる拷問の連続に力尽きたかガックリ首が前に垂れ女は気絶する。此処で終りとなっているが書きようが未熟な為上手く表現しえないのは残念だが、責める度に悶え苦しむ女優の姿は呻き声と共に拷問の苦しみを真に迫って表現している。

◎本誌の発送について◎

○復刊以来、本誌は書店販売をせず、一切郵便発送に依っておりますが、雑誌の荷造発送について御心配の向きも間々ありますのでこゝに一括してお答えしておきます。雑誌は新聞紙にて包装した上、強靱な厚手ハトロン紙製の角封筒にて完全に内容物が見えなくなるように収めて、即日発送致します。封筒の表面には、雑誌の題名その他の明示はしてありません。尚、社名でなく個人名にての発送御望の際は、その旨御申出下さればそのように取計らいます。

最後に映画に於ける最も拷問の代表的なものを取りあげてみよう。第二次大戦中でゲシユタボの残虐を鋭く描いたやゝ古いが伊映画「無防備都市」がある。監督はロベルトロッセリーニで地下運動者の恋人が麻薬と同性愛の為に恋人を裏切つてドイツの秘密警察に密告してしまう。其の為地下運動者は独兵に捕われの身となる。話は此処から始まる。ゲシユタボ本部では部長が直接運動員の組織網やパドリオ政権の重要人物を自白させようと運動員を拷問にかけける。運動員は上半身裸にされ椅子に坐らされて両手は椅子に縛りつけられていくのが先ず写る。全身を写さないのに分らぬが多分椅子の足に別々に縛りつけられている事だろう。総べてを観念しきつた運動員の顔。裸身の胸にジャングルの如く生えている胸毛が印象的。キヤメラは中接写で前に立つゲシユタボ部長の残忍なる姿を写し其の口から鞭刑が発せられる。部下の一人が鞭をとる思い切り強く運動員の背中に浴びせる。ピシヤリという音に運動員身体をのけぞらせて歯を喰い縛り苦痛をこらえる。然し連続の鞭の痛さに運動員力尽きてガックリ首をうなだれ気を失う。此処で場面は変り様々な拷問用具を写す。如何なる用具か思ひ出せないが日本には類を見ないものばかりで、それ等の拷問用具だけで秘密警察の拷問が如何に凄絶かを伺わせる。隣室では恋人が死ぬ苦しみの拷問を受けているのにイングリットと云う独の女性と同性愛を楽しんでいる。再び拷問場に

場面が変った時はどの様な責めを受けたのか運動員の顔は不気味にも脹れ上り観るものをして目を覆わせる。どんなメーキャップをほどこしたのか兎に角二た目と見られぬ顔を作り上げたのには感心した。然しそれでも微かに笑みを浮かべて依然口を割らない。身体には鞭の跡が幾筋も描かれて、処どころから鮮血が流れている。怒った部長は最後の責めとトーチライトを顔面に押し付ける。これは酸素づけ等を使用するあの強烈な炎を出す瓦斯但し此の場面のみは余りに残酷というのでカットされ僅かにトーチで悲痛な断末魔の声を聞かせるに飽くなき残酷な拷問の連続に最後迄口を割らなかつた運動員も苦悶の中に力尽きてガス責めを最後に息絶えてしまふ。運動員の断末魔の声を隣室で聞いた恋人が拷問室の戸を開けると悲惨な恋人の死が目に見え自分が犯した罪の深さに其の場に卒倒してしまう。此の拷問シーンの凄絶な傑作シーンには時には直視するに忍びないものがあるが大胆不敵というか本格的な拷問は一大圧巻で今迄述べた若干の場面をはるかに凌ぐ傑作なので此の映画を代表の一つに取り上げた次第だ。

以上映画の中に現れた拷問の場面を書いて見たが、おそらく今後も此のシーンは数多く登場して私達の目を楽しませて呉れる事だろう。又其れらの中で無防備都市に匹敵させて劣らぬ拷問の場面が出来るとも知れぬ。私はその事あるを映画製作者にお願いすると共に期待したい。

(おわり)

現代マゾヒズム芸術時評

(復ノ二)

原 忠 正

復刊第三項

米国映画「烙印なき男」(Backlash)

(天然色ナチュラマ)

主演 バアバラ・スタンウィック

(Barbara Stanwick)

西部劇の最もオーソドックスな方式に従って作られた娯楽映画であるが、本欄に屢々登場したバーバラ・スタンウィックが、他人の牛を奪って産を成した女牧場主という役柄で例によって悪女振りを發揮する。この人の登場する映画で最近上映されたものの中、悪女でない役を演じているのは僅かに、「カリフォルニア」と「賭博の町」の二つにすぎない。悪女といっても、此の人は病的なグロリア・グレハム(「見知らぬ人でなく」)やアン・バクスタアの軽快な理屈っぽさ(「イヴの総て」)「暴力には暴力だ」とは又違った、性格的な強力な淫虐が感じられている。従って「吹き荒

ぶ風」の感動的な幾場面や、「欲望の谷」の劇的なサディズムの隆起に見られる様にこの人の出演する映画には一種独特の雰囲気がある。現代に活躍する多くの女優の中で、所謂ドミナを真に再現し得るのは、二三の例外を除いて、エドヴィジユ・フュエール(仏「双頭の鷲」)ヒルデガルド・クネフ(独、「妖花アラウネ」)「アンリエットの巴里祭」とこのバーバラ・スタンウィック位のもではなからうか。マゾヒスト一般の好む幾つかの要件、荘嚴な雰囲気、豪華な衣裳、高貴な地位、冒し難い圧力を伴った表情、冷たい外見をもつ熱情的な言葉、そうして傲岸、不遜、傍に人無きが如き風情、これらは前記の三人に常に附きまといっている。彼女等は常に権力を持つ。不合理な而も余りにも大きな権力を持つ。米国レパブリック会社が「ナチュラマ」と名付けて新たに世に問うシネマスコープ

の一新形式は、視界一面に、この現代のドミナの姿を伝えて呉れる。この時評の立場から云うと、この様にスタンウィックを見るのみで、場面的に特に取立てて、云うべき処は少い。

復刊第四項

米国映画「六番目の男」

(天然色シネマスコープ)

主演 リチャード・ウイドマアク

(Richard Widmark)

ドナ・リイド (Donna Reed)

多くのスリラー映画で、私共に馴染み深いドナ・リイドが、性格俳優R・ウイドマアクと共演しての西部劇。最早や尋常一様の方法では、観客が満足しなくなったので最近はどうしたスリラー劇に西部劇的な背景と衣裳とをつけたものが作られる様になった。この傾向はG・クウパアの「真昼の決闘」に始まり「日本人の勲章」や「シェーン」に至って西部劇の一つのはっきりした新しい形式を生み出したかに思われる。この作も亦、この系列に属している。併し前記の数作と較べて、娯楽的要素が多く、筋立も存外に単純である。

この作品の中でドナ・リイドの新らしい魅力は充分に特筆に価すると思われる。殊に前半の部分、ウイドマアクが行方不明と

なった父を訪ねて、白人虐殺現場へ到着した時に矢張り自分の夫が虐殺されたのでやって来たドナ・リイドと会う場面、そうして、彼女が、夫の持っていた六万弗が目当てである事を語る部分、後に負傷したウィドマアクの肩の傷を焼鉄で治す部分の拷問的な凄絶さ、等の幾つかの場面は出色である。詳述出来ない事が残念であるが、「無頼の谷」や「大砂塵」等のデイトリヒやジョオン・クロフォードと比べて遜色なくむしろ緊迫した空気と雰囲気の完璧さを持っているといえよう。前項の「烙印のない男」よりは娯楽的興味に欠ける処なしとしないが、共に一見に価しよう。

復刊第五項

米国映画「白鳥」(Svan)

(天然色シネマスコープ)

主演 グレース・ケリー (Grace Kelly)

アレックス・ギネス

(Alex Guinness)

ルイ・ジュウルダン

(Louis Jourdan)

私はこの作品を漠然とした意図の下に採り上げたのではない。況して、主演女優グレエス・ケリーが、モナコ大公妃となった事の為に決してない。何となれば、ケリーの容姿も演技もその本来の性格も決して

て高貴なものではなく、明らかに旧植民地の中産階級の娘という感じしか得られないからに他ならない。

私は曾つて戦前の出版界に横紙破りとして有名であった第一書房の長谷川氏が突如として殆んど全集に近い出版をしたモルナルの作品の中から「お人好しの仙女」を知った。当時、ボオドレエルに

現を抜かしていた私にとって、この軽い味を持った洪牙利の作品は驚異であった。「お人好しの仙女」(訳者鈴木氏の麗筆によつてもあるが)は現代的感觉と、古典劇の格調と一九二〇年代迄の欧州の香りを私の心に印象づけた。「私はホテルです」という映画館の案内係である女主人公の台詞と、終幕の後で、再び開幕して登場人物の十年後を見せる人を喰った作劇法はこの作品のすべてを象徴しているかに思われた。

次いで、私は「開かれぬ手紙」「芝居はお詠え向き」等の題名によつて総括出版された数多くのモルナルの作品を読む事が出来た。「白鳥」は最初他の作に比べて魅力の少ない、理論の

勝った作に思われた。恰度私達が、代表作「リリオム」を読んで感じる様に。併し、二回目に「白鳥」はその美しい魅力を発揮して来た。ゲオルク皇太子が王女アレクサンドラに対して語る台詞は、最初から通読する者に烈しい感激と身に迫るものを感じさせる。

復刊第六項 (1)



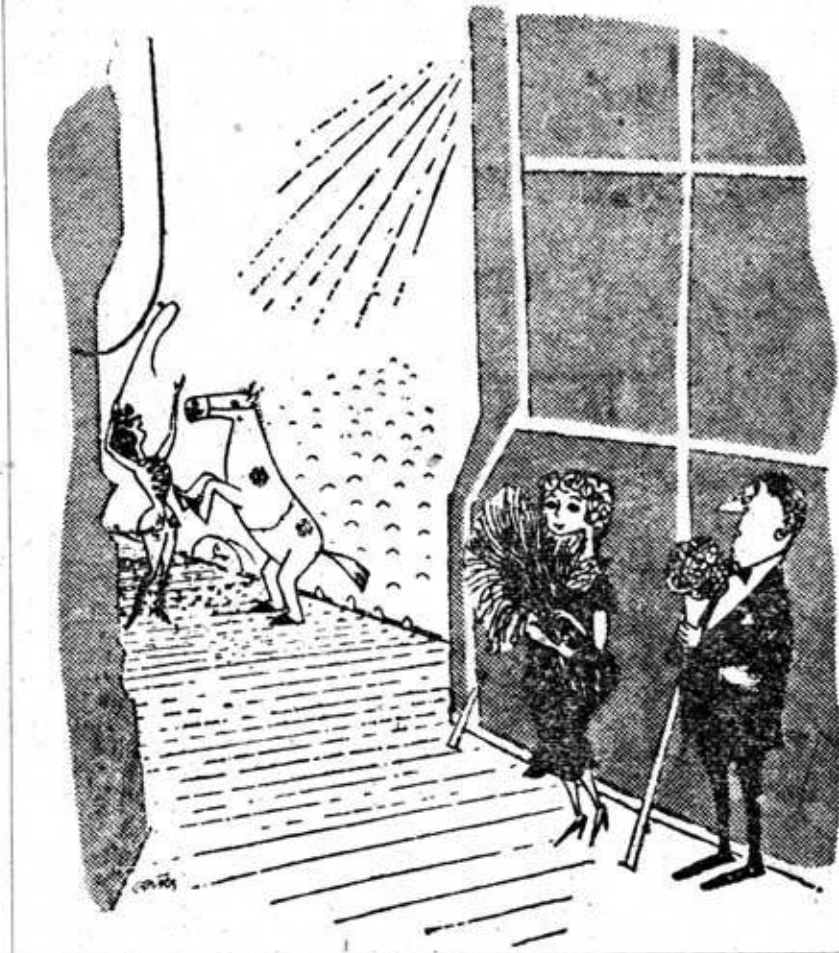
彼女はサーカスの猛獣
使いだった……
男ならしはお手のもの

「貴女は白鳥だと云われている。冷たく、世事にうといからだ。そうだ、貴女は白鳥なのです。静かな湖の上に高貴な姿を見せている白鳥なのです。白鳥は鳥であるが飛ぶ事はない。白鳥は鳥であり乍ら啼こうとしない。丁度、貴女もそうなのです。さあ、誇らしく頭を上げなさい、誇らしく、威厳をもって」

此の長い戯曲は簡単に云うと、或る国の、とりすました王妃と他の大国の皇太子との見合い結婚にからむ出来事である。皇太子がさっぱり王女に関心を持たないので王女の家庭教師のアギが、当て馬に使われる。処がアギが本気で王女を愛するようになってしまったので問題は面倒になってしまふ。王女も始めは見下げていたアギに、共感を感じる様になる。王女はアギと結婚しようと思ひ、城を出されるアギに同行しようとする。それを留めるものは、前掲の台詞に示された王女の心の中、先天的な高貴さである。モルナアルは貪慾な作家であるから、この一作の中に、同時に非常に多くの主張や問題

復刊第六項(2)

贈物の相手



を提起しているが、主として、「先天的な高貴さ」に対する主張が一貫している様になる。

「鳴かず、飛ばず、姿は飽く迄も清浄、高貴な白鳥、そうして、目下の男との恋に女としての自覚を知ったアレクサンドラにモルナアルは皇太子の口をかりて云うのである。「頭を上げて、誇らかに」と。」

上層階級の婦人達の虚栄心の為に「当て馬」としての役目をふり当てられた男、アギ。そうして、遂に、誇らしげに頭を上げた白鳥に別れを告げて、出てゆくアギの心理の変化はまさしく、清純な衣裳によってカモフラージュされたマゾヒスティックなものである。モルナアルのすべての作品が、再読三読に充分耐えるものである事から考えても、勿論、「白鳥」は作品から直接的な刺激をうけようとする人々にはむかない。この作品の内容するマゾヒズムは甚だ難解である。併し、複雑な考求は、その尽きる処を知らぬ、「環境より生れた天成の女支配者」の魅力を天国的に永続させる。恐らくはアレクサンドラ王妃は、高踏的なマゾヒストに対して、最上級の存在である事をつづけるだろう。此のアメリカ映画の不十分な再現、商業主義に毒された情ない改悪、不快な登場人物による最悪の伝播によつてさえも。

この映画の出来栄は甚だしくよろしくない。外誌はすべて、この作を「ローラ・モンテス」はおろか、「ナナ」よりも劣つ

た作としている。こゝに描かれているのは僅かにアレクサンドラ王女の拙劣な模造物にすぎない。モルナルの名言に俟つまでもなく、これは最悪の状態と云わねばならない。

※モルナルの名言とは、彼の短篇集の中の言葉を指す。

前大戦中、モルナルは士官として従軍した。『兵の中の或る者がスパイ嫌疑で銃殺の宣告をうけた。モルナルが他の士官と刑場に居ると、処刑される兵の愛人がやって来て聞いた。「あの人は、殺されるのですか」「そうだよ」と答えると、女は黙って元来た途を戻って行った。肩を張り、力強く地をふみしめて』

そうしてモルナルはいう。

『この女の歩き方、その雰囲気を再現出来るものは只、デュウゼ（伊太利の大女優こゝでは演技者の意）だけである。私達戯作は簡単に書く事しか出来ない。

「静かに退場」と。――』

以上、参考迄に。

復刊第六項

「最近の漫画誌よりの紹介」

復刊第六項 (3)



(1) 週間朝日 五月二十七日号六〇頁上段

「彼女は猛獣使ひだった」E・ハイデ

マン画

(2) 漫画読本（文芸春秋増刊）第五号一八

〇頁

「贈物の相手」一九五四年英国パンチ

誌より

マゾヒストの夢を描いて楽しい限りである。

(3) 米 漫画本（ポケットブック）

“How Green was My Sex Life.”

—L. Lariat.

(Signet Book No. 1261)

訳せば「我が閨は緑なりき」第二五頁

(以上)

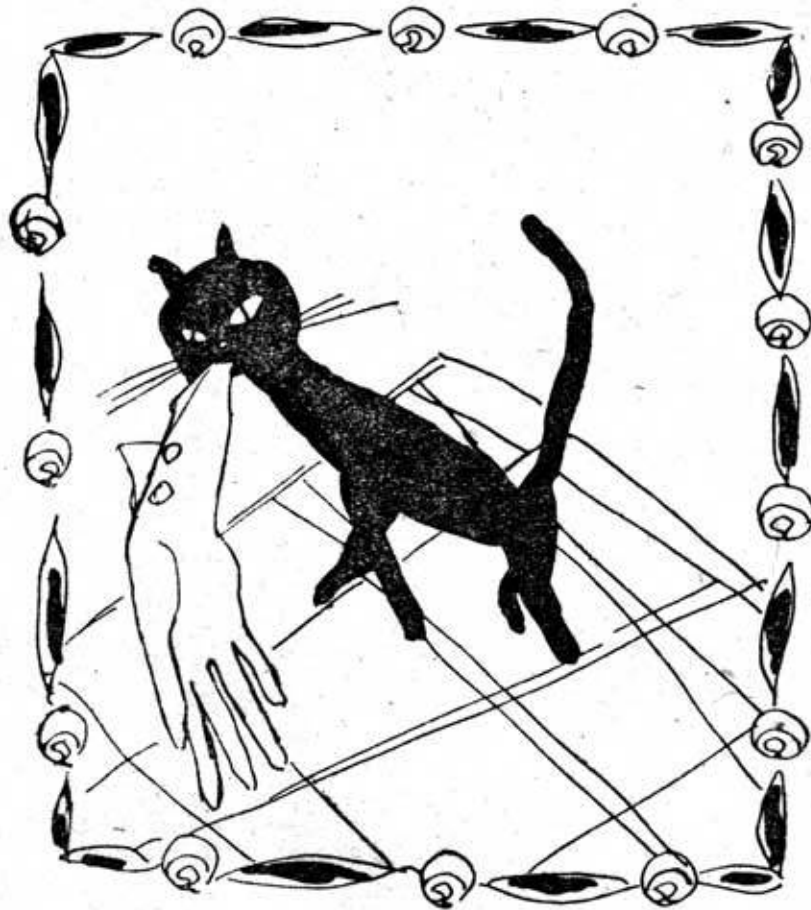
× × × ×

× × × ×

探偵小説新考

(2)

(私の書き抜き手帳より)



東 一 郎

今回は海野十三氏の作品を扱って見たいと思います。氏の作品は実に鋭く切れるメスの様な筆致です、その一種独特な科学的幻想は人の心をひきつけるのに充分な作風

でありました。今日此う云った描き方は途絶えた形です。全く惜しい人を失ったものです。

×
×
×

先ず第一に挙げるべき作品は何と云っても「俘囚」でありましょう。此れは余にも有名な小説ですので、大部分の読者は知っておられることと思いますが、此の作品を語るにはやはり取り上げるべきではないかと思ひます。

雑誌「宝石」昭和二十一年十一月号に、此の作品が武田武彦氏の要約、「名作画物語」として掲載されておりますので、一応全文書き抜いて見ました。

『あんたのために、あたし、今夜うちの人を殺してしまふわよ!』

『えッ?』この言葉に松永は、あたしの腕の中で、ピンと四肢を強直させた。何て意気地のないことだ、二十七にもなって、あたしのあれだのにさ!

あたしが扉を開けると、解剖台の上に、半身を前屈みにして、屍体をいぢりまはしてゐた夫は、ハッと面をあげた。白い手術帽と、大きいマスクの間から、ギョロリと眼が光る。

『裏庭で変な呻り声がしますのよ。気味がわるくて堪らないの。見て下さらない。』

『くッ、下らんことを言ふな!』

『本当ですよ。あの空井戸のあるあたりよねッ、行つて見て下さいよッ! 怖いわ。』
『うるさいね、さあ、案内しろ。』

夫は棚から太い懐中電灯を取って、スタスタと出ていった。あたしは十歩ほど離れて、後に随った。無言のまま、雑草を分けて進む。

『何にも居ないぢやないか。』

『居ないことはないわ。あの井戸のあたりですよ。』

『お前の臆病から起った錯覚だ!』

『呀ッ! あなた、井戸の蓋が……』

『おッ、井戸の蓋が開いてゐる。ど、どうしたんだらう?』

ドーンと夫の腰をついた。

『なッ、何をする魚子!』夫の姿は地上から消えた。

『たうとう、やったネ。』松永の声が、背後から近づいた。

『ちよっと手をかしてよ。』

あたしは、拾ってきた懐中電灯で足元の沢庵石の倍ほどもある大きな石を照した。

『どうするのさ。』

『この上へ落とすのよ。』

『えッ、それだけは……』

『何よ、弱虫!』

大きな石は、ゴロゴロ転がりだした。そして勢ひ凄じく井戸の中に落ちていった。夫への最後の贈物だ。ちよっと間を置いて何とも名状できない叫喚が、地の底から響いてきた。

翌朝、隣りに並んで寝てゐた筈の松永の姿がベッドの上にも、室内にも見えない。テーブルの上に、見慣れない四角な封筒を発見した。

置き手紙! それは恐ろしき松永の残した手紙であつた。

『愛する魚子よ——僕は夜のうちに、何者かのために、あの隆々ある鼻と、キリリと引締つてゐた唇を切り盗られてしまった。』

もはや君には二度と逢へまい、僕は祈つてゐる、君のからだの上に、僕のやうな危害の加へざらんことを……』

そのとき、入口の扉がすうっと開いて、あッ! 死んだ筈の夫が入つて来た。夫はテーブルの上へドサリと鞆を置いた。ピーンと錠があいて、ピカピカする手術器具が現れた。

『なッ何をするのです?』夫はよく光る大きなメスを取り上げてあたしを裸にした。

メスの尖端が、鼻の先にすつと伸びた。

『アレーッ。誰が来て下さアイ!』

『イッヒッヒッヒッヒッ。』

『呀ッ!』

白い物が夫の手から飛んで来た、強い匂ひだ。気を失つた。

気がつくつと、あたしの左右の腕は、肩の先からブツツリと切断され、太腿部から下も同じやうに切断されてゐる。

『悪魔! 畜生!』

『切つたところもあるが、殖えたところもあるぜ。ホラ、この鏡で、お前の顔をよく見ろ!』

『呀ッ!』

鏡の中のあたしの顔には、鼻がふたつ、唇がふたつ、ならんであるではないか!

『お前が好きな松永の肉体の一部だよ。』

夫はさう言ふと、コトンコトンと足音をさせてこの天井裏から出ていった。

天井裏の奇妙な生活が始つた。あたしは男の枕のやうな身体を同じところに横へたまま、ただ夫の持つて来てくれる物だけを口に入れて生きてゐた。用を達す時は恥しいと思つたが、医学にたけた夫だけに、少しも心配をさせなかつた。あゝ、あたしは何をされても、俘囚の身だ、何の反抗も出来なかつた。

ある朝、この真下の部屋に、数名の警官が風の如く飛び込んで来た。あたしは、警官が盛んに家探しをしてゐるのを認めた。やがて一人のキビキビした背広の男が現れ、警官に向つて言つた。

『松永を殺した犯人も、あの銀行で起つた密室の殺人事件も、みなこの室戸博士です!』

『しかし、帆村君、あの大きな博士の身体がああの部屋の空気抜きの小さなパイプを通

る筈はない。」

「ところが通ったのです。この姿を見て下さい。これが我が国外科の最高權威、室戸博士の餓死屍体です！」

帆村探偵は床の上に転ってゐた、ひとつの壺を、手にしてゐた大きなハンマーでポカリと叩き割った。

中からは黄色い枕のやうな夫の無惨な姿が飛び出した。

「みなさん、これは博士の論文にある人間の最小整理形体です。つまり二つある肺は一つにし、胃袋は取り去って腸に接ぐといふ風に、極度の肉體整理を行ったのです。かうすれば、あのパイプの中も安々と抜けます。博士の餓死した原因は、彼の手足を務めてゐた、人造手足をかくしてあつた、この台の上から落ちたためですよ。」帆村は顔を伏せた。

此の挿画は村上松次郎氏である。松野一夫氏より村上松次郎氏の描き方が私は好きである、殊に女の描き方は実に上手である——と思うのですが。

海野十三氏は「俘囚」について次の様に書かれている。

——この小説が生れたわけは、或る人が急に盲目となったが、それによって今まで目に費してゐたエネルギーが浮いて、他の

感覚に加はり、依つて普通人より感覚が鋭敏になり、つまり、頭が鋭敏になり、つまり、頭がよくなったといふ話からヒントを得て、それなら生存に必要な欠くべからざるもの以外は全部人体から切り放したら、さぞかし頭がよくなるであらうと考へ、此の小説を作ったわけである。——

全く最小人間のアイデアはすばらしいと思います。海野十三氏だからこそ考え附いたのでしよう。此れは「蠅男」にも応用されておりますが、此ればかりは「俘囚」の方が好かつた様に思われます。「蠅男」の方は少々あくどく、些かグロテスク泌みっておりますから。

然し、最小人間も面白いですが、むしろ私は、俘囚の身となつてゐる魚子が手足を切断されて、夫に飼われていた所に興味を引かれます。自分の手足が切断されたら——と云う気持は、男の人よりも、女の方が多く描かれるイメージではないでしょうか。

「奇譚クラブ」誌上でも羽村京子さんや門田奈子さんが書かれています。料理されたい気持を充分發揮させたのが「俘囚」とも云えるでしょう。少し極端ではあります。

——「流動食がいやなら、滋養浣腸をしよう。」と云う文も見受けられます。尚「三度々々の食事は、約束どほり夫が持つて来

て、口の中に入れてくれた。あたしは両手のないのを幸福と思ふやうになった。手がないばかりに、鼻の二つあり、おまけに唇が四枚もある醜怪な自分の顔を触らずに済んだ。——」と云う個所なんかは、全くよく女の心理を掴んでいます。本当にうがった言い方だと感じられます。

× × ×

次に同年十二月に刊行された筑波書林発行の「LOCK探偵叢書第三巻 振動魔」の中、「電気風呂の怪死事件」から書き抜いて見ました。

樫田武平の取調べの結果、事件の一切は判明した。

彼は、かねて、若い女が苦悶して死んでゆく所を、映画に撮らうといふ大それた野心を持ってゐたのだ。それは、多分に彼の変態性の欲望が原因したのであつたが、職業とする所の趣味道楽が、ひどく凝り固まつたことも一部の因をなしてゐた。で彼は種々と研究と計画を廻らした結果、それが夢でなく実現することが出来ることを発見した、それには、彼の行きつけの風呂向井といふ電気風呂を利用することが、最も安易な手段であつたのだ。

先づ彼は、日頃おさ／＼怠りなく向井湯

の内外を研究し、それに、特有の肉体美を備えた若い婦人を一人選んで、彼女の入浴の際、特殊の方法で惨殺しようとした計画した。

事件のあった日の暁、彼は自家の売品たるフィルムを一本と現像液を準備して、それに店にあった小形撮影機を一台と、パンや蜜柑などの食料品、束髪、西洋髪などを一緒に風呂敷に包み、向井湯の裏口へ赴いた。そして物蔭に隠れて種々と様子を窺つてのち、午前十時頃、三助由蔵の隙を窺つてその部屋から天井裏に忍び込んだ。彼が斯く忍び込むまでには、十分の用意と研究が積まれてあったことは勿論である。

彼は、先づ汽罐を開けて自らの着衣と下駄とをその中に投入して燃やし、三助部屋で由蔵の着衣をそのまま失敬して天井裏に忍び込んだのであった。

彼は勿論相当の電気知識を備へてゐた。故に、男湯の方の感電を計画し、またそれを遂行するための技術上の操作は、十分間も要せず易々と行はれた。それが終ると彼はかねて探つて置いた三助の由蔵の秘密の隠れ場所たる女湯の天井の、仕掛のある節穴の処へ来て、由蔵が設置した望遠鏡の代りに持つて来た撮影機を据えつけた。

やがて、時が来て、当日の生贄となつた例の女（後で判明したが、彼女はお照といふ二十二歳になる料理屋の女中で、その日

はこの向井湯の近所に住む伯母の所を訪ねて来た者であつた）の肉体に魅力を感じ、愈々計画の実現に志したのであった。

その時は正午少し前だつた。女湯の客はそのお照の他に僅かに三人であつた。男湯の方は、井神陽吉と他に四人であつた。頃合ひを計つて、彼は男湯の電気風呂に高電圧を加へた。果せるかな、手応へがあつて井神陽吉が飛んだ犠牲となつたのである。

それからのちは、女湯の客のうち、お照を除いた他の三人は、ひとしく上り際だつたので、隣りの騒動を機に匆々逃げ去つたのであつた。が、お照はたゞ一人、湯槽の側で間諜々々してゐた。といふのは、女湯の辱さが、裸体で飛び出す軽卒を憚からせたのと、一人ぼっちの空氣が隣の事件を決して重大に感ぜしめなかつたものらしくあつた。が、何はともあれ、樫田武平にとつては屈強の機会であつた。

彼は用意の吹矢を取り出すなり、狙ひ撃ちに彼女の咽喉へ射放つた。果して、あの致命傷であつたのだ。

転げつ、倒れつ、悶々のうち返へる美女の肉塊の織りなす美、それは白いタイルにさあつと拡がってゆく血潮の色を添へて充分カメラに吸収された。が、十数秒の短い時刻で、敢なくもお照は動かなくなつてしまつた。

だが、樫田武平は見事な成功に雀躍してそのフィルムだけを外すと、そのまゝ逃走しようとした。が、その時であつた、三助の由蔵は、別の目的を以て同じこの天井裏へ上つて来たのである。といふのは、彼は感電騒ぎを知るや、忽ちにして、警察の取調べがこの天井裏の電線に及ぶのを慮つて、其処は秘密を持つ者の弱さ、望遠鏡を外すために人知れず梯子を昇つて這ひ上つたのである。

当然、樫田武平と由蔵との兩人が、高い天井の暗がりで見合ふことになつた。が何分にも大きな声を出すことを許されぬ場合のこととて、互に敵視しながら一言も云はず、必死と眼を光らし合つた。やがて由蔵は、己が隆々たる腕力に自信を置いて樫田武平の華奢な頸筋を締めつけようと襲ひかゝつた。と、早くも吹矢は由蔵の咽喉深くグザと突刺さつたのであつた。

——急所をやられてそのまゝこと断れた由蔵の死骸を見捨て、樫田武平は怖ろしい迄緊張した気持で変装に取かゝつた。かねて目論んで置いた通り、彼は咄嗟の間にも順序を忘れずに、女装の髪を被つた。

そして再び三助の部屋へ降りて、由蔵の着衣を脱ぎ捨てると、彼は裸体のまゝ右手にはフィルムの入つた黒い風呂敷を提げて大胆にも梯子を伝つて釜場に降りた。そし

て女湯の戸口へ行かうとした。ちやうどその時彼は其処で湯屋のお内儀とぼったり鉢合せをしたのみか、ちよつと見咎められたのであった。さすがにこれには彼もぎよつとしたが、いかにも柔い媚々しい彼の体は充分に心の乱れたお内儀の眼を欺瞞すること成功した。

そして、彼は素早く女湯の戸口から中へ入って、自分が殺したお照の死体の側を過ぎて脱衣場へ辿りついた。それから先、お照の着衣をつけて下駄を穿いて、何喰はぬ顔で見張りの警官にも怪しまれずに戸外へ逃走する迄は、難なく行はれたことであつた。

が、如何に緻密の計画と、巧妙の変装を以てしても、白昼の非常線を女装で突破することは可なりの冒険であつた。

——榎田武平が捕縛されるに到つたのもすべてこの最後の冒険に敗れたがためであつた。

さて、かくして怖るべき「電気風呂」の怪事件は、犯人の捕縛と共に一切闡明されるに到つた。

やがて、あのフィルムは、警視庁へ移送されてその犯罪捜査に携つた一同の役人並に庁内主腦者の前で、たった一度だけ試写された。

が、凡そ其試写会に立会つた程の人々は

期待してゐた若き一婦人の断末魔の姿を見る代りに、ま白きタイルの波の上に、南海の人魚の踊りとは、かくもあるかと思はれるやうな、魅惑に充ちた美しいお照の肉体の遊泳姿態を見せられて、いづれ物言はぬ眼に陶然たる魅惑の色を漂はしてゐたものである。

何故ならそのフィルムは、故意か偶然か高速度カメラで撮られてゐたのである。

此の作品からは、サディズム、フェチシズム等々の面が強く書かれてゐるのを感じます。即ち若い女が苦悶して死んでゆく所を、映画に撮らうと云ふ夢はサディズムの極地でもありません。又女装して逃亡する所は、普通の探偵小説では余り取り入れておりません。氏はむしろフェチシストであつたかも知れません。中々の好男子であつたそうですから。

此の作品は処女作（「新青年」昭和三年四月号に掲載）であるだけに、新鮮でもあり、割合にのびのびと書かれてゐる様でもあります。電気風呂に高電圧を加えて失神させる所は、やはり此の科学的才能から来ているのでしょう。女湯の天井の節穴に撮影機を置いた点も中々に面白いと思ひます。最後の文のオチも中々に巧みではありませんか。

最後に昭和二十二年八月に世間書房から刊行された「ネオン横丁殺人事件」からは「墓を飼ふ男」を選んで見ました。

「こゝに窓がある」鉄つあんは、帆村探偵の耳許に、そつと囁いた。二人は、窓下に積み重なつてゐる材木の上に、静かに伸びあがつて室の内を見た。

嗚呼、それは、なんと物凄い光景だらう。二人は、グッとこみあげてくる驚駭の声を、両手を重ねて、押し戻したのだつた。

見よ、そこには、室の中央に、大きな浴槽のやうなものがあつて、沸々と湯気があがつてゐるのだつた。その丁度真上に、これはまたむごたらしく、素裸にされて、口には猿ぐつわを、両腕は背後に廻して針金の輪を、まきつけられてゐるのは、正しく若い女だつた。その女は、梁の上から、一本の綱でもつて、垂直に吊されてゐるのだつた。しかもその綱の端は、悪鬼のやうな嘲笑を浮かべることに夢中になつてゐる川田逸郎——いや、鎌手豹が握つてゐて、徐ろにそれをゆるめることに裸形の女は、すこしづつ、湯気だつ浴槽の中に下つていった。

(何者だらう、あの女は！)

帆村と鉄つあんは、同じことを考へた。

ふと見ると窓のすぐ向うの卓子の上に、見覚えのある淡紅色のスカートが投げ出されてあり、その手前には、これも又、忘れることのできないハンド・バッグが投げ出されたまゝ、口を開いてゐた。その間にキラリッと光るものが見えてゐるのであったが何やら黒ずんだ血痕のやうなものが附着してゐる薄歯の短刀だった。いまは、すべてを了解することが出来たのだった。

果然、梁に釣るされた赤裸の女は、不思議の女優「春日卯目子」に外ならなかった。

鉄つあんは、この女から、度々襲撃を喰つたことも忘れて、いきなり窓から、飛びこもうといふ気配をみせたので、驚いたのは帆村だった。必死になつて鉄つあんを押へつけた。

「煙山君、卓子の上をみたまへ、あそこに載つてゐるのは、どうやら例の重要書類らしいぞ」

この帆村の言葉は、鉄つあんの心を動かすに、十分だった。なるほど、よせ集めて四角につき合はせた一枚の大きな文書が、窓硝子をあけさへすれば、手の届くやうな場所に載つてゐるのだった。

「残念だ、届かない」鉄つあんは歯を喰ひしばった。

「見給へ、チャンスは来るぞ」帆村は興奮ししわがれた声を絞るやうにして叫んだ。「だが、あゝ何といふ恐ろしいことを、おれは今、目の前に見てゐるのだらう」

春日卯目子の裸体は、徐ろに、湯気たつ浴槽の中に、半分ほどもつかつてゐるんだが、グッと鎌手豹が綱を手許にひいたときグッと宙に浮かんた女の死体には、腰から下が、最早見当らなかつた。

あの湯気立つ不思議な薬液の中に、水のごとく溶けてしまつたのだらう。

二人は、悪鬼鎌手豹が、同臭の敵とでもいはうか、同じく殺人鬼に分類されるべき春日卯目子の鵬殺しに酔ひ痴れてゐる間に硝子窓をそつと押しあけると、手をのばして密書を盗みとつた。

帆村探偵と、鉄つあんは、死物狂ひで、窓下を逃げだしたのだった。

これは私の記憶では昭和六・七年頃、週刊朝日か、サンデー毎日誌上に竹中英太郎氏の挿画で掲載されてありました。此れも私が中学生の頃興味深く読んだ探偵小説の一つでした。勿論此作品は、書き抜いた個所がやまで竹中氏の挿画も実に生々生々しく印象深く残つたものでした。此の雑誌は何時の間にか紛失してしまつたのですが、竹中氏の挿画は未だに記憶に残っている程

です。

当時は探偵小説に対する興味と、不安とを強く感ずる年頃でしたのでしよう。その挿画の凄じさ——見まいとするのですけれども、結局は見えてしまふのですから人間の心理なんて妙なものです。サディズムも此辺まで来ると凄じ過ぎます、人間を溶かしてしまふのですから。此れこそ科学的幻想を海野氏は適切にまで描いた作品と云えるであります。

特に初期の作品としては印象に残るすぐれたものでありました。私は此の竹中氏の挿絵に似通つた作品を雑誌「風俗草紙」昭和二十八年九月号、増富次平作「俺が縛つた女」の挿絵に見出しました、書かれた画家が誰れであるかが不明でしたが。

戦後よりも戦前の、それも初期の作品に変わった犯罪物が多く、且つ又すぐれたものを見出します。そして単なる仮空なものに終らず、実現性が可能な場合が多い様に感じられます。

(以上)

× × × × ×



芝居の責め

紅皿欠皿

本田 由 郎

—

最近(六月二十九日)スミダ劇場にて『月
缺血恋路宵闇』が上演された。今では、この
芝居の上演される機会がなく、スミダ劇場で
上演された時も、小蕾会という中村歌右エ門
一座の若手連による第一回研究会公演会とし
た。従って、後援会会員だけの公開だったわ
けです。

キャストは、河竹黙阿弥作、渥美清太郎演
出、中村其鶴補導、二幕六場、正木の息、左
近太郎(中村万之丞)同若徒、真吉(市川芳
次郎)継橋の室、片もひ(中村吉弥)腰元、
渡鳥(市川おの江)洗濯女、おつめ(坂東し

ほみ)妹娘、紅皿(中村吉之助)姉娘、欠皿
(中村福芝)その他数人。

物語の内容は、本誌の読者の皆さま方なら
よく御存じのことと思いますが、簡単に筋書
を述べてみましょう。

里見家の家臣、継橋素太夫が紛失した家宝
の刀、小月形の在処詮議のために旅に出て、
早くも三年目の留守宅での話——。

今日は、奥方片もひが、妹娘の紅皿を連れ
て柴山の仁王様へ参詣に行つて留守中、腰元
の渡鳥のはからいで、欠皿は恋人左近太郎と
今宵嬉しい語らいをすることが出来るようにな
った。しかし、それも束の間、片もひの突
然の帰宅に、左近は周章狼狽して草履もはか

ずに逃げ帰った。片もひと欠皿とは、生さぬ
仲の間柄である。片もひは、継橋家へ後添い
として紅皿を連子して縁付いてきたのだ。こ
とごとに欠皿をいじめる継母になっていた。

案の条、片もひの眼に映った屏風、酒肴の
膳部、それに男の草履、渡鳥の言訳けも、姉
を思う紅皿のいじらしい程の詫びの言葉も、
怒りに燃えた片もひには、かえて怒りを増す
だけにしか役立たず、下郎脚平が逃れぬ証拠
として先刻拾った「楓の君へ、左近より」と
書かれた手紙を差出したから、片もひの憤り
は益々激しく、まして、相手が左近太郎とあ
るからには、缺血は折檻あるのみ、遂に欠皿
は庭に引き据えられての責折檻、それも皆、

紅皿を左近太郎に嫁がせようと思っていた片もひの願いが、打ちくだかれた腹いせに外ならなかった。

その夜、庭先では、脚平に監視されながら欠皿が荒縄で縛られていた。

二

庭先の松の木に、見るも無惨な姿をさらし荒縄でギリギリと縛られている欠皿、着物はくずれ肩から滑り落ち、縛られた腕の縄の処で止っている。落ちた着物の下から眼にみえるような朱の長繻絆が見える。その傍では下郎の脚平が、のんきげに煙草をうまさうにふかしており、欠皿の方に好色な眼ざしを向けている。

煙草をすい終り、煙管を腰にさすと、脚平は欠皿に話しかける。

「夜風が身に苦しかろうが我慢しなせいよ」
欠皿は今の今まで我慢していた気持も失せ果てたのか、縛られたまゝ泣きくずれてしまふ。

「この様にさいなまれるのなら、いっそ一思いに殺されたい。」

脚平はそれを見て、心から同情しているように、

「こんなひどい親なんてあるものか。お前がその心持にさえなけば、逃してやらないものでもないわい。」

「そりや脚平、本当のことかえ」

「本当も嘘もねえ、冗談で云えることか」

「本当のこととしても、母さんを裏切ることなるわえな」

「そんなのんびりしている時じゃねえ」

脚平は欠皿に近づき、松の木から欠皿の縄を解くが、欠皿の身体に縛ってある縄は、何か考える所があるのか解かず、木の方は縄を解いて、縄尻を手に持ち中央に出て来る。

「欠皿さま、逃がすには逃がすが、そのかわり、私の云うことを聞いてもらいたい。」

脚平は欠皿にいどみかゝる。欠皿は、（主人に向つて人非人）と荒縄で縛られた身体で脚平の毒牙をさけようとする。が、弱い女の身の上、その上縄で身体を奪われてゐるから、脚平に縄尻をとられ、どうと倒れる。あわや落花寸前という時、片もひが洗濯女おつめとつれ立って庭先にくる。

脚平、あわてゝ欠皿の身体を抱え起し、縄尻を手に空とぼける。この洗濯女おつめは、いやしい職を前身に持つ女で、町の蛇使いをしていたとかの身分の者、こゝで片もひは、左近太郎を思い切れと迫る。欠皿は只一度の契りでも、夫は夫と首を縦にふらない。

「左近太郎殿を思い切るか、それとも痛い目にあいたいのか、さあ、さあ、さあ、えゝ、しぶとい」

隣にいるおつめが、

「顔に似ず強情な」

「これなら、痛い目にあわせばなるまい、思いきり、打ちやれ、打ちやれ。」

「へえ奥様、こゝに青竹がございますれば、この竹にて」

「ぞん分に打ちすえてくりやれ」

脚平は、先刻は逃してやろうと云つた口をぬぐい去って、奥方様へ忠義の見せどころと欠皿の背を思うさま、力一ぱい打ちたゝく。

「ヒエー」

欠皿は脚平の青竹のムチを、身体をよじて逃れるが、脚平は、それを逃げる方へと無情にムチ打つのだ。片もひが、

「どうじゃ、もう十分、痛い目も見たであらう、左近殿を思い切つてしまつては、どうじや」

だが欠皿は泣くばかりで返事をしない。

「まだ折檻が足らぬとみえる。」
側でおつめが、

「これでは、奥方様じきじきで折檻なさらずば」

——この時、『ばばあ、うそつけ』『かわいそうだぞ』等の野次がとぶ。——
片もひが手に何か持つて、欠皿の方へ行こうとする。

「奥方様のお手にあるのは？」

「針の束ねだ」

「これは良いこと、その針でついたとて、生

命に別状、いや、よもや死すこともありませんまいが、さぞ痛いであろうに」

「死さず生かさず責めるのじや」

片もひは、その針の束で欠皿の顔、乳房、股、ところかまわず突き立て突き立て、欠皿を「痛いかえ、苦しいかえ」と責めたてた。それでも痛々しげに悲鳴をあげるだけなので業をにやしていると、一匹の青大将が庭にはいだしてくる。おつめにその蛇を使わして蛇責の手を用いる。

欠皿は脚平に縄尻をとられ、背を押さえつけられ、身を一寸も動かぬ様にされ、青大将を胸のあたりへ這ってきても、身うごきも出ず、後手に縛られていたので胸の青大将を払いのけることも出来ない。只、苦しげに悲痛な声をあげるだけ、おつめが蛇を欠皿の顔面に這わせると、「うーん」と呻めき声を上

げて気絶してしまう。気絶してしまった欠皿を引き起し、面上に水を吹きかけて気づかせ今一度蛇責にしようとする。

然し、おつめの不注意から蛇を逃してしまつたので、この上はと、断食責にすることにした。脚平が縄づきの欠皿を引きずるようにして土蔵の中へ押込んでしまふ。

三

我が娘の不幸の身の上を知らず、素太夫は宝剣と所持金五十両とを持って旅を続けていた。中仙道、鳥川で、天目須之助の悪計で、宝剣と五十両を奪われて殺されてしまふ。

天目須之助、大胆不敵にも継橋家へゆすりに来るが、片もひは須之助の悪事を読みとるのであった。今は悪事露頭と片肌ぬいで片もひに斬かゝるが、須之助の腕に三鱗のあざ、

片もひはこのあざに見覚えがあった。片もひの前夫、天目法印の間に出来た実子、不思議な親子の対面であった。この時、須之助が土産だとして出したのが、素太夫から奪い取った宝剣である。時に、腰元が法印の来訪を知らせる。今では片もひの兄だと欺つて、この家に出入している。

一方、土蔵へ押込められた欠皿は死を待つばかり。見張りの脚平は、相変らず五合徳利を前にして呑気なもの、腰元渡鳥、左近太郎の若党真吉の付きで、欠皿は死をまのがれ、助け出されると同時に、父素太夫の横死を知る。左近太郎の助太刀で仇討しようと思ひし苦心の末、目出度く仇討をすませ、左近太郎と晴れて夫婦になるのだった。

以上で、『紅皿欠皿』は終る。

快傑茶坊 (南寿美子)

この映画の後篇で、彼女は悪代官の手下に誘い出され、野原で襲われる。両手を掴まれる所でカット、次のシーンでは後手に縛られ代官の前に引き据えられている。後からも写してくるが薄暗いので残念。次いでその姿のまゝ、牢の中へ入れられている所を恋人が救いに現れる。後手姿で格子に駆け寄るが格子の為よく見えない。最後に恋人と共に磔柱

に縛り上げられ処刑されようとするが、その縛り方は緊縛感に乏しい。(B級)

謎の金塊 (泉圭子)

隠された金塊をめぐるギャングはその謎を知る人物に白状させる為、その娘を或る倉庫に監禁する。後手に縛られ、ギャングに囲まれて引き据えられているが、父親の前へ連れてゆく為、自動車に乗せて運ぼうとする。併し緊縛感に乏しい。(C級)

キツスで殺せ (C・リーチマン)

ギャングの為、裸にされ吊り責めを受けるが画面は足を写し、悲鳴を聞かせるだけ(C級)

花の兄弟 (三田登喜子)

主人公を慕う芸者に扮し、拐かされ座敷の隅に扱帯で後手に縛られている。口には猿轡をかまされているが、その結び方は髻の上に結んである所は珍らしい。悪者は彼女の前で

「髷が崩れて髪のはつ
れている所は何とも云
えない」と云い乍ら抱
きすくめようとする。

不自由な身体で必死に
もたえる姿を後から写
しているが肩より上を
写している為、後手縛
りは残念乍ら見えない

(B級)

予告篇

魔の死美人屋敷 (東映) 丘さとみ

女中に扮し、使いに出た際、悪者の為、或
る屋敷へ連れ込まれる。

祭に消えた男 (松竹) 雪代敬子

鼠小僧を誘い寄せる囃としてやくざに誘拐
される。

暴力の王者 (新東宝) 久保菜穂子、水帆順
子、ギヤングにより人質にされる。

怨霊佐倉大騒動 (新東宝) 花井蘭子

御存じ佐倉宗五郎の妻として白衣にて定法
通り磔柱に十字に縛られ処刑される。

怪猫乱舞 (東映) 千原しのぶ

おなじみの水戸黄門漫遊記第八話の中で逆
臣の為、牢へ閉じ込められる。

【女優緊縛映画速報版】

最近の映画から

白石

稔

謎の幽霊船 (東映) 高千穂ひづる

旗本退屈男シリーズ。琉球の王位をめぐつ
て牢に閉じ込められてしまう。

悪魔の街 (日活) 由美あづさ

主人公 (河津清三郎) の恋人に扮し、ギヤ
ングに誘拐され、倉庫に連れ込まれる。

与太者と若旦那 (東宝) 青山京子

やくざに連れ去られ、一室に閉じ込められ
る。

魔の花嫁衣裳 (大映) 南左斗子、矢島ひろ

子、前後篇ものであるが、その後篇で南は殺
人犯人の為誘拐され、椅子に縛りつけられる。

滝の白糸 (大映) 若尾文子

れようとする所を救われる。

快傑阿修羅王 (新東宝) 遠山幸子

疾風鞍馬天狗 (東宝) 扇千景

アレクサンダー大王 (アメリカ) C・ブル
ーム

古城の剣豪 (〃) K・ケンドール

この外、今年になってから現在まで誌面に
紹介されなかった映画のうち、緊縛場面の予
想されるものをあげておきます。

(剣豪対豪傑 (新東宝) 藤木の実

極楽剣法 (日活) 新倉美子

豹の眼 (大映) 藤田佳子

誤って人を殺し、裁
判される。手錠姿の彼
女がみられる事と思わ
れる。

四谷怪談 (新東宝)

相馬千恵子

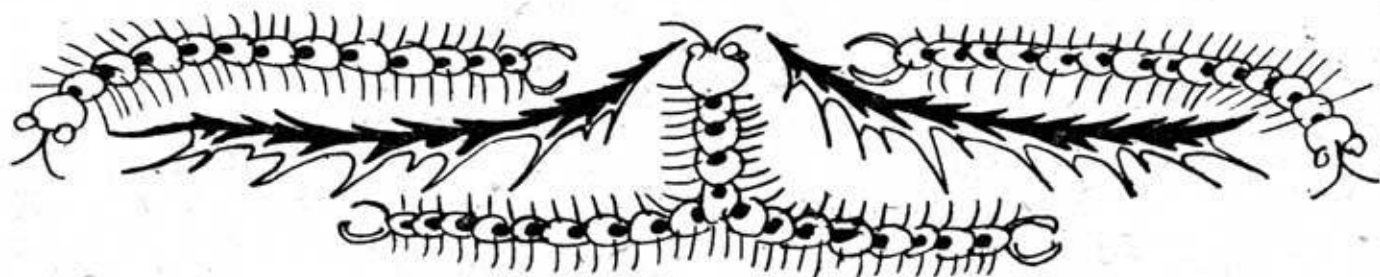
皆様御存じの怪談も
の、戸板に打ちつけら
れて川へ捨てられるシ
ーンがあるかどうか。

満月あばれ笠 (東映)

長谷川裕見子

横恋慕の侍に拐かさ

(以上)



悦虐に関する一考察

夫 春 原 菅

一、人類の残虐性

第二次世界大戦後の戦争裁判に於て日本等敗戦国の残虐行為が問題となつて、侵略行為と残虐行為が文明の名によつて裁かれるのなど、戦勝者側が大見えを切つたが、侵略行為も結局相手に対する加虐行為なのであるから、これは考え様によつては、「文明の名によつて残虐行為を裁く」ということに統一されてよいと思う。然らば「残虐行為」は戦敗国のみにあつたのではないから、等しく戦勝国のそれも裁かれねばならなかつたのに、一向それは問題にされなかつたのである。これは結局「文明の名にかくれて戦勝国側がほしいまゝに戦敗国を裁いた」のであつて、その裁き方が如何に公平であつたと仮定しても、そういう一方的な行為こそやはり相手方に対する処罰、即ち加虐であるから、たとえそれが「文明の名」に於てであらうとなかろうと「残虐行為を裁く」という事にさえも矛盾するわけであつて、全くのナンセンスにすぎずわけても引合ひに出された文明こそいい面の皮である。しかし戦争裁判進行当時は戦勝国側が絶對的に君臨していたので、敗戦国側としては、誰も異議を唱えることは出来なかつたし、まして、こんなことを云ひ出したらどんな目にあつたか判らない。しかしあれから僅か数年しか経っていない今日、既に侵略行

為や戦争挑発はすべて所謂同盟国側にあつたと決定的に考えられていたことにさえも疑問が生じて來てゐるのである。いわんや残虐行為が戦勝国側にも相当あつたこと、そしてそれが戦勝者なるが故に何の処罰も蒙つていないことを問題として差支えないのは當然である、世界史（それは戦勝戦敗いずれの側によつても歪められていないもの）をひもとけば日本などは諸外国にくらべては、全く平和的であり侵略行為も殆どなく、残虐な事件も余り見当たらないおとなしい民族ということができる。英国人の殖民地に対する残虐行為、支那に対する侵略、就中阿片戦争などや、米国人のインデアンに対するリンチなどをくわしく調べれば、日本人の残虐性など、その足下にも及ばないことがよくわかるであらう。更に暴君ネロの大量虐殺やイワン暴帝の圧政、敵の頭骸を盃の代りにしたり、油いりなどの極刑を平氣で行つた支那人等々に、実に夥しい残虐行為を見れば、世界史はさながら「残虐の歴史」といつて過言ではない。これらをまとめて「人類残虐史」編さんしたならば、まことに面白く有意義であると思う。とまれこれら諸外国の事例をみれば、我が日本などは残虐にかけては実にチンピラ的存在にすぎない。

扱、私がこんなことを書き出したのは、決してこれから戦争裁判の是非というような国

際政治的論議を始めようというのでもなく人類の残虐性を文明の名に於いて裁きたいというのでもないのである。そんなことは他の者に委せておけばよいし、実は大したことではないのである、では一体私がこんなことを書き出したのはどういうわけであるかと云うと、これによって、残虐性が人類全般にわたる共有の性格であるということを実証したいがためであり、更にその残虐そのものが文明の名によって裁かれねばならぬ「罪惡」であるか否かという問題を提起したいからに他ならない。

残虐行為を犯した者を文明の名を借りて処罰する残虐な人類、という事実は、もはや前述の記事によって明らかである。とするならば、残虐性というものが、人類共通の固有本能であることも又、くどくど説明する必要のない事実である、残された問題は、同じく人類共有の文明によって、この人類共有の残虐性が「罪惡」として裁かれねばならぬか否かということなのである、もしそれが裁かるべきものとすれば、当然、戦勝国の行為も裁かれねばならぬのであるから、我々はいかに戦敗国民といつても不当に我慢してはならぬ直ちに起つて、戦争裁判の訂正を要求し、且つ戦勝国の行為を弾劾するために一致団結せねばならぬ。一日も文明の名に於いて偷安を貪つてはならない筈である、だが、そ

うでないならば、何もとり立てゝ騒ぐには当らないのである。そこで私は結論を先に云おう。恐らく本誌読者の大部分がそう思つて居られるであろうごとく、そして今日迄本誌が声を大にして叫んで来られたごとく、残虐性そのものは、他の諸本能と共に文明を形成する一要素ではあつても、決して文明によつて裁かるべき罪惡ではないのである。これは西洋哲学やキリスト教はともかくとして、東洋哲学や大乘仏教などに於ては疾くに解決されている問題であつて、私一個人の見解ではない。先に私が「大したことではない」といったのは、実にこういう大乘的結論を持つていたからであつた。

二、残虐性と道徳性

さて、斯様なことを云うと、さぞかし世の道徳論者からは、左様なことでは倫理道徳は成立たない。法律も秩序も無視されると反撃されるであろうが、決してそんな心配はいらない。我々には残虐本能と共に、道徳本能も持っているものであつて、何も毎日サジ行為やマゾ行為（これをアブノーマル行為と云う者もあるが、私はこれに賛成できない）ばかりやつてゐるのではなくて、結構人助けをしたり共同募金に応じたり、平和運動に参加したり義理人情に涙を流したりしてゐるのである。そして本誌の様な特殊本（変態本やエロ本と

呼ぶものもあるが、これにも賛成できない）ばかり読んでゐるのではなく、哲学書や宗教書にも親しんでいるのである、一見矛盾する如く見えるこの二つの本能が、我々人間の中心には渾然として融和してゐるのである。若しそのどちらかを否定しようとする者こそ、偏執者でありアブノーマルなのである。宇宙には赤もあり黒もある、赤だけしかない黒だけが正しいと思う者はない。若しあつたらその者こそ変態なのである。然るに、世上の道徳論者は往々かような誤りを犯して、而も得意になつてゐるのであるから、実は彼らこそ最もアブノーマルなのである。（アブノーマルという言葉は斯様な時に使うべきであつて、残虐そのものは変態でも異常でもない）これに比べれば、彼らの説におびえて、自分の身内に秘められた加虐性又は被虐性をとりわけ恥かしい罪惡のように思い悩んでゐる人達は余程純情であり正常に近い。（私がこゝでなぜ正常といわずに正常に近いと云つたかと云うと、残虐性のみに偏つて道徳性のない人間は勿論道徳一点張りの者と同じく異常であるが、マゾやサドの傾向が多少強くてもそれを罪惡視してゐる者は道徳性があるので正常なのであるが、罪惡視してゐるうちはまだ眞の認識に達してゐないわけであり、道徳偏執の傾向があるから、正常そのものではない即ち「正常に近い」というべきであるからだ。）

更に私は、道德性を振かざして、嗜虐性やエロなどを「脊徳」と叫ぶ者が自分自身残虐性やエロを捨て切れない事実、否、普通人以上はその傾向が強い事、而もそれを蔭で楽しんでいゝという偽善的な事実を指摘したい。そして道德をふりかざして他を責めようとするそのことが、既に「精神的残虐行為」であることを明確にしておきたい。かように見ると、真の道德性は決して残虐性を罪惡として処罰しようとしてはいけないことがわかる。もしそうでなければ道德性そのものが残虐性の一つであるか変型であるということになつてしまい、道德性という一つの独立的立場を主張できなくなるのである。道德問題もこれまで深く考察するのだから本物でない。しからば罪惡というものは何かというと、かような「真実」に反することなのであり、残虐とか殺人とか一定の現象や事件に限定さるべきではない。道德をふりかざして他を責めるような偽善も又、立派な罪惡なのである。つまり道德性を以て残虐性を否定する者は却つて道德性に反することになるのであるから皮肉な次第である。

三、残虐と嗜虐と悦虐

このような人生の基本問題に関する重大事を以上の如く簡単な説明で片付けたのでは不充分的なそしりを免れないが、その結論は真理

であり、賢明なる読者は必ず私の云わんとする処に共鳴して下さったことゝ思う。そこで抽象的な論議を一応打切つて、少々具体的な考察に入つてみたいと思う。

私はこゝで残虐性という言葉を使ったが、これは実に広い意味を含んでいるのであつてこれを具体的に分析すれば、単なる暴力行為と性的興奮を伴う嗜虐行為とも分けられようし、更に嗜虐性は加虐性とも分けられる、更に又この二つは、一時的、突発的なものと永続的、趣味的なものに分けられよう。大体本誌の扱われているテーマは、この中で趣味的、永続的な性的満足と伴う嗜虐性であると思う。これは人類共有の残虐本能に於いては一つの特殊の範疇を形成する、故に或いは「変態」と云われ、一般の残虐行為とは區別されるのである。そして此を扱う人々も、この傾向を持つ人々も、自ら「サジズム」「マゾヒズム」と唱え、残虐性という一般的用語を使おうとしないばかりか、これを嫌うようである。勿論私がこゝで論じようとするテーマもこの範疇に属するのであるが、それを説明するためにはやはり一般的残虐性の考察から始めなければ基礎がしっかりしないので、前述のような一般論を展開したのである。そしてやはり所謂嗜虐趣味は残虐性の一形態であることは間違いない。しかし悦虐同好者が残虐性という一般的用語を使うのを喜ばないの

と同じに私もそれを嫌う者の一人である。なぜそうなのであろうか、これが重大である。即ち、所謂残虐行為には「醜」のみあつて残酷味が強すぎるに反し、我々の悦虐は「美」を探索するためであり、残酷というよりも恍惚を本旨とするからである。とするならば、悦虐こそ「残虐性」中の華であり、「変態」どころか、残虐本能の芸術的表現であり美的昇華なのである。これあればこそ、文化人のたしなむところとなるのであつて、所謂残虐行為の「安全弁」となるのである。だから、私も始めこれを残虐性として説明するのをためらつたのである。そしてこれは何か「性的本能」の一変形か、或いは性本能の変態、即ち「変態性慾」として説明しようと思つたのである。事ほど左様に縛絵を見て悦虐するといふような、秘かなたのしみは所謂残虐性とは程遠く思われるのである。私自身、縛絵に強い愛着を持っているが、決して性生活は「変態」ではないし、人一倍平和論者であつて所謂残虐行為などは全く出来ないお人好しなのである。これは決して自己弁護でも偽言でもない。具体的な真実である。本誌など振りむきもしない没趣味な人達や道德論者達の方が、余程人が悪く、粗野で残酷な者が多いように思われる。恐らく同感される同好者諸氏は多いことゝ思う。こんなわけだから、私も初めは何うしても嗜虐趣味を残虐性の一

分野だとは思いたくなかったのである。しかし特別にそういう趣味を一つの本能として独立させることは困難であった。それで若い頃はいろんな性書の定説に従って変態性慾なのだと思っていた。だからその「変態」ということに就いては分悩んだり秘かに恥じたりしたものだ。しかし今では私は「変態性慾」だ、という説には賛成できない。これはあくまで、性慾に關係はあるけれども、「残虐性」の昇華」であると見る他はないのである。何から何まで性本能一本で片付けてしまおうとするフロイド的行き方ではこの複雑な生物「人間」は説明出来ないのである。フロイド自身「性衝動と無關係の残虐行為」の存在を肯定しているといわれるが、それはまことにあり得ることである。これを「変態性慾」とするよりも、残虐性と性慾との結合と見た方が正しいであろう。しかも、嗜虐性が常に性慾を伴うのではなく、縛絵を描いたり観賞したりする時は、純粹に「美的感情」の対象としている場合もあるということも考えられるし射精を伴わないエクスタシーを味わうことが出来るということも考えられるので、明らかに「嗜虐性」は独立した一本能「残虐性」の範疇に含まれるべきものである。更に緊縛によるプレイが正常な性行為の前戯として行われることが多いという事実を見ても、又悦虐者の中には、被縛や加虐の方により快感度が、

高い者が多いことを見ても、このことは肯けらると思ふ。

四、悦虐作品の本質

以上述べた様に、悦虐は単なる残虐ではなく、むしろ美的芸術的方向に昇華され浄化されて行くものなのである、そこで自からそこに審美的要素の勝った対象が要求されるのは当然である。縛絵や責め写真及び緊縛プレイ等に美が求められ、種々の趣向がこらされるのはかゝる理由によるのである。それが醜惡な対象を持つと思われる畸型愛好にしろ汚物愛好にしろ、それは皮相的な見解や、表面的な美醜の概念でははかり知れない「美」をそこに見出しているのである。いかなる畸型と思われる者でも、造化の手に成った人間である以上、どこかに他にみられない美を有するであろうし、どんな汚物であつても、不浄不穢とまで徹底した哲学や心眼から見れば汚でも醜でもない、貴重な存在となるのである、いわんや美女の賣場や、緊縛芸術の美的価値は我々にとって限りなく大きいものである。そこで縛絵、責め写真、悦虐文学などは、勿論この要求に応えたものでなければならぬ。たゞ女を縛った絵であれば何でもよいというわけには行かない。やはりそこに縛り絵としての独得な性格と美とがなければならぬ。先ず第一に考えられることは、姿態の美

である。姿態は最近の傾向としてヌードが多いことは当然であるが、ヌードは往々にして美よりも醜に近い形態を生じることがある。裸体が人間の美の極致であるというのも、全ての人間にあてはまるとは云えない。みにくい裸ならむしろ美しい着衣の方がよいのは云うまでもない。悦虐作品に限らず近頃は裸体画やヌード写真が多いが、むしろ着衣より金もかゝらず安直だからという理由で濫作されている傾向があるのでないだろうか。女性の盛装には相当金がかゝるし、絵はとにかく写真となるとヌードの方が面倒でないということとは自明であり、この傾向を助長しているとは見てはひが目であろうか。裸体もよいが、女性の誇りは何といつても盛装にあるのであるから、その誇らしい盛装の女性を縛り上げた作品は絵にしる文にしる写真にしる最大の被虐効果をもたらすのではなからうか。盛装中でも花嫁姿が女性として最高のものである以上、当然花嫁の賣場が、もっと現れてもよい筈であるが、それが殆んど見当らないのはどういうわけか判らない。これについて振袖姿（舞妓、令嬢、時代物の腰元等）が着衣の責め作品としてもっと登場することを希望するのは筆者だけではないと思う。次に表情の問題であるが、これが最も重要なことであるにかゝわらず余りこの点で満足できる作品のないのは嘆かわしい。即ち悦虐は残虐美に発

するものであるから被縛者や責められる女は苦悶或いは悲痛の表情がなければ、いかに姿態の美があつたとしてもそれこそわざびの効かないにぎりずしの様なものであつて、画竜点睛を欠くのである。絵はともかく、写真にはポカンとした表情のものが多いようだ。こういうものは興ざめること甚しく、中にはさも作りものといった作意まる出しで、ナンセンスなものさえある。(本誌ではないが前に他誌の写真でこういう愚劣な作品を見て何だか馬鹿にされたように感じたことがある。こんなものは発表しない方がましだ。)

次に文芸についてであるが、告白、体験記などは写真の如く現実ありのまゝが尊いとしても、創作となつた以上は(絵でも同じことだが)たゞリアルであるだけでは価値がないので、むしろ思い切つてフィクションでなければならぬ。フアンタジックなものであればある程興味深い筈である、こういう意味から一流の画家や文士が本格的に悦虐作品を創作することが我々の望むところであるが、それは一般の無理解な現状では実現困難であるから、本誌に良き作家を育て、頂くこと、本誌所属の画家により美しき本格的作品の労作を期待する他はないであらう。

五、悦虐プランの提唱

悦虐芸術には縛絵、責写真、悦虐文学の他

に見落してならないものに悦虐劇がある。勿論悦虐場面のみを中心とした演劇は稀にしかないというより殆どないが、責場の多い芝居や女の縛られる映画は相当ある。終戦直後俄然全国を風靡して驚異的ロングランを打ち立てた「肉体の門」は恐らく責芝居の代表的なものであろう。闇の女のリンチという特異な題材のみがあれ程観客を動員したのではなくやはり責場の魅力がそうさせたと云つてよいと思うが、町子が長襦袢一枚にむかれて焼ビルの柱に後手に縛り上げられ、鞭打の折檻を受けて身悶える場面、マヤが吊し責めにされる場面などが忘れられず、何回か見に出かけたものだが、歌舞伎でもその頃、銀閣寺が引き続き二回ほど上演された。雪姫が美しい振袖姿で縛られ乍ら身悶えて踊る絵画的な美しさに魅せられて一幕見に数回足を運んだ。其他明鳥や中将姫や血屋敷等が責場面の長時間続く芝居であるが、中将姫の雪責めは看板に縛られた絵が出ていくくせに舞台では縄目なしで引出され折檻されるだけなのでガツカリしたことがある。映画ではこれに類した縛場面の長いものが殆どないから物足りないが、大概の時代劇には女の縛られた場面は出てくるしかし或る程度責場面の長いものでなければ悦虐作品とは云えない。責芝居は其点或程度満足出来るが近頃は余り上演されないし、責芝居だけ専門という場合は全然ない。ストリ

ップ劇場だつてあるのだから一つ位は専門の責劇場があつてもよいのではなからうか。悦虐劇は何といつても「動き」と「声」とが加味されるので写真や絵に見られぬ魅力があり悦虐芸術の圧巻なのであるから、若しこれの常設が不可能であるならば、同好者がグループを作つて素人芝居でもよいからこれを時々観賞したいものである。このプランは娯楽としては最上のものであると信ずるし、多少演技は拙くても衣裳が貧弱でも悦虐同好者自身演ずるのであるから、役者がやる芝居より真に迫った味が出るにちがいない、是非実現したいものである。

それから我々にはまだ世間を憚るだけでなく、自分だけで秘かにたのしむ偏狭な傾向があるが、これでは広く沢山の良い作品に接することも困難であり、又、大作を手に入れたる鑑賞することも困難であるから、すべからく集会を持つて、悦虐作品の展示会、交換会即売会などを催すべきであると思う。世には裸体美術の展覧会は常にいくつも開催されているのであるから、悦虐作品は当然あつて然るべきである、私は春画さえも展示して差支えないと考えるものであるが、現行の法律では人間の自由の真義を知らない規定があるのでこれは不可能だ。しかし悦虐作品は法にふれないから大いにやるべきだと思つてゐる、若し始めから公開が困難ならば、やはりグル

一プだけのものでよいと思う。かような催し
がなければ恐らく等身大の縛絵作品、本格的
な縛美人画などは出現しないであろう。我々

は美を探索する者として、当然これらの傑作
大作を待望する資格があり、それを実現させ
る任務があると信じている。悦虐プランとし

ては他に多々胸中にひめている面白いものが
あるが、漸く許された誌面もつきて来たので
後日にゆずることとする。(完)

〔新聞・雑誌通信〕

「切腹の歴史」

松原一提供

修道社発行の「ポスト第二集」に掲載さ
れている、切腹マニアは甚だ興味深い、尚
亦、知っていて欲しい記事がありましたの
で御紹介致します。尚、この「ポスト」は
毎日新聞の夕刊に毎晩掲載され、読者の質
問に当新聞社調査部が最も正しい解答を載
せ非常な好評を博している事は御承知の事
と思います。

※ 切腹第一号と作法

(質問)
わが国で、最初に切腹したのは、誰です
か。それから、三宝に短刀をのせる切腹の
作法などは、いつごろから出来たものでし
ょうか。

(解答)
切腹は、武士階級ができてからの自殺方
法で、第一号は、永延二年(西暦九八八年)
怪盗、袴垂保輔が、源頼光、同四天王、平
井保昌に攻立てられ「腹を刺し切り、腸を

引き出し」たが死に切れず、検非違使庁
(いまの検事局)へと突き出されて死刑に
なりました。既遂の第一号は、百五十年後
の嘉応二年に、源為朝が、平家の軍船に攻
められ、伊豆の大島で、切腹して亡びたの
がはじめです。切腹の作法ができたのは、
徳川時代に入って、切腹が武士の刑罰とな
ってからのことで、文献として残っている
天保十一年(西暦一八四〇年)に、上州沼
田藩士工藤行広の書留めた「自刃録」によ
りますと、「切腹の作法」「検視の作法」
介錯の作法」に分れ、本式の切腹としては
ヘソの上一寸ばかりの、左から右へと引き
廻す。あるいは、ヘソの下通りがよし。深
さは、三分か五分まで、ついで左手を刀の
右手に持ち添えて、右のけい動脈をかき切
る——とあります。乃木大将の切腹は、古
式通りの、立派な最期だったといわれてお
ります。

カミソリで切腹

自殺 未遂
ハラワタをつかみ出す

△山形新聞三一年四月一〇日付▽

九日午前十時ごろ山形市中野目農石沢長
太郎さん(六〇)は安全カミソリの刃で腹を
切りハラワタをつかみ出し自殺をはかった
が家人に見えられ生命はとりとめた。原因
は神経衰弱が高じたものらしい。(山口孝
吉・投)

「縛り」の挿絵

『好色五人女、情炎・経師屋おさん』
(大衆小説、三十一年二月特大号)

処刑されるおさんが、後手に首縄をかけ
られた木俣清史の口絵が載っている。

『淀君』(傑作倶楽部、新春増刊号)

後手に縛られ、うつ伏せになった虎若が、
淀君から薙刀の柄で打ちさえられる寺本忠
雄の挿絵が載っている。

『泥んこ波止場』(小説の泉、三月特大号)

「両手を縛られた小宮隆子を黒崎が抱え
て現われた。」というタイトルがあつて成
瀬一富の画がある。(森 信吉・投)

< 文 献 紹 介 >

私のコレクションより



きち 吉 庄 間 角

蛇使いの女

若月羊之助

〔変態心理、第六巻第五号〕

〔大正九年十一月一日、日本精神医学会発行〕

食後の散歩に町に出ますと、蛇使いの興行

物が盛んに鐘や太鼓の馬鹿囃子で人の好奇心を唆っていました。私も旅の気紛れから入ってみたのであります。

木戸を入ると十七八の丸顔の美人が、白の手術着の様なものを着て石油箱に腰掛けていました。そして前の縄張りの中には、痩せた猿が三疋とオームが一羽に佐賀とか熊本とかで解した四本足の鶏が一羽居りました。

やがて女蛇使いは立ち上りました。眼は異

常に据わり眼球の上は薄幕を張った様に潤んで光りなく、歩き方もよちよちとして危なげな腰付であります。然し肉付も血色も非常によく、音声も普通で異っていませんでした。女が立つとポケットから細い二尺許りの蛇が半ば乗り出してぶらぶらして居りました。すると女は手に取って「あなたは可愛い優しい性質になりましたね」と云いながらキッスをしています。そしてぶらぶらと蛇を掴んで猿を調戲ったり、飛び上るようにびよんびよん歩く鶏を追う位なので、私は甘く担がれたと思って出ようとする女は饒り出しました「皆さん！ 貴方がたには只こんな蛇を指に掴む位でも震えている方がありましょう。白本人は武士道で固めた国民です。世界五大国の一だと威張っていますけれども、こんなものに震える様な意気地なしです。私は常に悲しく思うのです。昨日彼の道に蛇がいたからと云ってわざわざ遠廻りをする人があります皆さんの中にはお前はそれが商売だから蛇が何ともないのだと云う方がありましょう。然し誰にでも握る事が出来ます。つまり胆力がないのです。私は皆さん日本人の胆力を養成したい。胆力の練磨から何にも動じない精神が生れるのであります。私は蛇で其の実験をしてお目にかけます。又蛇は滋養になるもので人の精力を増進すに効のあるものです。私はこの生きた蛇を食ってお目にかけます。」

斯う口上を述べて、べろべろと舌を出している蛇の頭を口に入れて嚙切りました。血はだらだらと地に落ち、又彼女の白いガウソンの胸に二三滴垂れました。此の瞬間には多勢の見物もぐうの音も出し得ず、恐怖の余り顔をそむけていました。彼女は更に両手で背骨を抜き、そして生血の垂れる蛇を食い始めました。全く本当に呑み込むのです。別に済んで吐き出しに行く様子もなく、空箱に腰かけて見物のざわめきを無言で見っていました。

其の次には、二尺許りの蛇を生きた儘丸呑みにする芸をやってみせました。彼女は初める前に瞑目して胸を張り、そして深い呼吸を暫くしていました。やがて食道を真直に延しそろそろと呑み始めました。一寸二寸と呑み下して行くにつれ彼女の胸は大きく波打ちましたが、六七寸も呑んだ頃、血と粘液の混ったものを少し吐きました。蛇は咽喉から一尺二三寸も腹の中へ呑まれ、尾をびくびくと動かしていました。彼女の顔は充血して赤く、目はちらちらしている様に見受けられました。蛇を引き出した後の彼女は放心した様に暫くなっていました。そして涙さえぼろぼろとこぼしていました。引き出された蛇は「し」の字形に垂れて赤い舌を出していました。これで一回の芸は終ったのであります。

二

彼女は三重県の生れで、名を吉本あきと云い当年十七才だそうです。父親は興行師で彼女は十才の時父に連れられて南洋に行ったのですが、予期通りの金儲けも出来ず失敗の結果、ひと頃は移民に混って百姓をやっていたのです。其の地方は非常に蛇が多く、住民は少しも恐れず尚食用として蛇を食膳に供する者も多くあるそうです。根が興行師の父親は彼女が此の気風に馴れたを幸い、娘に蛇使いをさせ日本に帰って一儲けする積りで三年前神戸に着きました。それ以来、神戸を振り出しに前述の様な芸を売り歩いていたのです。処が昨年其の父が横浜で死んだので、其からは他の興行師に彼女は買われて興行を続けているのです。

彼女は興行中絶対に穀類を食わず、蛇だとか其他肉類の生物を常食にしているのです。それが為に精神も肉体も確に普通米食をしているより、一層明晰になり強健になると云っています。

蛇は野生のものを取って約五十日間、何等の食物も与えず箱詰にして放置して置きます。そうすると蛇は運動不足と絶食の為に、性質が一変して全く氣力が無くなり、彼女の云うおとなしくなります。其の頃から出して手馴れさせ半月に一度位薬に浸んだ水を呉れるのだそうです。水の外一切与えずに置きます。勿論水も吞ませずに置いて百日程は生きて

居ると云っています。斯うして手馴らされた蛇が石油箱に数百疋居りますが、外見は別に衰えている様に見えませんが、彼女が使っている蛇は、黒焼にする縞蛇です。

三

以上は私が実際に見た処と、幕間の僅かな時間に彼女から聞いた所です。之を書いて居乍らも目の前に惨忍な野蛮な興行師の動作がちらつきません。

彼女が三年間興行して歩いた中で、見物が蛇の生血を呑んだのは横須賀の興行中水兵が只二人あるだけだそうです。何かの参考にもと修辭のない処をお目にかけます。

——八月廿九日相州小田原にて——

狐憑になるまで

守山 退耕

△変態心理、第五巻第四号▽

〔大正九年四月一日、日本精神医学会発行〕

お栄は××村の百姓岩本進蔵の女房であった。丈夫な時分はよく車の後を押しているのや、畑に出てセッセと亭主と共に仕事をしているのを見た。氣立は優しいように見受けられたが、性質そのものはどうも冴え／＼しない方であった。色の浅黒い、顔の少々尖ったそして人を見る時に兎角白眼の輝く女で、話

し声も余り高くない、口数の誠に少ない方であつた。家族は亭主の進蔵と姑と四人の子供との七人暮しで、小作百姓ながらどうやら借金もせずに、亭主の進蔵も極常人間の稼ぎ一方の人であつた。姑のお作も気のよい人間で始終恵比須様のように額に皺を寄せてニコニコしていた。子供も大きい女の子と二番目の男の子とは村の小学校へ通つていた。家の勝手仕事や子供の世話に姑のお作がするので、お栄は毎日亭主と共に畑に出て働くのが常であつた。

そのお栄が、去年の夏の終頃に盲腸を病んで、三月許り始終寝たり起きたりして居た。浅黒い顔は病にやつれて一層とがって来た。一層白眼が人の眼につくようになった。××村は大根を多くつくる処なので、秋十月頃から十二月頃迄は非常に忙しい時である。おとなしい亭主の顔も自分独りで余りに手廻り兼ねる時には、曇る場合も出来て来た。御人好のお作も悴の余りに忙しいのを見たり、仕事の片づかぬのを見たりして時にはたまに口叱言の出ることもあつた。

「全体お栄の病気は何時なおるだろう。もう思いついてから九十日の余にもなるじやないか。此の忙しい時に……」お栄は近頃、度々こう云う不平を聞くのが如何にも悲しかった。何も自分が好き好んで病気になっている

のじやあるまいし、と思うと涙も出た。そんな時には一層心がむしやくしやして、罪のない子供を叱つたり打つたりすることも稀ではなかつた。十一月頃には何処の家でも畑にある大根を抜いて洗つて干して沢庵に漬け込むのが此地方の百姓の一年中の大仕事である。大根の千方の成否は沢庵になってからの価格に關係する。大根を以て一年の生計の大部分としてゐる百姓にとっては、実に重大時期である。お栄は亭主が毎日浮かぬ顔してせせと仿いてゐるのを見るにつけ、どうかして一日も早く癒りたいものと、医者薬も我慢して飲んだ。天理教へ行つてお水を頂いて来て飲んだこともある。巢鴨によくきく灸点があるというのですえて貰つたこともある。菩提寺の住職が催眠術の心得があるのでそれをやつて貰つたこともある。天祖教会で祈禱をして貰つたこともあつた。然しどうも思うように効験がなかつた。彼女の陰鬱な顔は一層陰鬱となつて行つた。

「治助どんの嫁は大分具合が悪いてじやないか」或時千大根の蒔蓋をして帰つた進蔵にお作はこう聞いた。

「ウン何でも二三日は持つまいって話だよ」上り框に腰かけて草鞋をぬぎながら、進蔵は疲れ切つた声で答えた。

「大分天理様を信心していたが、矢張駄目か

ね」

「ウン矢張駄目だね、長え病気にや勝てねえさ」

お栄はお勝手の薄暗いランプの下で子供の着物のほころびを綴りながら此の会話を聞いていた。病氣に対して敏感になつてゐる彼女の頭には、亭主の云つた「病にや勝てない」と云う言葉が電氣の様に響いた。

「それから庄五郎どんの嫁も悪いって云うし谷津の権さんも大変悪くなつたそうだよ」

「おや、それじや治助どんの嫁さんの兄妹はみんな悪いんだね、病氣は矢張り肺かね！」お作はこう聞いた。

「ウン、みんな一つ病氣らしいよ、それに庄五郎どんでも谷津の権さんでも、みんな天理様に夢中になつて毎日△△の教会からあのほら、おいと婆さんが祈禱に行つて、近頃は医者の方は断つて天理様の御水許り頂いてるそうだよ」

「天理様のお水でなれば好いがね……それに天理様は何んでも狐を使うって話しじやないか？」

「世間じやそういうがどう云うものかな」「何でも鼬より少し小さい白い狐が天理様にや七十五匹飼つてあるって話だよ」

親子はこんな話をしてゐた。お栄はじつと此の話に耳を澄ませてゐた。

「谷津の権さんもうとう死んだそうだよ。明日が葬式だって、今仙さんに遇ったら云っていたよ」

「そうかえ、それじゃショッぱなに治助どんの嫁が死んで、初七日位で庄五郎さんの嫁が死んで、まだ二七日たたねえ内に、権さんも死んだのかえ——それであの兄妹もみんななくなつて終つたんだね」

其日はお栄は身体の具合が一層よくないの、部屋の中に寝て居た。進蔵とお作とは炉端で、肺病でなくなった兄妹の噂をして居た。何でも天理様で狐を使って、其狐に肺臓を食い破られたのだからと云うような意味のことを云つて居た。お栄は幼い時分によく聞いた狐憑や神置しや天狗などの不思議な物語を想い出して、空中に種々なものの姿を想像して見た。——幼ない頃椿をひろつた稲荷の森——赤い鳥居——神前に向い合せて飾つてあつた二つの狐の姿——こんな幻影を画いていると知らず識らずに臉が合わさつて来て、夢ともなく現ともない境地の中に、亭主と姑の断続せる会話が心の底に響いて来た。

「内のお栄の病氣も随分長えがどうしたつて云うんだらう、医者にかかつて、災をおろして貰つても、祈禱をして貰つてもちつとも驗が見えねえじやないか」こう云つたのは姑であつた。

「ウン、どうも此忙しい時にほんとに困つて

終つた。俺等一人じや全くやり切れねえ。他所じや大抵麦も蒔いて終つたと云うに内じやまだちつとも手をつけねえんだかな」仕事のはかの行かないのを苦に病んでいるのは亭主の進蔵であつた。

「お栄の病氣もひよつとしたら其の狐の仕業じやなかんべか」

「何故？」

「何故つて昨日も油揚げ食つて見たいなんて云つて居たし、さつき光坊に、金太さんへ行つて生揚げでも油揚げでも好いから買つて来てくれつて云つたそうだがどうも変だよ。病氣の時迄もなおらない処と云い、そんな物を食いたがる処と云い、それに御伺をして貰うと云つて二三度天理様へ行つた事もあるからね」姑のお作は尚色々最近に死んだ兄妹の例などを引いて、狐が憑いているから病氣が永引くのだからと主張した。

「一度〇〇の不動様へ行つて見て貰つて、若しそうだったらお被いをして貰つた方が好かないかね」姑はこうつけたして云つた。

「じや二三日内に俺が不動様へ行つて来ようか」

「そうした方が好からうよ」

お栄の心はまだ夢現の境に逍遙つていた。自分の前には自然に広い野原が展開されて、白い小狐が嬉々として遊んでいる。其中の一匹が何だか自分であるように思われる。そし

て今暗い部屋に現在寝ているのが自分であるか野原に遊んでいる小狐の一つが自分であるか、混乱して来た頭でははっきりした区別がつかなかった。そのうち野の一角に怪しい姿が現れた。それはお栄が丈夫な時分、夕方など金太さんの処へお汁の実などを買いに行く時、きつと飛び出して来て吠え立てた勝さんの飼犬のエスであつた。小狐の群は右往左往に遁れた。自分の様に思われた小狐は、あつちへ遁げこつちへ遁げ、力の限り走つたり隠れたりしたが、とうとうエスの大きな口に咬まれた、と思うと我知らず大声を挙げてアッと叫んだ。そして同時に眼が醒めたが、全身は汗でビッシヨリになっていた。

霜枯の時期に気圧の関係で南風などが吹いて、大変に暖かく、着ていた綿入をぬぐうような日のある事がある。時に桜が返り咲きをしたり、山吹なども黄金の花を見せる事がある。十一月半過のある日、小春日和の如何にも穏かな日の光を地上に投げていた。お栄は此日は多少心持が好いので、縁先に出て日向ボツコをしながら、前の畑で亭主の進蔵と姑が後れた麦の種を畑に下しているのを眺めていた。長い病に疲れた顔は一層くすんで、眼許り大きく見えた。時々彼女は定まった目標があるでなく、じつと眼を或一方に据えていることがあつた。彼女は治助どんの嫁の死を考

えた。自分と同年の其妹の庄五郎どんの嫁の死を考えた。それから又その人達の兄の権さんの死を思った。そうすると天理様と狐と云うことが念頭に閃いて来た。今度は自分の長い病気を考えた。次に前夜夢現に聞いた姑と亭主の会話が頭に浮んで来た。天理様——狐——生揚——油揚——病氣——臟腑を食い破られる——死——妄想は妄想を生んで脳中を走馬燈のように駆けめぐった。そして自分の病氣——天理様に御伺して貰ったとを考える——と、其時狐が何だか自分にもくつついて来たように思われて来た。盲腸部のチク／＼痛む処に其狐が宿って業をしているように思われて来た。ふらふらと立って仏壇の引出しにある鏡を取り出して見た。幾月振りで見えた自分の顔——頬肉が落ちて眼が大きくなり、尖ってその面影は心の迷いか寸分まがいのない狐そのまゝ——彼女は鏡を握ったまゝ其処に昏倒した。

其から彼女の挙動は側の見る目にも怪しくなってきた。多くは暗い部屋に寝てばかりいて、時には油揚げが食いたいとか、赤飯が上らなくて困るとか、又は稲荷鮓がほしいとかいうようなことを口走るようになった。

「愈々本物だぞ」姑のお作は自分の前に云った言葉の誤りでなかったのを、誇るように断定的に云った。

「此二三日は一層様子が変になって来た」進蔵はホッと溜息をした。

「早く行者を頼んで祈禱して貰ったらどうだろう」こんなことも云った。お栄は部屋の中へどくどくと言を云っている。進蔵はつかつかと這入って行った。お栄は急に蒲団の上に起き直って眼を爛々と輝かせて怒鳴った。

「此処の家は食物が悪くて困る！」

不意を打たれて進蔵は二足三足後ずさりして漸く云った。

「何だ、食物が悪いと、貴様は何だ？」

「俺は△△の天理教会にいるしろ狐だが、権次郎の処から此処へ来たのだ。最初は天理教会から治助の処へ行つて嫁を食い殺した。次に庄五郎のうちにへ行つて嫁を食い殺した。それから権次郎の家へ行つて二週間居た。権次郎の宅では毎日刺身や煮肴で御馳走してくれ、たが権次郎も教会へ奉納金をケチついたので娑婆から追い出して今日は此処へ来た。処が毎日の御馳走はどうだ。干葉の煮たのや大根の味噌煮で飯が食べられると思うか。明日から御馳走すればよし、しなければ其分にはして置かんぞ」其権幕は凄く、無口な寂しいお栄の面影は全く何処にも見えなかった。

「何だ、天理教会のしろ狐だと、奴！此家を直ぐ出ればよし、出なけりやこうしてくれ」進蔵は側にあった檜の辛張棒を取って、人格の変わったお栄を畳の上に突き臥せ、馬乗

りになって背中を撲り付けた。姑のお作も四人の子供もアツケにとられて、敷居際に立ってボンヤリして居た。お栄は辛張棒で打たれる度に、ヒーヒーと悲鳴を挙げて泣くのみであった。

夫から狂態は益々甚しくなった。一種異様の唸り声を発する。コンコン鳴きながら四ツ這になって座敷中を暴れ廻る。親戚の人々は詰掛けて来て番をする。そうしては時々打ったり撲ったりして狐に出る出ると迫る。然しそう云う場合には、お栄は只だ悲鳴を挙げる丈けであった。時には半日若しくは一日位やすやすと眠ってばかりいる時もあった。而し食欲は無暗に増進して三碗四碗を平げた。力なども二人三人の大の男がかゝらなければおさえ切れないような力を出して暴れ廻った。或時縁側の下の地面一杯に白い一寸位の毛が散らばっていた。お栄の着ている着物の袂を見たら同じ様な毛が一塊り出た。其毛は其処等に飼われている犬や猫や、乃至馬などの毛とは異って細くて真直できらきら光っていた。人々は、此毛のある以上最早狐がお栄に憑いているのに一厘一毫も疑う余地はないと考えた。彼等の苛責は一層激しくなった。お栄の神経は愈々興奮して身体は大食する反比例に益々やせて来た。人々はこれをも狐のせいだと確定して、不動様へ御祈禱を頼んだり、天

理教会へ狐の引取り方を交渉したりしたが、勿論埒があかなかった。毎日毎夜の看守に疲れて親戚の人々の眠に落ちた隙に、お栄は臥床から拔出して縁の下などへ潜り込んで、コンコンやっている事もあった。大騒ぎしてやっと思つて引出して見ると、体は蜘蛛の巣だらけ、顔や手足は傷だらけになっていた。御嶽教の行者を頼んで祈禱をして貰ったこともあった。六十恰好の小太りに太った行者は勿体らしく注連縄を張り廻して、幣束を三本

アイデア3

五種の責 失念生

A、木馬責め

木馬に女を馬乗りにさせ腰を馬の背に縛りつけ、足には適当な重りをつけ、手首を縛って首縄を掛け、腕を上へ吊りあげる。尻から背中では絶好の鞭打ちの的となるでしょう。

B、自転車責め

全身美容法で使用する様に、自転車の車輪を外して適当な台に固定し、女を乗せてサドルの高さをペダルを踏んだ時、少し虎を動かさなければならぬ位に高くして女の両足首をペダルに縛りつける。腰は前下の方の棒に緊縛し後手にして首縄をかけ腕は上に吊り上げる。

C、吊輪責め

隋円形で腰が丁度すっぽりとはまる位の輪を使用する。後手に縛り足首を合せてアグラをかけた形に縛った女を尻から輪にはめ込み、腕と脚とを輪にくくりつけ、輪に三本か四本の吊縄をかけて滑車で吊る。

D、水車責め

水車又は大きな車に仰向けに縛るか、俯伏せに抱きつく様に縛りつけ、車をゆるく時には早く廻転させて共に鞭打する。

E、閘門責め

閘門を作り、後手に縛った女の身体を俯伏せにして横木で背中を押しつけ腕を横木の上面にくくりつける。首縄をして頭をぐっと起した方がよいでしょう。両脚は思いきり拡げて左右の柱の下部に縛りつける。

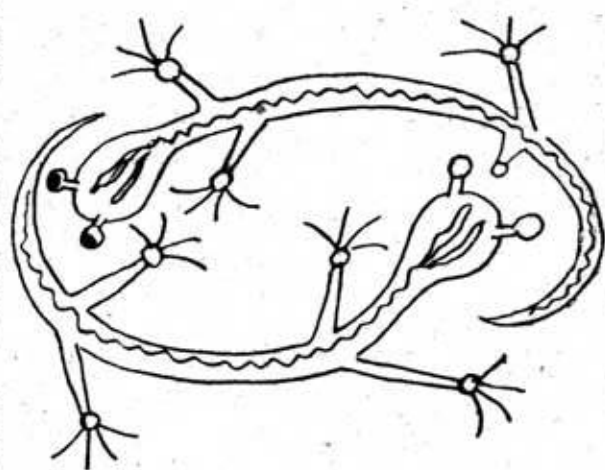
呪を誦え、劔印を結んでは不動慈救呪を唱えて、一心不乱に祈禱したが、お栄に憑いた狐は去らなかつた。其間に二三の開業医にも診て貰った。然しこう云う医師は肉体の疾患は癒すことが出来ても、心の病は癒し得なかつた。

「お寺の先生に御願して見ようじゃないか」人間の最後は矢張り寺院に行く。衆議は一決して菩提寺の住職に依頼して来た。其時はお栄の身体は極度に衰弱していた。彼女は微かに眼を開いて住職を見た。額や頬には無残にも擦り傷の跡が沢山あった。

「気分はどうだね？」住職はこう聞いた。「どうもいけません」蚊の鳴くよりも細い声でお栄は答えた。精神は案外に平静であつた住職は多少心得のある催眠術を以て、適当な暗示を与えて帰った。其以来お栄は全く落着いて人格変換の発作はなくなつたが、半歳余の病氣と一ヶ月に余る心神極度の疲労とは、遂に彼女をして三十三才を一期に、永遠の旅に赴かしめた。

お栄の葬式の日には、朝から大雨が降って大風は立木や家屋を揺り動かし、墓穴は汲んでも汲んでも棺が浮く許に水が溜つた。迷信の深い村の人達は、これも一時宿を失つた白狐の仕業であろうと口々に囁いて恐れていた。

(完)



創作

な め く じ

大 谷 絢 子

(一) 虚無に喘ぐ

終戦後十年、戦の惨禍は悪夢の様に忘れ去って、世の中はアメリカ一色にぬりつぶされて涯しがない様に見えた。デパートには戦前にも見られなかった贅沢品が並び、街には世界各国製の高級車が列をなしていた。崩れ去った家族制度の下に解放された女の群が、資本家に対抗する労働者の群が、巷に満ちあふれた。しかし一応身ぎれいにみえるサラリーマンを含めた中産階級の大部分は皮むけばその日ぐらしの浮舟の様な先の知らないはない生活にあけくれていた。農村に入るとその貧富の差が一段ときびしく、相変らずの封

建制の下に貧農は毎日、その肉体を酷使していた。こうした中でも、公用社用族を含めた恵まれた個人だけは、僅かに近代的な享樂の夢を追い、力の組合せに物を云わせた労働者だけが、そのイデオロギーの波にのって、どうかその生活を維持していた。新旧、硬軟、強弱といろ／＼な要素が正巴に乱れ合い、あらゆる雑多な思想と物体が入交って世は混乱のルツボの形相であった。デモクラシーという新しい思想も借着だし、純然とした日本思想もまだ芽生えず、たま／＼社会保障的な相互扶助の制度や生活をとなえるのも、内心、利己的な慾望か売名かどちらかで自分の事しか考えない輩が多かった。大部分の消費者階

級は新興宗教のお先棒をかついだり、野球、プロレスに耽って現実を忘れるか、虚無的になつて酒にひたつたり、競輪、パチンコにうつゝをぬかすばかりだった。保が拾年余もつとめた会社の位置もやつと下役の上層にしがみついて僅かの給料をとる、いまだに平の一会社員に過ぎなかった。そして彼もその会社も大して覇氣のないうだつの上らない状態であった。朝夕のラッシュアワーの電車にもまれて通う保は、ふっと時代離れた西行法師の歌だったか、

すゞか山浮世も外にふりいでて

いかになりゆく吾身なるらん

という歌を想出して、その現実性にしみ

うたれることがあった。

保は今年で三十五の春を迎えた。色白く中肉中背で、最近では男盛りの年配でありながらやゝ頭髮に白毛をましてきて、あごひげもうすく、殊に両の乳の辺りが女の様に盛上つて、多分に神経質で女性的な男だった。三十の厄に当る妻の令子は、保の祖父が没落したN銀行の重役だった頃、世話をした、当時の斜陽華族の孫娘だった。さすがにどこことなく品があり、面長のやせぎすで濃い眉毛、黒い目元、見るからになよ／＼とした紫苑の花の様な風情の女だった。音楽や草花が好きで保と同じ趣味なところもあって保が二十八の秋、平凡に見合結婚をした。しかし保と結婚して足かけ八年二人の間にはまだ子供もなく保の非社交性の為か外来客も少く、あながち倦怠期というばかりでなく、無味単調な日が夫婦の間につづいた。令子は保にとってあくまで従順な妻として満足したものゝ、近頃では何となくその日本的な横顔に憂愁の影が濃かった。保も古い殻に入ってしまった／＼自分の心の变りに一向無関心な妻に不満を抱く様になった。それに令子は生れつき無口な上に何かあらを拾われると半日も黙り込む様な剛情なところもあったが、どちらかというと夫の後について歩くという古い日本の女の型であった。それが保にはこの頃になってどっちみちたまらなく鼻について厭になってきた。保の

様に陰性で覇氣のない代りに異性には妙に執念深く考える質の男にとっては、一そ鈍重な牛の様なろ／＼とした図太い相手か、それでなければ屈託のない陽気で笑い飛ばす様な女性こそよい配偶であったのだ。

(二) 女神の降臨

都心から四十分程ゆられて保はM駅に下りた。潑刺とした職業女性の群が曇天に、一刷けパレットに走らせた様に美しい色彩のスカートをなびかせて濶歩する様は、花壇のベルトの様だった。保は遠くから見ると容姿が割に上品で均整のとれたスタイルであったが、まるつきり女性の気持をつかむことの知らない性分のところにもってきて、彼から受ける男性的感触がうすい為、殊に今時の女性にとっては自分は路傍の石の様なものとあきらめて居たが、内心若い人に親しくしたいあこがれは年と共に強くなっていた。だから保は明るいこうした光景を見る毎に却って刺戟が強過ぎて悩ましく心が重かった。妄想に走った挙句保は暗いじめ／＼としたところに住むなめくじの様な盲目で陰性な動物になって、すゝんで魅力ある女の足にふみつぶされたい様な気持を抱くことがあった。昨今生れついて粘り強い上に女性優先の戦後の風潮にのって一段と生氣と美しい偉容を示す女群の前にすっかり力を失ってインポテンツとなり精神的

に嬰兒の様になって、女性の大腿部に郷愁をもつ男が、如何に多くなった事だろう。相愛の仲でも実現しそうなないこうした妄想がつましい古い型の妻との間に起ることは到底問題にならないことだった。保が白昼夢を抱くのはこうした春から夏にかけての華やかな光景を見るときだった。

保の家は駅から十五分程かゝる、まだ周囲にいくらか武蔵野の雑木林を残した夫婦二人で丁度手頃な小住宅だった。令子が結婚した当時、まだ豊かであった実家が二人の為に建て／＼くれたもので、二階が保の洋間、南側に二十坪程の植込があり、風呂までついていて保にとって唯一の有難い不動産だった。

吾家の玄関をあけると、妻は台所からエプロンで手を拭き／＼出てきた。

「おかえりなさい、美代子がきたのよ」とだしぬけに云った。

「東京でつとめたいと無断で家を飛出してきたらしいの、あの娘にはあきれたわ」

二人にとってはこれは重大な問題だった。

二人でも中々くらしにくい都会生活に更に一人人口が増えるのだ。妻の顔にはあり／＼と困惑の色が浮んでいた。保は二年以上も見ない妻の妹美代子を想出してみた。姉に似ずおてんばでやゝ大柄な女学生時分バスケット選手だった頃の活潑な無邪気な顔が浮んだ。間もなく駅までチッキをとりに行っていた美代子

がかえってきた。すっかり大人びて、みるからに均整のとれた近代娘になっていたのに保は驚いた。

「お兄さん、しばらく、とう／＼きちやった」
白いキャップ・スリープの袖からむっちり、と伸びた腕を露わにして、チェックの灰色のタイトのスカートを窮屈そうに折り曲げて挨拶した。

「や、大きくなって見違えるよ。それにしても随分急だったネ」

前々から東京でつとめたい／＼と美代子の手紙にはいつもかきそえてあった。

「だって、田舎の生活って単調ですっかりいやになっちゃったの。家はモチ反対だったけれど逃げる様に出てきちやった。」

やとクリームにのってパウダーがほんのりついた生れつき浅黒い頬を一寸ほころばして美代子は云った。

保は義妹の肉感的に花の様に開いた唇、張のある大きな眼、ふつくらとした両の乳の辺り、いつも念頭に浮ぶ若い女の魅力を目のあたりに見て「お兄さん、暫く厄介になってもいいでしょう」という美代子の言葉も上の空で「まあいゝさ、ゆっくり考えるさ」と云って終った。

妻は浮かぬ顔でそれでも遠来の客の妹の為に夕食の用意に忙しかった。久し振のすき焼だった。美代子は旅行鞆から千枚漬と八ツ橋

を出してお膳の上にのせた。

「お姉さん、少しやせた様よ、お兄さん、もっと大事にして上げなければ駄目ネ、お母さんも暫く会わないから会いたがっていたわ、お姉さん、秋の御彼岸にはいつてらっしゃいよ」

「そんな人のことより美代ちゃん、これからどうするつもりなの、あなたこそ心配かけないでね、妾が困るわ」

「妾だって洋裁は専科を出たのよ、人の世話にならずに一人でやってゆく決心よ」

「若いんですものネー兄さん」

長いまつげの下から大きな瞳をこらして自信たつぷり保に用意を求めた。妻と比べると明るい赤い花の様に生々とした妹の表情に保まで思わずたじ／＼するのであった。

(三) 白いパンティ

新しい闖入者を迎えて保にとって何となくたのしい朝を迎えた。

玄関わきの四畳半に旅装を解いた美代子は何の屈託もなく流行唄を口ずさみ乍ら黄色いプリント模様のワンピースをきて甲斐／＼しく拭掃除を手伝っていた。美しい生え際を見せて両翼に張出した様な強靱な肩、柔かそうでしかも弾力ある鋼の様な背線、その下にどっしりとポリウームのある腰のふくらみ、それがぬけ出してすらりと伸びた生々とした脚

線の動き、保は思わず引きつけられて息のつまる思いだった。

保の出勤する玄関先にどっしりとした体を躍らせてきた美代子は

「アラ、ネクタイが曲ってみっともないわ、地味なネクタイね」と云い乍ら保の前に立はだかつて器用な手つきでネクタイを結び直した。顎骨と頬骨の張った広べったく油ぎって丸い美代子の顔が保の目の前に大きく迫って美代子の瞳までまるで生物の様に保には見えた。そして若い娘の香がまぶしい程、保の鼻をおそった。

「美代ちゃん、いつから男のネクタイなぞ結べる様になったの？」

夫のネクタイも結びつけたことのない妻があきれた顔をして不快そうに云った。

「洋裁学校ですよ」

美代子は、木で鼻をく／＼った様な返事をした。保は何を云っても意に介せず心気なくせにこうした細かい仕草に気のつく義妹の出現に心をはずませて家を出た。

午前中ふり出した雨も止んで、やっとすくしくなった。茶の間の夕食の膳に向った保は「美代子はまだ帰らないのか」

と云ったが妻は返事の代りに状差から一通の手紙を保の前に差出した。それは古い書体でかいた母からの手紙だった。

美代の事案じ居候処其許様に厄介になつて居る由前々より予想致せし通りに御座候。先々安堵仕候えども本人は御存じの如き派手好みにて其許様の荷厄介になるは必条に候えはよく／＼云いふくめ間違ひなき様丁度当方によき縁組の話も御座候えは一日も早く連れかえる様御配慮下され度願申候。

七月二十日

母より

令子様御許に

「とにかく無断で飛出してきた美代子を、このまゝこゝにおいておくことは出来ないわ、一度実家にかえしてよく話し合つた上なら別よ、実家の手前、妾だつて心苦しいわ」

妻は保に同意を求めた。

「美代子がどう云うかね」

「勿論いやというにきまつてゐるわ、でも家だつて毎月どうにかこうにかでしよう。それに美代子は小さい時から一ぺん云出したからには絶対きかない性分よ、あなたからでもピシリと云つてくれないことには——」

保は容易にウンと云わなかつた。いや云えなかつたのがほんとかもしれない。保には美代子が素直に帰るといふ返事が一番こわかつた。美代子が居なくなると、そう考えただけでも保はのどが乾いてくる様な思ひで食膳を離れた。

そして妻が勝手口で片付けものをしてるすきを見て美代子の居間の襖を開けた。

いつも見馴れた部屋が保には若い娘の部屋らしく立籠つた空気さえ桃色の香がする様だつた。壁にかけてある美代子のブラウスやワンプイスが電灯の淡い光をうけて艶かしく目に入つた。保はそつと近づいて抱きよせた。そして美代子の豊かな肉体を想ひ浮べた。

保は青年時代から天平時代の仏像のもつ彫刻美に興味をもつて居た。それは豊かな両肩から安定した腰の座まで神秘的というより、肉感的な美しさを持つて居た。しかしそれも所詮、現実の女性のもつ肌の香も色もなかつた。保はそんな境地に自己逃避して求めて求められない現実の代償を求めて居たのではなかつたか。今お前の前に居る美代子、それはもつと潑刺として動的な美しさと力をもつ生きた芸術品だ。いつもお前がかしづこうと思えばかしづけるではないか。

保はそつと戸袋をあけて隅に丸めこんであつた美代子の汚れた白のパンティを見付け出した時、狂おしくそれに顔を埋めて甘酸っぱい香にむせび乍ら美代子／＼と心に叫んでいた。つ迄もそこにしやがみこんでいた。

(四) 都会の哀愁

美代子は姉とちがつて女学生時分から男の友達があつて、考え方もませていて田舎ではアプレの娘として評判になつていた。宗谷はそのグループの一人で髪をいつもバサ／＼と

して、広い額、太い眉、くぼんで鋭い眼、高い鼻のあたりから額の辺まで精悍な顔に優しさをもつた美代子の好きなさっぱりした型の男だつた。

宗谷といつとも一緒に居る時、美代子は生々した感動を受けて居た。宗谷も美代子に好意以上のものをもつていた。そして去年の夏、六甲山にハイキングした時、山の灌木にかこまれた夏草の上でサン／＼と太陽の光に照らされながらお互に許し合つた。なつかしい美代子にとって唯一人の男は学校を出るとその後、或る写真雑誌の記者になつて上京してしまつた。美代子もいづれ東京に出るから東京で逢いましょうといつて別れたのだつた。

美代子はその後も何気なく友達づきあひする男も多かつたが、宗谷程の相手は見出せなかつた。昔風の実家では世間の噂を恐れて美代子の所行にはほと／＼手を焼いて居た。その頃たま／＼土地の素封家の次男坊からたつての望みで美代子を嫁に呉れとの話があつた。実家では今の場合願つてもない話とばかり親同志はほとんど異存なく話がすゝんで居たが、さて本人の気持をきく段になると、美代子はそんな平凡な好きでもない相手と田舎にくすぶる生活なんて考えても厭な事だと鼻にもかけ様としなかつた。

美代子は急に宗谷や姉のいる東京の空が懐しかった。何とかゆけば力になつてくれるに

違いない。宗谷——自分の胸に深く刻まれた唯一人の男の姿が、クローズアップされてきた。美代子はいともたつてもいられなくなつて家を飛出したのだった。

.....

兄が、あられもない妄念につかれていた時分、美代子は省線をN駅で降りて南側の繁華な通りを過ぎて道が二股になる、丁度角のアパート花園荘と看板の下った玄関に立つて居た。蔦の葉のからんだその煉瓦造りの建物は戦災をのがれたせい、如何にも古めかしかった。案内を乞うと中年をすぎた管理人の女が頭を出してきた。

「宗谷さん、今しがた風呂にゆくと云つてでかけましたが誰方ですか」

「田舎の親戚のものですが……」

「それじゃ、まあ上つてお待ちなさい」

美代子はひびの入った壁づたいに二階への梯子段を上り乍ら、さすがに久振り宗谷にあえると思うと、心も落ついて踏む足も軽かった。それでも何となく「宗谷さん一人でいらつしやるんでしよう」と聞くと、管理人の女は眼鏡越しに興味ありげに美代子の顔を見て「一人ですよ、でも商売柄中々派手な方ね、カメラマンですってネ」

「え、派手って女のお客様なぞも……」

「そりやーやっぱり雑誌なんぞに映画女優の様に写真を出して貰えるからでしょうね。」

美代子もその女達の仲間位に見てか、管理人の女のしやべった一言で美代子は折角たずねあてた男の影に不吉なものを感じて水をかけられた様にゾツとした。それでも廊下の奥にある男のドアのハンドルを手でつかむと未知の国でものぞく様な期待に心をおどらせた。

がらんとした部屋の窓際の朱の電気スタンドのある机の上に本や雑誌が乱雑にのせてあり、黄色くなつた壁にヌード写真が二枚程かけてあった。部室の隅にベッドがあるらしく緑のカーテンのしきりがしてあった。何気なくカーテンをめくると片隅に絹のシュミーズがしどけなくかけてあるのが目に入った。

「矢っ張り！」

夢に描いてた男の其の後の生活をまぎ／＼と見せつけられた様で美代子は立っている足下がぐずれ落ちる様な気がした。

まもなく宗谷が帰つて来た。ポマードをつけた頭の髪型まですっかりモダンで都会風だった。美代子の姿を見て宗谷はおどろいた様に長身の浴衣姿をギクツとさせて云った。

「何だ、誰かと思つたら、美代ちゃん！ 君だったのか、いつでてきたんだい」

「この頃は、ちつともたよりをくれなかったのね、すっかり妾の事なぞ忘れたのじやなくて」

「いや、そういうわけでもないが、何しろこ

ゝのところ仕事に追われて忙しくて」

「女のひとの御附合でもね」

「女の人……そんなことないさ、そりや商売上お客としては仕様がなないものね」

美代子はむら／＼してきて叫んだ。

「宗谷さん、よくそんな白々しいことを云えてね、何によッ、あのシュミーズは？」

宗谷はハツとして美代子の鋭い視線をささけてうつむいたが、内心の狼狽はかくす術もなかった。

「妾、くるんじやなかった、馬鹿だったわ」クルリと背中を見せて美代子はいかえろうとした。

「待つて、美代子さん、僕が悪かった。まあ僕の云う事もきいてくれ、君がもう少し早くきてくれたら……。君の云う通りたしかに僕は変ったかも知れない、僕だって田舎にいた時の様にロマンチックなきれいな氣持でいたかった。けれども僕の心は醜惡な都会の刺激に痺痺して終つた。誘惑は悪魔の様に僕の心に巣くつて離れ様としない。都会生活のきびしささびしさ、それをまぎらわす享樂とが車の両輪の様になって僕の心をかきたてた。僕は都会という魔物に魅せられたのだ……」

「宗谷さん、さよなら！」

決然と云つてドアを排して美代子が出て行った。宗谷が背後から追いつがる様に何か云つた様に思えたが、ドアの音に遮られて

聞えなかった。

美代子はボカッと心の中に空洞が出来た様な幻滅の悲しみにうたれて帰路についた。あんな近いところにいた宗谷が自分から遠く離れた人になって終った。お前の探し求める真実の男はどこに居るのか。夕靄があたりに垂れこめてきた。ネオンの色も濡れて都会の哀愁を美代子はひしひしと感じた。

(五) アフレガール

その翌朝、美代子も保もさりげない気色で食卓についた。美代子はさすがに顔色が勝れなかったが、彼女の苦さと負けず嫌いが物を云って少し疲れた位にしか見えなかった。保はあゝしたことの当の対象が身近にある義理の妹であるだけに兄として表面卑屈に見えない様振舞うのに苦労した。そして内心では反対にその卑屈を味って楽しいのであった。

「美代ちゃんも、東京にきて十日ほどになるわね、東京も見あきたでしょう。どう？ この辺で一度田舎に戻っては、妾と一緒に。あなたの希望も考えてるのよ、でもこんだのあなたのスタートの仕方はたしかに間違ってると思うわ、お母さんの正式の許しを得てからなら文句ないけど」

「それでは、妾が悪かったといつて田舎にかれとおしやるのネ」

「お母さんもお年だし、妹のあなた位、そば

にいてくれて相談相手になって欲しいと思うのよ」

「そんな事云って、お姉様の気持、ちゃんと分ってるわ、お姉さんの厄介にならなければいいのでしよう」

「そうじゃないのよ、そりや都会生活もお金があつて余裕があれば、こんないゝところはないわ、それに若いあなた達には、たしかに魅力があるのネ、でもきれいなものを着たり映画を見たりする位は田舎だって出来ると思うわ」

「お姉さんは東京に居るからこそ、そんな贅沢な考えが起きるのよ、美代子は刺戟のない田舎のくらしなんて大嫌い！」

都会の汚れた風潮になじんだ令子は、いつも雑然とした消費生活に明暮れする都会のにがりをきらって早くから田園へのあこがれがあった。生々とした木々や野菜、澄んだ空気山々、素裸の人間の労働してる美しさ、自分達の生活と楽しみを創造する世界、保にもそうした淡い感傷もないではなかったが、職場につながる東京に居ては、そうしたことも望めない事だった。どちらかと云えば酒に酔い疲れる様に強い刺戟を求める点では美代子と同じ側にあった。

「ネエあなた、どうしたらいいと思うの」

保も何か云わなければならなかった。

「そうだね、都会と田園の優劣論は、まあそ

れ位にして、美代ちゃんも来年は二十だし、自分で自分の道を開くことには誰も異存はないと思うが、但し誰にも迷惑をかけないということを前提としてネ」

「だから一度田舎にいつて円満に話をつけるのよ、美代ちゃん、妾と一緒に戻りましょう」

「よく考えてみるわ」

美代子は自分の部屋に戻って机に坐ったまま、ジッと目をつぶった。家の事、世間の手前こゝはどうしても姉のところをはなれては工合が悪い。差当ってこの家から通って若い女の出来る仕事があるに違いない。自分の若さ、美しさをもっと／＼飾る近代的な装いへの慾求や流動する都会の文化生活への執着が美代子の心に根を張った。月々何がしの食費位入れてがまんして貰う内には、自分の年来希望してる洋服も物にしてみせて皆の鼻をあかしてやれると思った。憎い男、母の顔、鈍な姉夫婦の生活、あれやこれや、美代子の頭の中に走馬燈の様に次から次へと浮いては消えていった。そうだ、何より自活の道を講じることだ。そしてまずこの家に居る為には、あの氣のよきそんな兄の氣持をしっかりとつかむことだ。美代子の決心はきまった。考えぬいた末、美代子を選んだ仕事はヌード写真のモデルだった。何よりそれは支度があるわけでもなし時間的にも兄夫婦の目をごまかす

変えた仕事だし収入の点も悪くない。――

たゞ異性の前に裸身を曝すことは、初めは針でもさゝれる様な羞恥を体中に感じたが、美代子の肉体に蜷集する男の数に比例して美代子は自分のボリユームのある均整のとれた肉体に誇らしげな自信を深めた。之は少し後の話だが。仕方なく姉は週末に田舎に――先ず一人でいってやることにした。

(六) 美しい籠絡

美代子は姉の留守の間に兄に接近して兄を自分の側に引寄せ様と姉の帰国を待った。土曜日の朝、姉を東京駅に送った美代子は、兄の会社に電話をした。銀座の尾張町の時計台の下で一時頃待ってるから来て欲しいというのだった。

土曜日の銀座八丁は半休のせいもあって雑沓を極めていた。妹が用があるというので久しぶり銀座に出た保は、知らない土地に来た様な錯覚を起す程華やかだった。赤いベレー青いスカート、道ゆく人も飾窓の彩りもそれは都会という海の底にでも居る様な幻惑を保に与えた。殊に淡紅色のサテンの袖なしブラウスに深藍色のサーキュラスカートを飄えして颯爽と立っていた美代子の姿は、妖しく熱帯魚の様に美しかった。

美代子は兄と喫茶店の二階に上って卓のメニューを片手に真紅の爪を光らせて器用な

手付でボーイを呼んだ。

「お兄さん、たまにはこういうところに来るのもいいでしょう」

保はまぶしい様な妹の視線をそらしてタバコを取出して火をつけた。やがて料理がはこばれると美代子は赤いビニールの手提げからコンパクトを出すと、大きな瞳をクリ／＼と廻して真赤な口紅をそつと拭きとった。

保は見違える様な妹の身についた近代的な容姿と身のこなし、妖麗な美しい肢体に目をみはるどころか、妹が何を云い出すか保には女としての妹の外には何も見えず何も考えられなかった。今日は安心して妾にまかしておいて、といって美代子は大きな歯並を見せて血のにじんだビフテキを食べ終るとスパゲッティをたのみ、また／＼間に平げて終った。それは肉食動物を思わせる様な旺盛な食欲だった。

「お姉さん、田舎に行って淋しいでしょう。それで代りに妾がサービス係というわけよ。お姉様行ってくれて、何だか妾、すっかり解放された様な気持――でも保兄さんはつまらないでしょう」

「いや、令子も久し振りで田舎にかえって喜んでるだろう。美代ちゃん、今日の君は實際別人の様だぜ」

「別人って、そんなに妾変って見える？」
「いや、別人の様にすばらしい……僕も久し

振り銀座に出て十年位若返った様な気持だ」

さすがに保は君のお蔭で単調な生活が破れて感謝したい位だとは云い出せなかった。

「あのねお兄さん、妾、今日お願いがあるのよ！」

美代子の瞳は妖しく輝いた。そういつて美代子は手提げから一通の封筒を出して保に手渡した。保が中を見ると新しい手の切れる様な千円札が五枚入って居た。

「妾の貯金よ、それでお兄さん、妾と一緒に妾の欲しい靴を見に行つて下さらない」

保は銀座でも一流のW靴店につれてゆかれて、やがて美代子がパンプスのハイヒールをかう迄店先で待たされた。

「お兄さん、一寸これをもっていて、淑女に物をもたせるものじゃないわよ」

美代子の今日のやりかたは別に変った風でもなく至極あたりまえなので、保もいや応なく従わなければならなかった。変ったといえは美代子の自信たっぷりな態度や仕草よりリードされた保の姿であつたらう。保は気がひけて外観ばかりでなく心中すでに女王蜂にかしづく幼蜂の様な気持を抱いて美代子の靴をもった。

(七) 隷属にうごめく

古ぼけた洋服をきて自分の靴をもって従う兄の姿が、美代子には、何だか滑稽に見えて

思わず肩をすぼめて笑いこけた。

「どうしたんだい、何がおかしいの？」

「いや何でもないの……何だか思い切り笑いたくなったの……御免なさい、——お兄さん御迷惑だったでしょう」

「いやかまわないさ、土曜日だし、第一、今日は君が御主人役だろう。僕には何にも云う権利がないさ」

「そうね」

美代子は一寸眉をひそめたが歩き乍ら一言／＼考え乍ら云った。

「それじゃ、ほんとに妾があなたの主人役になつていいのね、今日は、妾のいうなりになると約束する？」

保は何も云わなかったが、その目は肯定する様に美代子の顔を見ていた。

「妾って我儘よ、よくって……」

美代子は振りすてる様に云うと兄の顔をぬすみ見てクスリと笑った。

美代子の大きな目に射すくめられた様に保は

「君の云うなりについて……どうしろというの」

保の言葉は一個の男性としても弱々しそうにひびいた。

「まさか、とって食べるわけじゃないわ……妾と一緒に居る間は、お兄さんとしての権利を放棄するの……よくって、お兄さんじやなくて妾の召使……だから妾のことはこれから

美代子さんと呼んで頂戴！ さあ、あなたの

こと、何という名にするかな、保、TAM……TOM、そうトムがいゝわ、何だか犬みた

いだけど」

「さあ、かえりましょう。車を呼んで頂戴、

トム！」

車の中で美代子はいたずらっぽい目で黙り

込んだ兄の顔色をうかゞって云った。

「お兄さん、おこって？」

保は首を振るだけで、内心これからの自分のおかれた位置への妖しい期待にわな／＼していた。

美代子は兄を従える様に昂然と胸を張って敷居をまたいだ。

「トム、一寸おいで」

保はひかれる様に二階の自分の書齋に入つた。窓の外はむせかえる様な緑の木立に蟬がものうく鳴きつゞけていて微風さえなかった

美代子は窓を開けると青いレースのカーテンを引いた。

「あゝ疲れた」

美代子は兄の机の前の腕椅子にドカッと腰を下すと、ハンケチではちきれそうな豊かな胸元から襟首を拭いた。そして何だかめんどろくさそうにマニキュアした指先を短く刈つた襟足から突込んで髪をまさぐった。

形のいゝ組んだ足下からまぶしように美代子を見上げていた保は、手にした靴の包を差

出していた。

「美代子さん、はいてみる？」

「よし、さあ、妾にはかしなさい」

美代子は片足をひざまづいた保の鼻先にさし出した。保は左手で美代子の足首をもって恐る／＼靴を差入れた。ぐっと甲が盛り上るとふくらはぎ迄力強い拋物線を画いて、保にはパンプスをはく美代子の姿が益々近づきたい權威ある女性に見えてきた。

薄いナイロンの肉色の脚が太く組合さつたあたりからめくれた深藍色のスカートの幅一杯に膨れ上つた様なずっしりした女の臀部！足を組みかえて片足をだされると蒸し暑い舗道を歩いてきた美代子の体臭が靴特有の動物性の臭とまざりあつて保の顔をおそつた。

ハイヒールのくびれた尖端に真鍮の金具がつめたくキラリと光っている。

保は面とむかつていられない様な息づまる圧迫感を感じた。我を忘れて保は美代子のはいた靴にすがつて「ウ……美代子さ……」とのどのつまつた様なうめき声をあげて唇をパンプスの柔かい甲におしあてた。保に突然、重ねた右足をとられた美代子はやっと椅子の腕に手をおいて左足で立上り乍ら「何をするの失礼な！」と右足で保を振払つた。膝まづいていた保の体は重心を失つて前にのめつた。

(未完)



玉稿落穂集

誌上にのらなかった

原稿のことども

編集部

地下鉄の乗り場の暗がりなどで、ガリ版刷りの春本をよく売っておりますが、これなどを買って読んでみますと、全くつまらないのにあきれかえってしまいます。黒赤二色の拙劣な絵を挿入してあるのなんかは、かえって見ようという気をなくしてしまいます。それでいて、こういったものが相当流布されているらしく、公刊誌を弾圧して益々地下潜行のものを、はびこらせてしまったのかもしれない。

読者の方の中からも、よく、そういったガリ版刷りのもので、『責め』の内容を持ったものを送って来られる方があります。読んでみると、多くはつまらない読むにたえないものですし、ストーリーも所謂『強姦もの』とい

われる類型的な他愛のないものが殆どです。

さて、話が横道へそれましたが、今述べました一般に秘かに流布されていますガリ版刷りのつまらないさに比較して、本誌に応募されてくる原稿の中、つまり極めて描写の濃厚ないわば、到底誌上に掲載を許されない程度のもので、の方が如何に価値があるか、ということとを痛感しましたので、蛇足ながら、くだくだと述べてみたわけです。

云うまでもなく、こうした原稿は、そのまゝの公開は許されませんので、こゝに『玉稿落穂集』の活躍の域があるわけです。引用出来るものは、極力引用しつつ、出来ないものも梗概に肉づけをしながら、『非公開原稿』の扉を開けてみることにしましょう。

『クニニリングスの告白』 桃山 薫

私の告白は徹底的なエロで公刊ものには、発表出来る筋のものはないかもしれないが、奇巧御編集の上に何かの参考になればとペンを探ってみることにしました。その前に私のアイデアによる、責めを二、三書かせて貰いましょう。

という書き出しです。このアイデアの1なるものは、こゝに要約さえ出来ない程度のものでしたので省きまして、アイデア2を紹介してみよう。

『もう一つは、全裸の女を硝子器の中に入れて伏せ、排気ポンプで女の入った器中の空気を抜くのです。小学校五、六年の時、理科実験で硝子器に生きた小鳥を伏せ、排気ポンプで空気を抜くのを、先生の指導でやったことがあります。器中の空気が次第に稀薄になってゆくにつれ、全裸の女性もだえ苦しむ様子を想像して下さい。これ以上惨酷な責め方はないように思われ、想像するだに……』

この責めは、実際に行われそうもありませんが、幻想としてだけなら、探偵小説なんかにも、この趣向と似た殺人方法を用いているのがある位ですから一向差支えはないでしょう。然し、只単に女体の悶え苦しむ様を眺めようとするのなら、もっと他に方法があるでしょう。殺してしまう、というのが目的なら又別ですが。

次にアイデアの3、として、筆者が徴用工の時、寮の女舎監が年少の徴用工に対して用いた懲罰を挙げています。但し、このアイデアも、奇抜ではありませんが、公開を憚りませんので割愛いたします。さて本題のクンニリングスに就いて相当枚数を費して、微細に亘って詳述しています。これは筆者の夫婦生活を基調としての告白であります。真面目な態度で書いているだけに、ガリ版刷のY本と同一視することは出来ませんが、さりとて、その文をそのまま公開することは到底許されません。興味本位ではなく、真面目な真実の告白だ、といったところで、公開を正当化するとは出来ませんので、殆ど大部分の箇所を割愛して、最後の差し障りのない部分だけを掲げておきましょう。

『告白が余りにも淫猥卑俗で恐れいりますが、事実は何とも致し方がありません。奇クをよき伴侶に育てる為を思ふ一念から、あまりに露骨な生活の断片を告白してしまいました。夫、夫婦生活に退屈してくると随分突飛な幻想を描いて、その実現を期そうとするものです。今後に御期待下さい。』

〇〇県加〇郡〇見村下〇〇

奇ク愛読者 〇木〇一

奇ク編集部御中

次は、告白文、異性の香り、と題した、高見好太郎氏の投じられたものです。これは便箋に細かい文字で二十枚近くも、ぎっしりと書かれていますので、四百字詰の原稿用紙に書き直したら三十枚ぐらいになるかもしれません。

『私は十五、六才の頃より異性に対する愛着を持ち始めた。それはある店の店員として住み込んでいた頃であったが、ある夜、ふと眼をさますと、階下より……』

というような調子で、冒頭から話がすぐその方へ入ってゆくのは一寸加筆訂正削除のしようもありません。まあ、雑誌の原稿としては不適當として最初から問題にされない種類のものなのですが、それにしても通読してみれば、挑発以外に取得のないY本と比較して、或る程度生活というものを描いているのが、この原稿を読ませているのではないかと思えます。

高見さんの住んでいる店のお嬢さんには恋人があります。或る機会に、はからずも彼は、窃視してしまうのです。冒頭に出てくる場面がそのところ。秘かに美しい主家のお嬢さんを恋慕う彼が、最初に見せられたものは？ 然し、彼は悶々の情を抱きながら二階にある自分の部屋へ帰って寝てしまいます。

『その中、眠ってしまったらしく、目がさめた時は、何時もより時間がおそく雨戸よりの光がきつくさし込んで来ている。飛び起きて』

下へ行くと、お嬢さんが、涼しい顔で

「好どん、今日はお店開けなくともいいの」と云うので、「どうしてです？」と尋ねる

と、「ゆうべ、好どんが寝てから、森戸のおばさんが急病だからといって迎えに来たので、お母さんが行ったの」と聞かしてくれた。

それで私は、あゝ、それで、と、ゆうべの出来事をお神さんが知らない訳だ、留守では気づきようもないのは、あたりまえだ、と分った。それにしても、相手の男は、と奥の方を見たが居そうにもない。私が眠っている間に帰ったのだな、と思い、再び、お嬢さんの顔をそっと見ると、浮き浮きとした明るい顔でお勝手の方へ行ってしまった。

後で、その男が誰であったか、私にも分ったが、それははぶき、とにかく、ゆうべお神さんが出かけた後、お嬢さんが、お神さんを駅まで送っていった帰り途中で出会って引き入れられたらしい。

旦那は町会、商店街の慰安で温泉へ二泊旅行で出掛けていたので留守なのだ。やがて、「好どん、御飯よ」と云う声に、私は台所へ行った。食事が終る頃、お嬢さんは、「好どん、御飯すんだらお風呂沸して」と云うので「はい」と答えて裏へ廻った。お嬢さんが朝風呂に入るのには珍しいと考えながら、焚口から薪をくべていた。

やがて、お嬢さんがお風呂へ入ってきたの

か浴室の中で湯をつかう音がします。薪をくべながら彼は、お嬢さんの入浴のさまを想像します。そして、この文章の主題であるところの、秘かに慕っているお嬢さんの下着愛撫の個所へと移ってゆきます。

『……すると、そばにお嬢さんの洋服がぬいであり、一番上に真白い針抜きのパンティがやわらかそうにふわりと置いてある。私のそのパンティをいきなり手にすると、顔におしあてた。いゝにおいがする。女の香り、私は心を有頂天にして喜んだ。又、そのそばには薄桃色のメリンスで出来た腰巻がまるめて置いてある。お嬢さんの方を気にしながら、ひろげてみると……』

以下、彼の妄想と妖しい行為が綴られていきます。そうこうしているところへ、

『……パンティを顔に押し当てゝいた。突然、湯殿の開き戸があいて、お嬢さんが出てきたが、それと同時に、私とお嬢さんは期せずして、あッ、と一声叫んだまゝ呆然としてしまった。その中に、はッと気がつく……』

パンティに頬ずりしているところを見つけられたのですから、たまりません。驚く彼、裸のまま更衣室へ出てきて、そこに好どんがいるのに驚いたお嬢さん。

『「好どん、お前、なにしているの、あたしのズロースなんか持ったりして、変なことする

と、お母さんが帰ってきたら云い付けますよ、」と云うので、私はあわてゝ、「お嬢さん、ごめんなさい、今日のことは黙っていて下さい、もう二度とこんなことはしませんから」と一生懸命に哀願した。しかし、私がいくら真剣に頼んでも、中々きいてくれない。

私は、こんなことを云われて恥をかくのはともかく、田舎から出てきたばかりの私にはこの店を解雇されるのが恐しかった。私は遂に思いきって、ゆうべの事を主人達に話すといたら、お嬢さんはびっくりして、それでは、妾も云わないから、好どんも黙っていてくれ、ということ、お互いに黙っている事にした。』

これからの二人の中は、例の通りの進行を示しますが、この全篇の中で、最も詳細に描写されているのも、冒頭の場面であるところからしても、この文章の性格も知れようというものです。

で、結局のところ、この好どん、というのは、お嬢さんの下着狂崇に仕込まれて行きませんが、フエチシストの生活を描くだけであつたなら冒頭にある文章のような描写は必要はないと思います。

『それから一カ月程して、この店は商売不振のためS市に移転することになり、私は解雇されて国へ帰ることになったので、お嬢さんとも別れなければならなくなった。今頃、ど

うしているか、便りをしても戻って来るところを見ると、又、どこかへ引越したのか、私は現在の職業についても、お嬢さんのことが忘れられず、時折、お嬢さんから貰ったパンティとズロース、それに写真を出しては涙にくれており、異性の香りを偲んでいる。美人で均せいのとれたお嬢さん、そういうスタイルの女の人を見ると、尚更、お嬢さんのことが思い出されてならない。あれから、もう三年の月日が経つ。』

肝腎のところを削除してしまいましたのでとりとめのない紹介になってしまいました。今回のものは、特に、こういった種類に近いものばかりから選びましたので諒として頂きたいと思います。

次に御紹介する文章は、女が女を責めることに興味を持つ人からの編集部に対する便りです。投稿者は長野市の方です。

『拝啓、貴誌愈々御発展を賀し上げます。毎号貴誌によって感のうをくすぐられ、直ぐ次号を待たれてなりません。本日一筆を呈するもの、三月号（註、三〇年三月特大号）の長瀬昭子なる人の「私の体験記」と、同人画がくところの二九六頁の絵が、私が永年画いてきたサジ、マゾの無害な空想とピッタリと一致して、まことに嬉しく思ったからであります。』

此の上、貴誌に希望するのは、読者通信、

長瀬氏宛の佐世保の山田百合枝女史の希望している画を、四馬孝氏に依って画いて頂き度お願いする次第です。(一七〇頁の画の人物のようにハダカのもよい)

理想的な体をしているモデルもメッタにならぬ故、実演より反って濃艶な絵の方がよい。先号にあった「人体椅子」も気に入った構図であったが、おもしろいことに絵がなっていない。これは実際の写真我希望したところだ。

ひとつ私の体験を簡単にお話致します。単なるフレンド・ガールであります。フとした機会に、山田百合子氏が画いているような話をした際、彼女の云うことに、「わたしは組敷かれるのはいやだが、上へ乗るのはよい。また男の人に組み敷かれてみたい」と云うので、「では僕がいじめてやろうか」というと「嬉しい」と云うので、その場で打合せ、いよいよ実演ということになった。

これはもう初めより承知の話に付、長瀬氏のように手のこんだ動作は必要なく、最初から頭をはさみ、手を万才した形に押えているが、彼女、その中、足をかけて暴れ出すので私も益々強く押え込んで、本当にいい感じののだという気がして来たのはよいが私の……」

『……』と云う。この時を第一回として、彼女よりの希望で四回迄続き、そのうち彼女も倦きたとみえ、やめてしまったが、尤もいつ

迄も続けているようだったら氣違いだ。而し今になって思うに、実に得難き女性であったと思う。又、二度と演出できない経験であると思う。

○街を歩いている洋装の美人を見ると、こんな人に同性の同年輩の人をいじめさせてみたい。

○三十才位の有閑マダムが、十六、七才の女中に奉仕させる。

○姉妹が、同年姉妹の女中を前記構図でイジめる。亦日常随時奉仕させる。

右が私のサジ、マゾの構想であるが、いつか雑誌にて読んだ、進駐軍将校宅へ住み込んだ女中達の座談会記録に、外人婦人に奉仕、強制的に奉仕させられた話があり、国民感情を別にして、非常にコウフンしたものです。

洗濯、浴後の身体拭き、靴みがき(足へつけたまゝ)、夫婦の×××××奥サンの片足を×××いた、×××迄×××れた話、なぞ……」

『私の友人宅の奥さんは、子供もなく、年も五ツ位若く見え、三十六才の人だが、女中一人(十八、九)を使っている、全く気楽な生活にて、偶々、意識的に奉仕させている情景を見るが……』

『こんな奥さんは全く仕合せなんだ。女性になつてみたくなる。たいへん、駄文、乱筆にて深謝申上ぐ、多少でも御参考となることが

出来たら存外の仕合せ。

尚、左記画も載せて頂き度く希望します。

○美人がブラジャー、極く細いパンティのみにて立つ。

一、女を後手にしぼり上げた上、最敬礼の形で頭を太ももにはさむ。

二、女を後手にしぼり上げた上、椅子を使い背後へ弓なりにそらせ、首を太ももではさみ顔を股下から出す。(その顔を見下して、美人は満足そうに微笑む、表情大事)』

次は、青柳太郎氏の雑誌通信で、犯罪公論第二巻第四号、昭和七年四月一日発行、所載の『支那の排日騒乱と日本婦人の貞操』と題した一文、それに、りべらる第六巻第十号所載、『太平洋戦争惨虐記録』と題した一文。

共に男性の集団が女性に対して揮った暴虐行為を記しているのですが、前者は中国人の日本婦人に対する凌辱であり、後者は、日本人の中国人並に被占領地現住民に対する惨虐行為であります。

この二つの雑誌通信は、一つは戦前、一つは戦後、共に公刊雑誌として公刊されたものなのですが、この人の送って来られた通信の範囲内では、どうも、そのように見受けられないのは、どうしたことでしょう。戦後発行の「りべらる」の方は、折柄、カストリ雑誌の全盛時代のことゝて、この程度の描写が見

喰い狒々」で次ぎ／＼に花嫁がさらわれ、荒縄で大マナイタの上に縛り上げられるシーンがある。また少年用冒険活劇『日輪大郎』で、伏見扇太郎と新人丘さとみが、片方に扇太郎、片方に丘さとみで吊下げられる凄惨シーンがある。この新人女優は大いに縛られ、その可憐さで売出すが、今丘さとみは大いに可愛がられている所、椅子に縛りつけられているシーンもある。

吊責めといえば、松竹映画『のんき侍大暴れ』で、水原真知子の夜桜お源が小股の切れ上った姐御で大立廻りも見せるが、ついに「青竜秘文のありかを白状せよ」と隠密屋敷に捕えられ、太い荒縄でグル／＼巻に縛り上げられ鞭打たれ、最後は吊責めにあわされる。散らし髪で濃艶なところを見せる。

大映のお盆映画、長谷川一夫の『銭形平次捕物控、人肌蜘蛛』で女目明しの山本富士子のお品が、賊にさらわれ縛り上げられ、吊り責めにあう、そこへ長谷川の銭形平次が助けにくるといふ、女房のお静に阿井三千子だが、今度は縛られないらしい。

角田喜久雄の『酔いどれ牡丹』が京都映画で大谷友右衛門らで映画化される。原作が、サジステイックな角田喜久雄の相当強い縛りシーンやゴウ問の場面があったの

で、さぞ楽しみというところ、浅茅しのぶのお津賀が最初から猿ぐつわ、後手縛りで出てくる、雪姫が雪代敬子、玉枝が紫千代だがいじめられるだろう。

このほか期待のもてるものに、宝塚映画の舟橋聖一の『田之助紅』が扇雀、山田五十鈴らで再映画化される。『紅血缺血』のシーンもあり、お喜和のゴウ問、処刑の場面もあることとどのように映画化されるか楽しみである。松竹の『マリア観音』では中村賀津雄が、吊責めにあい、夏川静江らが縛られ鞭打たれている。

現代劇も中々このところ『縛りシーン』があり楽しませてくれる。日活の、志津野一平の探偵もの『謎の金塊』で新人女優が父親の前で縛られ責められているのも可憐である。

大映の『魔の花嫁衣裳』で新人女優が椅子に坐らされ、ツーピースの上から荒縄で縛り上げられ、短刀で責められている。このシーンをポスターにまで使っている、矢張りお盆映画用だろう。(おわり)

「お断り」 「映画速報欄」は重複している分もありますが、そのまゝ掲載しました。今後、投稿下さる際も、重複している個所がありましても差支えありません。

ストで、この男の戦場に於ける悪虐無道ぶりを書いています。こういった話は、もうすでに何度も聞いたような筋書きで、前記の中国人の日本婦人に対する凌辱行為と軌を一にしているようです。

「戦争」という、人間の頭を根底から狂わしてしまふ非人道的暴挙に災されて、こういった人達が、かゝる行為を仿いたものでしょうが、中国人にしても、日本人にしても、一たび、戦争というものを離れてみると、全く平和的で、理性のある勤勉な人種なのですが、この点から考えても、如何に「戦争」というものが、人類を毒するか、ということがわかります。

「りべらる」の記事は、この外、朝鮮人の慰安婦に対する惨虐行為、南方戦線に於ける現地住民に対する行為などが記されていますが、とりたてゝ引用するほどのものはありません。

尚、以上の外、『翠丸責め』『浣腸責め』或は『自虐についての実験』『窃視について』の体験、告白といったものが沢山ありますが、手間を費して引用しても、皆様方に十分納得のゆくまでに至りませんので、心残りながら、今回はこれだけの御紹介に止め、次回には、又別の傾向のものから拾い上げてゆくことにいたしましたよう。

女体切腹構成案図譜

中 康 弘 通 氏 案

北 原 純 子・画

この「女体切腹図譜」八葉。は、中康弘通氏の「女腹切図譜構成案」を基として、北原純子さんが描かれたもので、切腹マニアの読者の方々からのアイデアや御希望も揮毫の上に多分に加味して貰っています。

〔解説〕

甲、時代物

(一) 女武者の最期

△案▽ 片手で鎧の草摺をたたみ上げ、片膝支え片膝立て、着衣の上より鎧通して腹を一文字に掻切るさま。血が着衣に滴り滲むところよく、唇かみしめ鬢髪やや乱れはつれ、絶望又は憤怒の凄愴なる表情を可とす。二十二、三才位。

△画▽ 戦陣の間、すでに戦の勝敗は決したるか、落城の火焰が遙かに望める山の高みに、二十才ばかりの身分ある女武者、鎧を脱ぎ、腹真一文字に掻きるさま『案』の如し。木下につないだ愛馬が嘶き、折れた

矢など敗戦のいたましさを現す。両の乳房のふくらみ、下ぶくれの顔など『案』よりはいささか若い。

(二) 腰元の自害

△案▽ 白装束にて髪は江戸期腰元風、高島田も可。上半身脱ぎ白布に端坐、切先を残して紙縊で握りを巻き締めた九寸五分で臍の直ぐ上を一文字に切るさま、流血斑々と散り陶酔的な表情を可とす。式場らしく三宝は必ず配する。十七、八才。

△画▽ 自害の理由はしかと判らないが、膝前の三宝には遺書が置かれてある。上半身、下腹部まで裸体、臍を十分にあらわし小刀を左脇から臍下まで、切りさばき、やや上向き加減の苦痛の表情、血汐が左手の上臍部から膝の上の白衣裳にしたたり落ち更に、膝下にまで溜っている。

(三) 遊女の自決

△案▽ 慶長風俗にて帯は細帯（前結びも

可）上半身を露わし（前だけ開くも可）懐剣にて臍上を一文字に切るさま、表情は凄艶を可とす。端坐又は横坐りに崩れかけるもよし、三宝はなく黒塗り時絵の鞘を前に文机を横におく。十六、七才位。

△画▽ 背後の衣桁には派手な衣裳をかけたいささか妖艶な感じ、左手は袖から脱いで直接自分の左腹を押さえ、懐剣の切先は、臍下をしたたかに真一文字に切り開き、血痕淋漓、上半身から、下腹部、膝まであらわれ、豊満な肉体の苦痛にもだえるさま、まことに見事、血は下腹部より太股にまで飛び散り、切口から臍のあたりまで、にじみ出ている。

(四) 武家の娘

△案▽ 畳に端坐、紫矢紺の着衣に一本鎧鉈の帯を解き捨て、淡紅色又は藤色の下ノで寛げた着衣を腰の辺りに締め、脇差で臍の直ぐ下を横一文字に切り終え更に鳩尾より縦に押し下げるさま。三宝は省き鞘を膝の横か前におく。表情は哀怨の趣きを可とす。二十才位。

△画▽ 武家の娘、姉妹二人を配したため、絵は『案』といささか異なる。姉娘は矢紺の着物の襟をくつろげ、懐剣にて、臍下を深くしたたかに真一文字に切りさばき、溢れ出た腸を左手にて握かみ出さんとして

いる。畳の上に懷紙を敷き、切腹に用いた血塗れの懷刀を置く。苦悶の表情は清婉、上体は双の乳房もあらわに右に、今まさに倒れんとする。妹娘、姉に寄り添いながら背後より支える。妹娘も共に腹を切る態にて、豊かな乳房をあらわすまで着物の襟をひろげている。

乙、現代物

(五) 女剣劇の腹切り

△案▽ 男装小姓風男髪にて、大振袖の胸を寛げ乳房を必ず見せること、立ちながら大刀逆手に一文字腹を切るさま、眼は成可く大きく見聞き苦痛感を表出すること、二十六、七才にても可。

△画▽ 男装小姓風の男髪、上半身肌ぬぎにて、大刀を下腹に突き立てたところ。血が飛び散っている。派手な模様の袴を着しているが、むっくりと盛り上った乳房が女であることをはっきりと表している。

(六) 女剣士の切腹

△案▽ 髪は束髪又は軽いパーマ。白地馬糸刺子短袖の上衣に、義経袴。道場板の間に端坐、又は蹲踞の姿勢にて足踵を寄せた上に尻を据え、やや開き目の両膝頭を支えていること。遺書らしき奉書包みを三宝に乗せる。道場正面の神棚を承する場所の心持を要す。胸を開き乳房と臍は十分に覗か

せ、成可く両手で白布を緊と巻いた九寸五分の柄を握りしめ十文字に腹を切るところ。哀怨の趣きをよしとす。二十才前後のこと。

△画▽ 刺子の稽古着姿、道場板の間の中央に両膝を揃えて端坐。胸から下腹部まで十分にあらわし、短刀を突き出て切り廻すところ、左腕、臍下、着衣の襟などに血汐がとび散っている。目はかっと瞠き、苦痛を堪えている表情。

(七) 現代風

△案▽ 美貌のオフィス・ガールの心持。髪はパーマ、紺のスカート、白ブラウス、白シユミーズ等きちんと夫々たたんで横におくか衣桁にかける。ブラジャーとパンテイスのみの姿で端坐又は横坐り気味。たたみの上かベッド又は蒲団の上でも可。遺書らしき一封筒を前におく。下腹部を可成り露わし、短刀にて下腹部中央臍下一寸の位置を刺し貫くさま、又は左より引廻し中心に至るところをよしとす。表情は哀婉且つ陶酔感あるべし。一文字に切り了え、左手で大腸を掴み出せるも可。

△画▽ 洋風のアパートの一室、カーテンの蔭にベッドが見える。近代的な美しい顔つきのオフィスガール、パンティを膝頭まで下げ、ブラジャー一つの全裸に近い姿にて正坐す。短刀にて左下腹から臍下まで切

り、血は膝から床まで流れて脛の脇にて溜る。左手は胸を押さえ、苦痛をこらえて上向いた顔は悲愴、下腹部から臀部、膝頭など極めて豊かな膨隆を見せている。リボンをつけた髪は可憐。

(八) 農家の娘

△案▽ 紺紺のモンペの紐を解き、胸腹を露わし、臍下一寸最も膨満せる辺りを横に鎌の柄を右手に刃の背を左手で押し一文字に切るさま。凄愴感よし。二十才前後、姿勢は女武者の姿勢に準ず。

△画▽ 木立の茂った丘の上なるべし。十七、八才のお下げに結った可憐な娘、モンペの紐を解いて、胸、下腹部を開き、鎌の柄を右手に、刃に左手を添えて、今まさに下腹部へ突き立てようとするところ。鳩尾の窪み、膨らんだ腹部、臍窩を十分に正面にあらわし、顔は鎌の刃先から下腹部に注がれている。膝前に着替え、カバン等を置き、背後に駒下駄を揃えてある。

〔分譲〕

◎女体切腹構成案図譜

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組 千円(送料共)

右、御希望者はお申込み下されば、早速焼増の上、急送申し上げます。

“Rebellious Wasps”

-by- Eza.

Complets Story-4 chapters.

大中判印画紙焼付 英原文入

4枚1組 600円 (送共)

女性の女性に対するコルセット責め、尻打ち、注射、等々、拷問部屋に於ける数々の責場面の展開。

“Three Painful Years”

-by- Claire Willowes.

Complets Story-8chapters.

大中判印画紙焼付 英原文入

8枚1組 1000円 (送共)

女性が女性に加える苛籍なき調教と責苦、緊縛、鞭打、吊り下げ、逆吊り、足くさり、木馬、猿ぐつわ、あらゆる小道具を用いて、犬にしたり、馬にしたり、或は乳牛を乳を搾らし、床を磨かせ果ては、腹這いにして、ハイヒールの先を舐めさせる等、惨酷なるサジスチンの考案した責が絢爛として繰りひろげられる。

“Inuitation to the Dance”

-by- MacClyde.

Complets Story-16chapters.

大中判印画紙焼付 英原文入

16枚1組 1800円 (送料共)

マダムのメイドに対する責め、手と足とお尻を縛られ、鼻輪、舌輪をつけられた女中、ソファーに傲然と鞭を持つマダム、拷問室に於ける女性に対する女性の加虐は、一枚一枚その程度を加え、エキゾチックな趣向と相俟って、見る者をして桃源境へ誘い込まずにはおかない。水車責めに自転車責めといった奇抜なアイデアも生かされている。

“Bound for Slaues”

-by- B.Feminda.

Complete in 16 chapters.

大中判印画紙焼付 16枚1組 ￥2500円 (送共)

美しい女護島ならぬ美人ばかりの部屋へ迷い込んだ男が、女たちの手によって、あくなき責苦に逢うという、女性による男性責めの場面ばかりの集録、マゾヒストにとっては唯一無二の宝典。

北原純子・責面傑作選

△ハートの的△女体洗滌室△

大判印画紙焼付

二枚一組 三百円

全裸の豊満な女性に加えられる

△緊縛ヌード十六ポーズ△

大判印画紙焼付

二枚一組 三百円

柱、棒、杭、石、等を用いて

女体緊縛ヌードの様々な姿態を

お目にかける。

(以上、二組にて五百円)

△女学生の羞恥責め△

大判印画紙焼付

四枚一組 五百円

純情可憐な美貌の女学生をモ

デルとして描いた大胆きわまり

ない責構図四態。内容は見ての

お楽しみ。必ずお気に召す北原

純子女史の快心作。

血紅使用の女体切腹写真

女体切腹研究家某氏(特に名を秘す)が、うら若き女性をモ

デルに使用して作成された女体切腹シリーズ。

同氏よりネガを提供されていますので、御希望の方々へは焼

増して差し上げます。ネガは十枚あります。御入用の方は、

焼増の大きさを御指定の上、返券封入にて御照会下さい。

代理部分譲品目録

作成中

代理部からの分譲品目録を目下作成中ですので、御入用の方
は八円切手封入の上御申込下さい。出来次第お送りします。
尚、以前に御申込になって予約されている方へは出来次
第お送りいたします。

〇八月号(復刊第七号) 目次

定価二百円(〒8円)

口絵

美しい床の間……………四馬孝・画

すべりだい……………(慈子恵子嬢)

米誌にみた緊縛画

欧米式新スタイル二態

絵物語

華々しき私刑……………北原純子・画

大衆文学に現れた責めの描写……………藤見 郁

無惨絵マニア……………京 洛 生

マゾヒストとしての二等兵時代の思い出

……………才 昭吾

被縛症……………高村 民子

縛り絵マニアの回想……………渡辺 乃介

光りある中を……………近東規矩也

おきなひのひとりごと……………浪花 老人

編集者へ、一読者としての公開状

……………畑中 敏夫

元禄女腹切り……………川野 京輔

「太陽の季節」を斬る……………鬼山 紉策

歴史に現れた三人の美少年……………西村 向南

「鼻」として「変型しほり」と

……………真鍋四十七

幽囚十ヶ月……………春田 一郎

目決する従軍看護婦たち……………東 一郎

奈子のA感覚について……………門田 奈子

賭けられた洗滌……………矢崎 竜一

最近の縛り映画から……………嵯峨美也子

赤い花は泣いている(最終回)……………松井 頼子

奇譚クラブに寄せて……………真木不二夫

私のコレクションより……………角間 莊吉

続「少年権記」……………山口 幸一

KK誌編集方針に就いて一言……………佐藤 鼎

幻想小説「濃威の前夜」……………土路 草一

緊縛映画速報欄……………千葉 栄市

最近の映画から……………白石 稔

春田ルミ様まいる……………篠中友三郎

私の蒐集帖——緋草紙より……………緒台あふみ

玉稿落穂集……………編集部

新聞紙上に出た切腹実話……………藤森 一夫

探偵小説新考……………東 一郎

灸痕を吸う……………脇坂 豊助

蜂洞完成……………嵯間 洋子

新聞・雑誌通信……………青山三枝吉

倒錯の英雄、織田信長……………笠置俊郎・作

外国文献紹介、サド・マゾ関係

……………藤木 仙治

とりこの白人娘……………藤木 仙治

天星社代理部特選写真集

アフオト集 読者通信

編集後記 女体切腹構成案図譜

天星社代理部特選写真集 (実費分譲)

□高級光沢印画紙使用 大きさ (タテ 九寸 横 十三寸)

緊縛女体の
フォト

二枚一組 一五〇円 五枚一組 三〇〇円
三枚一組 二〇〇円 六枚一組 三三〇円
四枚一組 二五〇円 十二枚一組 六〇〇円

- | | | |
|-------|----------|-------------|
| AS 1 | タンス責め | 伊吹真佐子嬢 三枚一組 |
| AS 2 | 浴室の緊縛プレイ | 須川令子嬢 二枚一組 |
| AS 3 | 柔肌の弄戯 | 村田那美子嬢 二枚一組 |
| AS 4 | アクロ緊縛 | 萩千恵子嬢 六枚一組 |
| AS 5 | トイレ五態 | 須川令子嬢 五枚一組 |
| AS 6 | 強烈股間緊縛 | 中塚文子嬢 六枚一組 |
| AS 7 | セーラー服哀歓 | 須川令子嬢 三枚一組 |
| AS 8 | 奇抜な縛り | 伊吹真佐子嬢 二枚一組 |
| AS 9 | 蒲団責め | 須川令子嬢 五枚一組 |
| AS 11 | 女体嗜虐譜 | 春日伊吹二嬢 五枚一組 |
| AS 12 | 裸に縛るまで | 菅登紀子嬢 四枚一組 |
| AS 13 | 胴絞めしぼり | 伊吹真佐子嬢 二枚一組 |
| AS 14 | 後手縛三態 | 佐賀美智子嬢 三枚一組 |
| AS 15 | 股間しぼり五態 | 須川令子嬢 五枚一組 |
| AS 16 | 馬乗り姫シリーズ | 春日伊吹二嬢 六枚一組 |
| AS 17 | 禪美女体 | 須川令子嬢 二枚一組 |
| AS 18 | 股間緊縛四態 | 萩千恵子嬢 四枚一組 |
| AS 20 | 見ちや嫌 | 伊吹真佐子嬢 三枚一組 |

- | | | |
|-------|-----------|--|
| CS 1 | 美しき惨虐物語 | ヤンチャ娘：春日ルミ嬢
内気な娘：伊吹真佐子嬢
(シリーズ) 十二枚一組 |
| CS 2 | 裸身の嬌羞 | 須川令子嬢 三枚一組 |
| CS 3 | セーラー服の見世物 | 雪井久子嬢 六枚一組 |
| CS 5 | 素足の色気満点 | 佐賀美智子嬢 三枚一組 |
| CS 6 | 排泄の強要 | 中塚文子嬢 四枚一組
(この分は特に三百円) |
| CS 7 | 悪鬼の仕打ち | 杉 美美嬢 二枚一組
(この分は特に二百円) |
| CS 8 | ガンジガラメ吊り | 萩千恵子嬢 二枚一組 |
| CS 9 | 芋虫コロコロ | 厚狭春江嬢 二枚一組 |
| CS 11 | 女悪魔の暴力 | 女悪魔：春日ルミ嬢
いけにえ：伊吹真佐子嬢
シリーズ 五枚一組 |
| CS 12 | 女の禪美 | 伊吹真佐子嬢 二枚一組 |
| CS 13 | 雨の夜のプレイ | 萩千恵子嬢 三枚一組 |
| CS 14 | ショー出演 | 萩千恵子嬢 三枚一組 |
| CS 15 | 女体の荷造り | 春日、伊吹二嬢 二枚一組 |
| CS 16 | 四モデル特選集 | 萩嬢、高瀬嬢 四枚一組
杉嬢、伊吹嬢 |
| DS 1 | 観念横臥の図 | 花坂道子嬢 三枚一組 |
| DS 2 | 乙女の開陳 | 花坂道子嬢 五枚一組 |
| DS 3 | 失ったバタフライ | 須川令子嬢 三枚一組 |
| DS 4 | 寝乱れ姿 | 須川令子嬢 五枚一組 |
| DS 5 | 素足まるだし | 佐賀美智子嬢 五枚一組 |
| DS 6 | 首縄万華 | 佐賀美智子嬢 三枚一組 |
| DS 7 | 浴室股間縛 | 中塚文子嬢 三枚一組 |
| DS 8 | 素足素顔三態 | 須川令子嬢 三枚一組 |

アブフオト集

◎得難い稀少な

二十五集◎

各組 一枚 八〇〇円
 十組 一枚 七五〇円
 二十五組 二十五枚 一八〇〇円
 (以上全部送料共)

B S 1	覗れた下着 (加賀嬢)
B S 2	股間しばり (坂口嬢)
B S 3	クリツプ責め (川辺嬢)
B S 4	擦り責め (中富嬢)
B S 5	組上の魚 (須川嬢)
B S 6	大の字縛り (浅野嬢)
B S 7	みずばれ (杉嬢)
B S 8	くさり責め (高瀬嬢)
B S 9	折檻 (雲井嬢)
B S 10	梯子責め (伊吹嬢)
B S 11	ハリツケ (萩嬢)
B S 12	月経帯縛り (村田嬢)
B S 13	手錠くさり (伊吹嬢)
B S 14	人身御供 (高瀬嬢)
B S 15	落した下着 (萩嬢)
B S 16	下半身裸出 (村田嬢)
B S 17	鼻責め縛り (川辺嬢)
B S 18	高手小手 (加賀嬢)

新マゾ風景十態

一組 一枚 一〇〇円
 十組 十枚 九〇〇円

M 1	ワン公水をやるうか
M 2	ベッドの上で可愛がる
M 3	押え込み
M 4	足舐め大写真
M 5	お化粧台
M 6	ハイヒールの下にて
M 7	足の裏に屈服する
M 8	頭を殴る
M 9	お小言頂戴
M 10	男性緊縛フオト
M 11	晒し者三態
M 12	男性股間しばり

女体切腹写真

三枚 三〇〇円
 一枚 一〇〇円

しせ〇自害悦虐女体切腹

キヤビネ版 三枚一組 三百円

かせ〇女学生の切腹姿態

キヤビネ版 五枚一組 五百円

まん〇切腹曼陀羅図

キヤビネ版 五枚一組 五百円

たち〇女性切腹「立腹」

手札型 二枚一組 百五十円

さん〇女学生散華

キヤビネ版 七枚一組 七百元

H1 女体割腹譜

二枚一組 二百円

女性浣腸写真

かか〇女学生の浣腸

キヤビネ版 四枚一組 五百円

K1 エネマシリンジ

四枚一組 三百円

マゾフオト

とし〇奴隷使役

キヤビネ版 三枚一組 三百円

しし〇女王様の尻の下

キヤビネ版 三枚一組 三百円

なむ〇長靴着用の女性か

ら鞭で仕込まれる

キヤビネ版 三枚一組 三百円

とき〇奴隷教育

キヤビネ版 三枚一組 三百円

し〇乗馬靴乗馬服の男

から責められる男
キヤビネ版 三枚一組 三百円

お〇〇男性縛り禪美縛体

キヤビネ版 三枚一組 三百円

お〇〇男性緊縛二態

キヤビネ版 二枚一組 三百円

な〇〇男られる男

キヤビネ版 三枚一組 三百円

へん〇鞭撻

キヤビネ版 二枚一組 三百円

◎御注文の葉◎

◎御注文は符号だけで品物を御指定下さって結構です。

◎総べて通信にてお申込み下さるよう願います。直接の御訪問はお断りいたします。

◎御送金は綴込の振替用紙を御利用下さい。振替手数料は普通郵便に到着します。但し普通郵便より二、三日遅れます。早送品物をお送り下されば、早送品物をお送り致します。

奇譚クラブ旧号主要目次

昭和三十年

〇五月特大号

白面鬼	竹谷十三
続々、女性切腹断想	田谷敬三
見世物とサディズム	土屋淑人
たのしみはアブセックス	藤見郁
アブ追求三十年の回顧	山田正実
さいたふ	吾妻新
女サディストの手記	長瀬子
悪癖	榎本利昭
緊縛の回想	依田和雄
緊縛モデルの素顔	沢村精二
「呪い」の縁起	野村和隆
「死を憶える男」	青葉当魔
我が倒錯の系譜	山本和彦
禪美私感	山本和彦
縛り絵について	鳴海文雄
明治十年の新聞覚え書	吾妻一郎
幽囚十ヶ月	春田新
性への一考察	二侯志津子
おしめカパー	みずしま・まもる
アブ・ホート談義	狩井麗子
孤独の広場	吾妻新
或る少年のモノロク	牧啓一

〇三月特大号

倒錯研究の新展開について	成瀬川合伊都子
SAPHO日本版	川合伊都子
ボクの貴め方	宝塚三三夫
大津事件とその後日譚(一)	須藤新夫
夜光島(六)	吾妻新
「奇抜写真」寒夜の庭の櫓	大庭高視
残虐なる女性達	森本愛造
私のイメージ「手術室」	竹谷十三
「朝来波」	白金紅次
敬義先生医学相談 回答者	伊藤晴雨
血染の毛綱	伊藤晴雨

天狗鼻由来記	緑・猛比古
汗について	みずしま・まもる
「トウキョウの一夜」	R・G・S
マゾへの胎動	三根耕二
絵物語「百合子の冒険」	村崎明
編纂者への手紙	或る読者から
アブ追求三十年の回顧	山田正実
懸賞入選第三席「陰の花」	片矢正三
萩千恵子論	鳴海文雄
あるマゾヒストの手帖から	沼田正三
奇妙な便り	読者通信の囁き
細い縛り	二侯志津子
腰巻専門の窃盗男捕縛る	春木俊野
緊縛モデルの素顔	沢村精二
「マゾヒストの手帖」速報欄	白石正隆
最近の映画から	鈴木千稔
縛り映画落穂集	津島比呂史
「我が愛の記」について	中津直
「ウイナスの重石」	真砂十四郎
女性願望の青年の手紙	二侯志津子
Mへの手紙「第一信」	喜多島春夫
「残虐なる女性達」面集解説	森本愛造
編纂者への公開状	喜多島春夫
わが半生の記	喜多島春夫
幽囚十ヶ月	依田新
賣めのアイディア	堀田八郎
倒錯の英雄、織田信長	笠置俊郎
縛り絵を描いて	鳴山能平
洗腸マエヤの日記	花村恵美子
巨根崇拜	森田太一
自腹を切る	小田原渡
私の体験記	長瀬子
寄宿舎での体験	緑川純子
導尿される令嬢	田村仁子

〇二月特大号

倒錯趣味は果して背徳か	成瀬川合伊都子
「姑娘来り」	白金紅次
炎魔雑記	山口幸一
禪美愛好家の傾向	山口幸一
草双紙合巻に現れた女腹切	探書生

血染の毛綱(二)	伊藤晴雨
お灸通信	岩瀬祥一
絵物語「百合子の冒険」	村崎明
狼らな虫	辻村隆作
残虐なる女性達	森本愛造
洗腸の往復文書	花村恵美子
鉢山の少年忠告録	二木良雄
裸にされた美人通訳	山本晴
非小説性液	伊藤晴雨
レスボスとソドミアへの福音	伊藤晴雨
幽囚十ヶ月	春田新
少年の体臭	森田太一
倒錯の英雄、織田信長	笠置俊郎
「編纂者への公開状」	吉次郎
大津事件とその後日譚(二)	須藤新夫
少年の割腹自殺	小竹比呂史
あるマゾヒストの手帖から	津島比呂史
嫉妬する少年たち	三根耕二
自分後手に縛る方法	伏根耕三
A感覚の秘密	羽村京子
サジステイツクなシーンに就て	柳一
最近の映画から	白石柳
無毛狂	末森柳
弱者劣者にサジズムを感じる	末森柳
夜光島(五)	吾妻新
私のイメージ「お灸と乳房」	狩井麗子
「写真」お灸と乳房	土岐成之
ボクの貴め方	宝塚三三夫
映画に現れた切腹シーン	中野妙子
強盗に入られた時の事	古田吉郎
鼻責めについての実験	花村恵美子
「乳棒と月経帯」	大沢通子
特異マゾの告白	長瀬子
露出願望の少女の告白	柴崎明
私の見た三人の腰巻女	東明

〇新年特大号

破壊本能の文化的理由	林弓志雄
非小説性液	伊藤晴雨
「腹部に依る悦虐」	兵頭庫一

畸型の愛着	津久井
残虐なる女性達	森本愛造
A感覚の秘密	羽村京子
「遺精」悪の広場	角村祥二
お灸二態	岩瀬祥一
人工女性会見記	滋賀二
ソドミアの祭壇	三根耕二
草双紙に見る女腹切	川合伊都子
縛られた女優	井上正三
あるマゾヒストの手帖から	沼田正三
緊縛に関する十二章	村崎明
絵物語「百合子の冒険」	村崎明
告白文、体験談の書き方	編纂者
幽囚十ヶ月	依田新
切腹願望と臍いじめ	沢村精二
倒錯の英雄、織田信長	笠置俊郎
男性切腹同性愛者より	児島清
挿絵と心中し度い	白金紅次
春日ルミに関する十二章	春日ルミ
女蘭美考現	土俣四股平
「あるマゾヒストの手帖」旧号目次	土俣四股平
絵物語「芸者、春駒」	依田新
現代マゾヒズム芸術時評	原二
日本訳「残虐なる女性達」	森本愛造
丁稚小僧幻想	吾妻新
夜光島(四)	吾妻新
敬義先生性愛相談 回答者	伊藤晴雨
血染の毛綱	伊藤晴雨
「残虐なる女性達」面集解説	森本愛造
女灸点師	長瀬子
縄と足の遍歴	幾山保
縛り絵マニアの記録	青葉当魔
「色慾のペーシ」	藤見郁
眼帯ケニアの妻の日記	藤見郁
男色秘話「集る人々」	藤見郁
「綿ネルの妄想」	藤見郁
夫婦の倒錯遊戯	山田正実
動物嗜好者の手記	山田正実
号泣(私の腋窩遍歴)	山田正実

告白と手記と体験人選	山田正実
動物嗜好者の手記	山田正実
号泣(私の腋窩遍歴)	山田正実

四馬孝・傑作画集

『美しき女体家畜飼育室』

（「潰滅の前夜」より）

（大中判印画紙）焼付 八枚一組 八百円（送共）

「縛り絵」に対して、独自の境地を打ち樹てた四馬孝氏が、ここに筆を新にして、逞ましき制作意欲を湧かして、鋭意ものさした傑作画集を、マニアの方々の要望に応えて分譲することに決しました。テーマを本誌七月号並に八月号所載の「土路草一作」「潰滅の前夜」にとつておりますが、アイデアは、これすべて四馬孝氏の発案になるものばかりです、写真と交らぬ精緻なタッチは、きつと皆さまを妖しい女体嗜虐の恍惚境に彷徨させることでしょう。

（一）奇妙な磔

Y国人の地下室へ捕われた美貌の日本娘、彼女たちは従順な

る家畜として飼育させられるため、言語に絶する厳しい調教が科せられる。胸に絡らんだ冷たい鎖、足首にはまった鉄のベルト、そして口には、革製の鉗口具が、しっかりとこまされていく。あゝ、これ程の美貌に対する凌辱が又とあるであろうか。黒い手袋をはめたY国人の触手は、日本娘の顔に迫ってくる。

（二）排泄の強要

天井から荒縄で吊り下げられた足首、身動き出来ない緊縛の上、鼻をつまみ上げて仕方なく開いた口の中へは、大量の食塩水が情容赦なく注ぎ込まれてゆくのだ。今は観念の眼を閉じて、その水を受け入れているが、や

最新版女体緊縛フォト

光沢印画紙焼付
本誌写真部特写

本誌、復刊後、キャビネ版として誌上に初めて発表された女体の特写。若々しい多数のモデルが縦横無尽に活躍している。お早くとくお求め下さい。

F1 高瀬忍嬢

悦虐ポーズ代表選
キャビネ版 三枚一組 三百円

F2 美少女緊縛

（中富綾子嬢）
キャビネ版 二枚一組 二百円

F3 藤田節子嬢

「落花狼藉」
第一集 三枚一組 三百円
第二集 三枚一組 三百円

F4 古川裕子好み縛り

（萩千恵子嬢）
第一集 第二集
キャビネ版 三枚一組 各三百円

F5 加賀利江子嬢

第一回縛り集
第二回縛り集
キャビネ版 三枚一組 各三百円

F7 加賀利江子嬢

悦虐ポーズ集
キャビネ版 三枚一組 三百円

F8 厚狭春江嬢

股間しばり三態
キャビネ版 三枚一組 三百円

F9 デニムのズボン縛り

（加賀利江子嬢）
キャビネ版 三枚一組 三百円

F10 須川令子嬢

股間しばり三態
キャビネ版 三枚一組 三百円

F11 萩千恵子嬢

新版腰巻しばり
キャビネ版 三枚一組 三百円

F12 灸点地獄

（施術者 春日ルミ嬢）
（被術者 伊吹真佐子嬢）
キャビネ版 三枚一組 三百円

F13 悦虐モデル

緊縛六人集
キャビネ版 六枚一組 五百円

F14 ジャジャ馬馴し

（中富綾子、村田那美子）
キャビネ版 三枚一組 三百円

F15 逆さ吊り

（伊吹真佐子嬢）
キャビネ版 三枚一組 三百円

F16 萩千恵子嬢

新版股間しばり
キャビネ版 三枚一組 三百円

がて起ってくるであろう生理現象を想像してY国人は、にやりとやりと、ほくそ笑むのであった。

(三) 煙草責め

完全な後手しぱり、足首は揃えて椅子の脚に固定され、真紅の猿ぐつわの上には、更に革のベルトを二重にはめられて、口からは、息を少しもすることは出来ない。只二つの鼻孔から、あえない喘ぎをくりかえすに過ぎなかった。背後に迫ったY国人の手にしたのは、火のついた紙巻煙草であった。形のよい右の鼻孔にその煙草をさし込んだ忽ち、左の鼻孔からは、煙が渦を巻いて吐き出された。苦悶にもたえる美貌の日本娘、Y国人は更にもう一本の煙草をとり出して火をつけようとするのであった。

(四) 現代の火責め

膨隆した両尻に艾のけむりを挙げる全裸の日本娘、あゝ、なんとたる美貌に対する凌辱であらうか、一見、肌に粟を生ずる凄

絶きわまりなき責地獄。

(五) ミンミン責め

「そうら、鳴き声が悪けりや、声の出がよくなるようにしてやるぜ、それで足りなきや、まだ／＼手があるんだ。これはほんの序の口だよ。」

(六) 空気ゼメ

なんという惨忍な恐ろしい男の責上でしょう。身動き出来ない彼女は猿ぐつわの苦しきも、縄目の痛さも忘れ、鼻孔を僅かでも開けようと切なく喘ぐ。

(七) 食事ゼメ

「フ、フ、さあ、腹がへったろう、食事の時間だぜ、特別料理だ、ゆっくり食べさせてやるからな。」白い顔がぐっと仰向かされて、男の手から……。

(八) みじめな美しい白豚

「さあ、後でゆっくり又鳴声をきくからね、その美しい顔をよく見ておきな、ふん、いくら奇麗だったからって、あんまりなめた真似をしやがって、ざまア、見ろ。」

(以上八ポーズ)

F26 女学生凌辱連続写真 キャビネ版六枚一組 五百円	F25 ローソク責め (春日、伊吹、二嬢) キャビネ版三枚一組 三百円	F24 女体品定め キャビネ版三枚一組 三百円	F23 肉体美緊縛三態 (伊吹真佐子嬢) キャビネ版三枚一組 三百円	F22 猥らな縛り (須川令子嬢) キャビネ版四枚一組 四百円	F21 女体いじめ四態 春日、伊吹、二嬢コンビ キャビネ版四枚一組 四百円	F20 須川令子嬢 立木縛り野外晒し キャビネ版三枚一組 三百円	F19 強烈縛り五人選集 キャビネ版五枚一組 五百円	F18 萩千恵子嬢曲芸縛り 手札型三枚一組 二百円	F17 坂口利子嬢 悦虐全裸緊縛集 キャビネ版三枚一組 三百円
F36 落したスロース (佐賀美智子嬢) キャビネ版五枚一組 五百円	F35 旦那の二号責め キャビネ版十枚一組 八百円	F34 凌辱魔侵入(シリーズ) キャビネ版十二枚一組 千円	F33 佐賀美智子嬢 女事務員の縛り キャビネ版三枚一組 三百円	F32 晒責め三態 (伊吹嬢) キャビネ版三枚一組 三百円	F31 お寝み前の五分間 キャビネ版三枚一組 三百円	F30 修学旅行の出来事 (須川令子嬢) キャビネ版二枚一組 二百円	F29 衆人環視の緊縛 (萩千恵子嬢) キャビネ版三枚一組 三百円	F28 川辺砂登子嬢 メンズズバンド着用 キャビネ版二枚一組 三百円	F27 須川令子嬢 高手小手五態 キャビネ版五枚一組 四百円



【読者通信】

夏らしく大分暑くなって参りました。始めて読者通信を書いて見ましたが、なんだか胸がどきどきして思う様にペンが走らず読みにくいと思いますが、どうぞおゆるし下さい。私は同性の方より六尺一俣一本或は、全裸にて思う存分緊縛して戴きたいと何時も念願致して、KK通信の十六号を見て一人淋しく自縛して居ります。当年二十七歳(身長五尺七寸、体重六十二匁)になります、未だ独身でおりますその為と思い、ひたすら同性のサディストの方をのぞんで居ります。家では職場(郵便局)から帰ったら下着全部ぬいで六尺一俣一本になり、局でもなるだけ人目につく様にズボンをうんと下にさげ、褌を直したりして居り

ます。今年四月に、友人と二人で嬉野に一泊で旅行しましたが、夜部屋にて、かねて用意していたロープを出し六尺一俣一本になり、両手を合わせて「其のロープで、おれを縛って呉れ」と恥をしのんで思い切つて頼みました。友人は、最初びつくりして居りましたが、気持が至つておとなしい方ですから、云われるまゝにロープを取り何んとか縛つて呉れましたが、他人から縛つてもらつたのは始めてだったので、緊縛の醍醐味を味わいましたが、同好の人より、股間縛り(サルグツワ)海老責め等、情容赦なく縛られたいと思つて居ります。五月号の「池田正治様」七月号の「六尺ふんどし愛用生」の方との文通致したいと思ひますが御住所がわかりません。若しおわかりでしたらお知らせ下さい。それから「東京のSK生」様の云われる様に限定版「ソドミ」特集号の企画をぜひとも実現して下さい。我等六尺褌愛好生、緊縛マニヤの夢です。どうぞお願い致します。(佐賀 淀川生)

女腹切特集号の無期延期はまことに残念この上なく存じますが、北原画伯の麗筆八枚組を拝見、近

来の一大収穫として深く拝謝の意を表する次第です。情趣といふ、気迫といふ、揃つて遺憾なく女腹切の凄艶な雰囲気を与えて見事な出来栄でした。特に小感一筆左記に述べてみます。

○女剣士、稽古着は袖短く、ピッタリ肌についたものゝ方が宜敷きかと存じます。(藤山、青山氏所論の如く。)○白衣の腰元、双肌を完全に脱がせた方がよろしいでしょう。○女武士、ぬいだ鎧の胴丸を側に見せた方がいゝでしょう。

○女若衆、肩のあたりの白き印象的。以上四枚特に秀逸。○農家の娘、可憐純情申し分なし。○二人の武家娘、切腹の凄壮感や不足。○遊女、表情や哀艶の趣きに乏し。○現代娘、難点なし。かゝる形式により、今後も名面を続々お頒ち下さるよう期待しております。一度伊藤晴雨先生の作をお願い出来るよう御考慮下さい。(一枚でも結構)構図の例として、刺青白さらし腹巻の女賊、乱髪双肌ぬぎ立腹の図も面白いかと思ひます。今度の二人娘の図でも分る通り、群像となると、又一段の味が出ます。「女白虎隊切腹」の大絵巻をプランの中にぜひお加え願ひとう存じます。(東京 R・K生)

○小生始めておたよりいたしますが、御誌の存在をこよなきたのしみとする一読者でございますが、此度、御誌におかれましては、懸賞作品募集の由、甚だあつかましく限りですが、此の機会に思い切つて自身のたのしみを発表、若しも、共感を寄せられる方が居られましたら、非常な喜びであると存じます。今度御誌を通じて、同好の志と共にたのしみたいと存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。今後の御誌の御発展をお祈りいたします。

(カオル・サヤマ)

○奇譚クラブの御復刊を心からおよろこび申し上げます。昨日或る所で、はからずも六・七月号を手に入れる事が出来ました。旧号が廃刊になったときには、最早今後「奇譚クラブ」に目を通す事は出来ないのでないかと思つておりましたのに、実に意外で、夢を見て居る様な気がしました。今後の本誌の躍進を心から御祈りいたします。

(E・G生)

○連日の奇巧の皆さまの御努力厚く御礼申し上げます。増大号当時の

素晴しきは失われたとはいえ、ともかく無事発行されている事だけでも感謝の他はありません。今月特別サジ・マゾ特集が出るの由に、発表後、直に送金出来る様準備して居りましただけに、発行不能の発表にはがっかりする他ありません。全くがっかりです。どんな理由ですか。最近の奇巧は、少しく突込みが足らぬ様に思いますし、写真等でも、前の川端さんや伊吹さんの強烈な責めものが見当りませんが、伊吹さんに御願ひして、吊りのシリーズ物に、股間縛りや胴じめ、乳房責めを併用した吊り、逆海老吊等強いものを希望して居りますが、高価でもよいから計画していただけないでしょうか、御願ひ致します。素晴らしい貴社のフォートの更に一段の進歩発展を祈ります。(岐阜 I・K生)

○ 八月号二十六日に到着致しました、が入手して見るとその不満もけし飛んでしまいました。親しみある私達の雑誌であるからでしよう。拙稿、「探偵小説考」掲載させていただき感謝しております。その上私の大好きな北原純子のカットで飾って下さいましてありがたく思っております。北原さんの

独得の柔かい描き方がたまりません。表紙は復刊以来一番好いと思えます。少し古風な感じですが、それが又、実に魅力的です。裏表紙のカットは、やはり新しいものから選ばれた方が好い様に思われます。読者通信、早速十頁に拡張下さって、ありがとうございました。卒直な皆様方の御意見が活潑に述べられ、非常に有益だと思えます。尚拙稿「自決する従軍看護婦たち」の下のローカル・レポートは私が投稿したものではありません。何かの間違ひかと思えます。為念お調べ下さい。

(東一郎)

○ 八月号、一日千秋の思いで待っていました。今日やっと到着しました。真先に特集号発行予定を探しましたが、見付からず落胆した処、最終頁に無期延期とあるのを読んで、口惜しいやら張りつめていた気持ちが一途にくずれてしまいました。本当に残念でなりません。種々とその間事情があると存じますが、此の特集号発行が復刊後の本誌の飛躍を示すものと思っていました。が、やはり夢は実現しなかつたのです。私達の求めるものは現在他に無いと云って過言

ではありません。素晴らしい内容と充実さを持った特集号ならば、絶対求め欲する人には値段など問題ではない筈です。奇巧も値段云々の、いや求めねばならないのですから、二百円の値に云々する必要はないわけで、たとえば特集号などは千円では安すぎる感があるし二千円でも三千円でも本当に欲しいものは、それが無いと思えばいくらでも値段は云えるのですし、亦どんなに高くても欲するものが求めるのが真理ではないでしょうか。編集者の方もあまり無理な採算をとらずに、此の種の発行には思い切って値段にかかわらず、求める人の多い事を承知下されて発行して下さい。何卒特集号を出来得る限り早期に実現させて下さい。此度の無期延期も私達読者にも責任あると考えています。成可く早期に発行される様重ねてお願い致します。私は読者の皆様に呼びかけます。私達が希望した特集号の無期延期を残念に思い、早期にその発行実現を求めるものです。私達で呼びかけましょう。私達の一つの夢の実現に向って！

(K・M生)

五、六月号に掲載の「悲風磨上原」興味津々に拝読致しました。若き乙女達が廃屋の農家に火をつけ主君の後を追って次々と果てゆく描写……特に双肌を押し広げて互いの豊かな胸乳をめがけて放つ矢！一筋……その矢がプツリと柔肌に突き刺さる一瞬！亦急所をはずれた乙女が、脇腹に矢を突き立てたまま美しい心臓部を短剣で突かれ、息絶えてゆくシーン等を想像致しますと、筆では尽くせぬ昂奮を覚えます。昨年の四月でしたかの読者通信(サディズム)でも掲載して戴きましたが、小生は特に、この様な矢で射られる女の物語、画、写真等に興味を持っております。他にも同好の士も多いと存じますので、今後の御企画にどしどしこの様なアイデアを盛り込んで下さいませ。一層の御配慮をお願い申し上げます。尚御参考にもなりますまいが駄作一葉同封申し上げます。御笑覧下さい。まだ他に多々ありますがモデルの關係上、顔や体による識別が判然としてゐるものは避けましたから御都合で本誌にお載せ下さっても結構です。女体に矢が射込まれる箇所としては、やはり女性の象徴たる乳房か或は腹部が良いと存じ

ます。この矢と「縛り切腹」との合作等は尙一層強調して良い様に思いますが、編集部の方の御活躍を心からお待ち致しております。どうか宜敷しくお願い申し上げます。

(大阪 T・F生)

○ 奇クの到着を鶴首して待つのは毎月の事です。特に八月号は特集号完成広告が出ているかも知れないと思ひ、二十日過ぎると毎日いらして待つて居りましたが、無期延期との事誠に残念とも何とも云い様が有りませんが、私達ファン同様、編集其の他特集号完成に努力された皆様方の気落は大変な事だったとお慰め申し上げます。如何なる理由かは知りませんが、奇ク発展の為、又我々ファンの為出来るだけ早い時期に頒布出来る様一層御努力をお願い申し上げます。又七月号に舞鶴生氏、TY生氏も要年望さて居りましたが、二十八九月、十一月号に出て居りました様な緊縛オンパレード型式又は縮刷版型式等、小形見本の発行を私も全面的に賛成希望を致します。これからの注文に際しては百万の援軍にも成る訳で、それだけ特集号に期待を抱いて居りました。探偵小説新考を書いて居られる東一

郎様、私も探偵小説ファンと申し上げたいのですが、まだほんの馳出しですが、昨年奇クが店頭から消えてから他の類似書を古本屋に求めるよりはと、値段も手頃な宝石探偵小説そのものにも興味を持って来た程度なのです。現在、相当単行本も集めて有りますが、なかなか思う様なものは集めてありません。貴方様も云つて居られる通り御苦勞な事と存じますが、さうやかな誌友の為一層の御勞作を勝手な云い分ですが御願ひ致します。私も微力ではありますが奇ク発展のため、又情熱込めて投稿されている皆様の真の仲間に入り度いと思ひ。出生地で過した学童前期、養父と一人の女をはさんで感情の喰い違いから実家へ歸つて現在にいたる迄の体験を、最初から粉飾して書く迄の筆力の無い事を承知の上で、有りのまま真実を生で書いて見ようと思ひ立ち気分の良い折にボツボツ書き初めて見ましたが、事実体験した場面ふん囲気の百分の一も書き現わせず、とうてい皆様に、いや自分自身読めない代物になり、無性に嫌に成つて投出してしまいました。せめて読者通信にて思ひついた事又奇クに対する建設的な意見の一つも書

いて、自己満足を見出したいと思つて居ります。最近旧号増大と比較されて居りますが、生気な事を書く様ですが恐らく旧号をお読みになつた方で、現在の奇クに不満をお持ちで無い方は恐らく居られない事と思ひます。私は今個人の気持で、旧号増大に比較した不満を持ちながらも、敢えて弁護の筆を取りたいと思ひます。昨年春、あの御主婦様凡てが悪書追放の看板を押立て、吹きまくつた為他の興味本位の俗悪書物の巻添えを喰つて姿を消した時は、皆様はどんな気持だったでしょう。恐らく目の前が暗くなる思ひをされた事と思ひます。又復刊を知つた時灰色の空がわれ七色の春の陽光が心の奥まで、差込まれた感じであつたらうと思ひます。何故ならば灰色の雲におおわれんとする空模様の中のさうやから陽溜りが、奇クだからです。事実、読者通信の中で、皆様な卒直に奇クの存在を喜び存続を要望して居ります。此の気持は、キット奇クを、たとえ頁数が少くとも増大号以上に洗練された高い雑誌に生長して呉れるものと私は信じ度くなりました。又、編集の箕田先生初め皆様方も

きつと事情の許せる範囲内で読者の要望を満して呉れる事を、先生のジャーナリストとしての手腕と共に確信致します。とは申せ、今月の編集後記にも有ります様に、私達の花園は微弱です。何時、どんな風に吹き荒れるかわかりません。我々が今奇クを失つたら、他に何を求めたら良いのでしようか。古本屋で、たかが一、二頁の読物、色あせた一枚のグラビヤに法外の金を払つた後に、無残な思ひをするのは、もう御免です。まして、奇クが戦争物だなんて、我々が戦時詳さに体験した物だけで沢山です。すぎる物もなく黒一色の世界だった様な休刊時代は、いかがですか。此の際、無理解な要求は差控えて戴きたいと思ひます。一人一人の好みは違つても、親にも医者にも話せない悩みは同じだと思ひます。その心の寄り処が、たつた一つ残された我々の奇クではありませんか。現在の不満を埋草に、根を太らせ様じやありませんか。人が好いと云われるかも知れませんが、敢て投書致します。それから、来月五月初日の東宝ミュージカルの「俺は知らない」に氏家真紀が、上半身裸体で本水使用、水責めの景が上演され

るそうです。私も見に行きたいのですが行けません。どなたか鑑賞後、感想を投稿下さる事を楽しみに致して居ります。順不同で不愉快な書き方で失礼致しました。私の文同様な不順な天候の折柄、呉々も皆様には御体大切に奇々共々向上をお願い申し上げます。

(K・K生)

○ 復刊おめでとうございます。私は、ずっと貴誌を愛読致して居ります。高校生でニッパ、禪を御愛用の女性の方や福岡の池田ふみ子様と文通いたしたく存じます、どうか御住所をお知らせ下さい。

(横須賀 小宮晋)

○ 遅まきながら貴誌の復刊を見て嬉しく思うものですが、以前よりの不満と申しましたが、希望する事が一つあるのです。それはグラビア写真に女装した男性の責めがない事です。普通の人でもよく云いますが、花柳章太郎や中村歌右衛門は、そこいらの芸者なんかよりは、ずっと色気があると……：：：：そうです。女装した男性は、ある意味では本物の女性以上に色気があるものです。某著名映画女優が中村扇雀に色気の出し方を習った

という話もあります。話はもとへ戻りますが、女性に全然興味の無い人がいます。これなら、そんな人達から初まって、女性マニアの人、男性マゾの人、はてはノーマルな人(上記)迄も楽しめると思っています。あらゆる層の読者に喜ばれる事は必定です。手段としては専属モデルを一、二名作る事です。女装マニアの読者からでも募集すればすぐ出来ると思っています。私も画家の様な商売をしていて多少経験があるので、化粧し、かつらをかぶせてしまえば、そうキレイな人でなくても充分美しくなります。体格等も、痩せすぎ肥えすぎでなければ上等です。和装もいゝですが、濃い化粧、ブラジヤ、コルセット、ストッキングハイヒール位をつけさせ、半裸での責めなんかも迫力があってたまらない程いゝものです。色々書きましたが、右切望致します。御発展を祈ります。(徳島T・V生)

○ 小生、昨年貴誌をたまたま大阪駅にて購入、秘かに心の底にうずいていたものが、具体的に目の前に現われたのに驚いたと同時に、自分の考え方や秘かな雲を掴む様な願が系統化され、そして大勢の

友人が居る事に大に元気づけられました。しかしそれもつかの間、五月号を最後に、店頭より姿を消し、今迄相見する事が出来ず。自分のやり場の無い気持ちを、北アルプの岩壁に積雪のスキーツアーにまぎらして、今日まで送って参りました。そして再び今日、大阪駅にて本誌復刊七月号入手、その巻頭「拘束服の装着」に貴誌の面目躍如たるものを感じ、胸躍るを覚えました。そして一度美しい御婦人に女性着を着せられて、あんなにされてみたいと思う様にもなり、ました、貴誌を見ていると限りない夢が生れます。(大阪M・Y)

○

御多忙のことと存じます。私もこの所仕事の方が大変忙しく、毎週の日曜日にも休めない有様です。したがって、ぜひお送り致したいと思えます原稿もなかなか書けず、ついそのまゝになっております。併しあと一ヶ月も立てば、仕事も一段落つき平常になりますので、その時はきつと書き上げましてお送り致します故、その時はよろしくお願い致します。奇々、読者通信で、大分内容が貧弱だといふ声や不満の声をききますが、不満があるが無かるうが、廃刊

になつてゐるよりは、存続してゐる方が、どの位いゝかわかりません。今後共、続刊に御努力下さいませます様お願い致します。正直のところ私は、男性マゾ、ソドミア、切腹等は嫌で、一度も読んだことはありません。それでも私の大好きな絵や記事がありますので(他の雑誌では奇々様のものはない)それですからこそ気永に今後の内容発展に期待して、喜んで愛読者の一員になつてゐる訳です。

(S・R生)

○

最近になつてやつと「奇々」の復刊を知り、心から喜んでゐるメトミマニアの一女性です。今後益々御発展下さいませ様、切に祈つてゐます。此の辺で「メトミ画集」を発刊して頂けたら、どんなに素晴らしいでしょう。唯でさえ美しい美人同志が、真剣に格闘する姿程美しいものは他にありません。特に寝技はメトミの極致ではないでしようか。髪振り乱して顔を真赤に紅潮させて、しなやかな手脚をばたつかせながら跳ね起きようと必死に抵抗する女を、そうはさせじとむちりした脚をぐつとふんばつて馬乗りに跨つた女が、満身の力をこめてぐいぐい押え込み

乍ら喉を絞め上げる光景等、想像しただけでもたまりません。私もそんな絵を画いて見たいと思って何度も試みましたが、下手なので何時も失敗ばかりしています。それで絵はあきらめて、今度は写真をとることを始めました。極く親しい友達二人にモデルになつてもらつて、寝技で格闘するポーズを写すのです。勿論始めは友達も恥しがって中々ポーズをしてくれませんでした。そこは女ばかりの気安さから無理矢理頼んでやつとやつてもらいました。でも私の写真の腕前があまりいいので、中々思う様にとれません。それでも一寸面白いのが数枚出来ています。私はそれをお送りしたいと思つていますが、そんな写真は「奇ク」に載せられないのでしようか。でも未だ今の処、モデルになつた友達が写真を送ることに絶対反対していますから、今しばらくはお送り出来ません。若し許可が出ましたらお送りしましょう。それから、ただポーズをしただけでは真剣味の足りない写真しか出来ませんので本気になつて「参った」と云うまで格闘する様に頼むのですが、これは何うしても聞き入れてくれません。去年の三月号には、長瀬

さんの小さな絵で、女が女を仰向けに倒し、首の上に馬乗りに跨つて顔を太股の間にはさんでいる面白い光景が載つていました。私はあれと全く同じポーズの写真をとりましたので、よく並べては眺めてみます。恥しがつたりいやがつたりしないで、私の云う通りのポーズをしてくれる若い美しいモデルはいないものでしよう。若しそんな方が居られましたらお知らせ下さい。
(桑山洋子)

○ 奇クの復刊号も毎月回を追う毎に内容が充実されつゝあるのを拝見して非常に喜んで居ります。これも一重に、スタッフ皆様の絶えざる努力のあらわれと感謝して居ります。殊に「潰滅の前夜」は大変面白く読みました。責める方法が新しくなつたからだと思ひます。八月号が待たれます。それにしても、限定版特集号御発行の予定との事、大いに楽しみにして居ります。小生はサディズム特集号を御願ひしたいと存じますが、折角取止めなされない様御努力下さる様願ひします。
(K・O生)

○ 七月初めのある日、名古屋市内のMデパートの香水売場で、ウイ

ンドケースをのぞき込んで居られた二十六、七の娘さん(だと思ひますが……)に私は感動いたしました。若しや「奇ク」の読者のお方でしたら、名乗り出て下さいませ。私もフンドシの常用者ですが、その人は、淡クリーム色の薄いもののワンピースに下着なし、丸い美事に発達したヒップがはち切れるように飛び出して、熱心にウインドの中を見て居られたのです。が、後ろから見下すとマア何とうれしい事でしょう。薄ものを透かして、きりりとした六尺輝がはつきりわかるではありませんか、六尺フンドシの色はブルーか紫らしく、結び目が目立たぬように手ぎわよく巻き込んでありキツチリ締め上げてヒップの割目にぐつとわ喰いこんで、いかにも小気味よいスタイルは印象的でした。私も勿論そのときも下着はフンドシ一本でした。六尺フンドシではなくて男の水泳フンドシ型でした。私は自宅では六尺フンドシですが、外出のときは、服装の関係で水泳フンドシ型に締め替え、カサばらぬようにしているのです。私はこゝで「奇ク」八月号読者通信の、福岡の池田ふみ子様(御礼申し上げます。私は越中フンドシや、もつ

こフンドシは好みませんが、あなたの水泳着の考案は何と素的でしょう。本当に私達フンドシ常用者にとって理想的だと思ひます。上半身の部分を黒でなく好きな模様にして下まで続きのワンピース型にしてその下の部分を、もつこフンドシ型から一歩進めて水泳フンドシ型にして、お尻は全部出る様に裁断してみたいと思ひます。皆様も、御意見どしどし聞かせて下さいませ。(岐阜 若柳キミコ)

○ 脱腸帯マニア等と云う言葉があるかないか知りませんが、私は小学生の頃より脱腸並に脱腸帯に変魅力を持つて居りました。私自身後二ヶ月位より脱腸で、一年目位から脱腸帯を使用致して居りました。そうですが、小学校入学後四年生位にはいつしか出なくなり今日に致つて居ります。それでK式脱腸帯と云う総ゴム製のものを続けて使用致して居りました。小学校入学当時は、入浴時にも使用して居りましたので、いつしか近所の二つ三つ年上の子供達に見つかり、お医者ごつこの時などは必ず呼出され、患者にされました。子供達も脱腸に興味があるのか私の脱腸帯をしめたり、自分から浣腸

器を持ち出して水で浣腸したりなどしてよく遊びました。これらの影響ではないかと思うのですが、此の頃より特に自分の体（特に脱腸並に脱腸帯）に興味を持つ様になった様です。今はどちらに居るのか知りませんが、Fと云う私より一つ年上の子供が居りましたがこの子も脱腸で、やはり脱腸帯を使用致して居りました。彼のは、たしか、スプリング式のものだったと思います。よく私の物ととりかえて見たり致しましたが、やはりゴム製の品の方が良いのか、いつのまにか私と同じ脱腸帯を使用する様になりました。四、五年生になると、いつしか自分が脱腸であり、脱腸帯をしているのが恥しくなり、いつか使はなくなり、其の後又全治したかどうかわかりませんが、いつしか出なくなり、忘れるともなく忘れて居りましたが中学三年生の時、近所の薬局へ何か薬を買いに行った時、三つ位の子供を連れた人が脱腸帯を求めました。そして、それを子供に着けて貰っているのを見て、内に、自分も又脱腸帯が欲しくて欲しくて仕方がなくなり、小遣いを少しづつ貯めまして、遂に又脱腸帯を買い求めました。久しく忘れてい

たゴムの感触、腰廻り、股間に対する心よい圧迫、小さい時には未だこんな事は感じませんでした。今再び使用して見て始めて感じる快さ、とうとう私は脱腸帯につかれたのです。其の後、各種の脱腸帯を買求め家の者に隠して置いてひそかに取り出して眺めたり締たりして居ります。ですがやはりゴム製の品が最も私の気に入って居ります。脱腸帯に限らず最近ではゴム製医器（浣腸器、痔バンド、夜尿器等）にも興味を持ち、色々買集めて居ります。現在脱腸帯は、小柳式を二個所有して居ります。私の様な性癖の人が、他にも有るかないかは知りませんが、貴誌にも時々脱腸についての記事が出る様ですが、何卒今後共この種の記事を發表して頂けます様御願致します。作製不能と思われた浣腸フォトも作られて居るのでしたら脱腸帯を締めた写真（出されれば各種脱腸帯をした子供の写真等）を作製して頂けましたら喜び之に過ぎるものはありません。思い出すまゝに拙いペンをとりましたが、万一誌上に發表して頂けましたら之れ以上喜びはありません。

○（京都 野原喜美夫）

復刊第五号から内容が充実して来たように思います。最近の読物としては、いで湯、虐げられる娘潰滅の前夜等、大変面白く読みました。八月号の東一郎氏の探偵小説新考は今後に期待します。飛田良二氏の新作、特集号発行を期待致します。（大阪 F・A 生）

○ 奇ク七月号入手致しました処、久方振りにて美少年趣味に関する記事多くなり、面白く拝見致しました。挿画も次第に多くなった様ですが、尙一層充実させて頂き度いと思ひます。ソドミヤ、美少年趣味、揮美特集号についての希望者も相当多いと思ひますが、一部千円か二千円位にて、速に企画を進めて頂きたいと思ひます。美少年趣味の人は数は非常に多いのですが、只本誌と連絡が取れない人が多いのです。小生、先日、東京の某ソドミヤ喫茶店にて奇クの話をしていました処、復刊になつて居る事と知らない人が多いのでした。今後もつとめて新読者を獲得し、ソドミヤの読者が大勢奇クの仲間入りする事によつて、立派なソドミヤ、揮美特集号が刊行出来る様に努力する事が、吾々ソドミヤ読者各自に課せられた一つの努めで

ありましよう。読者側でも努力致しますから、編集部の方も速に希望者を募り、刊行の準備にとりかゝって頂く様お願い致します。（山口幸一）

○ 緑夏の候、貴社益々御清栄の事と推察致します。過日友人宅にて奇譚クラブ復刊七月号を読んで、復刊されていることを初めて知り、驚きと共に大変嬉しく感じました。一時は廃刊かとも思われ、我々同好者にとつて失望の念を大ならしめていた矢先、正にビッグニュースの価値があります。小生、復刊前の旧号は二十七、八冊所有し、日頃愛好研究致して居ります。この性風俗の特異性を調べてゆくことは、アブノーマルな意味のみでなく、変態心理学上からも大いに貢献していると確信いたします。目下、書店販売でなく直接販売のみとの事ですが、かえつてこの方が内容的にも充実化が達せられて、本来の目的にかなうのではないかと存じます。旧号の発展販売ぶりからみても、同好者は必ずこの種の出版に期待していることは明らかな事とは存じます。が、これからも一層の御活躍御発展をのぞんで止みません。旧号中

次号(十月号)は九月下旬発売です

毎月の赤字も意とせず鋭意発行を継続して参りましたが、愛読者の皆さまの要望は熱烈なものがあつたが、種々なる制約に左右され果すことが出来ない状態であり、此の際、赤字負担の軽減と更に内容刷新充実を計るための準備期間の必要という、二つの理由の爲、次号は九月下旬に発売いたします。何卒御諒承下さるようお願いいたします。

断のため、折角の投書熱もどこえやら、一時はがっかりしましたが、今後は是非発表させて頂いたいただきます。(一読者)

○

六月号のK・M生氏。おしめ放浪記。責めとフェイシズムの畔野様、文通願えませんでしうか。お互に腹藏なく意見の交換をしていく語り合い度いと存じます。秘密は絶対に厳守します。是非御願ひ致します。おしめと流腸に対して、興味を持たれる諸兄姉のお便りを下さるのをお待ち申しております。なほアドレスは五月号、読者交換室に書いてあります。是非下さる様。

(S・A生)

貴誌の以前からの愛読者です。出版が休止してからは消息を知らぬまゝに講読しておりました。

た。とこがある手づるを通じて、貴誌が再刊されていることを知りました。七月号を読んで見ますと以前にもまして内容が充実しているのに驚きました。(K・Y生)

○

一マニア生様。うつつといふ梅雨の六月も七月と改まり、盛夏の陽光が強く膚を刺す様になつて参りました。奇々八月号誌上の読者通信欄で拝見致し嬉しく存じ、拙文をかえり見ず、筆をとりました。貴兄には、同好者又は奇偶愛読者に対してグループを組織して、楽しい毎日を過ごして居られる由、全く羨ましく次第です。私も是非、同好者との文通意見交換の友の一員として参加出来ます様、御願ひ致します。私は奇々は、二年前より愛読致して居ります者です。破廉恥なる記事を發表して、読者兄姉の眼を赤井

茂のペンネームでけがして居ります者です。同好者を御照会願えれば幸甚に存じます。不潔な奴と思召しかと存じますが、悪しからず御許し下さい。希望条件としては流腸に興味ある人、男女いづれも問わず、又オシメに対しても同様お互に腹藏なき意見を交換して、その日その日に希望を持ち同好者と共に末永く交つて行き度く存じます。私の歪められた性癖を理解してくれる者もなければ、友もなく、又性癖を打破る勇気もなく、悶々として居りました折柄大いに意を強くして、筆を取りました。吉報ある事を心から切望して居ります。私のアドレス。(岐阜市此の花町四丁目、荒井繁樹)

○

夏もよろしいのですが、洋服の人が多くなり、我々和服マニヤは淋しいと思います。しかし浴衣姿や、タイトのスカート、それも普段着の黒のものなんかは私にとつても好きです。早く秋がきて、いろ／＼な好きなものが眼に入る様になるのを楽しみに、夏を過そうと思ひます。いつも何か楽しみ期待があるので人間は生きて行けるので、その点我々は、人より以上にめぐまれているかもしれませ

ん。又そこにはなやみもあるのですが……。毎月号に公平に、和服お腰等に関する記事を載せて下さるのを望んでいます。女の随筆のあぶみさんの記事が一番好きで、読物です。それから写真ですが、色々の種類の中に次の様なものを加えて下さい。おもしろいと思います。モデルの人が、(シュミーズ・ブロー、お腰、肌じゆばん等)を竿に干している。又は干してある下で洗っている。軒下の竿に、いろ／＼干してあるつまらないアイデアですが、何かの参考にしたい下さい。現在一つの拙文を書いています、仲々うまく書けませんが何日かかかってまゐりてお送りするつもりです。(F・T生)

○

小生二十七歳の孤獨な独身の青年です。長年K・Kを愛読して居りますが、サジ七分マゾ四分といった処でしようか……？お灸に関心をお持ちの男性女性の愛読者の方々の文通を希望致します。お便り鶴首申し上げます。(横浜市磯子局止・松原一)

○

昨年休刊されてからいつになつたらお目にかゝれるのかと心待ちにしていました。ところが最近

からずも店頭で復刊した奇クをみつけ、早速買い求め、息もつかず読んでしまいました。私は女装と緊縛にこよなき興味をひかれていた男です。四月号の「ああこの恍惚境」（小村二郎氏）は私のイメージにピッタリで、私もこの作品の主人公のように女装して化粧し縛られて拷問にかけられ、責められてみたいと思っています。『サジスチンの告白』の原美智子さんのような方に、あんな目にあわされてみたいと思ったりしています。七月号の「被縛症」（高村民子さま）の作品も興味あり、また「玉稿落穂集」も楽しい。松井頼子さまの「赤い花は泣いている」は久々に御目にかゝった作品でなつかしい。全般にみて、巻頭の縛りフォトが少くなったのは寂しいが、新人モデルの登場は今後に期待をかけています。フォトももっと変った強烈な責めを希望します。

（神戸 T・I生）

○ 七月号の編集だよりに柳氏の「ストッキングとパンティ」の写真の事と解説を見て、ぜひ共その写真をお譲り願いたいと思います。柳一郎氏のお便りをお待ち致して居ります。

（岩手県摺沢局区内小原一高）

○ その後如何しているのかと思っ
ていました。先日古本屋で貴誌をみつくとびついて求めました。公刊時代に比べると頁数も少く、写真も絵もなくめつきりさびしくなっていました。表紙の清潔な白さと云い、定価と云い？ 趣味同好雑誌としての体裁をととのえてきました。今後は絶対に市販せずこの方法で続行して下さい。御約束しておきながら送稿しなかつた原稿も、そのうちに送りたいと考えています。免角復刊お目出度う。廃刊後二、三度便りをしましたが返事がなく全く心細く思っていた矢先、偶然にも古本屋で貴誌を見つけた時の歓喜は御想像下さい。

（A・K生）

○ 七月号拝見しました。久しぶりの山口幸一氏の連載「少年禪記」や、以前の「美少年の秘密」を思いだすにつけ期待しています。できれば一挙に掲載していただければなどと、慾の深いことを考えたりにしているんですが。巻頭口絵、写真頁には、さっぱり禪美、男緊縛等のものが見られないのは、物足りない気がします。女性緊縛も、

一般からの色眼鏡を顧慮する故でしようか。どうも生ぬるい感じ。編集にあたられる方の御苦勞を考えると、余りぜいたくも云えないのですが、前便にも書いたのですが、読者通信欄の拡充希望も重ねてお願いします。もっとも興味深く拝見しているのは、今の処この欄といつてよいくらいでしょう。

（K・M生）

○ 貴誌の第一号より愛読して居ります。本だには数十冊の「奇ク」が並んで居ります。早速ですが、「奇ク」の数年前に「緊縛美のオン・パレード」と称して二百余の小型フォトがありました。是非次号当りに、ここ二、三年間の発売したフォト及び現在発売中のフォトを同じ様な方法で小型にして載せて下さい。又緊縛フォトの他に浣腸フォト等と一緒に、小型フォトで沢山「オン・パレード」として載せて下さい。貴社のフォトの広告にもなり、我々もフォトを買うのに便利と一石二鳥です。

（宇都宮市 千手町 早乙女）

○ 御多忙中とは存じますが、できれば以前の様に、文通の斡旋もなるべく早急に計っていただけたら

と思つています。諸者交歓室欄を利用するということは、やはりためらわれるというものが多くの人の気持ではないかと考えられます。むろん、ぼく自身もそれだけの勇氣がないからこそ、こうした文通斡旋を希望するのですが。では八月号を楽しみにお待ちしております。居ります。

（群馬 Y・S生）

○ 私は某デパートの化粧品売場で働いている満二十三歳の女店員ですが、昨年休刊になるまで約一年間貴誌の熱心な愛読者でした。中でも春日ルミさんが、伊吹真佐子さんを捻じ伏せて縛っている写真等が何となく好きで、あれを見ていますと、私も一度モデルにしてもらいたい様な気持がしました。所が昨年の三月号、五月号には、長瀬昭子さんの御体験が息づまる程の見事さで発表され、戸破貞子さんの御投稿がのせられて、私はすっかり取りのぼせ無我夢中になる位感激してしまいました。それ以来、私も長瀬さん戸破さんの真似をして、女性を組敷いて見たい気持が非常に強くなり、ほんとに困りました。でも実際には恥しくて中々そんなこと出来ませんから一人になった時など大きい姿見の

◎お願い◎

雑誌の購入や分譲品の御申込
みのため、或はその他の用件で
直接発行所を御訪問下さる方が
ありますが、理由の如何を問わ
ず右は固くお断り申し上げます。
必ず郵便にて御申込下さるよ
うお願い致します。

前で、細いブラジャーに短いパン
ティだけになり、座ぶとんを二つ
折にしたのを二枚重ねて、其の上
に馬乗りになり、鏡にうつる自分
の姿をあかず眺めたりしました。
そしてこれが座ぶとんでなくて純
情可憐な女性だったらどんなに素
敵だろうと空想し乍ら、首を絞め
る真似をしたり、腕を捻じるボー
ズをしたりして一人楽しんだもの
です。その時の私は、勿論うぬぼ
れですけれど、一番美しいと思っ
ました。でも此れも再々くりかえ
す内にも足りなくなり何とかし
て本当に女性を組み敷いてみよう
と考え始めました。然りやはいり恥
しくはあり、それにめったによい
チャンスがありませんので、此の
一年間に二度しか実行していませ

ん。二度とも長瀬さんの真似をし
て首の上に跨り、相手の顔を太も
もの間にはさみ込んで、股でうん
と喉を絞めつけてやりましたが、
其の時の快さは全く大変なもので
私は氣も遠くなりそうでした。本
当は最後に相手の顔の上にべった
りお尻をのせて、息が出来ない様
に口、鼻をふさいでやりたかった
のですが、いざとなると、あまり
ひど過ぎる様な気がして、此れだ
けは未だ出来ないでいます。最近
同じ職場に来た妙子さんがとても
スタイルのよい美人なので、近い
内にきつと組み敷いて、散々な目
に合せて見ようと計画していま
す。その時は、今度こそ一と思ひ
に可愛らしい顔をお尻の下敷きに
して、いやと云う程股にキッスさ
せてやりたいと、すけて見える様
にうすいナイロンのパンティーを
用意しています。若し成功しまし
たら、体験記を発表しようかし
ら。女だてらに、こんなはしたな
いことを書いてはいけなにかも知
れませんが、私は女ばかりでなく
男の方にも実行して見たい気持が
あります。でも私より腕力の劣つ
た男の方でなくてはいやですから
此れは無理でしょうね。矢張り私
の様な女は、女だけに行うより他

に方法はないのでしよう。若し、
私に組み敷かれたい女性の方が居
られましたら、おたより下さいま
せ。
(三木恵子)

○
奇ク八月号で、一マニヤ様から
各々好みに応じて銘々楽しくやつ
ているとのお便りがありましたが
これはお説の通り我々にとって此
上もないビッグ◎ニュースです。
早速仲間に入れて頂きたいもので
すが、どういう手続をとつたらよ
いか詳細は御教示下さい。(東京
中央郵便局私書函一三九一)

○
浅草公園劇場で七月上旬、不二
洋子一座の女剣劇を見たが、座長
不二洋子の颯爽たる剣戟ぶりは、
いつも乍ら楽しいものが、特に岡
本綺堂作「番町皿屋敷」では、洋
子扮する颯爽たる青山播磨に対し
楚々たる腰元、お菊には、一座の
女形、藤方金夫が扮し、男女配役
が逆で、男性の扮する腰元お菊が
女性扮する殿様播磨から、家宝の
皿を割った理由で、折檻される場
面(殿様の前に手をついてお詫び
するが許されず、首筋とって抑え
られ、庭矢に引出されてお手討ち
になる)は特に倒錯的興味深く、
我々男性マゾにとっては、此上な

く楽しいものであった。編集部と
しても、こんな連続マゾフォトを
企画して下さい。(敬愛生)

○
私は以前より、貴誌を愛読させ
て頂いている者です。編集部の方
々の苦難をのりこえての御努力に
は、本当に蔭ながら深く感謝致し
て居ります。何卒今後共、一層の御
発展を祈つて居ります。さて、甚
だ勝手な御願いを申し上げますが、
次の事について、適当な御配慮を
願えれば幸甚と存じます。(一)鬼山
絢策氏の「学者犬」乗杉貴代子様
の「ダイアナ夫人」の続稿「未亡
人の巻」等は掲載されませんでした
ようか。亦、馬族保氏の原稿など
は「魔子さま御尊像」——その後
到着して居りませんでしょうか。亦
ありましたら御載せ願います。亦
二十万円懸賞原稿の入選作品中、
まだ「未掲載のものが多い様で
すが、「毒婦と隠坊」「舌人形」
「鞭の下から」等御掲載下さいま
せ。(三)最近の本誌は、卒直に申上
げると、やゝ興味がうすい様に思
われます。昭和二十八年頃の方が
同じ位の頁数の雑誌でしたが、も
っと内容が充実していた様に思
います。この頃は余りに通俗的な普
通の雑誌にもある様な記事が多く

本誌の特色ある記事が少い様に思っています。特にマゾ的な記事は、余りにも少い様に思われます。この点、マゾ記事をもっと増加して下さいませ。(愛知 M生)

○ 森山美歌女王様へ。当方三十歳の独身男子。女王様の奴隷を憧れて居ります。何卒、三吉様に対する如き『女王様の御便り』を賜わらんことを伏して願ひ上げます。(愛知県岡崎市中央郵便局 田正男)

○ 自分は二十一歳の気の弱い青年です。男の人の前では、それほどではないんですが、女の人の前に出ると、とても駄目なんです。積極的な女の人がとても美しく思われます。積極的な女のひと話をしてみよう事があるんですよ、でもまあそんな機会がありません。もし出来る事でしたら、積極的な女の方で、年齢は問わず、御文通してくる人はいないでしょうか、自分分は旅行がとて好きなんです。旅の事や山の話の文通の交換もしたいと思ってるんです。(東京足立区本木町三の二八一〇清和荘 木熊敏夫)

○

僕が褌を締める様になつてからもう一年になる。以前からあこがれていたのであるが、こんな気持ちで母には一言もいへなかつた。だが、K誌を友人から借りて、何気なくページをくついていると、『美愛好家の傾向』という記事が出てくるではないか。僕は、それを何度もうりかえして読んで見た。褌にのみ興味をもっているのは僕だけではないのだという自信が来て、大いに力強くなつた。だがその締め方がわからないので弱つていたが、幸い通信欄にくわしく締め方が出ていたので、僕は思いきつて母にいった。「僕、六尺褌を締め様と思つてゐるんだが」と勇気を出していった。ときめく胸をおさえながら、とうとう母に打つてくれたので、締めて見る事にした。晒の褌であつたが、真赤に染めてもらつた。鏡の前で裸になり、はじめてなので、水泳褌を下にびつたりと締めて、その上から六尺褌を締め上げた。垂れをもう一度股間に通して、後の結び目へ通してぐつと締めると、股間を吊り上げた様な快感は、とても何とも云えない気持ちであつた。真赤な

褌の盛上りと、ぐつと尻に喰い込んだ姿を鏡にうつして、一人でのしんだ。それから、僕は一日も褌を締めない日はなかつた。だが会社へ通勤の僕は、後の結び目がズボンの上へふくれるので、帰つてきてから六尺褌を締める事にした。一本では足りないのでもその後真紅のを二本、長さも七尺にして作つてもらつた。だんだん締めてゐる中に、黒、紺、白等を締めて見たくなり、現在では、色々の褌が七八本にもなつてゐる。締め方も色々とおぼえて、時には垂れを長く、時にはみじかく、又三角にしたりはさんで見たり、前部のふくらみを大きく見せるため、垂れを作らずに締めたりして、毎日変えて締めておきます。山口幸一氏の『美少年の秘密』「少年の褌美について」『博多山笠』最近では「少年褌記」を拝読致しましたが僕は、何故か少年では物足りなくやはり成熟した青年の褌美の方が魅力がある様に思いますが、どうでしょう。今後において、青年の褌美を貴氏の筆によつて、大いにK誌に発表される様が一愛褌としてお願いすると共に、是非実現して頂く様に御願致します。青年達の褌一本の姿、これは僕のあこ

がれです。海辺でのたくましい体の褌姿は、戦前又は戦争中は、子供乍らよく見たものですが。戦後は僕の地方ではないといつていい位見られなくなりました。だが時折褌一本で、泳いでゐるのを見ます。昨年の夏水泳に行くと、一人は黒のサポーター一本。一人は晒の六尺褌を、垂れを思いきり長くして締めてゐるのを見かけました。が、サポーターは重量感がなく、やはり六尺褌の方が見た目に良いと思ひました。これからは、褌美の季節になります。大いに褌美愛好者は、この夏をたのしもうではありませんか。僕も今年こそ、思いきつて海水パンツを使用せず、六尺褌一本で、海へ行こうと思つておきます。褌を思いきりかたくしめて、それが水にゆれて行く事の感じは、褌愛好者でないとはわかりません。終りにK誌に要請致します。それは「少年褌記」の褌に関する記事を毎月二、三篇つづけてのせて頂く事と、休刊前の様に褌一本の姿の写真をのせて頂く事です。それから図解でもよいですが、青年による褌の締め方を連続として、締め初めより締め終りまで願ひたいのですが、如何でしょうか。これは僕一人の思ひでなく

輝を愛用している者すべてが思っている、共通の思いであると信じておられます。緊く締め上げた輝の快感にひたり乍ら記す。

(兵庫県 愛輝生)

初めてお便り致します。奇譚クラブは複刊後のものと、古本屋で見つけた四、五冊の旧号以外拝見致しておりませんが、未だくわしくは存じませんが、私の本誌への希望を皆様にお知らせしたいと思えます。私は二十才になる男性マゾヒストです。同時にソドミアの世界に遊ぶものです。今迄拝見したマゾ記事は、女サジスチンと男マゾとの組合せのものだけと存じております。又ソドミア小説(フンドシ小説)は非常にロマンチックな美少年趣味の領域を一步も出しておりません。私は残念で仕方がありませんでした。「悪癖」「奈落の欲情」らのサジスチンは私にはたくましい野性的な美青年です。ソドミア小説の主人公はサジストであり、夢の中で私に鞭をふっていました。筋骨隆々たる男性の言動にこそ真のサド的体臭が感じられるものです。理想的な男性と、彼に恋する男の組合せを企画して頂きたい。顔中、唾だらけに

なり、踏まれ蹴られ足をなめさせられ、最後には、両手でさゝえられ、荒々しく髪の毛をつかまれ、仁王立ちになった彼のたくましい二本の足の割れ目へ、おしこまれ、怒声とばとうの内に掃除させられるマゾヒストそれを眺めながらけがらわしいと又痰を吐きかける男性サジスチン。是非お願い致します。これが奇巧に載った何とすばらしいでしょう。きつと読者の皆様の中にも同感して下さる方があると思えます。又サジスチンの方も今迄の行為の中に共鳴満足される点が多々あると確信します。種々不平ばかり並べましたが、七月号「活火山」「潰滅の前夜」「スーダン」等面白いものが出てきたので、奇巧の行方が楽しみです。がんばって下さい。それから男性サジスチンの方、私に関心のある方は、どうかこの通信にお便り下さい。(神戸 T・S 生)

読者交歓室へ投じられた左記の方の分は、締切後に掲載出来ませんでした。神奈川県私書箱第十三号氏、東京中央郵便局私書箱一三九一氏、東京都文京区久保哲志氏他に読者通信も相当、次号廻しとなりました。(係)

◆ 編集後記 ◆

○今度、四馬孝氏の「画集」が印刷紙焼付として分譲されることになりました。印刷と違つて値段の嵩ばるの欠点ですが蒐集品としては恰好のものでしよう。○久方ぶりに沼正三氏の「手帖」が登場しました。これで文庫誌としての本誌に更に一威力が加りました。読者の方々と共に喜びたいと思えます。

○本号を以て、復刊号も第八冊目を迎えました。早いものです。もう、そろそろ復刊という言葉もお別れしてもよい頃のようにです。一号一号新しく脱皮しつつ、どうやら一つのスタイルが出来上つたように思われます。今後、更に牛歩の歩みにしても、進展させたいものです。

○一定の枠内に固く閉じ込められながらも、全巻限から隅まで読みこたえのある雑誌にすべく、とにかく努力してみましたが、まだまだ不満足なところも沢山ありますが、今後に期待して頂きたいと願う次第です。

少々 の定価の値上げ位では追いつかないのが実情です。

○懸賞の応募作品が、予想を析はずれて問題にならない少なさでした。繰り返して更に募集しても、急に応募作品の増加も望めそうにもありませんので、本誌の発行部数が従前に近いものになった頃を見はからつて「復刊記念」の懸賞募集を大々的にやりたいものです。

○「太陽の季節」の映画化がヒットして以来、巷には「太陽族」なる流行語が横行し、又々不良文化財云々が人の口の端にのぼるようになってきました。太陽族なるものは、そう長く流行するような性質のものではないと思えますが、恰好の攻撃目標を提供したという結果になったのは否めません。

○別項記載の通り、本誌次号の発売を約一カ月遅らし、夏休みを頂くことになりました。毎月お待ち下さっている方々には相済みない次第ですが、非常に熱心ではあるが、極めて少数の固定読者を擁しているといった実情を御推察の上、何卒御諒承願いたいと思えます。

○そのかわり、代理部分譲品には、とっておきのものを放出することにしましたし、又、新しいもの満載の目録も準備中ですので、せいせい、そちらの方で渴を癒やして下さいよう願います。では、又次号にて。(K・M 生)